

Fate/ fallen brade

阿後回

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、どこかの世界で七罪の魔王が倒された。

世界は平和を取り戻すことができたが、とある世界ではそのツケが回ってきてしまった。

そのツケを支払うことになった少年は『七罪』と共に世界を駆けて選り抜いた。

これは選んだ後の物語。

いもうと少女のイリヤ達を守る為、ついでに世界を救う為、かつての『傍観者』はもう一度立ち上がった。

f a t e k a l e i d l i n e r プリズマイリヤ×デジモンのssです。

今回で二作目で、まだ若輩者で拙いかもかもしれませんが感想等募集しているのでよろしくお願ひします。

注意

プリヤ士郎君の過去改変作品です。

『衛宮士郎』を大幅に改変しております。

原作の『衛宮士郎』が好きな人は注意して読んでください。

※三月三十一日

『傍観者士郎君』のタイトルを変更しました。

目次

IFルート

番外編 ヘブンズフィール | 1

設定など

人物・世界観・考察・独自設定・疑問点

(ネタバレ) | 8

fate・デジモン用語・オリ設定

(ネタバレ) | 26

プリズマイリヤ

プロローグ 汚れ物の英雄 | 33

第一話 『強欲』の少女 | 41

第二話 『依頼』と『邂逅』 | 53

第三話 暮海探偵事務所とオグドモン

第四話 少女と弓とサーヴァント

67

第五話 転校と『劇物』と敗北

75

第六話 アニメと空とキャスター戦

82

第七話 『投影』・『楔』・『罪の記憶』

92

第八話 疑念とカードと電腦世界

101

第九話 (記憶(タクミ)と捕食者(イ

ター)

112

60

第十話 ハツカー『M』と土郎のお見舞

い 122

第十一話 過去と世界と必然 128

第十二話 逃走と退院と偽りの変化

139

第十三話 依存とチケットと槍

150

第十四話 私の選択 163

エピソード 俺の選択 176

2wei編

今は遠き日の記憶 憤怒の夜 189

第一話 転校と依頼と初探偵(しごと) 208

第二話 彼の動向と彼女の見えた者

216

今は遠き日の記憶 嫉妬との対話

228

第三話 彼女達の想いと邂逅 239

第四話 嫉妬と新たに刻まれるトラウマ

マ 252

今は遠き日の記憶『怠惰』の夢

260

第四話 実験の過程と遅れて来た彼女

274

第五話 チケットの意味と『シンジ』

284

	第六話 『告白』	297	『慢』は嗤う 後編	359
	今は遠き日の記憶 『強欲』が欲したも		第十話 狙いと嘘と誕生日	369
	の	309	第十一話 海と祝いとプレゼント	
316	第七話 新たな依頼と不穏な気配		380	
	第八話 パニック・襲撃・壊れた世界		今は遠き日の記憶 『暴食』と覚悟	394
325			第十二話 聖杯戦争と士郎の隠し事	413
	第九話 黒騎士の借り	335	今は遠き日の記憶 『傲慢』と『選択』	
	今は遠き日の記憶 『色欲』のとても大		425	
	きな間違い 前編	343	第十三話 表の戦い 裏の設営……そ	
	中編		して……	436
	今は遠き日の記憶 『色欲』は失い、『傲	351	第十四話 雷撃と天雷と本当の自分	

第十四話 産声をあげて

473

幕間の物語

第一夜 収束の裏側

484

第二夜 集まる人々と過去を知る人々

495

第三夜 そして少年は語り始める

第四夜 衛宮士郎とは

516

第五夜 ハジマリ

529

第六夜 蘇る絶望

549

第七夜 最後の虚構（うそ）

567

第八夜 黒く塗りつぶした真実と選択

の終わり

I F ルート

番外編 ヘブンスフィール

街中に二人、雪のように白い少女と、場違いなほど赤いローブを着た男がいた。

「御機嫌よう・・・お兄ちゃん」

年齢には似つかわしくない優美な姿で少女は挨拶をする。

「はじめまして、私はイリヤ。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言えばわかるかしら？」

かしこまった姿を見て、ローブの男が口を手で押さえている。

「なんですすって!？」

黒髪の少女は、アインツベルンに驚いたようだが、お兄ちゃんと呼ばれた少年は、頭に疑問符を浮かべており、その隣で金髪の少女が警戒を強めた。

「ぶつ、ククク・・・そんなんじゃ、こいつはわからないって言ってるだろ、マスター」

そんな様子がおかしいのか、男は……少年のような口調でその様子を笑った。しかも、この口調から、赤髪の少年を馬鹿にしているのがわかった。

「もうっ……それじゃあ、格好がつかないでしょ!!!ルーラー」

男……ルーラーは、彼女を顔が半分ほど隠れているローブ越しから彼女を見た……どうやら、マスターと思われる少女に呆れているようだ。

「ルー裁定者ですって（だと）ッ!?」

今度は二人……先程の黒髪の少女と金髪の少女が驚いた。その様子に、赤髪の少年がこの状況を把握できないでいる。

「はあ、これだからイリ……マスターは」

ついに、言葉に出してしまう。

「もういいわ、戦って、ルーラー!!!」

その言葉にキレた少女はルーラーをけしかけてきた。

……この関係の始まりは、約二ヶ月前まで戻る。

「もうッ!!お爺様ったらヘラクレスの触媒さえ取りに行けないなんて、どういうこと!!!」
「アインツベルンとして……そして、お母様を裏切ったあの男を殺すことが、私の聖

杯戦争の参加理由だった。そのためにも必要だった、ヘラクレスの触媒。

しかし、触媒は何者かによって盗まれてしまい、いまこうして私は召喚する羽目になっている。

「それに、盗まれたってなによ!!!」

ちやんと管理できてないのが悪いんでしょ!!!」

そのことにお爺様は怒っていた。しかし、その八つ当たりは私にぶつけられる。お爺様に愚痴を言われてしまい、私には本当に不愉快であった。

「ほんと、耄碌したお爺さんってやんなっちゃう」

お爺様に言わせれば、御三家とも呼ばれるアインツベルンが縁召喚などしてはならない……と言っていたけれど、

「それをやる羽目になった原因はどこのだいつよ」

私はそのせいで、ほんつとうに、不愉快だけど、私は自分を触媒として縁召喚を準備に取り掛かる。

「お嬢様、それは私たちがツ!？」

「いいわ、私がやる」

側仕えのホームクルスが準備を邪魔してきた。

きつと、私の召喚陣になにかするつもりだわ。

「私は誰も信じない」

キリツグも、お母様も、お爺様も……アインツベルンさえも信じない……だって、どうせ裏切るのだから。

「……できた！」

私は誰の手も借りず、一人で召喚陣を完成させた。途中、ホムンクルスたちが私の手伝いをしようとしてきたが、何をされるかわからないし、その度に断っていた。

これで、召喚を開始できる。

たしか、お爺様はバーサーカーを召喚しろと言っていたつけ……

私は自身を触媒に召喚を開始する。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公」

たしか、バーサーカーを召喚するには一説言葉を加えるんだったよね。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

あれ……どういうこと？

「閉じよみたせ。閉じよみたせ。閉じよみたせ。閉じよみたせ。閉じよみたせ」

これ・・・勝手に私の口から呪文が出てる!?

「繰り返しつとに五度」

・・・・・・止まって、

「ただ、満たされる刻を破却する」

止まって、まだ言っていない!!!

「———告げる」

止まってよ!!!

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

もう少して召喚が始まっちゃう!!!

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

どうやら止めることはできないみたい。

「誓いを此処に」

なら、このまま召喚するわ。きっと強いサーヴァントが来るってことを願って……

「我は常世総ての善と成る者」

『この世に善なんかない』・・・そんな言葉が聞こえた。

「我は常世総ての悪を敷く者」

白く輝く剣と、黒い神殿が見える。

「されど、汝の夢は叶わず」

その一説は、誰かの生を表しているようだった。

「汝三大の言霊を纏う七天」

そして、勝手に紡がれた言葉は……

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

光とともに、赤いローブの少年を召喚した。

「サーヴァント、ルーラー。

俺を召喚した……いや、召喚させられたのか」

そうして、裁定者は召喚された。

・・・私は、今でも思い出すことができるだろう。

・・・あの日々のことを。

血のように赤いローブをして纏って、

私の世界を救ってくれた、報われない貴方。

だから、たとえ何年でも思い出すだろう。

・・・貴方がいた日々を。

・・・貴方と最初に出会った夜を。

「まだ名前を明かすつもりはないから、『バルバ』とでも呼んでくれ」

設定など

人物・世界観・考察・独自設定・疑問点（ネタバレ）

ー世界観設定ー

プリヤの並行世界とデジモンストーリーサイバースルウースの並行世界が入り混じっている世界。

サイバースルウースの不幸な事故などは実際に起こっている。

ー人物設定ー

『衛宮士郎』

Fate 原作とこの小説の主人公。

13歳の頃、『デジタルワールド』を七大魔王とともに救った。

原作とは違い、弓を使うことに対し嫌悪感があり使うたびに精神的苦痛を伴ったり、自身が女性からモテることに多少の自覚がある。

『正義の味方』という言葉を使わずに、『選択』という言葉をよく使う。

戦闘面においてなぜか『七大罪』を模した魔術（？）を使っており、その度に投影し

たものから別のデジタルワールドを救った『英雄』の記憶を読み取っている。

『オグドモン』

デジタルワールドの『罪』の化身。

士郎によって倒された（？）存在。

士郎を中心に並行世界の自身の存在を認識する者にだけ声が聞こえる。

『シスタモンノワール』

※今は遠き日の記憶で登場。

士郎の『師匠』にして士郎自身を救い、士郎自身が好いた女性（？）。（？）なのは、デジモンには性別がとくにないたため、厳密に言えば女性ではない。

士郎に生き続けなさいと言いつづけた人物。

そのおかげで、生きること・・・『幸せに生きる権利』ことを士郎は見出した。

『色欲編』

ノワールはブランを庇い倒れる。その後、『強制デジクロス』によってブランの中に取り込まれる。

『バケモン』

※今は遠き日の記憶で登場。

デーモンの進化前。

『憤怒の剣』の守護者を士郎と一緒に倒した。

士郎への呼称は主。

『オタマモン（赤）』

※今は遠き日の記憶で登場。

『嫉妬の剣』の守護者を士郎とともに倒した。

士郎と出会う前、同じ集落のデジモンから迫害を受けており、そんなときに旅をしてきた士郎に助けられた。

『嫉妬の剣』の記憶を手に入れた後から口調が『僕』から『儂』へと変わり、記憶の中のリヴァイアモンの影響を受けたことで、老人のような口調になった。

士郎への呼称は『契約者』。

『フアスコモン』

※今は遠き日の記憶で登場。

『怠惰の剣』の守護者を士郎とともに倒した。

精神年齢は4〜5歳。

他の士郎のパートナーデジモンのなかで最も『怠惰の剣』の影響を受けていない。

士郎への呼称は『しろー』。

『ファントモン』

※今は遠き日の記憶で登場。

『強欲の剣』の守護者を士郎とともに倒した。

そのとき得たイグドラシルの能力を使って、仲間を覗き見するのが趣味になってしまった。

士郎への呼称は『シロ』

『シスタモンブラン』

※今は遠き日の記憶で登場。

ハツカーズメモリー同様、普段は礼儀正しいが、性格の根本にあるのは戦闘本能である。

『色欲編』

姉のノワールを取り込み進化。

リリスモンに進化化したものの、さらに進化し、強化されたシャウトモンとのとてつもない実力差に絶望し、逃げようとする。

《デジモン》

『御島エリカ』

ハッカーズメモリー同様、両親を失い自身も大きな障害を負ってしまふ。医者に宣告を受けた後、士郎と出会い運命が変わる。

士郎経由で悠子達に伝えられて岸辺リエによって保護、闘病・開発の生活を送つてわずか数週間で精神のデータ化を実現させた。

その後、急いで記憶サーバを作ったことによりなんとか生き残ることに成功した。フリーデイエモンとイーターエデン、二つの記憶を保有している。

『相羽タクミ』

サイバースルゥースの世界で世界を救った英雄であるが、この世界では探偵事務所で

働いている大学生。

基本的に無口だが、色々と考えている。しかし、鈍感である。

『白峰ノキア』

サイバースルウースの世界でロイヤルナイツ『オメガモン』のパートナー。非常に口が軽いために、魔術のことは仲間うちで唯一知らない。

『真田アラタ』

かつてとサイバースルウース世界で『レジエンド』とまで呼ばれたハッカーであり、この世界では『EDEN』制作において最も貢献したと言つてもいいほどに、『EDEN』の完成へと導いた。

この世界でも、チームを『レジエンド』と呼ばれるまでのし上がったが、この世界でも『ジュード』は解散している。

『神城悠子』

かつて、サイバースルウースの世界で兄のアバター『ユーゴ』を使って、チーム『ジュード』解散後、最も力のあるチーム『ザクソン』を率いていた。記憶を手にしてからは、そ

の手腕を発揮して現在の『EDEN』開発のチーフをしている。

相羽タクミに好意を寄せているが、彼が鈍感なため気づいてもらえない。

『神城勇吾』

サイバースルウースの世界において、一番最初の『EDEN症候群』の患者であり、イーターに最初に取り込まれた人物。

イーター内で精神データに最も触れていたおかげで、精神のデータ化において一日の長がある。

『天沢ケイスケ』

ハッカーズメモリーの主人公。

この世界では、ハッカー『M』と名乗っている。

『M』の活動は、恋人の『乃木優』の進めとカミシロの経営が困難になったとき決意した。基本的には悪い魔術師や企業にしかハッキングをかけない。

『M』の由来はモブ顔だから。

『乃木優』

ハッカーズメモリーにおいて、『クレイジーサイコホモ』化して中ボスであったが、この後世界ではTSして女性として生まれた。

記憶を手にしてから、好意を持っていたケイスケに告白、後に恋人になる。

『M』が有名になったときに、ハッカーチーム『デモンズ』を結成させてケイスケの負担を軽減した。

『岸辺リエ』

ロードナイトモンの記憶を手に入れた人間。

御島エリカを引き取り、『EDEN』開発に着手、そのかわり『EDEN』のエリカに記憶サーバを提供できる地位まで手に入れる。その後、エリカとの契約で記憶サーバを提供した。

性格は残虐性が高く、ロードナイトモンの意識にまで干渉するほどであった、エリカを引き取ってからは残虐性が少しずつ衰退していった。

『ジミイKEN』

サイバースルウースシリーズにおいて、『間桐慎二』ポジション・・・つまり、囃ませである。

この世界でもネット界隈のビジュアル系バンドで有名であり、それによりいくつものスポンサーを得る。その後、数回のライブを成功させて、最近ではリアルでも人気が上がっている。

※2wei編第六話参照。

デモンズの一員であり、慎二を救った人物。

慎二が魔術を諦めたのはこの人が慎二を音楽の道へと誘い込んだから。

『誰か』

士郎に『幸せに生きる権利』を教えた一人。
教えた人物は二人いる。

『師匠』

士郎へ『愛』を説いた人物。

ハッカーズメモリーには登場している。

※シスタモンノワールを参照。

『嫉妬の剣に記憶された英雄』

今作品でのオリ設定の一つ。

ゼヴオリューションの世界観のオリジナルの前日譚の主人公。

他の記憶との違いは、唯一世界を自分の手で救えなかったことと、他とは違いこの設定だけは、今作のデジモン側のオリジナル。

グランドラクモンにダークエリア内にある城に呼び出されるが、呼び出した本人が力と知識を失ってしまったために、知識を取り戻すまでにとっても苦勞を重ねていた。

ダークエリアを突破する際にリヴァイアモンと戦闘になってしまい、なんとか打倒し、イグドラシルにも致命的なダメージを与えるものの、グランドラクモンを失ってしまい、虫の息のイグドラシルに背を向け、アルファモンの力を封印されたドルモンを救出、後に『ニューデジタルワールド新 世界』へと送り出すことに成功するものの、ロイヤルナイツの一角に殺されてしまう。

設定上、デジモンの世界観ではあり得ないほど不憫な主人公。

《f a t e プリズマイリヤ》

『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』

『プリズマイリヤ』の主人公であり、衛宮士郎の義妹。

プリヤ世界とあまり大差ないが、幼少期、士郎の行方不明後に少し士郎に依存していた。

『アイリスファイル・フォン・アインツベルン』

『プリズマイリヤ』の世界と変わらず、二度と聖杯戦争が起きないように夫『衛宮切嗣』とともに世界中を渡り歩いている。

士郎の変化に最もはやく気づいた人。

『リーゼリット』・『セラ』

『プリズマイリヤ』同様、士郎とイリヤの面倒を任されている。

士郎が行方不明中での記憶喪失と偽っていることに気がついている。

見つかった後、士郎を誘拐した者を探していた。その途中で、白髪で六十代から七十代くらいの名前のわからない男性（キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ）を見つけたが、士郎との会話後なんの情報も掴めなかった。

プリヤ原作とは違い、士郎の行方不明と士郎自身の言葉から、士郎やイリヤの『平和な世界』で暮らせるように努力している。

『キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ』

fateシリーズにおいて五人いる魔法使いのうちの一人である。

プリヤ世界とは違い、デジタルワールドから帰った後の士郎に出会っており、士郎からデジタルワールドの出来事を全て伝えられた人物でもある。

『間桐桜』

fate原作においてヒロインの一人だった人。

この世界では基本的に兄『間桐慎二』と二人で暮らしている。

弓道部に所属しており、士郎が弓道部に所属するように勧誘しているが、いつも一歩手前で生徒会長柳洞一成によって阻まれる。

※2wei編第六話参照。

とある理由で士郎が好きになったことを明かし、告白。

しかし、士郎には好きな女性がいたということを教えられ、振られる。

『間桐慎二』

※2wei編第六話参照。

ジミイKenに救われた少年。

間桐に執着していたが、前当主であった臓硯の日記に魔術の才が無いことを理由に当主にはなれないことが書かれており、その後家を飛び出した。

その後、ジミイKenと邂逅する。

そして、ジミケンに憧れてギターを始め、その後ジミケンの隣でギターを弾く立ち位置までのし上がる。

たぶん、原作に比べて、この小説の中で一番救われた人物。

『鎖の少年』

第四話から登場した。

※一章のエピローグにて、型月世界に救いは無いと言い、衛宮士郎に対して『選ぶ』ことを願っている。

― 独自設定・裏設定 ―

『型月人物とデジモンの性能』

《表》

《粹無しレベル》

NEO、デクスモン、オグドモンなど

《超究極体上位レベル》

オメガモンAlter-B、スサノオモンなどの神話系

《超究極体下位レベル》

ロイヤルナイツ組、七大魔王組、イグドラシルなど

セファール（f a t e
）

《究極体上位レベル》 \geq ORT

三大天使、魔王系、四大竜など

《究極体中位レベル》

基本主人公のパートナーデジモン（究極体）など

赤い月のブリュンスタッド≧ゼルレツチ最盛期

《究極体下位レベル》

キングエテモン、マリンエンジエモンなど

クラス・ビースト

→

《完全体上位レベル》

ドラグレモン、ライズグレイモン、ヤタガラモンなど

《完全体中位》

メタルグレイモン（核兵器一発）など

グランドクラス

《完全体下位》

スカルグレイモン、デーヴァ十二支など

カルナ、アルジュナなどのインド神話、オジマンディアス、スカサハなど

《成熟期上位》 \geq 『ヘラクレス』などの強力なサーヴァント

ジオグレイモン、デジモンアドベンチャーの強化デビモンなど

ギルガメツシュークロックモン

《成熟期中位》 \geq 基本サーヴァント

パートナーデジモン（成熟期）など

《成熟期下位》 \geq 基本守護者

メラモン、ドリモゲモンなど

※

サーヴァントは原作で戦闘機一体分と明記されているので、基本的にデジモンでいうところの『成熟期』レベルだと設定されています。

性能面でいえば、宝具はギルガメッシュ等を除き、強いサーヴァントで『完全体』レベル（核兵器レベル）、弱いサーヴァントで『成熟期』を倒せるか倒せないかがぐらい。

身体能力では、『成熟期』を基本的には超えられないが、強力な逸話を持つていけば、『完全体』下位ぐらいならなんとか。

ギルガメッシュが成熟期上位よりも弱いのは、宝具は強いですが近距離の戦闘面において慢心して守護者に負けるレベルだからです。宝具『エヌマ・エリッシュ』の不意打ちならば完全体上位も楽に倒せますが、近距離まで一気に詰められると近距離戦闘があまり得意ではない完全体デジモンでも一瞬でやられます。凶鑑のクロックモンみたいなネタ枠、もしくはロマン砲程度にしかありません。

また、宝具射出にも一定の時間がかかるために、ペックモンやエアドラモン、ガオガモンなどのスピードタイプのデジモンに隙を突かれて倒される可能性があるからです。カルナがなぜ上位かといえば、不死身や宝具の強さ身体能力がサーヴァントでも上位のレベルだからです。

この作品の主人公、土郎のレベルは魔術(?)を使えば基本的に完全体上位、魔術(?)

を使わなければ成熟期中位ぐらいです。

―疑問点―

- ・ 士郎はどうやってデジタルワールドへ行き、帰ってこられたのか？
- ・ 士郎の魔術（？）とはいったい？
- ・ 『監視』とは？
- ・ オグドモンの声はなぜ聞こえる？
- ・ 士郎の詠唱の変化した理由？
- ・ 鎖の少年が言った『楔』とは？
- ・ 士郎がなにを願われ、なぜ切り捨てたのか？

f a t e ・ デジモン用語 ・ オリ設定 (ネタバレ)

《デジモン》

『デジモン』

正式名称 『デジタルモンスター』

士郎達が住む世界に隣接している、擬似電脳世界 『デジタルワールド』 で暮らす電子生命体。

・ デジモンのタマゴ通称 『デジタマ』 から生まれる。

・ オス・メスの区別はない。

そのため、生殖行動をする必要がない。

・ 死亡時に一定の強さを持っているとデジタマを産み落とすことがある。

・ 『進化』 という身体を変化させて、成長する。

・ 基本的に闘争本能が高い。

『進化』

デジモンが一定以上の成長を行うときに現れる現象。

『幼年期Ⅰ』↓『幼年期Ⅱ』↓『成長期』↓『成熟期』↓『完全体』↓『究極体』↓『超究極体』

の順に世代があり、基本的に『幼年期Ⅰ』から『究極体』の順に進化することができる。

また、『アーマー体』、『ハイブリッド体』、『超究極体』などの一部のデジモンしか進化できないものもある。

『デジタルワールド』

擬似的な電脳世界。デジモン達が生きている世界。

地球に似ており、海や陸をはじめ、火山の大陸や氷の世界、機械の街などさまざまな場所があり、デジモン達はその場所にに応じて進化していたりする。

この小説では、サイバースルゥースの世界を基準としている。

『イーター』

サイバースルゥースでの敵。

基本は灰色をベースに白黒の模様のオウムガイのような触手をしている。

触手を伸ばして、人間、デジモン問わず存在に接触してデータを侵食し、姿を変えよ
り強力な存在へと変化する。

デジモンには耐性があるが、人間には無くアバターに触れられると精神データがバグ
化して意識が戻らなくなる奇病、通称『E D E N 症候群』になる。

実態は、人間世界やデジタルワールドよりも上位の次元の存在であり、データを上位
の存在に送り届ける役目を持っている。それを、人間のデータを取り込むことでバグ化
してしまい、暴走するようになってしまった。

『ミレイのハッキングスキル』

相羽タクミと天沢ケイスケが御神楽ミレイからもらったハッキングスキル。

ありとあらゆる工程を無視して、ある一定の事象を電脳空間内で行うことができる。

『イグドラシル』

デジタルワールドのホストコンピュータであり、デジモン達の神。

『ロイヤルナイツ』

イグドラシルに仕えているデジモンのトップ。
全員が究極体である。

『終焉防ぐ願いの剣』

ロイヤルナイツの始祖たる『インペリアルドラモンPAモード』が使う『オメガ・ブレード』を士郎が自分に使いやすいように若干劣化させたもの。

本来ならば切った存在を『初期化』させて存在を『無』にするのだが、触れずに相手を『初期化』できる代わりに、一定以上の存在の一部を指定したあとに『無効化』しなければ使うことはできない。

※第七話のヘラクレス戦において、宝具『十二の試練』を無効化した。

また、士郎が『デジタルワールド』で最も使った武器でもあり、もともと白い剣だったが、『デジタルワールド』での『ある出来事』以降、黒く染まり名前も『願い』↓『欲望』へと変化した。

『主人に仕えし最防の盾』

ロイヤルナイツ『クレニアムモン』の持つ魔楯。

必殺技『ゴッドブレス』による三秒間の『絶対防御』は、ありとあらゆる攻撃を無効化することができる。

また、士郎の体内なかにある韃と同じ名前。

『七大魔王』

デジモン達の中でも、魔王型デジモンと呼ばれる存在……の中でも最強クラス
の七体のデジモン。

とあるデジモンを封印するために、平行世界に存在する全ての七大魔王はその力を分散させているシステムを担っているのため、上位のデジモン達でさえもあまり手を出せず、勝手に殺すことはできない。

しかし、大抵のゲーム・アニメ版のラスボスで登場してしまう。
しかも、主人公にやられてしまうことが多い。

『オグドモン』

上記のとあるデジモン。

この小説では、士郎に倒されている(?)。

士郎と一体化(?)をしているが、詳細も謎。

デジモンの中でも間違いなく最強であり、罪の化身とまで呼ばれている。ありとあらゆる悪意を持つ攻撃は無力化され、どんなデジモンであっても傷つけることは不可能。全ての罪を『贖罪』することができる。

《fate・プリズマイリヤ》

『サーヴァントカード』

サーヴァントの力を置換することによって、誰でも使える兵器。

やはり『複製』ではなく『置換』しているので、多少劣化しており、サーヴァントにあつた感情などはなく、力や宝具も使えないものもある。

『複製カード』

ミレイのハッキングスキルによって、修正された『サーヴァントカード』をコピーしたうえで、『記憶』で上書きされたもの。

脳空間内では使えないうえ、修理レストレーションによって、カード内の記憶の縁が強い者しか

使えなくなった。

しかし、劣化したものに比べて強く、戦えば確実に圧倒することができると、
現在あるのは、

相羽タクミ

『ケルビモン（善）』の『魔術師』のカード

真田アラタ

『イーター』の『降臨者』のカード

『バーサーカーのカード』

ミレイのハッキングスキルによって、劣化していたのが元に戻った。

また、元に戻ることによって、より縁のある者しか使用できなくなってしまった。

※七月二十二日

暮海杏子

『アルファモン』の『裁定者』のカード

プリズマイリヤ

プロローグ 汚れ物の英雄

『力が欲しい』

圧倒できる力が・・・

途方も無い力が・・・

目の前の状況を打破できる力が・・・

目の前の守りたいものを守る力が・・・

そして、俺は立っていた。

円を描くように建てられた七つの城。

その中心に神殿が建てられ、周りには七つの台座が置かれていた。

台座にはそれぞれ七本の剣が突き刺さる。

剣は、それぞれを意味する『罪』に突き刺さる。

幼い俺はそれぞれの剣を『覚悟』を決めて引き抜いた。

どうしても守りたいものができたから・・・

彼の者にオレンジの紋章が光った。

憤怒の劍

『いつか歩んだ地獄を見た』

自分が昔いまに見た地獄。

誰一人として救いようのない大災害。誰もが生き残りたいと願ったにも関わらず救えなかった・・・いや、救わずにただ生き残りたいと・・・そう、願った自分の抑えきれない『憤怒』。

彼の者に水の紋章が光った。

嫉妬の劍

『いづれ知る地獄を見た』

大災害じごくから救える自分を見つけ、幸せそうに笑った彼の笑顔。それは、とても嬉しかった。そのせいで『望おかげんだ夢せいのみかた』を指指せた自分への『嫉妬』。

彼の者に青の紋章が光った。

怠惰の劍

『いづれ来る結末を見た』

『正義の味方』の結末は呆気なかった。

より多く救ってきた民草に死刑にされるといふ滑稽な結末。
それは、全員を救わなかったより多くを救った自分の『怠惰』。

彼の者に紫の紋章が光った。

強欲の剣

『いづれ望んだ願いを見た』

たつた一人の妹の為に『正義の味方』を敵対した珍しい自分。それは衛宮切嗣との決別。

無色の杯に願ひ・・・叶うはずもない途方も無い夢。

たつた一人の為に行う、優しい『強欲』。

彼の者に緑の紋章が光った。

色欲の剣

『いづれあるはずの幸せを見た』

愛を向けた彼女たちと気づかない自分。

繰り返される四日間、自分は一人の少女と天に昇った。

そこにあつたのは『悪』と『色欲』。

彼の者に黄の紋章が光った。

暴食の剣

『いずれ行う地獄を見た』

殺し続けた記憶の終焉。

血潮は枯れ、心は鉄へと変えられた。

それでも、『正義の味方』までは程遠く、ただの機械へと成り下がった。

それでも、たくさんの人を殺し続けた『暴食』。

彼の者に赤の紋章が光った。

傲慢の剣

『いずれ選んだ道を見た』

『正義の味方』の前の自分の選択。

いずれ歩むと知ったとしても諦めきれないその姿勢にあったのは、自分にだけは負けたくないという子供の我が儘。

望む結果にあらずそれでも『正義の味方』に歩む姿勢はまさに『傲慢』。

迷い込んだ先は、電子の世界。

七体の友と出会い、たくさんの敵と戦った。

どうしても勝てない敵を倒す為に七回の選択を迫られた。

最終的に七体とともに向き合ったのは闇の化身。

立ち向かい

証明し

封印し

受け入れた。

そこに『正義の味方』の自分はおらず、

代わりに、生まれた『傍観者』。

『傍観者』は友と語り、学び、理解した。

自分の生涯は彼らと出会い始まったのだと・・・

「ぼくたちは君をずっとずっと待っていた」

「僕らはデジタルモンスター。」

電子の世界に住む、君とは違う生命体だ」

「さあ、君の人生ものがたりを始めよう。

人形きみがどんな選択いきかたを選ぶのを僕は隣で見物させてもらおうよ」

「懐かしい夢を見たな」

仕事場のソファから起き上がる。

朝の日差しが出る前に、身支度を整え朝食の準備へと取り掛かる。

彼女たちが起きるのは大抵俺の出発前だ。

「いただきますっつと」

朝食は和食。

ご飯に茄子の味噌汁、鮭の塩焼きに小松菜のお浸し。それに林檎をすりおろしたものを入れたヨーグルト。後、彼女達のコーヒー専用マヨネーズ。

朝食を終えて、時間は八時。仕事場から学校までは、徒歩で約三十分、自転車でも十五分かかる。

もうそろそろ出発の時間だ。

「おはよう『土郎君』。今日も朝からはやいな・・・」

彼女は眠そうに目を擦りながら自室のドアを開けて出てきた。

「おはようぐざいます『杏子さん』」

彼女は暮海杏子くれみきようしさん。

この探偵事務所の所長であり、俺、衛宮士郎がここで働かなければならない理由の一つだ。

(親父よりも、イリヤやセラの説得をするのが大変だったな・・・)

バイトとしてここに通うのにあたって、お兄ちゃんっ子の妹のイリヤと、教育ママのような存在の使用人のセラには徹底して反対されたこともあり、なんとか説得したのも自分にとってはいいい思ひ出だった。

『おいそろそろ時間だよ』

「あつやばい」

時計を見れば、もう八時十分。変な匂いのするコーヒーを飲む彼女に笑われたのが見えた。

「それじゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

鞆に普通なら『黒いキーホルダーに見える物』をつけて俺は玄関から飛び出す。

それは桜の花が散り終えた、春の風が吹く爽やかな朝であった。

第一話 『強欲』の少女

「はああ〜」

現在、穂群原学園の昼休み。

俺は生徒会室でいつも通り、生徒会長の『柳洞一成』と昼食をとっていた。

「どうした？溜息などついて。

またバイト先にでも泊まったとでも言うつもりか？」

ギクツと音が鳴りそうな顔になったんだと思う。

その顔を見て一成は大きな溜息をつき、箸を止めた。

「いいか、俺は何度も言っていることだが、お前はもう少し高校生だということを自覚しろ。」

高校生は十時以降働いてはいけないと労働基準法にも書いてある・・・」

最近、一成の説教に耳が痛くなる。

この説教だって何度も繰り返したことだった。それだけ、俺が隠していることが多いのだと自覚させられる。

「そんなことは、わかっているさ・・・それでもさ・・・やらなきゃいけないことが

多すぎるんだ。時間がないことはないが、目的を達成するには出来る限り全力でやっていきたいだろ」

「ほう、そこまでしてやらなければならないこととは、いったいなんなのだと俺は思うのだが？」

「……どうせまた教えてくれないのだろう？」

一成な一瞬、訝しげな顔になりその後すぐに諦めにも似たその言葉を言った。

「ごめん一成、俺は……」

「いや、俺も悪かった。だが、もし頼れることができたのなら言ってくれ。俺は友人だからな。少しでも衛宮の力になりたいとは思っている」

どう見ても苦笑にしか見えない。

まあ、俺がそれをさせている原因なのだと思うと、その行為自体は正義の味方とは違うのだが、やはり自分も似てきているのかと不安になってくる。

『キヤは派ハツ!!!不安にナルくらイ奈ラ喋ればイイダロ?』

(少し黙ってる!!!)

俺の内心を知っているくせに『アイツ』は『語る』。

心の中で。

「そういえば夜に円蔵山……特に鍾乳洞の付近で、衛宮を見かけたと仏弟子の一人に言

われた。それが何か関係しているのか？」

「えっと、まあそんな感じだ。」

一応依頼内容については守秘義務があるから話せないが、この街でちよつとした人探しをしているのさ」

柳洞寺の関係者の方々のうちの誰かには、いづれ知られると予想していたので、『嘘』に『事実』を少しだけ混ぜて嘘だとわかりづらくする。

「人を探しているのなら人手が必要であろう。何故、衛宮は人を頼らない？」

結構痛いところを突いてくるな・・・

「さつき守秘義務があるって言っただろう。」

今回の依頼人は、あまりこのことを公にすることはしたくないんだ。それでちよつと俺が雇われている『暮海探偵事務所』に知り合いがいたから、依頼人は内密に依頼したんだ」

まあ、あの『爺さん』の知り合いは俺なんだけど。

「それも守秘義務ではないのか？」

「ある程度なら特に問題はないさ」

そうある程度なら問題はない。

見つからなければそれでいいんだ。

「ある程度ならか・・・すまないこれは詮索しすぎたな」

一成がすぐに謝る。そんなに変な顔をしていたのだろうか？

「いや、いいさ。・・・それよりも最近また弓道部の部活勧誘が酷くてな。そつちでなんとかしてくれないか？」

「ほう・・・それは問題はだな。」

それくらい頼みならば、すぐに手伝ってやろう」

無理矢理話題をそらしても真面目に頼らせてくれる一成。

先ほどのことがあるから、少し自分が卑怯だとは思いますがとても良い友人を持てたのだと思う。

それからは昼休みの予鈴まで、昼食をとりながらゆっくりと会話を楽しんでいた。

「『先輩』！」

今日こそ、弓道部に来てもらいますからね!!」

放課後、教室を出ようとするが、苦手な後輩『間桐桜』である。

去年、友人の『間桐慎二』に弓道部の助っ人として頼まれた際に『直接』知り合った。その時、弓道部で『そこそこ』活躍した俺はその後、結果として勧誘が酷くなった。

一成のおかげで勧誘は収まってきたが、今年から入学してきた彼女によって再び勧誘

され始めた。

まあ、それ以前よりずっと前から彼女のことは苦手であったが……
「すまないが、妹が小学校から迎えに来てくれるんだ。そのことに関しては、また今度な……」

いつも一緒に帰っているわけではない。

探偵事務所に泊まる日の次の日は、イリヤが迎えにくることになっている。俺が探偵事務所に泊まることに対してのイリヤ達の譲歩のひとつだ。

「先輩はいつもそうです!!」

なにかにつけて私の勧誘を断って、バイトや妹さんの相手ばかりして……バイト休みの日くらい、私のお誘いにもものつてくれたっていいじゃないですか!!!」

おい、どこで手に入れたその情報……

『めん倒クサイなこの女……』

(おいっ!!そんなこと言うな!!)

この後輩は無駄に感の……

「なにか言いましたか。せ・ん・ぱ・い?」

『(ヒイツ!!)』

背後からの寒気は、間桐から発生しており俺に対して理不尽な怒りが向けられる。

あの洋館で慎二と一緒に不気味な日記帳を見たときと感覚が似ている。

「いつ、いえ．．．なにも言っておりません！」

その時のことを思い出しそうになり、つい背筋がピンとなる。

「む．．．なにか怪しいですが、まあいいでしょう。それでは、先輩。私の勧誘．．．ついてきますよね．．．．．」

満面の笑みを浮かべて、彼女は言う。

もうこれでは、自分は断れない状況にまで追い詰められたと言ってもいい。

こんな恐ろしい状況でも、俺には救いの手が差し伸べられる。

「間桐後輩、すまないがここは帰ってくれないか。」

衛宮にも衛宮なりの事情がある。また今度、出直してきてくれないか」

『NICE!!NICEダ、ホモ眼鏡』

言っている言葉には悪意があるが、『奴』の言う通り丁度いいタイミングで登場した一
成。

「来ましたねっ!!

いつもいつも先輩と私の邪魔をして．．．先輩も今日という今日は逃がしませんからね!!!」

「貴様の意見など聞いておらん。衛宮、妹が校門で待っているぞーさっさと行ってやれ」

間桐が俺を追おうとするも、一成がすぐに道を遮る。

昼休みの時間は無駄ではなかったようだ。

「ありがとな、一成。それにさようなら間桐っ」

すぐさま踵を返し、全力で自転車置き場までダッシュする。

「あ、ちよつと待っててください先輩ー」

「ここから先には行かせんぞ!!」

背後から大声で言い争っているが、一成が作り上げたこのチャンスを無駄にしないため、決して振り返ることはなかった。

「ぜえ．．．はあ．．．ぜえ．．．はあ．．．」

「大丈夫、お兄ちゃん？」

今、俺を心配してくれている少女は、義理の妹の『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』。

現在小学五年生だ。

「大丈夫．．．少し息．．．を整えるから待って．．．くれ．．．」

今俺はイリヤと一緒に下校中である。

だが、先ほど全力疾走したことにより今は汗だくになっていた。

「すう……はあ……もう大丈夫だ。

イリヤ、俺は自転車だけど、疲れちゃったからな、歩いて行くけど……イリヤはど
うする？」

「私もお兄ちゃんと一緒に帰る！」

イリヤはニコツツて笑ってそう言った。

だが、俺はそのときあることを思い出した。

「そういえば、イリヤ。

今日、なにか宅配便が届くって言ってなかったっけ……」

「あつ、あーそうだった。

ごめん、お兄ちゃん……先帰るねっ!!!」

そう言って走って帰って行った。

一体なにを買っていたのやら。

ふと、空を見上げて夕日が街を照らしている。

この世界は本当に幸せな世界だ。

今ならそう思える。

俺の家族は、きつと『幸せ』になれなかつたはずだから。

『平オンを享受するのハ良医ガ伏せろ』

「はっ?」

『歪むゾ』

ギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチ

『奴』の言葉とともに、世界が無理矢理引き裂かれるような音が鳴り、柳洞寺付近から空間自体が軋み始める。

周囲の人間達はそれにまるで気づいていないように歩いている。

周囲の人間……いや、この状況を把握できるのはこの世界で数名もいないだろう。

「ま……まさかつ!!!」

『キャハハハ、ソ野通りサ!!!』

俺はこの現象に心あたりがあった。

『黒化英霊』

『クラスカード』

そして……

『強欲の剣』

「あの願いが叶ったとしても言うのか……?」

決して叶うとも思えない願い。

理想を捨てた男の願い。
とても暖かく優しい願い。

『叶ったカラ、一人増えタンだろ』

「はは・・・ははは・・・」

『世界』に『罪』が増える。

音が鳴り終わると、すぐさま俺は自転車を漕ぎ始めた。

『イマから以下無くて良いのか?』

(まずは体制を立て直す。それに今行ったら、今までやってきたことが台無しになる)
『奴』の考えを否定して、家へと戻る。決行は夜。

現在夜九寺過ぎ、イリヤは風呂へ入った頃合いだろう。

俺は夜の街を駆けていく。

それは『衛宮士郎の赤い外套』ではなく、『憤怒が扱う赤いローブ』を着ていた。
鍾乳洞には痕跡は残っていたが、誰も存在していなかった。

『ケケケ、急がナイ都誰かに拾和れチマうぜ』

(だから急いでるんだよ!!!)

かつて『衛宮士郎』が行ったように、昔自身が『投影』させた力を使い、放課後とは比べ物にならないスピードで駆けていく。

ふと、公園に光が灯った。

(あそこか!!)

全力疾走をしたおかげで『一瞬』でついた。

そう『一瞬』遅かったのだ。

「住む場所をください」

「食べ物をください」

「服をください」

「戸籍をください」

「……わたしに居場所をください」

たった『一瞬』で全てが決まってしまった。

失敗した。

すぐさま確保していればこんなことにはならなかったのだ。

『木や葉ハハ、とつても面白イことに成つタなシロウ』

(黙つてろ!!! 『オグドモン』!!!)

同時刻……

もう一本のステツキは違う『少女』と出会い契約を結んだ。その一件に気づいたのは家に帰つてすぐである。

かつて『オグドモン』が誰かに語つた。

かつて俺の『体は剣で出来ていた』。

しかし、『英霊エミヤ』では『七罪』を救うことはできなかった。

だから、『理想』を捨て、『俺』を変えた。

結果として、『傍観者』には『オグドモン』がいる。

第二話 『依頼』と『邂逅』

『ほほう、あやつら『カレイドステッキ』に裏切られるとはもう?』

現在朝の五時。イギリスの時間帯では夜の九時。

昨日、仕事途中で出られなかった依頼人『キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ』に連絡を入れていた。

あの後、家に帰るとセラガの怒髪天の姿を発見した。どうやら壁に突然凹みができ、おり、『犯人を捕まえてひき肉にしてグラム 98円出荷してやる』等の愚痴を聞かされた。

『ゼルレッチの爺さん』に例の報告カレイドステッキをする前に、壁の凹みを見るとどうも最近見たような形の大きな凹みを見つけた。

嫌な予感がした為、すぐに家を調べたところイリヤの部屋に『遠坂凜』がいることがわかり……盗み聞きしたところイリヤもカレイドステッキと契約していたことが判明した。

その後、つい『なんでさ』と言ってしまい、オグドモンに笑われてしまった。

『クッククック、まああやつらの性格では仕方なからう』

「それは・・・まあ仕方ないか」

どう考えてもあの二人が悪い

・・・が、あの二人を一緒にの任務を下したこの爺さんも悪いとは思う。

『それで・・・お主が考えていた『最悪の事態』が発生したわけじゃが、一体どうするつもりじゃ?』

そう『最悪の事態』。

この世界に『衛宮美遊』という並行世界の『異物』が侵入したこと。

世界の次元を超えて並行世界に移動することは、ほぼ不可能である。それを成し遂げるといふことは、異世界との壁に穴を開ける行為といつていい。この世界の抑止力はそこまであまいものではない。

この爺さんの『第二魔法』も、『並行世界』の『観測』や『移動』はできるが、『権限』を使い移動するのであって、無理に並行世界への壁をこじ開けるようなことはしない。だから、『別世界』には行くことができなかった。

だが、今回は違う。

壁をこじ開けることによって、かつてどこかの『並行世界』で起きた、『EDEN』の二の舞になりかねない。

たとえば、『運命』だろうと、『奇跡』だろうと、又聞きで聞くだけでも悲惨であった『人間』と『デジモン』との戦いのようなことを繰り返してしまふ可能性もあるのだ。

「あんたはこの世界の異常について調べてくれ。俺の方は、『依頼』通り『危険だと判断した場合、カード回収の介入』および、『カードの製作方法とその出どころの調査』を行う」

『ほう、それではお主の『イリヤスフィール』を守れないのではないか?』

「いいのさ……俺みたいな『傍観者』の側にいれば危険が伴う。きつといつか『俺』では守れなくなるときがくる。そのときのために『戦闘』を経験していくのは仕方ないことだ。

……それに、無力であれば友人さえ助けられないからな」

決して『衛宮士郎』せいぎのみかたが言わない言葉。今の『俺』だからこ言える言葉だ。

俺は、『自身の罪』を戒めるようにに言った。

『カッカッカ!! 『経験者』だからこ言えることもあるのじやな』

「まあ、そういうことだ。

並行世界のことを知っているなら、『イリヤ達の中にあるもの』ぐらいわかっただろ」

『聖杯か?』

「そう『聖杯』だ。」

今は、切嗣達オヤジがもう二度と『聖杯戦争』を起こさないように奮闘しているが、いつかは切嗣達では守れなくなるときがくるし、なによりそのときに俺がここにいるとは限らないからな」

第四次聖杯戦争は『未然に』終わつたらしいが、正確な情報が足らずわからなかった。聖杯は今もイリヤの中に存在していることは確かである。

『それを本当にワシみたいな捻くれ者に頼んでも良いものなのか？』
きつとその顔には薄ら笑いを浮かべているだろう。

だが、俺は確信して言った。

「大丈夫、これはあんたの『管理』の一環だ

俺がわざわざ出しやばる案件になったら、それなりな連絡をしてくるだろ」

『……カツカツカ、それもそうじゃのう。』

『この世界で起きた異常について』はこちらで調査をしよう。それじゃあ、探偵事務所たんていじむしょの面々によろしくのう』

「よろしく……ねえ？」

電話を切られ、少し憂鬱な気分に戻る。

美遊かのじよが来てしまった以上、『最終段階』に入っている『工事』のペースを上げなければな

らない。

「はあ……忙しくなるな」

「クツクツク、三年か……あやつも変わったのう」

最初に会ったのは確か……

「なんじゃ、この小僧は？」

イギリスのとある浜辺に打ち上げられたどこかで見たことあるような顔の日本人の少年。先日、ワシは管理していた世界の異変に気づき、この世界へとやってきた。

現代において、浜辺に打ち上げられていること自体に驚きだが、それ以上にこの少年への既視感と根源的な恐怖に興味を持った。

近くのホテルに連れて行き看病をしていたのだが、少年はワシの顔を見ると一言、決して見逃せない言葉を言った。

「元の世界に……戻ってきたのか？」

「……いや、元の世界なんてわからないな。」

似たような『並行世界』なんてたくさんあるからな」

今、この少年は『並行世界』と確かにそう言った。まるで、ここに似た世界を知っているような口ぶり。

「あんた『キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ』だろ」

「貴様、何者だ？」

年不相応にどこか諦めたような笑みを浮かべる少年。その行為に、ワシはこの少年への警戒度を引き上げる。

「俺は何者だ？」か・・・一体なにになれたんだろうな、俺は。結局俺はただの『傍観者』でしかないはずなのにな」

「『傍観者』だと？」

少年はようやくくこちらを向いた。

「そう警戒しないでくれないか。『俺が何者か』という質問どころか、俺がここにいる経緯をすべて話しますよ。

・・・もう話したつていい気分なんだ」

そうすると少年は魔術回路を起動し、一言。

トレース・オン
『投影開始』

たった一言でその少年の正体を理解した。

少年は机の上に、対となる二振りの『夫婦剣』を置いた。

「まさか……お主は……?」

観測した世界よりもやや幼い少年は、自身の魔術に対し苦笑して、自身の名を告げた。

「俺の名前は『衛宮士郎』。

『人形』から『傍観者』になれただけの、ただの『悪人』だ」

第三話 暮海探偵事務所とオグドモン

「現実とは思えない・・・か？」

内容としては三流レベルの荒唐無稽なお伽話。

だが、その話を証明するにあたって、目の前に置かれた二振りの剣は『恐怖』と『安寧』を併せ持つて存在している。

自身の知らない世界・・・それに対して、恐怖を抱かないというのがおかしい。すぐに恐怖を振り払い、ワシは衛宮少年の今後に興味を持った。

「お主は、これからどうするのじゃ？」

「とりあえずは、『監視役』にでも会いに行く・・・ところで、ここはどこなんだ？」
会話後の彼は諦観の念が薄まり、年相応の笑みを浮かべていたが、窓を開けた瞬間に驚きの声を上げる。

「イギリスじゃが？」

その一言に、諦めたような表情になった。

その表情から、彼が最後にこの世界にいたのは『日本』だったことを思い出す。

「なあ、爺さん・・・誰にもバレずに日本に戻る手段はないか？」

「えっと……そうじゃな……」

頭の中で今まで作った礼装の内容を確認する。

（あれはダメじゃ……これも、それも……おう、そういうえればあれがあつたんじやつた!!!）

自身の作った礼装の中でも最高クラスの『収納箱』を思い出した。

「クツクツク……それなら良いものがあつたはずじゃ」

「ふう、やつと着いたの」

『ガタツガタガタ』

あれからワシ達は一日をまるまる使い、日本へと向かった。

そして現在、『暮海探偵事務所』の前までやってきたのじゃが……

『ガタガタガタガタ……ガタツガタツガタン!!!』

「たつく、うるさいのう……これ、少し待っておれ……よし！開けたぞ」

ガタガタと音を鳴らす『宝箱』の鍵を開けて、蓋を持ち上げる。

……すると、

「おいッ、テメエ!!!」

いきなり、人を『箱』の中に突っ込むとはどういうつもりだ!!!」

同時に、衛宮少年がいきなり飛び出してきた。

それも、怒りながら。

「たった一時間だけどな、あの中物凄く揺れんだよ。一体、何を乗って移動したんだ!!!」
怒る理由は当然、人一人を箱の中に入れて飛行機の『貨物室』に入れられたことだろう。

「悪かったと思っているが、あの方法が一番はやく『暮海探偵事務所』に来ることができたんじゃ」

「へ……なん?」

そう言つて衛宮少年は振り返ると、怒り顔が驚きの声とともにかき消える。

「まさか……あんだ」

「考えている通りだとも。」

そのおかげで、『少年』はこんなにはやく戻つてこられたのじゃからな」

少年が見る先は我が礼装の一つ『ゼルレッチの宝箱』。

第二魔法のによる『屈折空間』により少年は収納され、特殊な空間であるがため内部と外部での大きな時間の隔たりが存在するものである。

この礼装とワシの立ち位置によつて、衛宮少年は日本へと戻つてこられたのじゃ。

「その……いきなり、怒つてすまなかつた。……あと、ここまで連れてきてくれて、ありがとう」

衛宮少年は行つたことを恥じ、自身の間違いと感謝の念を伝えた。

「おい、うちの前で『爺さん』と『孫』のような行動をとるな。

それに、今日は休業日だ。依頼があるのなら……」

ワシが背後から来る気配に気づかなかつた。声を後ろからかけられた瞬間に驚くが、すぐに『監視役』がいるのだと思ひ出した。それに他にも理由がある。後ろを振り向いたとき、目の前には『絶世』という言葉が似合う程の美女が買ひ物袋を片手に立っていたからだ。

「……いや、その手の客ではないようだ。

『衛宮士郎』……君についての説明は受けている。そのの『ご老人』も関係者ではあるようだ。さあついてきてくれたまえ」

そして女性は『暮海探偵事務所』の鍵を開ける。

「ようこそ、衛宮士郎君。安心と信頼の『暮海探偵事務所』へ」

「ふむ・・・そうやって君はイギリスから帰ってきたわけだね」

衛宮少年はこれまでの経緯いきさつを丁寧に話し、自身の行ったことについて話していた。

「それでは、こちらのことについて少し話しをしよう。」

「すまないが、『助手君』・・・例の資料を頼む」

「はい、わかりました。『杏子さん』」

助手と呼ばれた少年『相羽タクミ』は、棚の中から一冊のファイルを取り出して衛宮少年に渡す。

「現在、君のことを知っている人間はここにいる『私達』と『ご老人』を含めて『七人』資料には彼女達以外に、『白峰ノキア』、『真田アラタ』、『神城勇吾』と『神城悠子』という少年少女の名前が載っている。」

「ご老人と『私』以外は、あの世界を救った『英雄』だ。」

なぜ私を選ばれたのかはわからないが、できる限り君が平和に暮らせるように努力しよう」

「お願いします」

少年は子供でありながらも真剣な表情でそれに取り組もうとしている。

『きゃはハハハ歯波ハ葉はハはは破!!!』

突如として、探偵事務所に響き渡る子供の笑い声。

ここにいる全員が反応を示す。しかし、誰一人として警戒することはなかった。なぜなら、その声の中心は衛宮少年から出ているからだ。

「この声は一体？」

「はあ、やっぱり聞こえる見たいですね」

衛宮少年の諦めた表情を浮かべていた。

「この声が『オグドモン』そのものです」

その一言に全身の怖気がたった、

それは他の二人も同様であり、恐る恐るといった様子で相羽少年が聞いた。

「たしか・・・オグドモンは封印されたんじゃない・・・？」

少し諦めた表情には妙な確信があった。

『イツタ通り墮口。去つさとセツメイしろ』

「そうだな・・・はあ、オグドモンはたしかに『封印』はされたが、もともと『曖昧な存在』であるため、この世界にとって『異質な存在』には聞こえるようです」

「『異質な存在』？」

相羽少年の疑問の声が聞こえる。

「ええ、『異質な存在』。

『並行世界』や『異世界』の自分自身を知っている存在に対しては．．．特に」
『けつ局アンタ等ノセイデコイツはこうな成ったんだ。その上『監視役』都破特にワラエ
ルなおい!!』

オグドモンの甲高い声に肩を揺らした相羽少年。

「少し黙つてろ、話が進まない」

衛宮少年の一言で、気配が消される。

「このように、オグドモンは声とかは聞こえますが、基本的には俺が自ら『封印』を全て
解かなければ、なんともありません」

そのあとじやったかな、ワシに教会やらなんやらから連絡がきて、ワシはイギリスに
戻らなければならなくなったのは．．．

まあそのあともうひと騒動、少年達があつたそうじゃがワシにはわからんしのお。
今度また聞いても見るか．．．

第四話 少女と弓とサーヴァント

「コンパクトフルオープン！鏡界回廊最大展開！

『魔法少女プリズマイリヤ』推参!!!」

わたしは『ルビー』を掲げ、叫ぶ。

瞬間、わたしは光に包まれ『例』の魔法少女姿へと変身したする。

「悪いやつらと愚鈍な男は許さない。ルビーいくよー!」

「オーケー、マイマスター！魔力集積路二次開放！」

力が湧いてくるのがわかる。

この力をルビーに集中させて一気に……

「カレイドストラ……って、なに?!?」

瞬間、空が黒に染まる。

世界は暗くて寂しい世界へと変わり、唯一青い炎あかりが灯る場所は安心あやすする気持ちきもちになった。不思議と怖くなかった。わたしは光に吸い寄せられる蛾のように、あの青い炎あかりへと近づいていく。

「ダメです、イリヤさん!!!そちらには近づいてはなりません。戻ってください!!!」

ルビーの止めようとする言葉が聞こえる。それでも、足も手も炎に向かって進んでいく。それにどうしても向かわなくちやいけないうつて心が叫んでるんだ。

「やめてください!!!止まって・・・止まってくださいイリヤさん!!!」

ルビーの必死な制止も振り切つて、わたしは青い炎がある中心点へとたどり着いた。

「なにっこれ!?!」

わたしより少し年上の男の子が、鎖で巻きつけられている。

「今すぐ、取り外すからね!!!」

「んあ?」

黒髪の男の子の鎖は固く巻き付けられていてぜんぜん取れない。魔力を全部強化魔法を使おうとしたとき、男の子は目を覚ました。

わたしを見た瞬間目を見開いて驚いた。

「なんでこんなところに、『ーー』が!?!今すぐここから帰れ!!!」

鎖で顔が見えない男の子がなにかの名前を言ったとき、わたしは鎖に弾き飛ばされて男の子から遠く離れていく。かなりの速さで、まだ減速していない。『神殿』やとても大きな『お城』が見えると背後から光が照らされる。

その光の中に包まれた瞬間・・・わたしはベッドの上で寝ていた。目覚まし時計の音が鳴り響く。

わたしは憂鬱な気分になりながらも起きて服を着替え始めることにした。すると、ドアの方からコンコンつと音がした。

「おーい、イリヤ。もうそろそろ起きないと遅刻するぞ」

「うん、わかった。すぐいく」

そういえば、あの声どこかで聞いたことあるような気がするなあ。

「イリヤが風呂に入っている時に、風呂の近くで壁に跡をつけたやつがいるなんて知らなかったな・・・覗きだったかもしれない。もしそうだった場合、俺も家にいればよかったかな？」

「ぶっ・・・ううん、壁に跡をつけたこと以外なんにもなかったから。きつと大丈夫だよ」
登校中、お兄ちゃんはすこし怒った雰囲気ですう言った。お兄ちゃんは昨夜、セラにとつても愚痴を聞かされてたらしい。それだけなら、お兄ちゃんもいつものことだって言って笑っていただろう。それでも笑ってなかったのは、わたしを心配していることだろう。わたしは心配されていることに心を痛めた。

「まあ、それならいいんだが……」

昨日、凜さんから『魔術』についてすこし教えてもらった。凜さんは『魔術』について、一般人には話してはいけないって言うてたし、わたし自身お兄ちゃんを『クラスカード』集めには巻き込みたくないからなあ。

「そうだ、イリヤ。今日、少し遅くなるってセラカリズに伝えといてくれないか？」

今日はバイトが休みだったはず……バイトが今日入ったのかなあ。

「なんで？」

「ちよつとき、学校の後輩に弓道部に誘われてて、少し体験入部してくるんだ。まあ、今日だけなんだけど」

それって……まさか……

「また……女の人？」

お兄ちゃんはずこし時間をおいて首を縦に振る。

その行為に、わたしの頭からプチツとした音がなるのがわかる。

「お兄ちゃんなんてもう知らない!!!」

「いや、なんでさ!?」

そう言うてわたしは学校に向かって走っていった。

「――」

俺は朝のことについて考えていた。

イリヤはきつと、俺がまた女の人を落としたと考えているのだろう。

「ーっばいっ」

いやしかし、俺はなにもしてないぞ。並行世界とは違って『穂群原学園のブラウニー』とか『ばかスパナ』とか呼ばれるほど人助けした覚えはないし、それに特に目立った行動なんて・・・そういえば苦手な高飛びのテストの前は毎回放課後に残って練習していたな。

・・・いや、まさか・・・それはないはず。

たかが、高飛びだけでフラグが立つなんていくらなんでもおかしい。しかも、遠坂に手当てしてもらったし、困ってるときには『多少の手助け』はさせてもらったが、たかがそれだけでフラグが立つわけ・・・

「せんっばい!!!」

大きな声で呼ばれる。

すると、すこし怒った顔の間桐が俺を見ていた。

「悪い・・・すこし考えごとをしていて、気づかなかった」

これ以上このことを考えるのはよそう。最悪・・・爺さんに頼みたくなるかもしれないから。

「もうそろそろ部活も終わります。先輩、一回弓を引いて見ますか？」

そうだ。それを行えば、もしかしたら落ち着くかもしれない。

「それじゃあ、貸してくれないか？」

間桐の練習用の弓を貸してもらおう。

心を静かにして、ただ敵^{まじ}だけを射抜くことを考える。ゆっくり、弓を引いてブレがすこしずつなくなっていく。

そしてブレがなくなった瞬間――

気づけば、矢は的の中心に中っていた。

「やっぱり・・・こうなったか」

口の中の気持ち悪い吐き気と、それに応じて胸の中に広がる息苦しき。その二つが相まってこの状況に嫌悪感が生まれる。

「先輩はやっぱりすごいです!! やっぱり弓道部に入ってもらえませんか？」

それを知らない間桐は俺を褒める。その姿を見て罪悪感を感じるのは筋違いだ。この世界ではなんともないのだから。

『知ら無イツてのはらくダヨな』

(ああ、そうだな)

「貸してもらって悪いが、今のところ入るつもりはない」

笑顔で勧誘をする彼女を否定する。

「『今のところは』ですか・・・それなら頑張つて勧誘します!!!」

覚悟してください、先輩」

それでも、笑いながら彼女はそう言った。

夜、爺さんからもらった『礼装』^{うでわ}で鏡面世界の学校まで来ていたのだが

「なにやってるんだ、遠坂・・・」

『幅はハツ何テキから逃げ手ンだよ!!!』

イリヤ、現在進行形で『ライダーのサーヴァント』から逃げていた。オグドモンはその姿を見て笑い、遠坂はサーヴァントから遠く離れた校舎の影で応援している。並行世界との違いにさすがの俺も呆れていた。

『アつ、『宝具』ハナツゼあのサーヴァント』

ライダーのサーヴァントは宝具を放つ予備動作をする。

これはいきなり介入した方がいいかと思つて立ち上がるが、すぐに考えを改める。

『刺し穿つーー死棘の槍』

もう一人の少女が、『ランサーのカード』を使いライダーのサーヴァントを倒した。

『色欲』ノマスターが集メタカードだっけか？』

資料によると『色欲の剣』の中で『アンリマユ』のマスターをやっていた人だったはず。

資料を読む限り『色欲の剣』同様に戦闘能力が高く、封印指定されているがさほど問題ではない。

問題は・・・遠坂とルヴィアさんは喧嘩をしており、魔法少女二人はあまり会話もなく傍観している。

現状に関していえば、先行きが不安しか残らないのはなぜだろうか。

第五話 転校と『劇物』と敗北

「美遊さんかあ……」

昨日、ランサーのカードを使って、実体化した『ライダーのカード』を倒した彼女。

それが今日の朝、学校に転校して来た。算数の授業ではなんだかよくわからないけど、英語を使って凄いことをして、図工の授業ではピカソみたいな絵を描いて、唯一負けたことのなかった短距離走ではわたしよりもはやく走ってみせた完璧超人。

それが……

『カードの回収は全部わたしがやる。せめてわたしの邪魔はしないで』なんていわれちゃったんだよね。

「ねえ……わたし、美遊さんに悪いことしちゃったのかなあ。どう思うルビー」

「うーむ内容はわかりませんが、やはり美遊さんの地雷を踏み抜いてしまったことが原因かと」

問題はこれからの『カード回収』になにか影響するかもしれないことなんだよね。「やっぱり、あやまった方がいいのかな」

うん、やっぱりあやまった方がいいと思う。やっぱりこれから一緒にカード回収をし

ていく、魔法少女同士なんだし!!!

美遊さんとの仲直りを決意すると家が近づいて来た。すると、玄関前にバイトに行っているはずのお兄ちゃんがいた。

「ただいまーお兄ちゃん。今日はバイトじゃなかったの？」

「おかえり、イリヤ。そうだな．．．あれを見れば理由はわかると思う」

お兄ちゃんが指を指す方向にはとても大きな豪邸が建てられていた。

「なっ．．．なにこの豪邸．．．!？」

「こんなのウチのの目の前に建っていたっけ!？」

「さっきセラに聞いたんだけど、『今朝から工事が始まったと思ったらあつという間に部屋敷が出来上がった』んだって言っていた」

流石に嘘だと思いたいんだけどなあ．．．いや現実か．．．とお兄ちゃんはぼやいていたが、実物が目の前にあると現実逃避はできないらしい。

「嘘っ．．．!?!お兄ちゃん．．．?！」

背後から声に気がついて振り向く。さっきわたしにきついことを言った彼女は驚いた顔をしていた。

「えっと、ああイリヤの兄です。君はイリヤの友達かな？」

お兄ちゃんの一言により、美遊さんの表情が一気に暗くなった。

「はい、クラスメイトの美遊……といえます」

「はじめまして、俺は衛宮士郎。苗字は違うけどイリヤの兄だ。すまないが、これから少し用事があるんだ……これからもイリヤと仲良くしてくれると俺もありがたい……それじゃあイリヤ、行ってきます」

お兄ちゃんは自転車漕ぎながら走っていく。お兄ちゃんが見えなくなった瞬間、美遊さんはこつちの方を向いた。

あれ……なんか……ちよつと目がおかしいような……

「イリヤスフィール……今すぐ、士郎さんのことを全部教えて……」
「ハッ……ハイ!!!」

この後、お兄ちゃんのことを好きなことから嫌いなことまで全部はかされた。

『きやハ波つ……危なかツタな御前』

(たしかに、あれはかなり危なかつた)

先程、エーデルフェルト家に引き取られた『衛宮美遊』と出会ってしまった。こちらは一方的に『強欲の剣』で知っているし、彼女は彼女で『強欲』の衛宮士郎を知っている。

正直言つて、俺自身はとても気まずかつたりしていた。

『そろそろ……現ジツとウ避はやめようぜ』

オグドモンは俺の目の前に置かれた世にも奇妙な『劇物』に対して言った。

「ああ……はやくこの『劇物』をなんとかしないとな」

目の前から湧き出る異臭

黒の液体の中を彩る緑と白の二色

背後に倒れている助手さん

どう見ても殺人現場にしか見えない……!!!

「『劇物』とは失敬だな君達は……これは傑作だとしか言いようのないものだというのに」

この『惨状』を起こした原因は先程の劇物を飲みながらくつろいでいる。

ことの発端は先程、爺さんからの依頼の報告を終えた後に起こってしまった。俺自身の気の緩みから『衛宮美遊』の確保ができなかつた為、気を引き締め直そうと意気込みを発したところ、杏子さんがでは私の『特製ブレンド』をと申したのだ。

タクミさんは『マヨネーズ』入りを飲めるようになっていたことにより慢心し『撃沈』。逃げ場を失った俺はこうして目の前に置かれている『コーヒー（笑）』に手を伸ばす。

ええい、ままよ。

一気に飲み干した『それ』は口の中で異様な不味さが広がった。海苔の佃煮とヨーグルトがうまい具合に吐き気を催させている。急いでトイレへ駆け込もうとする足がふらつく。ああもうだめだ……と思った瞬間に倒れてしまう。

意識が消えてなくなる前に、もう二度と『コーヒー』だけは飲みたくない!!!と心に誓った。

「おい、大丈夫かおたく。杏子さんのコーヒー飲んだんだろ。今日くらい休んでもいいと俺は思うぞ」

その後、運良くアラタさんに起こされて『カード回収』の時間に間に合った・・・が、今万全の状態どころか絶不調をきたしている状態だ。ちなみにオグドモンはすでに燃え尽きている。

「大丈夫・・・だと思いたいがしばらくここに座っておきたいです。ところでそっちはどうなっていますか？」

「さっき行つたばかりで、流星に変わらなと思うが・・・いや、おたくの妹さん達すぐに戻ってきたぞ!!!」

イリヤ達は、『鏡面世界』に入つてすぐに鏡面世界から抜け出してきた。

「どうやら、おたくの妹さん達負けたみたいだぜ。これからどうするんだ」

全身黒焦げで鏡面世界から抜け出してきたうえ、ルヴィアさんはカレイドステッキに八つ当たりしている。敗北したのは事実のようだ。

「いや、様子を見よう」

「ふーん、おたくは『介入』しないんだな」

どう見たつて『介入』案件だが、まだ『聖杯戦争』としては始まつたばかりだ。

「全身黒焦げ程度なら『キャスト』だろ。『セイバー』や『バーサーカー』ならともかく、『キャスト』程度に遅れをとっているようではとてもじゃないが、他のサーヴァントには到底勝てると思えない」

「おたくがそういうなら良いんだが、このままだと死ぬ奴が出るぞ」

明るいい声だったが、どこか的を射いた。

俺の不安の中心はそれではないだろうかと思う。

だから、ここではつきりと言っておこう。

「そのときは『介入』しますよ……『生きたい』って願いは……『生きてて欲しい』って願いは、決して間違いではないのだから!!!」

第六話 アニメと空とキヤスター戦

「ただいま」

放課後、教室から桜の勧誘を断り自宅に帰ると玄関に穂群原学園指定の靴が二足。一方はイリヤのだとして、もう一足は……

「リズやセラの靴がないってことは、客が来ているのに茶菓子を用意していないってことだな」

リビングから聞こえるアニメのオープニング。この前、イリヤが買った『魔法少女』のDVDか。

『ソノ音に混じってガサゴソ何かやってルナ』

オグドモンの言葉通り、俺が玄関のドアを開けると急いで何かを隠す音が聞こえてきた。きつとカレイドステッキを隠す音だろう。

「とりあえずお茶とお客様用のお菓子はっ」と

『ソコの棚にけーきがあるぜ』

普段は入らない自宅の台所に入り探しているとオグドモンが茶菓子の場所を教えてください。棚を見ると本当にケーキが置いてあった。

オグドモンに感謝しつつ、沸かした湯を使い紅茶を淹れる。

茶菓子を出しに行くといリヤと『衛宮美遊』が座ってアニメを見ていた。

「お帰りイリヤ、それといらっしやい・・・クラスメイトの美遊ちゃんだっけ？お茶菓子持ってきたけど食べるかい？」

最近会ったばかりの人を装いつつ、自身が持つお客様への茶菓子を出す。

「ありがとうございます、土郎さん」

「お帰り、お兄ちゃん・・・そうだ！」

するとイリヤは美遊を連れて内緒話を始める。少したつと、意見がまとまったようだったが、美遊はなぜかそわそわし始めイリヤは期待を込めた目で俺を見ってくる。

「お兄ちゃんは、もしこの『アニメ』みたいに空が飛べるんだったらどんな飛び方を考える？」

「へっ？」

イリヤの発言の内容の突拍子のなさに驚く。

「イリヤスフィール、やっぱり・・・!？」

美遊は顔を赤らめ、そのとつさにその言葉を止めようとした。

「ぶっククク、ハハハハハハ!!」

「お兄ちゃん!!!」

その笑いからイリヤはさっきの質問をバカにされたと思い、不満げに言う。

「いや、いきなり笑って悪かった。この歳になっても、イリヤ達はそんなこと考えるんだなって思っただけだよ」

「士郎さんは何か考えがあるんですか？」

美遊も聞いてくると言うことは、きつとカード回収に関する事だろう。

「そうだな……」

まず思い浮かぶのが、『デーモン』や『デュークモンクリムゾンモード』など人体に近いデジモンの『羽』。しかし、それはもともとデジモンとして進化したかたちなので却下。

次に思い浮かぶのが、『オメガモン』などの『羽』がないのになぜか空を飛べる存在。『魔法少女』に一番近いが、原理がわからないのでこれも却下。

最後に思い浮かぶのが『強欲の剣』^{ツミノキオク}で見た『変異種』^{イリーガル}もしくは、『デジメモリ』による足場。

これを擬似的に作り出すのが一番わかりやすいな。

「『足場』を作ることかな」

「『足場』ですか？」

美遊は小首を傾げる。

「そう、足場。結局のところ人間には空を飛ぶ機能はついていない。それでも飛ぼうと考えると、やっぱりどこかで無理が生じる」

美遊はそれに頷き、イリヤはどこか不満そうに顔を膨らませる。

「まあ、魔法なんてなくても先人たちが試行錯誤して作り上げた『飛行機』があるから別に問題はないんだが……」

もし、魔法が使えるようになって空想が現実でできるようになつたとしても『人はすぐには飛ぶことはできない』

出来ること、出来ないこと。たとえば、すぐに飛べるような人間はそれほど想像力がある者でなくてはならない。

まあ、『EDEN』が完成すればそんなことはなくなるんだが……
「それでも魔法とかで肉体を強化したあと、ウサギやバツタのように『跳ねる』^{ジャンプ}するくらいなら想像できるはずだ。

それなら、その先を予測して空気状に含まれる水蒸気を集め、凍らせて一時的に足場を作り出すことやさ、空間内に足場があると空想することができると俺は考える」

まあ、空間内に一時的に足場を作り出すなんて離れ業、『某師匠』やら、どこかの『バ
ンチョー』ぐらいしかできないと思うが。

イリヤはともかく、美遊はその言葉の中から答えを見つけ出したようだ。

『経ケンシヤは語ルってカ?』

(別に問題はないはずだが)

かつて対策として考える必要があっただけだ。

「ありがとうございます。土郎さん」

空になったカップと、皿を音を立てないように器用に置いた彼女は感謝の言葉を述べる。

「これで何かわかったのならいいよ。ゆっくりしていつてくれ」

現在、午前0時。

昨日、敗北したキャスターとの戦いが始まった。

「土郎さんが言った通り・・・『跳躍』!!」

イメージを形にして作戦通り、接敵距離からの奇襲を試みる。

「散弾!!」

イリヤスフィールの魔弾はキャスターの行動を止め、隙を作り出した。

「『ランサー』限定・・・」

「消え……ガっ!!!」

瞬間、目の前からキャスターは消え、背後から重い一撃を喰らう。

「美遊様、申し訳ございません!物理保護の強化が間に合わず……」

「大丈夫大したこと……っツ!?!」

立ち上がろうとすると、足に痛みが走るのです。どうやら足をやられたようだ。

「美遊は足を……!?!」

「このくらい……リジエネレーション治癒促進ですぐ……」

痛みを無視して立ち上がろうとするが、キャスターはそれを待ってくれはしない。大量の魔術で狙われたようだ。

「逃げなさい美遊!」

そんな集中砲火を受けたら障壁ごと……!!」

もうだめだ……そう思った瞬間、イリヤスフィールによって助けられる。その後、有効範囲外まで連れてこられた。

「転移魔術を使えるなんて反則ですよ」

カレイドステッキのルビーでも考えつかないようだ。

「まだ……手はある」

作戦を伝え、イリヤスフィールとともに行動へと移す。

背後からルヴィアさんたちの叫び声が聞こえるが、作戦通り地面まで追い詰めていく。

「散弾!!!」

イリヤスフィールの散弾と反射平面によって動けなくなった敵を……

「断続最大……狙射!!!」

わたしの一撃で打ち貫く!!!

しかし、キャスターはまだ倒れていなかった。

そこヘルヴィアさんたちの『宝石魔術』が炸裂した。

攻撃陣が消えて言った。

「美遊様、お疲れ様です。見事な策でした」

そんなことはない、そう言おうとしたときだった。

キャスターは特大の魔術陣を展開して攻撃をしようとしている。

急いで、倒さないと!!!

もう……間に合わない!!!

いくら速く跳んでも距離は遠く、相手の魔術の発動のほうが確実にはやかった。

「乗って!!!」

背後からのイリヤスフィールの声とともに、打ち出された魔弾に士郎さんの言葉を思い出す。

『水蒸気を集め、凍らせて一時的に足場を作り出すこと』
氷ではなくとも、魔弾を足場として想定すれば・・・

魔弾を踏み『跳ぶ』。

『狙射!!!』
シュート

あれほど遠かった距離は一瞬で近づき、魔術の発動前に一撃でキャスターを貫き倒した。

キャスターのカードを回収した。

「回収完了です」

サファイアのその一言に終わりだと思ってしまった。

こんどこそ終わり・・・と思った瞬間、そう思った瞬間に『奴』は現れた。

ランサーのカードを耐えきり

ルヴィアさんたちの肉弾戦を弾き飛ばす

『黒い巨躯』

『無骨な斧剣』

『一度死んでも蘇る身体』

わたしたちはその全てによつて叩きのめされる。

ルヴィアさんたちは倒れ、イリヤスフィールとわたしはステツキが使えなくなり倒れ
ふす。

意識は朦朧とし、なんとか立ち上がろうとしたときだった。

そんなとき、目の前に誰かが立っていた。

『赤いローブ』

『黒と白のゴーグル』

『銀の二丁拳銃』

決して、その姿は似ていなかったが・・・

わたしを守る『お兄ちゃん士郎さん』のようだった。

第七話 『投影』・『楔』・『罪の記憶』

「『バーサーカー』が戻って来なかつた原因か」
 黒い巨体に大きな斧剣。

間違いない……『ヘラクレスだ』。

『きゃハハハ!!セマって来んナ筋肉だるま!!』

もう一人の監視者にイリヤ達を回収してもらい、適当な剣を投影して意識をこちらに向
 けさせる。バーサーカーは牽制したことにより意識が向き、イリヤ達と同じように斧剣
 で吹き飛ばそうとした

「……!!!」

攻撃を防がれたことに気づいたバーサーカーは、瞬時に別の方向から俺を切り裂こう

とする。

『投影、開始』

背後に妹たちがいないことを確認、すぐに攻撃へと転じる。

『彼女』の銃を持つ右手に剣を装填。

奴が振りかぶった斧剣に撃ち、間合いを取る。

一発の威力で煙は上がったもののやつ腕は傷一つなかった。

『オイおい、キズ一つツイてねえジャネエか』

「やつぱり、低ランクの宝具には届かないか……仕方がない」

『ヘエ……使ウのかアレを』

「ああ」

オグドモンへの返答を返すと同時に……

銀の銃を消す。

『「憤怒の剣——接続」』

右腕から赤の紋章が浮き出る。

紋章の光により、黒のキーホルダー……『デジモンミニ』が変化する。黒と白の二色とともに、手のひらにちようど収まる形の『デジヴァイス』へと変わりはてた。

集中しろ、集中しろ、集中しろ。

「『トレース投影——リンク接続』」

『記憶』……かつてそれは『勇氣』を受け継いだ少年と『優しさ』をつかさどった少年二人とそのパートナーが起こした……いや、それを願う全ての者達が起こした『奇跡』。

「——憑依経験——開始」

それを模倣することは今の俺にはできない。
だから、反転させる。

『願い』を『ねがい欲望』へ……

「——憑依経験——完了」

「——工程終了。『リアライズ現実生成』」

そこへ顕現するは、記憶の中の剣ではない。

『ねがい欲望』と『罪』により作られた。

『終焉防ぐ欲望の剣』

かつて『英雄』が使った剣は黒く染まり、願いさえも欲望へと変わってしまった剣。英雄の剣よりも、こちらの方が俺には似合っている。

「……………?」

バーサーカーの体から光が消え去った。

このことにバーサーカーは何が起こったのか分からず、一瞬動きを止めた。すぐにわかるはずもない。

バーサーカー自身が絶対と信じる『宝具』を消し去るなんてことは……

「……………!!」

しかし、自身の体に気づいたのか、バーサーカーは自身の武器で強引に包帯を切り裂き、先程より一層力を込めて斧剣を持った。

拘束は剥ぎ取られたが、時間稼ぎは終了した。

迫るバーサーカー、俺の慣れ親しんだ剣。

あのときとは違う武器だが、決して外しはしない。

『終焉防ぐ欲望の剣』オオオオオオ!!」

「……………!!」

俺とバーサーカーの咆哮と同時に、バーサーカーの斧剣と『終焉防ぐ欲望の剣』が交差した。

その後、周りは煙に包まれた。

バーサーカーを切り裂いた。その感覚はたしかに存在はした。終焉防ぐ欲望の剣を消して、周囲の確認しようとしたとき、背後で黒い巨躯が斧剣片腕で振り上げていた。バーサーカーは片腕を犠牲にして、自身の宝具を準備していたのだ。

「わかっていた・・・あんた程の英雄が一撃で終わることがないくらいな」
だから、こうして準備を整えたんだ。

「■■■■■■■■■■———!!!」

『射殺す百頭』

攻撃が一つに重なる程の『高速』の九連撃。

それはまさに『一瞬』といってもよいだろう。

『交代チェンジ————』『怠惰ツミノキオクの剣』

そう『一瞬』さえ防げば関係ない。

『現実リアライズ生成——主アに仕えし最防ロの盾ン』

かつて世界を滅ぼそうとした神。

その神に仕えていた騎士が使っていた、ありとあらゆる攻撃を『三秒間』だけ無効化する盾。

それは彼の中にある『鞘』と同じ名前で、彼が最も彼が使った盾だ。
『絶対防御ゴッドプレス』

高速の九連撃に対し、全方向の衝撃を完全に霧散させた。
宝具の発動後必ず、サーヴァントの隙は大きい。

『————』『現実リアライズ生成』

手元に現れるのは銀色の銃。

「トレス
投影、『リアライズ』」

その銃は決して強い物ではない。

しかし、込められた剣はどんな宝具よりも威力を持っている。

「喰らいやがれ、チェックメイトだ」

バーサーカーの頭部は一撃で吹き飛ばされ、もう二度と戻ることはなかった。

「俺はもう二度と不意打ちは喰らわないと決めてるんだよ」

カードを拾う士郎の言葉は誰にも届かない。

同時刻、青のパーカーを着た人影が少女達の周りに座って電話をかけていた。

「最近の僕の扱いつて本当に酷いと思わないか、Y?」

『ハハハッ、それは前からだと私は思うけど、M』

声からして男性、しかも相手は女らしい。

人影はフードを顔が隠れるくらいに被り、フードの中にも仮面をつけている。

人影はすぐに視線を一つの方向へと切り替えた。

「はあ、どうやら『ネズミ』は起きていたようだ」

『ふーん、おまえに気づかれなかったなんて相当なものなんじゃない』

そして、人影は少女が倒れていた場所の一部をじっと見つめる。すると、中から赤いステッキが現れた。

「ルビーちゃんを見破るとはなかなかの手練れですね」

赤いステッキと怪しい仮面の人影との会話が始まった。

第八話 疑念とカードと電腦世界

「なんですつて!!!」

見知らぬ魔術使いにカードを奪われた!!!」

「いや、すみません凛さん」

夜の校舎内に響く凛様の声。

先程、バーサーカーのカードに敗北し、氣絶してしまった。そのときに、わたしたちを助けた人物がバーサーカーを倒して、カードを取って行ってしまったらしい。

それを見過ごした姉さんを凛様が怒っているところだ。

『すみません』じゃないわよ!!!

だいたい、この土地のセカンドオーナーたる遠坂に挨拶も無い上、さらに私達が大師父から依頼されたカード回収において最も重要なカードを奪われたですつて!!!

あんたそれでも大師父の礼装としての自覚あるのー

そこから凛様はここぞとばかりに、今まで私たちにされてきた行動に対して、ガミガミと説教をしていたが、さすがの姉さんも堪忍袋の尾が切れた。

「バーサーカーに完膚なきまでに敗北したのに、私に怒ってどうするんですか？ 私たち

がボロ負けしたバーサーカーを倒した相手に勝てるはずもありませんし、第一に彼らはアサシンとセイバーのカードを倒せたら返してくるって言っていました。」

姉さんは私と凜様が気絶している間ちやんと交渉はしていたらしい。

「そんなもん、ホントかどうか知らないじゃない!!」

しかし、相手は魔術使い。凜様のいう通り本当に約束を守るかどうかなんてわかりません。イリヤ様と美遊様、そしてルヴィア様はまだ気絶しているなか、言い争いが続いています。

しかし、なんでしよう・・・姉さんのあの自信。

まるで返ってくるのがわかっていような口調で喋っているような気がしたのは間違いではないかもしれません。

「カードの設置が終了しました。タクミさん、お願いします。」

午前九時。カミシロ・エンタープライズ社。

ここはEDENを開発する為に作られた特殊な施設で、今日は特別にEDEN内で起きると想定される『バグ』の最終テストだと一部の人間以外の全員に伝えられている。

実態は電腦世界『EDEN』におけるデジタル情報の流れ、通称『デジタルウェイブ』が『現実空間』にどのような影響を与えるのかという実験の最終テストであった。

しかし、かつてあの世界で起きたデジタルウェイブの収束による現実空間がデジタル化する現象、通称『デジタルシフト』は既に確認済み。

今後の当面の目的はデジタルシフト内での現実空間への干渉、及び、魔術・神秘に対する影響の第一実験がこれである。

カードの『複写』と『貼り付け』によるカードの複製が目的であった。私達はカードを完全に再現することによって、新たなカードを作り出したかったのだ。

カードが完全にサーヴアントの複製であったのなら、私たちの記憶内にいるデジモンもこの世界の中ならばカードであったとしても再び出会うことができるかと仮定したからである。

デジタルシフトした空間にバーサーカーのカードが置かれている。

赤毛の青年、相羽タクミがカードに近づいて、手をかざす。

「こっちはOKです」

管制室へタクミさんの声が伝わる。

『複写』

バーサーカーのカードからデジタル情報が写し出される。

それはかつて、タクミさんが使ったそれは『半電脳体』として手に入れたハツカー技を現実で行使に成功した瞬間であった。

「やったー!!! 私達成功したんだ!!!」

「末堂が入った領域に一步近づいたんだ!!!」

「これで、残業続きから抜けられる! バイトちゃんに会えるぜー!!!」

その瞬間に私たちがいる管制室から緊張感が消え、歓声の音が聞こえてくる……私と兄さんを除いて。

「静かに、まだ実験の途中です!!!」

「そうだ!!! まだ、『貼り付け』が残っている」

私と兄さんが警告の瞬間、彼が発しました。

『貼り付け』

カードが途中までは生成されていきました。

そう途中までは。

「嘘っ……!?!」

「マジかよ!?!」

「カードが……消えていく……?」

そう。完成すると同時に、カードが構成が分解していくように消えていったのだ。た。

「失敗……ですか……」

思わず、落胆の声が出てしまう。私、『神城悠子』の一言によつて全員の顔が俯く。これは私達にとつて最も重要な事柄のうちの一つであったから。

E·D·E·Nの開発経費はなんとか得られたものの、E·D·E·Nを運用するお金が足りなくなつてしまったのだ。そのため、E·D·E·Nを運用するにあつて必要な経費を『宝石翁』お金を前金としてもらう代わりに、この依頼を受けたのだつた。

本来なら解析はカードそのものを使えばよかつたのですが、電脳世界でカードをつくらるとなると話は別でした。有機物、無機物といった存在が中にある情報がE·D·E·N内の容量を無駄に使つてしまう為、わざわざこんな面倒な方法で解析しなおしていのだ。

それが失敗して、私たちのモチベーションを下げてしまったのだつた。

「クソツツ!!!ここまで来て、最初からやり直したと!!!」

一人、また一人と少しずつ落胆の声をあげる。

誰しも、望んだ結果にはならないと知つていても、私たちはもう一度だけで……どんな形でもいいから会いたかつたのだ。

デジタルモンスター達に。

「いんや、そうでもないんじゃないか」

この中で一人、決して諦めなかった人がいた。

デジタルウェイブの計測をしていた『真田アラタ』さんが立ち上がっていった。

「おい、ちよつとこつち来て見てみろよ」

そう誘われるがままにデジタルシフト内にいたタクミさんを含めた全員が、デジタルシフト内のカードを映しているカメラの映像を見た。

一瞬ブレのようなものが発生した。

「このブレはカードのデータの欠損だと俺は考えている。この欠損によつて完全に複製ができなかったんだろう。」

たぶんこれは、『複製』じゃあなく、劣化させて作ったんじゃないかと思う」
「えつと．．．つまり、ドイウコト?」

アラタさんの説明にわからないものが数名。

「つまり、これの『劣化』をなくせば．．．」

「カードの解析が進むつてわけだな」

『今井千歳』さんの言葉を『御島龍司』さんが付け加える。

「そうできればアグモン達にまた会えるってことだよね!!!」

ノキアさんもようやく理解できたのか声をあげる。

でも、確かなとおりませんが、それは……

「いや、しかしどうやってなおすんだ?」

解決案を提示したあなたが言うんですか!?

「まあ、その……なんだ、俺たちは容量の無駄使いをしないためにこんな面倒な方法してんだけど、俺たち『レジエンド』でもデジタルソフト内でのカードそのもののハッキングは時間や手間がかかる上、ハッキングツールを使うための容量まで少なからず使ってしまう。」

だから、EDEN内に影響のない『御神楽ミレイ』のハッキングツールが使えるタクミに頼んだわけなんだが……なあ、おたく修理できる技術なんて持ってないだろ」
タクミさんは口を開かず、首を縦に降る。

彼が御神楽ミレイからもらったハッキングツールには修理できるものはなかった。

「それじゃあ……今度こそ……」

「失敗……だな……」

「……………」

今井さん、御島さん、タクミさんの順にうなだれる。

「嘘って・・・嘘ってだれか言ってよ!!!」

一人、ノキアさんだけが諦めなかった。

「嘘なんかじゃねえ、事実だ」

「アラタ、さつき解決方法思いついたじゃん!!!今度も何か思いつくんじゃないの!？」

「そんなこと無理に決まってる!!!」

「だいたい解決案が見つかったのも奇跡みたいなもんで、そんなすぐに見つかるわけないだろ!!!」

ノキアさんとアラタさんが口論を始める。

アラタさんみたいに事実を認めるのが正しいが、誰もが諦めたくないのは理解できる為、ノキアさんに反論したくてもできない状況が続く。

「だったら、『イーター』とかの技術とか再現したり、ミレイさんにツールをもらった人とか探せば・・・」

兄さんは止めるタイミングを逃したみたいでおろおろし始め、御島さんはこの場面を諦観し、今井さんはいつものことでため息が漏れる。

第一にタクミさんとノキアさん以外このメンバーで御神楽ミレイという人物に

会った人はいない。唯一、他に会っていきそうな杏子さんは探偵の仕事でない。

「そんな簡単にイーターの技術なんか再現できるかよ!!!長い日数合体してた俺がそれを理解してる。それに都合よく御神楽ミレイなんて得体のしれない人物に会ってるところかツールもらってるやつなんて……」

突如、背後から扉の音が鳴り青いパーカーフーディを着たモブ顔の青年と、全体的に淡い紫色の服を着た美人の女性シシトが現れる。

「たつく……昨日、監視してきたのにまた呼び出しなのか」

「仕方のないさ、元々は私たちがカードを持ち帰ったのが運の尽きだよ。仕事が早いのがまずかったな……って、喧嘩か!?朝っぱらから何やつてるんだあの二人は……?」

『天沢ケイスケ』さんとその彼女『乃木優』さんが到着し、私は仕方なくこれまでの経緯を説明する。

「……てっことは、最初からやり直しかよ!!!」

乃木さんが長い髪を揺らして、地面に拳を叩きつける。

だが、天沢さんだけは首を捻ったままだった。

「・・・何かあれば言ってくれませんか。

もうそろそろ、あの喧嘩を止める人がいないとこの問題の解決に当たる時間が少なくなりそうですから」

少しいらだつてしまったのも、失敗のことで私も落ち込んでいたのだろう。

私の言葉に彼は苦笑を浮かべながら頭をかいた。

「あの僕、『修理』レストレーションでできます」

「「「はっ?」」」

一瞬、この場の空気が止まった。

フリーズした私たちを尻目に兄さんが最初に再起動した。

「えっと、もう一回言ってくれるかな?」

兄さんがもう一度聞き直した。

「だから僕、あの世界で初めて『デジラボ』行った時に、『御神楽ミレイ』からハツキン
グツールグツールもらったんで、『修理』レストレーション使えますよ」

場がもう一度固まる。

その間にデジタルシフトした空間に天沢さんが入り、一言。

「『レストレーション修理』」

バーサーカーのカードは光を放ちながら、金色へと色を塗り替えた。急いで、カードの解析を行うとブレは消えて『完全』なカードへと姿を変えたのだつた。

「……結局、すぐに解決できたんですね……」

第九話 記憶（タクミ）と捕食者（イーター）

現在、午後五時。

サーヴァントカードの解析及び、現実世界における運用についてのテストが終了した。

いよいよ、カードの作成を始める。

ここにいるみんなが待ち望んでいたものが、ついにテスト段階までいけたことにより、それぞれが喜びの声をあげる。

アラタが、パンツと大きく手を鳴らした。

「いいか、お前ら。これから行うのはカード制作の最終確認だ!!!」

気合の入った一言。注目の集め方からハツカーチームのリーダーの風格が出ていた……が、メンバーが悪かった。

「そんなことしても、カッコつけてるだけにしか見えないよアラタ!!!」

「そうだー、そうだー、カッコつけてんじやあねえよ、アラタ」

ノキアのは茶々が入り、千歳さんやヤジが飛ぶ。

「oooooooo」

アラタに青筋ができた。

これは……話が進まなくなるな。

「コホン……いいか、最終確認だ」

あれ？アラタが怒らなかつた。そうか、みんな成長してるんだよな。

「それじゃあ、今日検証したカードの仮定、もしくは実態について説明する」

アラタはヤジを無視して説明を始める。

その様子にヤジを無視された者たちはヤジを飛ばそうとしたが、二人とも背後にいた龍司さんに拳骨をされていた。

「一つ目は、カードは『金』、『銀』、『銅』の順に抑止もしくは、それに準ずるものとの繋がりが強く、力を発揮することができると仮定する」

これは、カードを解析している間に発覚したことであつた。

バーサーカーのカードが『修理』レストレーションによつて修理されたときに『金色』へと色が変わった。

コピーしたカードの解析中に調べた結果、ヘラクレスのカードは抑止力への干渉が強く、コピーカードの実験途中でできてしまった『銅色』のカードは抑止力の繋がりが弱いことがわかつた。

もし、違う色のカードが現れた場合、どのような結果になるのだろうか。

「二つ目は、コピーカードからバーサーカーの『記録』^{データ}を抜き出したとき、カードはからクラスが消え、サーヴァントとしての力を失い、無印のカードへと変化することは実証されたことだ」

これもコピーカードの実験途中で、カードから『バーサーカーの記録』^{データ}を抜く実験を行ったところ、アラタが説明したような『銅色』で『無印』のカードへと変化した。

これは、先程の仮定通りだとカードとしての繋がりが弱くなって、クラス自体なくなってしまうことを指している。無印へと変化したカードは使えなかったことから新しい『デジモン』^{データ}の記録』を上書きすれば、問題なく使用することができるだろう。

「三つ目は、コピーカードは現実世界には持ち込めない」

これは、実験終了間近に、ノキアが悠子から本物のカードをとってきて欲しいと頼まれたときに、間違えて『マヨヒガ空間』^{デジタルソフト}内からコピーカードを持つて出てしまった。その時、カードは現実世界から消えてしまい、ノキアの手の中には何も無くなってしまったのだ。

これは、現実世界にはカードを持ち込めないことが判明した。

「四つ目、ただし『相羽タクミ』の持つ御神楽ミレイが改造した特殊ポーチの中ならば、現実世界で持つて移動することが可能」

その後、あちらの世界でミレイさんが改造した、俺のポーチは現実世界のものを電脳

世界に持って行くことを可能にしたものであったが、逆もできるだろうと思い、やってみたところ成功。

ミレイさんは一体何者なのだろうか？

「以上が、実証もしくは仮定されたカードの実態だ」

アラタが言葉を区切り、一拍くらの時間をおいた。

「最後に、俺達がカードに上書きするのは『俺達の記憶だ』。

それを決して忘れるな!!!」

アラタが言ったように上書きするのは『俺達自身』の記憶。

それは、完全なデジモンを作ることとは不可能だということを、事前に釘を刺していったんだ。

「これから、擬似『サーヴァントカード』制作に入る」

空気が重い。みんなわかつていることだ。

今日、誰が選ばれるかをここにいる全員が自分が選ばれることを期待し、それを望んでいる。

アラタが大きく一言。

「今日、カードを渡されるのは……タクミと俺だ」

瞬間、場の雰囲気が変わった。

この場にいるアラタ以外の全員が、その言葉を理解できなかつたためである。それでもアラタは言葉を続ける。

「理由は二つ……一つ目は、タクミの精神はタクミのものであつてそうじゃない。デジモン達がタクミを救うために自分達の『記憶』を少しずつ分け与えていったものだ。

その中のデジモンの『記憶』を『複写』し、バーサーカーの『記録』の上から『貼り付け』するためだ。

一応は実験だから、安定したら少しずつ新しいカードを作っていくつもりだ」

一つ目の俺が選ばれた理由は納得はできた。

しかし、なんでアラタは自身を選んだんだ？

「二つ目……つまり、俺のカードはデジモンのカードではない」

その言葉で、固まっていた面々が再起動した。

それにより、周囲の騒々しさが戻ってきた。

「静かに!!!俺に渡されるカードは決まっているから静かにしろ!!!」

アラタは大声で叫んだ。

状況の理解できない者、理解しているが納得のできなかった者、アラタの言葉に静かに耳を傾けている者。それぞれがそれぞれなりにアラタの言葉を待っている。

「俺が作るカードは……『イーター』だ」

今なんて言った？ 『イーター』って言ったのか。

全員が聞き間違いのような顔で周りを見回しているからアラタの言ったことは間違いない。『イーター』であった。

「なぜ……『ディアブロモン』でなく『イーター』なんですか？」

悠子の疑問とともにアラタが悔しそうに手を握っているのが見えた。それも一瞬で、俺以外に気づいた様子がなかった。

「俺は……デジモンと一緒にいた時間よりも、『イーター』を取り込み、使役して力を蓄えていた時間のほうが記憶に残っていたからカードを先に作る必要があった」

アラタが勇吾を助けるために、暴走して末堂の誘いに乗ったときの話だ。でもイーターのカードを作る必要があるのか？

「でも、アラタがイーターのカードを作る必要なんて……いや、僕のほうがきつと適任だろう!!」

勇吾のほうがイーターに取り込まれていた時間が長い。

ではなぜ、アラタがアラタ自身を選んだのか。

「勇吾・・・お前じゃ駄目なんだよ。」

お前は、取り込まれていた時間が長くて、取り込んでいた時間はないんだよ。

第一に、俺達はカードを作るために、それぞれの『記憶』でコピーカードを記憶という名の『記録』^{データ}上書きしていく。

ここにいるのはデジモンの『記憶』^{データ}から精神を作られたタクミ、そしてここにはいないデジモンの『記録』^{データ}を持っている彼女、さっきの二人を除いた複数人の『記憶』^{データ}からカードを取り出さなければならぬ。この中でイーターを使役した人間は俺一人だけ。

なら、俺が一番適任だ」

その言葉には足りない部分があった。

俺だけが気付けた足りないものがある!!!

「アラタの演説には足りない部分がある。

確か、マザーから切り離されたイーターはない再現なく成長したとフリーデイエのメンバーが言っていた。

なら、アラタ自身取り込まれるんじゃない」

「それはない」

アラタは言い切った。

「このカード制作を始める前に言っただろ。」

『これは俺達自身の記憶』だと。つまり、俺達が行うのは自身の記憶を使ってデジモンの力を複製すること。

俺は、俺がイーターを取り込んでいた『記憶』を上書きする。それなら、取り込まれた人間、もしくはそれを見ていた者以外の『記憶』が無いから暴走はしない。

だって、『記憶』には暴走したことなんて無いからな」

アラタ自身、多少影響は受けていただろう。

しかし、イーターを取り込み、最終的に完全に支配した姿は『彼女』から聞いた『暴走』とはかけ離れている。

それでも……

「それに……俺達の『監視』を忘れるな。」

きつと、イーターの記憶が残っていたのにも意味がある」

結局、アラタは俺達の意見を聞かず、カードを作ることを決意した。

「それじゃあ、始めるぞ」

アラタは俺達の中心に置かれたかつて『山科誠』の記憶を操作した装置を起動させる。
「準備はいいか？」

俺は首を縦に振った。

操作は悠子が行い、フリーダイエのメンバーと勇吾はデジタルシフト外の部屋で待機している。

アラタと俺の記憶がコピーされ、白い光が周囲に浮いた。

最初に出会った白いぬいぐるみのようなデジモン。

悠子の初めての依頼のときに、進化して両手が銃火器へと変化したデジモン。

アラタと悠子の作戦途中で大きく姿変えて進化したデジモン。

ユーゴとのアバロンサーバ内でムゲンドラモンに勝つために、仲間を守るために、神々しい光を放って究極体に進化したデジモン。

一つ一つの記憶が集まって、大きな一つの形へと変えた。

それを、『貼り付け』を行い、無印のカードが変化していった。

「キャスターのカード……」

金色へと変化したカード。

『『インストロール夢幻召喚』』

士郎に教わった言葉はカードに光を放たせ、体になにか纏ったような姿へと変化する。ぬいぐるみだった姿は成長していったが、結局可愛らしい着ぐるみのような獣へ進化した姿であった。

しかし、今では俺の体に力を与えている。

「ケルビモン」

俺は俺を抱きしめた。

そこにはたしかに俺のパートナーがいる。

俺はここにいと証明している。

ふと、アラタのほうを向くとカードの色が金色へと変えた。

しかし、クラスが見たことがないものであった。

クラスカードの絵柄がローブをまとった者が中心で正面を向いていた。

『^{フォーリナー}降臨者』だど・・・!!!』

アラタがそのカードを見て言った言葉は、士郎からは聞かなかつたはじめての『エクストラクラス』だった。

第十話 ハッカー『M』と士郎のお見舞い

最近、私『美綴綾子』にはツキが回ってきた。

自身が部長を務めている弓道部に有望株君が、少しずつだがうちの部活に来てくれるようになったからである。

有望株君とは、昨年私がまだ部員だった頃に、慎二が大会を急用で休んでしまい困っていたときに、慎二の代わりだと言い、颯爽と現れ、見事に矢を全ての真ん中に入れていった。

数日後、学園内で見つけはしたのだが、勧誘によって何度か来てくれるようになったのだが、数ヶ月前に生徒会長によって阻まれ、某有望株君は部活の勧誘ができなくなってしまった。

この四月に入って新しい後輩が、1ヶ月間根気よく勧誘したおかげで、とうとう先週弓道部に来てくれたのだ。

某有望株君こと衛宮士郎が帰り支度をしている。これは、チャンスだ。今後、のらりくらりと逃げられる前に、この私が弓道部に繋ぎ止めて、夏までに立派な弓道部のエー

スにしてみせる!!!

「よお衛宮、今日は弓道部寄ってくか?」

何気なく誘ってみる。

「いや、今日は用事あるから帰るよ」

そう言つて衛宮は帰ろうとする……つて、さらつと断わんなよ!!!だが、ここで諦める私ではない。

「用事つてなんだよ。また、バイトなのか?」

「いや、バイトじゃあないんだけど……」

顔をかきながら、言いづらそうに笑う。これは、押せばいけるかもしれない。

しかし、衛宮はただ一言……

「ちよつと、友人のお見舞いに行くんだよ。だから、今日も行けない」

そう言つて、教室を出て行つた。

同時刻、エーデルフェルト邸にて……

「本当にハッカー『M』と名乗っていたのですね……?」

昨日、バーサーカーのカードを持って行つた者についてルビーに聞いたところルヴィ

アの雰囲気が変わった。眉間にシワを寄せて、ルヴィアがいつになく怒っている。私の怒りも冷めてしまっている。

「はい……それが、どうしたんですか？」

ルビーを無視して、爪を噛んだ。

「……逃したのは、失敗だったかもしれないわね」

「ちよつとルヴィア、今なんて言った？」

もしかして、そのMって奴知っているの？」

ルヴィアが目を開いて驚いた。

「……えっ、まさか知らないんですの？」

イリヤ達と顔を見合わせるも、やはり二人ともわからないといった表情をしている。

「だから、貴女に言ってるんですよ。ミス・トオサカ」

「だから、ハツカーとかならわかるけど、その『M』って人物に関しては何も知らないわよ!!」

そいつのことを知らない私を呆れたようにルヴィアが見たのは間違いない。

そんなに有名なのだろうか？

「そんなに有名なんですか、ルヴィアさん？」

美遊が話を進めようとMについて聞いた。

「ええ、魔術師の間や裏で色々やってる方にはとても知られています……そのミズ・トオサカは知りませんでしたか」

「何ですって!？」

「……いいから、進めてください」

ルヴィアは美遊の言葉によって、少しずつ話し始めた。

「約三年ほど前に突然現れて、企業……特に裏で『魔術師』がやっている会社をハッキング……その後、その会社の口座からお金を引き落とし、裏で会社の行なっている非人道的所業を警察に匿名で報告するハッカー達ですわ。

横領を始め、麻薬や武器の密売、果ては人体実験を行う組織やマフィアをハッキングによって潰して、金を奪っていく。

表向きには、裏で危険な行為をしている会社を潰して回っているため、インターネットでは『義賊』などと呼称されるほど人気があり、その人気から、今では一時期インターネットを騒がせて、ハッカーから『レジエンド』と呼ばれるようになった『ジュード』の再来とまで呼ばれるようになりました」

私、ネットとかそういう使えないから知らなかったのか。それよりも……「あんた今、ハッカー達っていったわよね？」

「ええ、『M』には『Y』と名乗るパートナーがいました。しかし、最近『Y』が中心と

なつて『デモンズ』と呼ばれるハッカーチームを作り、『M』とともにハッキング行為を拡大し続けていますが、最近ではあまり活動を控えているようで、魔術師達の被害も少なくなつていたのですが……」

「ルヴィアさん……なんでその人たちは捕まつてないの？」

そういえば、そんなことをすれば魔術師達が血眼になつて探す筈だ。

「捕まえる以前の問題で……魔術師達や警察も搜索してはいるのですが、相手はかなりの強者で、今まで一度たりとも尻尾をみせるようなことはありませんでした。」

しかし、活動を控えた状態でこの街で姿を見せたということは……」

「この街にはなにかあるかもしれないわね」

夕日は沈みかけ、窓からオレンジ色の光が差し込む。学校帰りのカバンを手に、ビルの廊下を歩いて進む。

エレベーターで数階上がつて、手前から左に曲がるとドアが見える。

彼女の名前を確認して、ノックを三回……すると、ドアの向こうからも三回ノックの音が返される。これは彼女が身内と会社（じやう）の人間を差別化させる為につくったルールだ。

部屋を開けると、クジラやバクを確認模した向こうぬいぐるみと数台のパソコン……

「今日は随分遅かったね………土郎（キミ）」

青色に近い黒髪の少女が病衣を着てベッドの上で寝ている。

「さあ……君が見聞きしたあの世界のことを今日も話してもらおうよ!!!」

彼女……『御島エリカ』はそう言ってベッドから起き上がった。

第十一話 過去と世界と必然

「『明日があるから!!』」

俺は、他のデジタルワールドを救った英雄達の話をしている。しかし、話が長かったのか、エリカはもう寝てしまっていた。

「その瞬間……少年少女の胸から光が大きくなって獣達……を包み込んだ。

勇気・友情・愛情・知識・誠実・純真・希望・光それぞれの個性思いが8匹の獣達……に力を取り戻させたのだ……」

コクンと頭が揺れる。

昨日の夜……『罪』キョクを使った代償だろうか。今朝から疲れがたまっていた。うつらうつらと途切れかけそうになる意識を戻すため、コーヒーを飲んで目を覚まそうとした。しかし、変わらず眠気が続いている

「……力を取り戻した、獣達……は……」

エリカももう寝ちゃっているな……そのことで少し気が緩んだのか、瞬間……意識が途切れるのを感じた。

「……ようやく、眠ったんだ……」

寝ているフリをやめて、私は起き上がる。つい、はあ……とため息が出る。

「睡眠薬が効いてよかった」

私は彼のコーヒーの中には睡眠薬を入れた。

もちろん理由はない……あの頃みたいに二人っきりの時間が欲しかった……ただそれだけである。

「そういえば、初めて会ったのもこんな夜だったよね」

彼の寝顔にを撫でながら思い出すのは三年前。

私と士郎が入院していた頃の話……

「……本当に死んじゃうんだ」

数ヶ月前、私は事故に遭った。

そこで両親は死に、私一人が生き残ってしまった。お兄ちゃんは偶然にも私たちとは

違う場所にいたから大丈夫だったものの、私のせいで学校を辞めて両親の残したお金を使ってお店を始めた。

残りのお金は私の入院費に使われているが、原因不明の障害でもう残りわずかとなつてしまった。今までの治療は意味もなく、私の体は痛くて、辛くて、苦しかった。

数日前・・・医者からもう手は尽くしたということだけ私に伝えられた。お兄ちゃんにはそのことだけは伝えられなかった。

「……………もう、疲れた」

最近、変な夢を見る。

私が『別の世界』へと旅立つ夢だった。

私にとって、『樂園』は存在しない。現に、私の住んでいる世界には『樂園』^{EDEN}なんてものはなかった。

カミシロエンタープライズ社はあつてもただの一介の企業程度でしかない。でもな
んで『希望』を与えるような記憶^{知識}が入ってくるのだろう。私はそれに辟易していた。

こんな『記憶』^{こんなもの}なんの役にも立たないのに。

「ねえ、ここがどこなのか教えてくれないかな？」

私と同じくらいの赤い髪の男の子が、私の部屋に入ってきた。

「……誰？」

「そうだな……俺は衛宮……衛宮士郎」

男の子は笑ってそう言った。

「……今日も来たんだ」

士郎は出会ってから、ここ数日『私の部屋』に毎日来ている。

「暇だからな」

この大学病院は、大きいが若い子供が少ない。いや、この地域全体と言った方がいいだろう。

数年前、この地域で大火災が発生、そこから芋づる式に過去にこの近辺で大きな災害

が幾度も起きたことが発覚した。大半の人・・・特に子連れの人はそのことを知った時に引越してしまい、ここ数年間でこの近辺では過疎化が特に進んでしまった。残っている人は、この地域に愛着や仕事、様々な理由があるがほとんど子供はいなくなってしまう。

それから、子供に入院するような怪我をおわせないようにと地域全体で取り組んでいる。それで、ここに入るくらいの子供は少ないというよりも、いないと言った方が正しい。

だから、彼はいつも私の部屋に置いてある本を読んでいた。しかし、私にはここで疑問が湧いた。

「ねえ、なんで君はこんなところにいるの？」

「ん・・・そうだな。まあ話しても問題ないな」

少し思案してからそう言った。

「俺・・・記憶がないんだよ」

えっ、今なんて？

「そんなに驚かなくていいって。」

俺さ……ここ最近、一週間ほど行方不明になってたんだよ。その一週間の記憶がないんだ」

行方不明、一週間……えっちよつと待って!?

「見つかつた時には探偵に保護してもらつてさ……なんとか家族に連絡とつてくれて、それからは大騒ぎ。行方不明になつたと思つたら見つかつて、そのうえその期間中の記憶がないつてことで大病院連れてこられてさ……そのあと、ここで検査を受けて体に傷とかそういうものがなかつたから、精神的なことで記憶喪失なつたかもしれないつて判断されたんだ……」

あつけらかんとそう彼は言つた。

どうして……

「……つなんで、なんでそんなふうに言えるの!!!」

私は彼がわからない。

「えつと……」

「私はっ．．．私はこんなに辛い思いをしてるのに．．．事故にあつて、お父さんもお母さんも死んで、お兄ちゃんを苦しめて．．．もうすぐ死ぬって言われて、『変な記憶が混じつて』、その記憶では生き残つて、それが羨ましくて、妬ましくて、こんなに苦しい思いをしているのに、あなたも苦しんでるんだつてそう思つて．．．なのにつ．．．どうして!!!」

八つ当たり．．．そんなのはわかつてた。

でも、それでも言いたかつた。苦しくて、悲しくて、許せなかつた。

わがままなんて言えない。

少しでも、お兄ちゃんの負担を減らすために、もうすぐ死ぬかもしれないなんて言えない。

『いきたい』だなんて言えるはずがない。

私はこんな体だから．．．でもこの人は違う。

彼は私よりも生きていける．．．幸せになれる。

だから、なんで現状に不満を持たないでいる。

苦しんでいいはずなのに．．．なんで、どうして．．．私にはわからない。

――私

「君は『いきたいんだね』」

．．．．．えっ

「わかった．．．．．もうここには来ない。

君が上手く選択出来るよう願ってるよ」

その日から、彼は来なくなった。

一つわかったのは、彼が退院したこと。それだけだった。

数日後．．．．．

「．．．．．貴女が御島エリカちゃんであつてるわよねえくん？」

私が殴つてた人が来た!!!

．．．．．いや、そうじゃない。

この人は確か、カミシロエンタープライズの……

「……『岸辺リエ』さんですよね」

岸辺リエは少し口角を上げる。

「あつらーん? ……どうやら『並行世界の記憶』はあるみたいね。それじゃ、御島エリカさん。契約しましょう」

契……約……? ?

この人と! ?

「私を使ってお兄ちゃんを苦しめた人の契約なんて信用できません!!!」

「どうやら、語弊があるみたいねえ。」

私と貴女が行うのは……、真つ白で……、クリーンで……、私と貴女が利用しあうた……だ……の……『契約』よ」

数日後、私はカミシロエンタープライズ社にいた。

その後、彼と再会するのは時間の問題だった。

「本当にあれから三年経ったんだね」

綺麗な満月が彼の顔を照らす。

あの後、お兄ちゃんやアラタさん、他にもたくさんの人に会って『EDEN』は作りに上げられた。精神のデータ化は勇吾さんを中心に私やイーターを取り込んでいたアラタさんによって、いちはやく完成された。

そのおかげで、私の『記憶サーバ』が作られて、治療を受けられた。それで、私は今も『いきつづけられる』

「入るぞって、こんな時間なのにコイツ寝てていいのか？」

アラタさんがこの部屋に入って来て士郎を起こした。

「おい起きろ」

士郎は少し目をこすりながらゆっくりと体を起こした。

「・・・あれ、なんか暗くなってますがってもうこんな時間!!」

「随分とお寝坊だったね」

真っ青になった彼の顔は、携帯を見た瞬間に真っ白にまでなっていました。

「
・
・
・
・
イリヤが玄関で倒れてたって」

第十二話 逃走と退院と偽りの変化

わたしにとつて『魔術』ってなんだろう。

最初はただ・・・アニメの中の主人公みたいで、とても楽しかったと思う。凜さんやルヴィアさんみたいな『魔術師』じゃなくて、『魔術』なんか今まで関わったことのない、もつと平凡な人間・・・だと思つてた。

バーサーカーとの戦いでは、手も足もでないほどやられていたから気がつかなかった。

『・・・・・・・・』

わたしを中心に大きな音が聞こえる。

『・・・・・・・・これが』

ボロボロになってしまった、みんなが見える。

『イリヤの力?』

わたしは怖くなって走り出した。

わたしは普通の人間なのに……

わたしはただ、ステッキに騙されただけなのに……

「……助けてよ、お兄ちゃん」

「で……どうだったの？」

「……熱はありました。」

しかし、それ以上に心のほうに異常をきたしており、三年前の状態に戻りかけています」

昨日の夜遅く、私は連絡の一つも送ってこないシロウをリビングで待っていました。すると、玄関からドンつと音が聞こえて、そこへ行くと……イリヤさんが倒れていました。

その後、すぐにシロウに連絡……といっても返事がくるとは思えなかったのですが、シロウもその数分後に帰宅しました。

シロウには説教をしたのですが、いつもとは違いイリヤさんのことを心配をしています。

「たしかに、シロウへの依存もそうだけど、私が聞いているのは、魔術の封印のほう……どうだったの？」

「封印は解けてしまいました。それも、十年間溜めていた魔力がほとんど全て無くなるぐらいに。熱のほうも、それが原因でしょう」

「それよりも、なぜ封印が解けたのでしょうか？」

「……いえ、そんなことよりもあの精神状態が不安です。ね。きっと、『三年前』ほどではないにしろ、とても辛いことが起こって、事件などに巻き込まれているのでは……!?!」

「セラ、大丈夫だって……シロウも家に帰ってきたし……」
リズは樂觀的に……いや、少しうつむきそう言いました。

『三年前』、シロウは行方不明になりました。

旦那様、奥様は一度家に帰ってこられ、シロウを寝る間も惜しんで探しておられ……一週間後、シロウはとある探偵に保護されました。

旦那様はすぐに迎えに行きました。
シロウは確かにそこにいました。

しかし、『シロウ』は一週間前の土郎と違っていたのです。

シロウの変化にまず気づいたのは、奥様でした。

記憶が無いと言い張るシロウに奥様が、『今まで、どこにいたの?』と伺ったとき、シロ

ウは『わからない』とおっしゃりました。

その後、奥様が『病院に連れて行きますよう』とおっしゃりました。以前、シロウを引き取ったときにお世話になったお医者様（セイセイ）に聞いたところ、シロウは以前と違って、『意的に隠している』と先生はおっしゃられました。

その後、シロウの一週間を知るためにシロウには記憶喪失のカウンセリングと称して入院させました。

シロウが入院している間に、シロウを探偵事務所へと連れてきた人物を調べました。

見た目が六十代から七十代の年齢の男性、髪の色が白髪でシロウを探偵事務所（セイセイ）に連れて行く前に空港の監視カメラに映っており、荷物は子供一人入れそうな宝箱。

どう考えても誘拐犯だと思える人物を探しましたが、一向に見つからず、そういうしている間にシロウの退院すると連絡が来しました。

心理学の先生でも引き出せなかった記憶を、シロウが『少し』思い出したと言ったことで、旦那様たちは迎えに行きました。

旦那様が聞きました。

『何を思い出したんだい？』と……

シロウは少しずつポツポツと話し出しました。

『親父とアイリさんに出会ったとき』と答えました。

私達を含め、旦那様と奥様は驚きました。

シロウが引き取る前にあつた『聖杯戦争』の最後の記憶を取り戻したと言ったからです。

シロウは言いました。

自分は人の命を踏み台にして生きてきたと……

体が痛いと呼ぶ老人の苦痛を無視した……

せめて子供だけでも救って欲しいと嘆く母親の悲しみを無視したと……

そして、自分が救われたとき、とても嬉しかったことを……

奥様はシロウに抱きついてずっと『もういい、大丈夫』と声をかけ続け、旦那様は苦しそうに言うシロウを見続けました。

それでも、シロウは言いました。

『俺は『正義の味方』になりたかった』

『俺を救ってくれた親父やアイリさんみたいな『人間』になりたかった』

『見ず知らずの誰かを救って、誰もが幸せで、誰もが平和に生きていける世界をつくりたかった』

シロウはまるで教会で『罪の告白』をするように言いました。

『……でも、それは間違いだった』

『俺が望んでいたのは、踏み台にしてきた人達への『贖罪』』

『俺は誰かを救いたかったわけではなく、誰かを救うことで俺は『人間』なんだと実感したかった』

そのとき、私は気がつきました。

シロウの今までの違和感を……シロウはあの一週間前まで機械じみていました。しかし、今のシロウにはそんな反応は一切無く、『人間らしく』身勝手に生きていました。

『ずっと忘れていたんだ。』

苦しかった記憶、辛かった記憶、悲しかった記憶、でも俺はそれよりも、ずっとずっと大事なことを忘れていたんだ……』

『あの一週間……俺は誰かには言われ続けたんだ』

シロウは一瞬、とても辛そうな表情を見せた。

『……生きて欲しい。』

．．．ずっと．．．ずっと言われ続けただ。

『たとえどんなことがあっても、誰あながシロウを傷つけても、私あなたはあなたに幸せに生きてほ
しい』って』

『誰かが言った』とシロウは言いました。

しかし、それが誰かとははつきりと言葉には出しません。

『そのとき、俺は気づいたんだ』

『俺はあのとき、たとえどんなことをしてでも、どんなふうになっても『生ききたかっ
た』
んだって』

シロウは泣くように言いました。

『……俺をどうしますか?』

シロウは旦那様に聞きました。

旦那様も奥様も私達もその言葉がわかりませんでした。

『俺みたいな『人間』をこれからも引き取り続けますか?』

そのとき、シロウがなぜ『記憶』を言おうとしたのかがようやく理解できました。旦那様から、奥様から、私達から捨てられる覚悟ができたから話したんです。

『大丈夫だよ、士郎。』

君がたとえどんな人間だったとしても、僕は君の『父親』だから……

旦那様は優しく言いました。

『僕は士郎に幸せになって欲しい。』

だって君は僕の『息子』で、僕は君の『父親』なんだから……精一杯に生きて、幸せになって欲しい』

『……私もよ。私も、士郎……あなたに幸せになって欲しい……だから、もう二度とそんなこと言わないで!!!』

奥様が強く抱きしめました。

そのとき、シロウは初めて泣きました。

シロウが初めて見せた人間の感情でした。

……だからこそ私は。

「……リーゼリット、私達があの人を幸せにしましょう」

「……うん」

私は、あのときのことを思い出し、もう一度刻んだ。

第十三話 依存とチケツトと槍

．．．ああ、なんでこんな目に．．．．

ふざけるな．．．ふざけるな、なんでなんだよ

．．．．．
えらべるはず
選択権なんてなかったのに

『．．．．．』
選
べ
って、言ったのはそっちだろうが!!!

．．．こんな結末が．．．あつてたまるか!!!

．．．．．もう．．．いい、わかった

い．つ．も．ど．お．り．切．り．捨．て．て．や．る．よ

．．．．．そのかわり、覚えておけ

『^{アイツ}ー^ー』との約束を破らせた『^{オマエラ}ー^ー』を

．．．．．俺破絶タイに許さない

『おい、衛宮．．．衛宮．．．衛宮!!!』

ふと、目の前を見ると慎二がいた。

「ようやく起きたのかよ。もう、放課後で教室には誰も残っていないのに寝てるなんて、ほんつとうに呑気なやつだなあ、衛宮は」

そういえば、午後の授業中から意識がない。

それどころか、あんなまで見せられた。

(これは、昨日、イリヤの部屋で徹夜したのが原因かもな)

昨晚、自宅に帰るとリズにイリヤの部屋へと連れていかれた。

イリヤが高学年になったときから、あまり入らなかつたその部屋、俺にとつては少し懐かしい……と普段なら言えただろう。しかし、現状ではそうも言っていられなくなっていた。

『……お兄ちゃん……行かないで』

イリヤはうなされながら何度も俺を呼んでいた。

三年前、入院が終わり家に帰った後……イリヤが俺のあとに引つづくように、後ろについてくることが多くなった。当時、小学生低学年だったイリヤにとつて、身近な……それも家族がいなくなるということは、俺が思っていたよりも重かつたのだろう。

当時のイリヤは毎晩うなされ、俺の名前を呼び続けた。それを見た……そのときから俺は、イリヤに気を配るように気をつけていた。

イリヤの寝る前には、寝るまでそばにいて『デジタルワールドの英雄譚』を少しアレ
ンジして聞かせていた。

最近といつてもここ一年ほど前には、イリヤがようやく一人で眠れるようになったの
だが、またそれが再発していた。

(どう考えても、昨日アサシンだから気を抜いていた俺が悪いんだけど……)
最近の癖になりつつある溜め息について、友人の某ワカメを見る。

「……おい、今とても失礼なこと考えただろ」

「……げっ、なぜバレた。」

『ンなモン、才前がバレや単位だけダロ』

「……いや、そんなことはないよ」

いつもと同じように、言葉を無視して慎二へと集中する。

「なんだよ、その間は……まあいい、俺もお前を待っていたしな」

はっ……俺を待っていた？あの、慎二が？

「なぐに、驚いてんだよ！」

「そんなに俺が待っていることが意外なことなのか？」

『「意外だ」』

慎二は俺の言葉に拗ね始め、ボソボソと何かを呟き始めた。

(やつぱり、違うんだな)

中学入学の時から友人だった慎二に対して、俺はかなり疑問に思うことがあった。

しかし、あの『罪の剣』^{ツミノキバタ}で見た衛宮士郎の友人の『間桐慎二』と、俺の友人の『間桐

慎二』は別人なのだと自覚した。

「…俺が、悪いってのかよ。ああ、そうだよ。いつもいつもいつもいつも…」

『アあ、又はじマツたか』

あつちの慎二との相違点においては、こつちの慎二はとにかく自信がない。並行世界^{あつち}の慎二と同じように陰湿な性格ではあるものの、こちらの慎二は有能ではあるが、自分に自信がない上に、それを隠そうとしている。

四年ほど友人をやっていたので、以前その場面に立ち会ってしまい、俺の目の前ではこんな風に泣き言を言うようになったが、その原因までは理解していない。

本当に妹をいじめたり、殺したりした並行世界の慎二とはえらい違いだ。

「……こいつ、偽物か？」

いや、(慎二のトラウマで)話が長くなる前にさっさと要件をすましてもらおう。

「……あのさ慎二、さっき言ってた用事って一体なんなんだ？」

「いつもい……へっ？」

「ああ、だから……」

慎二が正気を取り戻して、(繕った)自信に満ちた表情でバッグの中から取り出しながら言った。

「……ふっふっふ……おい衛宮、衛宮。この手の中にあるものがなんだかわかるか？」

「手の中って……それ、ライブのチケットか？」

自慢げに取り出したものは、ライブのチケットであったがそれがなんになるんだ。

「ああ、そうだ。……これはな、今ネットで大人気のヴィジュアル系バンドのロッカー

『ジミイKEN』さんのライブチケットだ!!!」

そういうえば聞いたことあるな……一部のカルト的な人気を誇るヴィジュアル系バン

ド『ジミイKEN』。

「でも、ネット界限でしか有名でない人が、いきなりライブなんてやって大丈夫なのかよ？」

「いや、何度かライブもやってとうとう全国ツアーにまでこじつけた人だ。きつといいライブになるぜ!!」

それで、なんで少し不満気味に俺を見るんだよ。

まあ、ファンだから仕方ないとは思うが……

「しかし、残念だが俺は用事があつて行けないからライブ楽しんでこいよ」
そういつて慎二は俺の前にそのライブチケット二枚を渡して去つていった。

「これ、どうすればいいんだ？」

「本当に良かったのですの？」

「ええ、いいわよ……これで……」

これからイリヤを欠いた私たちは、最後のカードへと挑みにいく。

昨日、私たちはアサシンと戦い、結果的に勝利した。イリヤは毒の体を酷使して、無理やり魔力砲を撃った。しかしそれは失敗して、全方位に向かい私たちを巻き込んでしまった。

結果としては勝てたものの、その後イリヤは逃走・・・私たちには何もできなかった。

「いい、作戦の確認よ!!!」

イリヤを欠いたメンバーではやはり不安があった。

「私たちがやるべきことは、ただ一つ」

だから、私は声をあげて奮い立たせる。

「美遊がランサーのカードを使い、『刺し穿つ死棘槍』で倒すわよ!!!」

一抹の不安を抱えて・・・

遠くで、妹が鏡面世界の開いたのを感じる。

「どうやら、セイバーへ挑むらしい。」

「ねえ、ルビー本当にいいのこれで？」

「イリヤさんが少し辛そうに私に聞いた。」

「いいんですよ、あつちにはランサーのカードがありますし……もうバーサーカーのカードのときのようなこともないでしょう」

「イリヤさんの精神状態から考えると、これから鏡面世界に行くことはできない。それ以上に、イリヤさん自身ああはいつているが、行きたいとは思ってはいないだろう。」

「不意にドアから音が聞こえる。」

「誰かが来たのだろう。」

「イリヤ、入るぞ」

「お兄ちゃん!?ちよつと待って!!!」

「イリヤさんに小声で挨拶して、机の中に隠れる。これならば、士郎さんにもバレないだろう。」

「イリヤさんが私が隠れたのを確認してから、お兄さんを部屋へ入れた。」

「……お兄ちゃん、今日バイトは？」

「休みだよ……って言うかとらされた。」

『「実の妹が風邪気味なのに、バイトなんてまるで私が悪者みたいじゃないか」なんて言っ

てさ・・・本当にいい上司を持ったよ」

（おおっとー！！！！ここで貴重なお兄さんのバイト先のこと知れるなんて、私はルビーちゃんとてもラッキーです！！！！）

「・・・それでさ、最近バイトとかで話してなかったし、少しイリヤのこと聞きたいと思つて色々」と

それから、少しずつ最近のイリヤさんについて、イリヤさんは話していった。お兄さんは相槌を打ったり、質問をしながらイリヤさんの話を少しずつ聞いていった。もちろん、魔術的なことははぶいて・・・

・・・そうして、イリヤさんは昨日のことを話し始めた。

とても・・・とても怖いことがあったこと。

それを自分だけで解決できてしまったこと。

それで、友人を・・・美遊さんや凜さんを傷つけてしまったこと。

イリヤさんにとってはならとても苦しいことだろう。

それでもイリヤさんは聞いた。

．．．自身の救いを求めて．．．

「．．．．．どうしたらいい、どうすればいいの、お兄ちゃん!!!」

士郎さんは今までとは違い、少し時間をあけてイリヤさんの目を見て言った。

「．．．．．イリヤはどうしたいんだ」

．．．．．同時刻、鏡面世界にて．．

「．．．．．嘘でしょ．．．」

宝具を撃つたにも関わらず存在する金髪の少女。

「まさか……」

先程とは違うのが、腹の部分の鎧だけが壊れていること。
しかし、槍にはたしかに血が付いている。

「……『刺し穿つ死棘槍』が避けられた!？」

第十四話 私の選択

「わたしが．．．どうしたい？」

お兄ちゃんは何を．．．

「そう．．．．．どうしたいんだ？」

お兄ちゃんは先程と同じ笑顔でわたしに言った。

けれど、わたしが言いたかったのはそういう事じゃなくて．．．

「イリヤはきつと．．．俺に選んで欲しいんだと思う」

お兄ちゃんはわたしを見てそう言った。

わたし自身、お兄ちゃんに選んで欲しいって思っていたから、どうして聞くんだろうとわたしは思った。

「イリヤは友達を助けられる力があって、それを使ったけど友達を傷つけてしまった、ここまではわかる。でも話したってことは、友達は現在いまも戦っているんだよね？」

内心で．．．．ドキッと、心臓の音が鳴った。

お兄ちゃんは魔術のことを知らないのにはずなのに、なぜかそう言ったのが怖くなった。

「それでも……イリヤには解決できるチカラがあつて、でも、友達を傷つけてしまった。だから行きたくない。いや、違うな……美遊なら大丈夫と言ったから、美遊ちゃんはいりやと同等の力を持っている。だから……」

（いやつ、聞きたくない!!お兄ちゃんの口からそれだけは……）
「わたしは行く必要はない」

お兄ちゃんの声が響いた。わたしの本当の心のを暴かれたみたいで、心が折れる音がした。

お兄ちゃんにだけは知って欲しくなかった。

そんな醜いわたしの心を知って欲しくなかった。

耳を塞ごうとしたわたしの手を取ってお兄ちゃんは言葉を続ける。

「イリヤはさ……『明日』って言葉……どう思う？」

突然、お兄ちゃんはそのことを言った。

「明日？」

「そう『明日』……昔さ……よく話したよね。まだ、高校生にもならない子供たちが、悪を倒しながら旅をする話」

昔・・・というよりも、お兄ちゃんはわたしが一人で寝るようになるまで、沢山のお話をしてくれた。それは、子供たちが悪い奴らをやっつけるお話だったけど・・・それが、なにか関係があるのかな？

「そのお話には・・・正義の味方なんてものは出てこないんだ」
「えっ・・・でも、あの話って」

あのお話はたくさん悪い奴らが現れて、主人公たちがそれを倒しながら世界を救うお話だったんだけど・・・お兄ちゃんは少し笑いながら話し始める。

「あの物語の主人公たちはね・・・誰しもが、より良い『明日』を求めてるんだよ」
そういうえば、あの話の主人公たちは、絶対に自分が正義なんて言葉は言わなかった。むしろ、戦いたくなんてないって言って、戦いから逃げ出す人や、恨んで、殺したいって願って失敗している人もいた。

でも・・・それがなんだって言うの？

今のわたしには関係ないじゃないか・・・

(もう、ほっといてよ)

「イリヤは今『私には関係ない』って思ったよね」

「それが……どうかしたの？」

わたしは不満そうにしながら、お兄ちゃんに返事をした。

「まあ、最後まで話を聞いてくれないか？」

わたしはその言葉に渋々頷いた。

「それじゃあ続きを話そうか」

「あの主人公たちが求めるより良い明日って言うのはね……自分たちが幸せになれる『日常』なんだよ」

少しだけムツとした気持ちになる。

小さい頃に、『正義の味方』だと思っていた『理想』を汚されているような感じがする……それでも、お兄ちゃんは話を続ける。

「物語の主人公たちは、みんな迷って、悩んで、必死になって考えたものの中から選んで、それでもたまに失敗や間違いを犯して取り返しのつかないことになって、もう嫌だっけって足を止めたり、諦めて逃げ出したり、失ったものを数えて後悔したりする奴もいる……そんな中でも前を向かなくちやいけない行動を起こすんだ」

お兄ちゃんの言った通り、主人公たちはたしかに悩んだり、後悔しながらも立ち上がって戦っている……今、動かないわたしとは大違いだ。

「この話を聞いてもう一度聞くけど……イリヤはどうしたいんだ？」

(そんなこと言われても……)

「そんなこと言われても、わかんないよ!!!」

お兄ちゃんはわたしにどうして欲しいの？わたしはわかんないからお兄ちゃんに聞いているのに……お兄ちゃんは変な話をし始めるし、そんなこと言われたって、わたしは物語の主人公みたいに立ち上がれないし、行動もおこせない……本当に、どうしたらいのかなんてわかんないよ!!!」

わたしはお兄ちゃんの言い方に本当に苛立った。

「どうしたらいいの？」

「どうすればいいの？」

「ねえ、お兄ちゃん……どうすればいいのかを教えてよ!!!」

わたしの質問にお兄ちゃんは一回、ため息を吐いて静かに言った。

「俺はイリヤに『選んで欲しいんだ』」

「なに・・・それ、わたしはわからないからお兄ちゃんに聞いてるのに、なんでお兄ちゃんはそのことを言うの!？」

お兄ちゃんはふつと笑った。

「イリヤはたぶん後悔したくないから俺に頼ったんだと思う」

凶星だ。

失敗したり、間違えだったとしても誰かのせいにはできるから、お兄ちゃんに聞いた。

（わたし、とつても意地汚いな）

「それでも、俺はイリヤに選んで欲しい」

お兄ちゃんはわたしとは手を握って、懐かしそうにそう言う。

「もしかしたら、選んでもより良い明日なんてこないかもしれない」

「もしかしたら、明日はもつと苦しいかもしれない」

「選んだのは失敗だったって後悔するかもしれない」

お兄ちゃんの手が震えている。

きつとお兄ちゃんも、そう思った経験があるんだと思った。
「それでもさ……」

「自分で選り取った道なら、イリヤはきつと……前を向いて歩けるようになれると思っ
たんだ」

わたしは、お兄ちゃんのその表情を初めて見た。

笑っているのか、怒っているのか、泣いているのか、どんな風に例えたらいいのかわ
からない表情だった。

「もう一度聞くと……イリヤはどうしたいんだ？」

「くっ……!?!」

『美遊様、これ以上は戦ってはいけません!!!』

一度鏡面世界から出て、態勢を立て直しましよう!!」

凜さんとルヴィアさんは寶石を使い果たしてもう戦えない。

最後の希望だったライダーの夢幻召喚インストールした宝具も、相手の宝具によって破られた。

これ以上、戦っても負けるのはわかっている。

(・・・それでも!!!)

イリヤをこれ以上巻き込まないためにも、ここで勝つ必要があった。

(しまった!!!)

現実は甘くなかった。

障壁を破った風の刃が一瞬の隙をついて、わたしの目の前にきてしまった。杖を盾に

しようとするも、間に合わない。

流石に、もうだめだと思った。

しかし、痛みはこず、わたしはまだ生きている。

「大丈夫・・・美遊？」

かつてわたし達を追い込んだバーサーカーがそこにいた。

いや……違う、そこにいたのは……

「どう……して……?」

「わたし、もう逃げないから……あとはわたし達に任せて」

そこで、わたしの意識は消えてしまった。

「あなたが強いことは知ってる」

目の前に立つ、剣を持った金髪の女性。

「正直言つて、怖いし……あなたみたいな人と戦いたくなんてない」

戦うのが怖かった。

美遊をここまで追い込んで、凜さんやルヴィアさんが鏡面世界から脱出していたのを知ったから……余計に戦うのが怖くなった。

「それでも……わたしは逃げないって決めたから」

手の甲に赤く光る三つの模様が見える。

「だから……力を貸して、バーサーカー!!!」

一つ模様が消えると同時に、力が湧いてくる。

女性がかまいたちのような攻撃を仕掛けてきても、この力はビクともしない。

『イリヤ、そういうえばお前宛にこんなものがポストに入っていたぞ』

わたしが美遊を助けに行くと決めたあとすぐに、お兄ちゃんから渡された封筒。

その中には、Mに奪われたバーサーカーのカードが入っていた。

不思議とそのカードが気になって、鏡面世界に入る前に触って見た。すると、カードの使い方が手に取るようにわかった。

そうじゃない……バーサーカーが教えてくれたんだ。

「わたしはあなたに勝って、美遊と友達になる!!!」

女性は風の刃が効かないことを見抜いた瞬間、接近戦に切り替えてきた。

(わかる……相手の動きが手に取るように……!!!)

あらゆる方向からくる剣撃を、バーサーカーの剣で防いだり、受け流す。

女性が達人なのは今までの動きでなんとなくわかる。

けど、バーサーカー自身がわたしに力を貸してくれているおかげで、相手が次にどんな攻撃がくるのかわかる。

女性が剣に魔力を込めた。

(右に避ける!!!)

右に避けた後すぐに、風の斬撃がわたしの横をすり抜けた。

それを見た女性はわたしから距離をとった。

わたしは近づこうとしたその時・・・今までとは比べ物にならない魔力が、女性の剣に集まった。

(なにかがくる!!!)

『『約束された勝利の剣!!!』』

(ダメっ・・・避けられない!!!)

巨大な光の奔流がわたしを襲った。

その瞬間、バーサーカーの宝具が発動する。

大きなバーサーカーの背中がわたしを守っている。

一回、二回、三回とバーサーカーの背中が光に飲み込まれては現れてわたしを守って、十二回目でようやく光が消えて無くなった。

バーサーカーの背中がなくなった瞬間にわたしは駆け出した。・・・もうバーサーカー

はわたしを守ってはくれないとなんとなくわかったから……わたしは女性に接近した。

女性はもう一度光を集めようとしたが、もうバーサーカー^わの宝具^たの射程内^しだ。

赤い模様が一つ消える。

だけど、まだ足りない!!!

「やるよ、バーサーカー!!!」

自分よりも大きな剣を構える。

そして、もう一度……最後の赤い模様を使って叫ぶ。

『射殺す百頭!!!』
『ナインライフス』

赤い模様のから出た魔力を使って、わたしはバーサーカーの宝具を使う。

剣撃が女性に向かう。

わたしにはわかる。一回の一撃で相手の急所を破壊する恐ろしい技だったこと

が………

(………それでも)

「それでも……わたしはあなたに勝つ!!!」

最後の一撃が決まった。

既に女性は消えてなくなり、カードへと変化した。

(………セイバー?)

剣を持つ騎士の絵柄のカードだった。

「やったよ……わたし、勝ったんだ………」

そうして、わたしはセイバーに打ち勝った。

エピソード 俺の選択

爺さんから貰った指輪を通して、魔力の塊が消えたのを遠くで感じる。

「・・・イリヤは勝ったんだな」

少しの安心感と自身の無力さを実感した。

(こんなことを思うなんて・・・きつと、アレを見たせいだよな)

『暗闇』

『鎖』

『黒髪』

．．．たとえば夢だったとしても忘れないであろう光景。

三年前のあの光景を．．．

『ダメえもサツサ都選んだホウがいいん邪無いか?』

考えていたことを理解して、今の俺には到底、選ぶことすらできないであろう『選択』をオグドモンはせまった。

(そんなのわかってるさ．．．)

「．．．．．三年前から」

希望なんて消えてしまった。

絶望などと言葉には表すには生易しく。

『ア
イツ
ー』の頼ネガイみを選切り捨てばなくても……

それでも『俺おれ』は『そ
れ』を救おしいタカった。

『……ズイ分と、ナマったモンだ』

(……えっ)

オグドモンの一言・・・疑問に思った、そのとき・・・

「ふーん・・・やっぱり、三年前の記憶はあったのね」

いつのまにか自身の部屋のドアが開いていて、そこにはアイリさんとセラが立っていた。

「・・・あつ!!!」

つい、口から漏れた言葉に自身が失策を気づいた。

(この、三年で警戒をここまで緩めていたのか・・・)

ただ考え事に集中してしまっただけで、自身の近くに人が来たことにすら気づかなかったことに驚愕する。

「・・・とりあえず、おかえりなさいアイリさん」

作戦1、とりあえず話をそらそう。

「ええ、ただいま・・・それで、三年前の・・・あの一週間のこと話してくれるわよね?」

・・・笑顔が

「ははは・・・なんのことでしょうか?」

『ソレは無理アルンじゃネエか?』

オグドモンの言葉と同時に、セラがポケットからスマートフォンを取り出して、アプリを起動した。

『……三年前から』……証拠です。

これで……話してくれますね……」

セラの手の中にある証拠と、アイリさんの『やっぱり』という言葉には、有無を言わさない感じがする。

『……イウのカ?』

『アイツ』の声から啞いが消えた。

必要最低限、オグドモンには関わってくるから……

しかし、俺の答えは決まっている。

「俺は話すつもりはありません」

二人の顔はさっきの俺のように驚愕へと変わった。

アイリさんたちが知りたかったように、俺も教えたくないのだから仕方がない。

「・・・シロウ、なんで答えてくれないの？」

アイリさんは質問を変えた。

『まあ、当然だな』

アイリさんはたぶん、少しでも情報が欲しいんだろう。

情報さえ手に入れば、この世界の事象ならば間接的にもなら知ることができるからであるが・・・

(まあ・・・結局は無理だろうし)

異世界のことは言っても理解されないうえ、余計な詮索をされても厄介なことになるのは間違いない。

「・・・たんに俺の覚悟が決まっていけないだけだよ」

だから俺は、本当のことを微塵も渡すつもりはない。

奇しくも、俺がオグドモンへの返答しようとした言葉と同じであった。

(・・・それに)

「それに、アイリさんたちだって、俺やイリヤに隠していることがあるでしょ」

二人は肩を揺らした。

やはり、この世界でも聖杯戦争は起こったのだ。

『イキ物つてのハどれも同じだな。』

ヘイコウ世界デも異世界でモ、ヤル事なすコトホトンド変わんネエな』

オグドモンの言う通り・・・こんなに表面上は平和であっても、魔術や魔法は存在するし、吸血鬼なんて生き物がいる。

(結局は『普通の世界』なんてものは存在しないんだよな)

デジタルワールド
かっつていた世界でも・・・

リアルワールド
かっつて見た世界でも・・・

魔術や神秘が存在する世界でも・・・

見ている光景には『死』が存在していた。

その中でも人間の世界なんて特に酷いものであった。

意味もなく差別して、意味もなく騙して、意味もなく呪って、意味もなく殺して、意味もなく喰らって……自身の『罪』に決して気づいていないうえ、まるで自分が正義のように語る。

(本当にくだらないな)

俺はあのデジタルワールドで学んだ。

チカラ全能でなければ、誰一人として救えなかったことを……

今まで傍観してきた世界の中で俺が旅をした『デジタルワールド』が一番異質だったのは間違
いなく『皮肉』なこと……

(……そんなこと、考えても仕方がないよなあ)

しばらく考え事にふけていた意識を、二人へ向けた。

二人と視線が合う。アイリさんは必死に悩んでいおり、セラはそれを見て辛そうにしている。

しかし、考えた末にアイリさんの答えが決まったようだ。

「……ここで、話したら……シロウは言ってくれるのかな？」

その答えであるのならば、俺の答えは決まっている。

「……いや、俺の覚悟が決まったら話します。

だから、しばらく待ってくれませんか？」

これが……今の俺が答える唯一の答えだ。

(まだ……まだ俺は迷ってもいい!!!)

迷う時間なんてなかった三年前と比べて、俺には今は考える時間がある。

それは、別に今答えなくても良いということだ。

(「……いつかは、話すことになるだろうし」)

イリヤの魔力の方向を見る。

あそこにはきつと、彼女みゆがいるだろう。

それは、彼エインズワースらが関わってくる筈だ。そのときには、俺も関わらざる得ないだろう。

「……ッシロウ!!!」

俺がアイリさんとの会話の最中に、余所見をしたのでセラが大きな声でそのことを正そうとした時、アイリさんが手を挙げてセラを止めた。

「……そう、わかったわ。シロウがそういうのなら待つことにしようかな」

アイリさんは泣きそうな顔をしながらそう言った。

俺の部屋から二人は出て行った。

「……きつと……きつといつか話します」

俺は閉まったドアに向かってそう言ってしまった。

この光景で再び『彼』は思い出す。

「こっちは『楔』の繋がりがどんなに悪くとも『アイツ』に考えを『送信』できるうえ、『映像』だつてこちらが『受信』できることに対して、『アイツ』自身は俺の言葉を『受信』しかできないうえに、繋がりが悪いせいかな文字化けしたような言葉遣いになるんだよな」

『彼』は『神殿』の階段の一番上に座つて足を伸ばしたり、ばたつかせたりしながら、『鎖』で遊んでいる。

「もう慣れたけど、いつ見ても『不愉快』だなあ……この『鎖』は……」

自身の足首から生えた『鎖』を見て彼は残念そうに見ていた。

「……さつさと選んでくれると助かるんだけど……」

「まあ……無理だろ、『今』のままじゃ」

彼は『彼』を思い出して、空を見上げた。

昔の『彼』できたことは、今ではできないことを知っている。

「……あのときは気づかなかつたよな」

かつて、暗闇で嘆いていたときには気づかなかつた『ほし』を見た。

彼にとって『ほし』のように照らす『それら』を見るのは、もうすでに日常になっていた。

「さつさと選んでくれよ『衛宮士郎』」。

どつちにしろ、どうせ救いなんてないんだからさ」

ジャラジャラとなる『鎖』で遊びながら、天を見上げた。

そこにはまるでほしのように輝く、無数の『聖剣』が存在した。

2wei編

今は遠き日の記憶 憤怒の夜

主は『憤怒の剣』の封印を解いた。

それにあたって『英雄』守護者を倒した前に．．．

．．．『我』と『主』あるじは剣キの過去オクを見た。

世界を救った英雄譚はどうでもいい。

並行世界の我アイの立場モにある者モンをダゴモンの海へと放り込んだのは多少『憤怒』いんぬだったが、そんなことはどうでもいい。

問題はその前だ。

崩壊した街並み。

老若男女問わず、死へと向かう火の海。

誰しもがその中では歩くことさえままならないほど、苦しみ、悲しみ、痛みを訴えている。

——嫌だ——死にたくない!!!——

ただ一人の『子供』を除いて……

『子供』はこの火の海の中をひたすらに走った。

目の前で死に堪える姿を見ても・・・

すぐそばで誰かの悲鳴が聞こえても・・・

『子供』の体に助けを求め、足を掴まれても・・・

子供は見捨てた。

見たのなら、見なかったことにして・・・

悲鳴が聞こえたのなら、耳を塞ぎ・・・

足を掴まれたのなら、その足を振りほどいて・・・

我はその『子供』を知っていた。

しかし、それを認めたくなかった。

なぜなら我の知る『子供』は・・・

・・・決して、そんなことはしないのだから。

あの剣キョクは確かに事実だ。

それは理解した。

ならば、『主』に聞きに行こう。

思い立ったが吉日という言葉もある。

我には聞くことができるのだから。

数刻・・・主を探した結果見つかりはした・・・

しかし、近づくのは野暮というものだろう。

なぜなら・・・

「・・・結局、あんたは剣の記憶・・・『デジタルワールドの英雄達』の記録を見たのよね？」

「まあ・・・そうですね。一応・・・見ましたよ、英雄って言うていいのかわからないけど、平和ボケした英雄だったんですがね」

「へえ・・・それは、この世界より『平和』だったってことよね・・・なら、なおさら聞いてみたいわ!!!」

主と『師匠』殿が対話をしている。

それに・・・待てば『あの』話も聞けるだろう。

『憤怒』の剣の記録には、かつて我等の世界のように人間英雄によって救われた世界であつ

た。だが、その世界ではデジモンも確実に生まれ変われるのに、殺すことを躊躇う者どもが増え・・・記録の後半になるまで決して殺すことはない者もいた。

(まったく・・・愚かでないな・・・)

生きている存在はいずれ死ぬ。

敵対するのならば殺すのは必然。

それを理解していながら、相手をできうる限り殺したくはない。

・・・デジタマに戻れるという破格な条件を得ていながらも!!!

この世界では一定以上の強者以外は、淘汰デジタマに戻れないされるというのに・・・

・・・愚かしいにもほどがある。

主は師匠殿と笑っている。

その世界の話で笑っている。

ただ、この世界の方よりも幸せで平和な世界があるというだけで、この世界にも希望

があるのだと……そんな世界にして見せるのだと、前を向いて話している。

そんな時に、主の顔つきが変わった。

「……なあ、師匠が言っていた『愛が足りない』ってことがようやくわかったよ」
主が一呼吸おきそう言ったすぐ後、師匠殿の雰囲気が変わる。

「……へえ、どうやってわかったの？」

師匠殿の声に刺々しさがある。

……しかし、敵意ではない。

「……昔、ずっと昔のとあるところに子供がいました」

主は物語を語るように話し始めた。

「幸せだったかもしれませんが。」

不幸せだったかもしれませんが。

それは、少年には記憶にないからです」

師匠殿は少し不思議な顔をしたが、それでも静かに聞いていた。

「……でも少年には、たった一つだけ刻覚えてまれた光景がありました」

ここで、私の知りたい話を聞けるのだと思う。

少しの罪悪感……それを上回る好奇心は私の足を止めた。

「少年はたくさんの人を見殺しにしました」

師匠殿が顔を顰める。

『少年』という言葉が『主』自身であることを察していたのだろう。それが、今の主の度が過ぎたお人好しな性格に我と同じように齟齬が発生しているのだ。

「少年の住んでいる街に大災害が発生しました」

師匠殿の顔が驚愕へと変わった。

私は記憶そのことを知っていたのであまり驚きはない。

「少年の住んでいる街は火の海へと変わったのです」

「少年は火の海から逃げ出そうと、必死に走りました」

「……その過程で、どれだけの犠牲が出ようとも」

主の言葉とともに、周囲の音が消えた。

主の目は、今までで見たことがないほどの狂気が見える。

「走っている最中に焼け爛れた男の死体を見ました」

「少年は男を見なかったことにしました」

我が見た記録の中の地獄の一つ。

データの存在とは違う醜き姿は、我等との存在の違いを理解せざる得なかった。

「少年は子供の悲鳴を聞きました」

主は嗤いながら話し続け、師匠殿はそれを悲しそうに見つめた。

「……そうして少年は火の海から逃れることができませんでした。しかし、ようやく救われるつてときに……少年は力尽きてその場で倒れてしまいました」

「暗黒の太陽が昇り『もう助からない』……そう思ったとき……」

主の顔が無表情へと変わった。

「そんなときに奇跡が起こったのです」

主は無表情な顔で歪な声をあげました。

「瀕死の少年を突然現れた夫婦が救ったのです」

「泣きながら、それでも笑って『生きていてくれてありがとう』と夫婦は言いました」

無表情の顔とは違い、明らかに尊敬の念がこもっている。

「何度も、何度でも言いました．．．．．」

それ以上に、『憤怒』^{いきどお}つているのは何故だろうか？

「少年はそんな姿に憧れました」

主は心底からくだらなさそうにして、話し始める。

「自分もこんな人間になりたい」

「自分もこの人たちみたいに、たくさんの人を救いたい」

「たくさんの人を救って、たくさんの人を笑顔にしたい」

「そうすればきつと．．．．．」

「あの日見捨てた人たちに報いることができる」

嫌悪感をあらわにしながら主は話す。

「それから数年・・・夫婦に引き取られた少年はこの記憶を忘れました」

「感情だけが残り、なぜ救いたかつたのかなどの疑問すら抱かなくまま、『正義の味方』に・・・たくさんの人を救える『英雄』になりたいと考えるようになりました」

我の知りたいことは聞けた。

しかし、それならばなぜこの世界にきたのか？

「少年は運良く世界を救えるチャンスを得ました」

今までの中で最も冷たい声が聞こえた。

「少年は困っている世界があることを教えられ、すぐにその世界へ向かいました」

「そして・・・その少年こそこの俺・・・『衛宮士郎』です」

主はあつけなく自身のことだと言った。

『憤怒の剣』が教えてくれたよ。

戦う前には自身の記憶を・・・

勝った後には英雄の記録を・・・」

「本当にくだらないと思わないか？

あれほど、『誰かの為になりたい』、『正義の味方になるんだ』などと言っておきながら、
本当は『贖罪』の為に生きてきたんだ」

主自身が今までの生き方を否定する。

「・・・ルーチエモンの言った通り」

「まるで……『人形』みたいな生き方だ」

かつて『傲慢』ルイチエモンが言ったように、主は今の己を否定した。

そのとき——

「……かはッ!?!」

(……は?)

師匠殿が一発……主の腹を殴った。

防御態勢どころか、無防備に等しい土手っ腹に師匠殿の拳がめり込み、主は地面に這いつくばる。

「あんたはバカ? 私はそんなこと聞いてるんじゃないわよ」

師匠殿は体をくの字に曲げている主に向かって言う。

「私はたしかにそう聞いた。」

あんたの不幸も……あんたがどうしてそうなったかも……」

師匠殿は主を見下ろして言い続ける。

「でもね・・・あんたが『自己批判』してどうすんの？」

主がもがくのをやめる。

「私は今までなんのために『愛』を教えてきたと思ってるの？」

主は首を振った。

我にもそこまで愛というものが重要なかはわからない。

それを見た師匠殿は大きなため息をついた。

「あんたがあんた自身を愛せるようにさせたいからじゃない!!!」

主は顔をあげる。

師匠殿は主と同じ目線の高さになるようにしゃがんだ。

「『愛』ってのはね・・・人それぞれに形はあるけれど・・・あんたは自分を愛して

「いない!!!」

師匠殿の力説は続く。

「自分を『愛』していない奴が世界を救う? 笑わせるのも大概にしなさい!!!」

「そんな奴は絶対に自分を犠牲にしようとする」

「. 残された人のことを考えないで!!!」

主は自身が体を揺らした。

実際に経験やっしたことがあるのだろうか。

「私があんたの修行をみたのは、これからくるどんな困難にも負けない強さと、あんたに絶対に誰も後悔しない選択をさせるためよ!!!」

主の顔つきが変わった。

今までの諦観が一瞬で驚きに変わるとは我にもできないであろう。

「……いい、私が言ったことを胸に刻みなさい」

「……はい!!!」

主は立ち上がり返事をする。

「そこにいる『白いのも』さっさとでてきなさい」

(……バレていたのか)

我は木陰から姿をあらわす。

「……バケモン、まさか聞いていたのか？」

「……すまない、主」

我は主へ謝罪する。

「盗み聞きなんて許さないわ……こいつと一緒に説教の続きよ!!!」
「どうやら師匠殿は逃がしてくれないようだ。」

「わかったらさっさと正座!!」

朝までどんなに『愛』が大切か骨身にしみさせてやるわ!!!」

主と我は顔を見合わせて笑ってしまった。

第一話 転校と依頼と初探偵（しごと）

担任の葛木先生が手元の紙の束の見直しを終えた。

「では、これで中間テストは終わりだ。

特に連絡事項もない為、ホームルームを終了とする。来週まで問題を起こさないように」

クラス内の雰囲気は弛緩して、遊ぶ約束いる人や、この後の部活の予定を話し合ったりしている人、カバンを持って足早に帰宅する人など：：先程までの緊張はどこに行ったのか。

「ああ〜〜ようやく終わった・・・」

俺も廊下へと出て歩きながら、この後のバイトのシフトを確認していた。

「・・・・・・・・あれ？」

・・・・・・・・なにかおかしい。

いつもより静かで、なにかとても安心しているが・・・・・・・・やっぱりなにも考えないようになろう。

『んなモン決まッ流ダロ・・・五月蠅いやつらがいないからだろう』

（・・・あ!?!）

そういえば今日は遠坂もルヴィアさんも一緒に帰ろうとか言ってこないし、間桐の勧誘や一成の生徒会の備品修理の依頼、慎二や美綴との会話すらなかった。

（だからうるさくなかったのか・・・）

『ここ最きんハ特に忙しかッた力羅な』

思い出しても、二週間前の遠坂やルヴィアさんの転校があった。

・・・そしてなぜかルヴィアさんに懐かれてしまい（思い当たることがたくさんあるが）、下校時に一緒に帰りませんかと言われる。なぜか知らないが間桐の勧誘の激化や、一成が勧誘を妨害するために俺の周りに集まってくる。

それによって、別クラスの一成は遠坂やルヴィアさんと口論になって、その隙に隠れて帰ろうとするが、勧誘に来た間桐に見つかる・・・という悪循環が最近ずっと続いている。

『……これで暫クはゆっくりでキルな』

階段を下り、昇降口を出ると人だかりができており、少し騒ぎになっている。

「美綴、校門前で人だかりができてるけどなにかあったのか？」

その人だかりの中に美綴を見つけて声をかける。

割合的に男子が多いのはなぜだろうか？

「衛宮か……女性が車止めているんだよ。それも大学生くらいの人で、結構な美人……だと思いたい」

「だと……思いたい？」

その言葉に思い当たる人物が一人……

（いや、どう考えても確定してるだろ）

「ちよつと行つてくる」

「あつおい、衛宮!!」

人だかりを押しわけ、俺は校門前へとたどり着いた。

……そこには。

「ひっさしつぶりだねっ！ 元気にしてた、士郎君!!!」

赤い髪のツインテールに、そこそこの美人で活発そうな女性がそこにいた。

「なにしてんですか、ノキアさん？」

俺は呆れながらノキアさんを見る。

「うわっ、ひっど!!」

杏子さんとタクミがお得意様の依頼で出てくるから、事務所に土郎君をはやく連れて来て欲しいって頼まれたから迎えに来てあげたのにひっど!!!」

お得意様つてことはカミシロからの依頼か・・・

すると、周囲の冷めた目線が俺に集まる。

これはまずいな・・・

「わかりました、それでは行きますよ」

彼女が校門前に止めている軽自動車に急いで乗り込む。

「うんうん、それでオッケー!!」

それじゃ、しゅっぱーっしんこー!!!」

現在、暮海探偵事務所。

あの後、ノキアさんに送られて十数分で到着し、掃除をしていた。

暮海探偵事務所についたすぐ後から、一成からの電話がかかってきた。

もちろん内容は説教・・・どうやら、生徒会にも校門前の車の情報がはいつていたらしく、現場にいた美綴から一成へと俺の知り合いだと伝えられてしまったがために、一成から30分に渡る説教を聞かされてしまった。

『(あれもこれも全て^あの元凶^女が悪い!!!)』

オグドモンと偶然にも意見が一致した。

その怒りを忘れようとそれから約一時間ほど掃除を続けている。

「・・・これで終了」

鬱憤を晴らして見渡せば、掃除した場所は埃一つ落ちてはいない。

衛宮士郎の家事スキルが役に立ち、掃除や洗濯、料理を作ることに關しても、バイトで任せられるようになってしまった。

「次は仕事だな」

しかし、バイトの主な仕事は事務処理である：：とは言っても有名ではないため、基本的には杏子さんの知り合いの警察官『又吉さん』の依頼の聞き込みの手伝いや、その情報のまとめなどが俺の仕事だ。

たまに、ハツカーの依頼としてカミシロエンタープライズ社の手伝いの依頼以外ほと

んど客などは来ないのである。

「ここ一週間ほど来なかったせいか、情報のまとめやらが出来ていない。

「・・・依頼書の整理ぐらいやつといてくださいよ」

掲示板には受けた依頼書が貼られている。

しかし、そこには達成済みの依頼まで貼られ続けているので、依頼の整理は俺がやっている。

もちろん、守秘義務があるのでそう簡単に処理はできないが、一応ギーククラスのハッカー達が整備してくれたパソコンがあるので、その中に依頼内容を打ち込みデータ内に収めるのも俺の仕事の一つだ。

『シュレppardーグラいいれば良いのにナ』

（そうだな）

依頼書が貼られ続けているのは、シュレッダーなどがないことが起因している。昔はあったが、昨年壊れそれから買ってはいない。

（あれば楽だったのに・・・）

そんなことを考えたり、オグドモンと会話をしながら、器用に依頼書の内容を打ち込んでいること30分。

午後三時あたりだろうか。

探偵事務所のチャイムが鳴らされる。

俺は玄関へと向かいドアを開ける。

「こちら暮海探偵事務所ですが、ご用件は……!?」

紫色の髪とリボン、高校生くらいの見覚えのある若い少女が玄関に立っている。

「はい、依頼をしようと……!?」

その少女も驚いて声を止めてしまった。

「……………間桐?」

「……………先輩?」

同時刻、他の場所でも同じようなことが起きていた。

「……………イリヤがふたり?」

洞窟の中にはカレイドルビーへと変身したイリヤと、アーチャーのカードをインストールしたイリヤが存在した。

そして、カミシロ関係に行つた二人は……

「やはり、ロイヤルナイツのカードを作るのは難しいようですね」

カード製作に悩む少女とそれを見て無言で頷く少年、そして記憶を『複製』^{コピー}されている女性がいる。

「ふむ……仕方ない実験を続けよう。」

私の『アルファモン』のコピーしていない記憶はまだたくさんある」

こうして、実験は繰り返される。

試行錯誤され、カードの複製はまだ続いていく……

第二話 彼の動向と彼女の見た者

資料を見直しながら、昨日のことを思い出す。

―昨日―

「とりあえず間桐……いや、間桐さん座ってください」

依頼人である間桐を玄関に留まらせ続けるのはダメだと思い、中へと入れた。書類が入っているダンボールで埋め尽くされた仕事場へ案内して、付近にダンボールが置いていない依頼人用のソファへ座るように進める。

「先輩……別に敬語じゃなくて良いんですよ」

「いえ、仕事ですので……間桐さんはコーヒーか紅茶どちらがよろしいですか？」
彼女が座ると同時にお湯を沸かす。

間桐は紅茶を選び、俺は紅茶の茶葉が入っている瓶を取り出す。

『確力菓しがアツたヨナ』

(……そういえば)

オグドモンの言葉とともに、以前買い置きをしていた日持ちのいい菓子を取り出し、皿に盛りつけた。

そうこうしているうちにお湯が沸き、紅茶を入れて間桐のところへと持つて行つた。

「それじゃ、依頼の内容を聞いてもいいですか？」

彼女の反対側のソファに座り、内容を聞いた。

「シ……慎二がいなくなつた!!!」

思わず、声を荒げてしまった。

話しを聞く限り、問題は一年ほど前から始まつたという。

「二年ほど前に、かなりの金額を銀行から引き落としてから、兄さんは夜遅く帰つて来るようになりました。ここ二週間ほど前からは、平日にも遅く、休みの日は必ず朝帰りをし、この一週間に限つては中間テスト期間中にもかかわらず、家に帰らない日もありました」

『ソレ、お前二モあてはマルんじゃねーか?』

(うるさい!!!)

桜の話にオグドモンは突っ込んだ。

流石の俺もテスト期間はバイトを休みはしたが、心当たりが多すぎて、若干申し訳なく思えてしまう。

まあ意識をなんとか切り替えて質問を始める。

「えっと、かなりの金額って言いましたけど……慎二君は一体どれくらいの金額を引き落とししたんですか?」

「……先輩、それは兄さんの捜査に関係ありますか?」

間桐が少し疑うような視線で俺を見てくる。

「まあ……関係はありますよ。」

少しでも情報があつた方が、慎二君を見つけやすくなりますし……」

間桐は少し思案してから、『間桐慎二』と書かれた通帳を取り出した。

「残高を確認すると、兄さんは約三十万円ほど引き出しています」

「……三十万……か。」

それじゃあ、二二週間の間に慎二君の様子がどうだったかを教えてくれませんか

「？」

「(一)二週間……ですか……?」

彼女は思い出そうとした。

俺は思い出していた。

「そういえば、平日に初めて遅く帰ってきた時にとても機嫌が良かったのを覚えています。そのときは、口論になりそうになった時に『せっかくなに、桜の相手なんてしてられるか』って言っていたのを覚えています」

『せっかくなに、桜の相手なんてしてられるか』

その日の夜に慎二にとつていいことがあつたつていうことだろう。

「……それで他にありませんか?」

「……あとは、ここ半年くらい、毎日手になにか『保湿クリーム』みたいなものを塗っていたことぐらい……ですね」

(手に塗っていたもの……?)

彼女はもうないと言った。

その後、俺は彼女を家に帰り、エリカへと連絡を入れた。彼女は忙しそうであつたが、暇があれば調べてくれるらしい。

そして次の日・・・今日の深夜に、杏子さんから連絡があつたらしい。
・・・書かれていた内容は、

『現状、こちらの状況も芳しくない。助手君も私達もこちらのことで手一杯だ。

すまないが、良い機会だと思つて一人で依頼を受けて欲しい。

初依頼でサポートしきれないのは申し訳ないが、こちらの状況が変化したらまた連絡する。

しばらくは帰れないので、いつもの掃除等宜しく頼む。

―追記―

依頼に成功したら、お詫びに私の新作のスペシャルブレンドをごちそ・・・

・・・等々、書かれていた。

『ゲンジつ見口』

オグドモンがなにか言っていた気がするが……俺はなにも見てない。見てないっ
たら、見てないんだ!!!

……とまあ、こんな感じで押し付けられたわけだ。

「まあ、『アレ』が完成すれば、俺が作りたいものが一歩進むからな」

仕方がないと思い、エリカの連絡を待ちながら午前中に集めた情報をまとめる。

可愛い女の子好き弓道部員M

『慎一い……?』

最近来なくなった以外にはわからないくらいかな……詳細がわかったら、連絡
してくれ』

生徒会メンバーR

『あやつがどうした?……いなくなっただど!!!』

そういうえば最近、クラスで間桐が不穏なものを生徒に勧めているという噂を聞いた。

今度会ったら説教をしてやる』

T先生

『間桐君……？それよりもお腹すいちやったわ。お昼にしましょう、お昼に。それとたまにでもいいからお姉ちゃんに、弁当作ってきなさい、士郎!!!』

……生徒会メンバー以外、なんの情報も得られなかった。

生徒会長Rの『不穏なもの』というのは、『悪魔巡礼』と書かれたチケツトラしい。

……って、俺慎二からチケツトもらってるじゃないか。

バツクの中からチケツトを取り出すと……

「なんでさ」

『悪魔巡礼』と大きく書かれていた。

「・・・ふふ、お兄ちゃんつたら、隙だらけなんだから」

リンたちもずいぶん甘いわね・・・

私がそう簡単に捕まるもんですか。

「・・・つと、今はそれよりも、お兄ちゃん〜」

なにか紙を持ってうなだれているお兄ちゃん。

(どう考えても、いまがチャンス!!!)

「おっにいっちゃんーん!!!」

そうして、私はお兄ちゃんに抱きつく。

「ん、なん・・・うわっ!!」

なんだよ、イリヤ・・・いきなり抱きつくなんて」

(・・・え?)

お兄ちゃんが振り向いた瞬間、お兄ちゃんの右目が血の色だった。

肌は薄気味悪いくらいに白に近づいて、まるでイリヤやお母さんみたいなアルビノへと変わっていく。

血色の眼でお兄ちゃんが私を見る。

「・・・イリヤ、なんでいきなり抱きついたんだ？」

(・・・あれ?)

そこには普通の姿のお兄ちゃんがいた。

肌はいつも通りの肌色で、目は決して血の色などではなく、黒色へと戻っていた。

「・・・どうした、イリヤ。どこか体調悪いのか？」

なんか、いつもより肌が黒つぽい気がするが？」

(たぶん、私の見間違いだ)

「ううん、そんなことないよ・・・お兄ちゃんつてば、妹の肌がそんなに気になるんだ」
「別に、そんなことはない。」

「気のせいなら気のせいで問題ないんだ」

「お兄ちゃんは意外と慌てた様子もなく私に返事をした。」

「あれお兄ちゃん、さつきから持つてるその紙はなに？」

「べっ・・・別に、イリヤには関係ないだろう」

「そう言ってお兄ちゃんは紙を取り上げる。」

(ふーん、怪しいんだ)

「それ、なんかエツちなものなんでしょ・・・お兄ちゃんつたら、やらしーんだく」

「エツちなものなんかじゃない・・・これは、とつても大事なものだ」

「お兄ちゃんとはつきに、私の手の届かない場所まで紙を持ち上げた。」

「それじゃ問題ないよね、見せ．．．っへぶっ!!!」
痛っ．．．イリヤが呪いを使って、私に攻撃をしてきた。

「イリヤ、本当に大丈夫なのか？」

「こころは、普通に．．．」

「うん、ぜんぜ．．．っひぶ!!!」

．．．．．二回も．．．お兄ちゃんにもぶたれたことないのに!!!
もういい．．．怒った。
ここちらキスするしかなも強硬するしかない!!!

「お兄ちゃん．．．キスを．．．!!!」

お兄ちゃんの悲鳴が聞こえる。

お兄ちゃんの驚いた顔がどんどん私の顔に近づいていく。

(やった・・・・これで、お兄ちゃんは私のー)

そこで、私の意識は途切れた。

今は遠き日の記憶 嫉妬との対話

『トレース、開始』

昨日さくじつの戦闘を思い出すように契約者シロウは『嫉妬ツミノキオクの剣』にあつた『魔術』を行使していた。
「……………儂にとつて、どれほど聴いても理解しがたい魔術もじゃな……………それは」

赤い……………いや、何本か黒が混じつた髪を揺らして契約者は振り向いた。

「誰だつ……………つて、なんだオタマモンか。」

俺も慣れないよ……………お前のその口調には……………」

警戒した声を出す契約者。

それにしても、初めて出会つた頃とは比べ物にならないくらいに成長しているようじゃ。

「儂の慣れないと契約者の慣れないは間違いじゃ……………儂のは『嫉妬ツミノキオクの剣』のせいじゃが、おぬしが使つておるのはおぬしの世界の技術もじやろうが……………まあ、慣れぬという

のならば、口調も戻さぬこともないのじやが」

『嫉妬の罪』の試練のなか、剣の記録キオク……かつて並行世界ではリヴァイアモンだった存在の記憶を儂は植えつけられた。

それにより、儂はとてつもない力を与えられたかわりに、口調などに多少の影響を受けてしまった。

「いや、いい……お前がどんな口調だろうが、リヴァイアモンはオタマモンだからな……それに、口調に関してはいちいち俺が口に出すことでもないさ、お前の好きにすればいい」

それに、バケモンのときに慣れてるしな。

そう言った契約者は空を見上げる。

『正義』ってなんなんだろうな？」

そう言った契約者の顔にはどこか諦めがあった。

「なんじゃ……おぬしは『正義の味方』になるとか言っておらんかったか？」

そう言う儂には疑問とは真逆の、確信めいたなにかが心の中に居座っている。

そして、その言葉に反応した契約者は自嘲気味に笑った。

「目標を見失ったから．．．いや、自分が『正義の味方』だと思っていたあの人たちが、あの災害を起こした原因だと知ったからかな」

ふむ．．．どうやら『嫉妬の剣』^{ツミノキョク}のことを言っておるが、儂は『憤怒の剣』^{ツミノキョク}を見ておらぬからそんなことを言われても知らぬのじゃが．．．

まあ、迷っているのならば助けてやろう。

「ほう．．．詳しくは知らぬが、あの衛宮切嗣という養父救われたのだろうか？．．．その男が原因の一つだからといって、契約者が『正義の味方』を指すのになんの問題がある？」

契約者は苦笑いとともに顔をかいだ。

「はは……そうだな……」

「あの記録を見て、俺の中に目標せいぎのみかたにしていった人はいなくなったからさ」

ふむ……これは、ちと難しいか。

正義の味方であり続けようと『固執』をしていたのを『憤怒いぜん』の試練でやめてしまったことで、少し問題になってしまったのお。

かつての自分を見たことでの『正義の味方』に対する『固執』を失ったまではよかったのじゃが……今回の試練で、目標となった『衛宮切嗣せいぎのみかた』の真実を知ってしまったことが迷わせている要因じゃ。

目指す存在が原因となったことで、契約者は目標を見失ったか。

……仕方ない。

こういうのは『傲慢』の得意分野じゃが、いったからには儂が一肌脱ぐかのう。

「つまりおぬしは、目指す目標がなくなったから『正義』とはなんぞやと考えておるわけじゃな？」

契約者はコクリとうなづいた。

儂は少し考えていると思わせる間おいた。

「ふむ．．．では、儂が知っておる一人の『正義の味方』の話をしようではないか」

契約者はキョトンとした顔になり、数秒後儂を睨みつけた。

「なんだよ、それ．．．今更俺に、なにかを目指せつてのかよ」

「まあまあ、そんなに儂を睨むな。儂はただ話を聞いてもらいたいだけじゃよ。そこからなにを感じるかなどおぬしの勝手じゃ」

契約者は少し時間をおいて、頷くことで肯定を示した。

「そうじゃな．．．儂の知っておる『正義の味方』はとても愚かな人間じゃ」

「無鉄砲で人の話を聞かず、できるできないに問わずいつも何かをやるうとして周囲を巻き込むうえ、失敗して後悔はするものの、それはその場限りで、結局同じような行動を起こして周囲を困らせる」

契約者は眉を寄せる。

まあ、そうじゃな。こんな人間のどこが正義の味方であろうか？しかし、儂の話は続

いているから静かに聞いておる。

「……でも、その無鉄砲さに儂は救われた」

「……………は？」

契約者の間抜けそうな表情は腹にくるものがあるのう。

「儂は周囲のオタマモンから、色が違うという理由だけでいじめられておった」

そう、儂の体の色は『赤』。

周囲のオタマモンの体の色は『青』。

多少の差はあれど、集落にたった一匹だけ体色が違えばそれは差別の理由となる。儂は赤いオタマモンに進化してから迫害というものを受けていた。

「ただの成長期だった儂自身ではどうにもならず、ただ自身と周りとの差をひたすらに妬んでおった」

たったそれだけの違いで、『なぜ僕は周囲とは違うのか』とか、『僕も他のオタマモンみたいな色がよかった』とか、ずっと考えておつたの。

「そんなときじゃったよ、一人の大バカ者が現れたのは……」

世界を救う旅路だと申して儂らの前に姿を現した。

世のため、人のために、果ては世界すら救いたい。

そんな荒唐無稽な夢を、恥ずかしげもなくいつてのける。

そんな大バカ者が儂の前に現れた。

「いきなり儂が住んでいた集落に押しかけてきて、迫害を受けている儂のことを知った大バカ者は、儂を集落の者たちから救い出した」

「……それは」

契約者はようやくぐだれかわかつたようじゃな。

「それはおぬしじゃよ、契約者」

「少なくとも、あの頃の儂に対して平等に接した存在は珍しかった。しかしそれ故に、あの頃のおぬしの無鉄砲さに儂は救われた」

「おぬしは『嫉妬の剣』の英雄のように、並行世界の同種を倒したり、死ぬ間にパートナートともに、イグドラシルに甚大な影響を与えて封印されていた』とある『デジモン』を新たな世界へと逃し、希望を繋いだわけではない」

『嫉妬の剣』で知ることができた存在。

イグドラシルによつて奪われた『とある危険なプログラム』を、取り戻すために、退化してしまった城の主人とともに立ち向かい、最後の最後に敗北してしまった『英雄』。それは契約者とは決定的に違っていた。

「……………それでも!!」

「儂を救ったのは契約者じゃ」

儂はできある限り契約者の顔を見ないようにした。

正直なところ、とても恥ずかしい。それでも、今のコヤツには伝えなくてはならない。

「わ……悪い、けど……口調戻ってるし……さつきまで、『儂』とか言ってたやつが、いきなり『僕』とか……ああ、だめだ笑える、あははははははははははははははははは!!」

そうして『士郎』に言われて気づいたのは、自分が『嫉妬の剣』ツミノキオクの試練前までの口調に戻っていることだった。

「おっと……笑ったのは別にどうでもいいから、『儂』としてはさつきの言葉を考えて欲しいのじゃがな」

口調を戻して、自身の話はどうだったかと今現在笑い続ける契約者へと聞く。

すると、契約者はすぐに笑いをやめた。

「……そうだな、口調が戻るまで言ってくれたことだし、俺自身いつか向き合わないといけないことだった」

『憤怒の剣』ツミノキオクの時にもなにかあったとは聞いたが、儂はよう知らんから、今契約者は自身と向き合わなければならないのじゃろう。

それでも、契約者は……

「だから、俺自身がおまえにとつての『正義の味方』であることはしれた」

さつきとは違う晴れ晴れとした笑顔で……

「だから、俺はもう少し頑張ってみるよオタマモン」

悩みを振り切るように走り出した。

「……これなら大丈夫じゃろ」

契約者が見えなくなった頃に、独り言をつぶやく。

「……いずれ来る、災厄に対しても……」

第三話 彼女達の想いと邂逅

N o w h a c k i n g

N o w h a c k i n g

N o w h a c k i n g

「.....ダメ、全く情報が出てこない」

いや、それは違う。

こちらの世^{ネットワルク}界自体が統一されてい^{ない}から.....
やっぱり、『EDEN』で情報が共有されていたあの世界と違って、情報量が多すぎる。

「……それに、こちらの手の内を相手が知っているような……気がする」

膨大な量の情報の中に『ジミイKEN』に関係する一定以上の情報を調べようとした途端に、『罫』^{ウイリス}や『データの壁』^{ファイヤーウォール}によって阻まれる。それらを除去し終えた後には、情報が消え去ってバックドアどころか、データの破片すら残っていない……あちらには確実にこちらの手を読みきっている奴がいる。

「一通り送ってみたけど、きつといい情報にはなっていないだろうな」

前にジミイKENのブロックがされていない情報を集めて送ってみたけど、やつぱり参考にならなきさそうだったし……唯一わかりそうな情報に至っては、一部のコアなファンじゃなきや手に入らないものだったし。

こんなときに私の無力さが恨めしくなる。

せめて体力さえあれば、地道な聞き込みだつて手伝えるのに……

杏子さんや助手さんがこつちにいるつてことは、探偵の仕事一人でやっているんだろ
うな。

「……これじゃあ、士郎にまだ情報を渡せないかな……」

「……………」

「……………」

「……………んっ?」

今、なんて言った私……?

これじゃあ、士郎にまだ情報を渡せないかな

(嘘……!?私そんなこと言ってない……私はただ『カミシロ』で現在開発中のE D E N限定マスコット『めめたん』を士郎に取りに行かせるかわりに依頼を受けただけなのに、なんでそんなこと言っちゃったの!?)

それから数分間、ベッドの上でゴロゴロしたり、熱くなつた顔を隠したり、本当に自分でも訳がわからない行動をしていた。

そんな時、ピコン・・・とパソコンの画面にメールの通知が来た。

「・・・お兄ちゃんから連絡・・・？」

記憶が戻っていららい、関係は悪化して普段は会話もないのに、そんなお兄ちゃんからメールが届くなんて・・・

『例のチケットを持つている人間をピックアップしておいた』

簡潔にそう書かれたメールに関係者の情報が明記されている。

「これなら・・・士郎に連絡できる」

キーボードを打ち付けて士郎のメールに放課後、『店』に来るように連絡を入れた。

．．．．．同時に、私は手元のキーボードを使って、違う画面を見る。
「まだ、完成しない．．．やっぱ難しいかな？」

画面にあったのは『アルターエゴ』と書かれたどこかトランプのジョーカーを思わせる『灰色』のカードであった。

黒いイリヤと遠坂やルヴィアさんの家突撃から二日、クラス内の雰囲気テスト返却によつて浮き沈みしていた。

俺はまあ．．．そこそこの点数を取ったので、今日やるべき仕事をする。

．．．．．慎二は今日、学校に来ていなかった。

担任の葛木先生に聞いたところ、『家庭の事情』．．．．．ということだったが、間桐からの連絡もないので、慎二の独断であろう。

そんなとき、携帯のバイブの音に気づいてメールを開いた。

「『この後、『フリーダイエ』に来て欲しい』……？」

「なにか、情報でも掴めたのか？」

唐突なエリカからのメールに少し驚いた。

「先輩、どうしたんですか？」

メールの内容を確認したところで、校門前の間桐がこちらへとやってきた。

「……えと、ちよつと協力者からのメールが届いた」

依頼内容は学校では秘密なので、少し砕けた口調で彼女へと言った。

『協力者』という言葉聞いた瞬間、彼女は眉を顰めた。

「……その人って、信用できるんですか？」

まあ、そうだよな……協力者なんて言われたら、俺だって心配になる。でも、杏子さん達がいらない今、エリカかのじよの協力は不可欠だ。

「信用できると思うぞ。」

あつちも似たような仕事してるから、こちらの秘密をおいそれと明け渡すことはないだろうし、むしろ破格の条件でその手のプロかのじよに依頼できたのは安かった」

この世界では、今回のような仕事自体請け負う必要はないはずなのに、わざわざ人探しなんていう仕事まで請け負ってくれたエリカには感謝するしかない。

「……………彼女ですか？」

……………あれ、間桐の雰囲気が変わった？

「ああ、彼女だ」

俺の返答とともにその懸念は現実へと変わった。

「ふふふふふ……………そうですか……………彼女ですか……………」

（げっ……………また、なんか地雷踏んだのか？）

自身の行動を顧み、並行世界の自分衛宮士郎と照らし合わせる。

（……………まさか、さっき言った『彼女』って単語に反応したのか?!）

（ヤバイヤバイ、並行世界の自分はどう対処をした。）

間桐そつちのけで意識を集中して打開策を考えた。おもいだした。

「先輩……そこへ、連れてつて……くれますよね……？」

間桐の雰囲気は先程よりも重圧感が増して、有無を言わさない。

……並行世界の自分の結論、^俺

『なんでさ』

その言葉は数分後、俺の口から出ていた。

先輩は酷いです。

私の気持ちも知らないで、女の人に頼みにいくなんて……それにその人は絶対に先輩に惚れています。

先輩の言う破格の条件とはなにか知りませんが、プロが早々に安く仕事を請け負われて溜まるもんですか。

「……すみません、間桐さん。もう少し、機嫌を直してもらって申し訳よろしいでしょうか？」

「……なんですか先輩、私は全然機嫌悪くないですよ……」

先輩がヒイツと悲鳴をあげる。

(そんなに私の顔が怖いですか……?)

精一杯笑顔をしているつもりなのに……酷いです、先輩。

そうして、さらに私の機嫌は悪くなっていく。

……先輩もわざわざ、私の前で女性の話をしなければいいのに。

「……どうしたら、許してくれますか？」

少し時間を置いて、先輩はそう言った。

「……先輩？」

先輩の言葉に耳を疑い、先輩の顔を見ると、とても真剣な表情の先輩がいた。

「暮海探偵事務所の所長と助手が他の仕事をしている今、たとえバイトであったとしても依頼を任されている身の上で、たとえ所長と助手が許したとしても、私自身が失敗することを許せません」

「それほど、私にとつてこの依頼はとても重要なものなのです」

「だから今、私ができる精一杯のことをしたいと思つています」

「今回、貴女を不機嫌にしてしまった要因には予想がつきませんが、私自身未熟者の自覚があるが故に、それが正しいとは思えないのです」

「ですので、依頼人の要望にはできうる限り答えたいと思つています」

「先輩はそこで言葉を区切りました。」

「私は少し時間をかけて考えました。」

「わかりました先輩、機嫌を直しますから私の要望に三つほど答えてはくれませんか？」

「私は笑顔でそう言った。」

「………できうる限りのことなら」

「先輩は少し言い淀みましたがそう答えました。」

「さて………なににしましょうか？」

「そうですね………まず、先輩のクラスに遠坂先輩と一緒に転入してきたエーデル

フェルトさんみたいに強引にいつはいけませんよね……せつかく先輩に『おねがい』で
きるのだから、今後ともよろしくできるとなことにしたいですし、なにより先輩を好
きな女性たちに一歩前に進みたいですね。

……そうだ、まずはあれにしましょうか。

「それじゃあ一つ目は、先輩はその敬語をやめてもらってもいいですか？」
「……わかった」

これで、先輩は私と仕事にも普段通り話してくれます。

それなら、他の先輩を好きな女性陣より進むためにも……

「二つ目は、私の下の名前の『桜』……と呼んでもらってもいいですか？」

その瞬間……先輩は背中をビクツと揺らしました。

「本当に、そう呼ぶのか……？」

その言葉とともに先輩は相当複雑そうな顔をした。

「はい!!!」

その言葉に対し、笑顔で私はそう言った。

・・・数分後、私は『フリーデイ』と書かれたネットカフェへと来ていた。

「・・・・・・・・ほんとうにここなんですか?」

先輩はコクリ・・・・とうなづいて階段へと登り、受付の女性と少し話していた。

「奥にいるって言ってたから、行こうか」

少し歩くと『VIPルーム』の前に先輩は立ち止まった。

(ここに協力者を名乗る女性がいるんですね)

私の思惑とは裏腹に、先輩はドアへとノックを行った。

「エリカ・・・・いるのか?」

すると、突然ドアが開かれた。

「久しぶりだね、士郎……!?」

これが、協力者『御島エリカ』との初めての出会いであった。

瞬時に、エリカの顔がギョロリと俺たちに向いた。

「なに・・・?」

「・・・なんでもないです」

間桐が小さな声で話しかけた時に、つい返事をしてしまったが為に気に障ったようだ。

「・・・まあいいけど、それよりもこれが今回調べた情報なんだけど・・・」

パソコンを使ってジミイKENの情報が画面から出てくるが、この前送られてきた資料とさほど変化はない。

「・・・他には?」

「・・・もう少し待って」

そして、さらにエリカは画面をスクロールしていくと、数人の男女の写真が写っていた。

「・・・これは、例のライブのチケットを購入した人たちのリスト・・・士郎、この中から知っている人物はいる?」

次々と増えていく写真に、数名……うちの学校の生徒を見つかるも知り合いではない。

エリカのスクロールは続いていく。

「エリカ、ストップ!!!」

俺の制止にエリカはスクロールすぐに止め、俺の指示の通りに再びスクロールを戻し始める。

「見つけたの？」

エリカの問いに俺は頷いた。

画面の中でたった一人だが、知り合いを見つけたからだ。

『コ乃女は確力……』

「ああ、タクミさんの高校時代のクラスメイトだった人だ……たった一回だけど、彼氏さんの依頼のときに会ったことがある」

名前は藤咲サクラ……だったはずだ。

彼氏の武井リョウタさんから、雑誌に載っているデートスポットの調査と評価を行う

依頼を受け、当時はまだバイトではなかったもののアラタさんに無理矢理に付き合わされた記憶があった。

「この人……『数年前に』ジミイKENを調べたときにもかなりコアなファンだよ。それが身近にいたなんて……」

『数年前』……この単語には彼女の世界での記憶にあったという隠語を含んである。

『コノおんなソンな人物だったのか……』

「……ちよつとまってください?!

先輩と御島さんはいったい誰と話しているんですか!？」

間桐は俺たちの会話に無理矢理割り込んだ。

しかしその時、俺とエリカは間桐の存在を忘れて、オグドモンを挟んで会話をしてしまったことに気づいてしまった。

『……おい、シロウ……おれに合わせろ』

先輩とエリカさんがスクロールを終えて話し始めた。

一言目はただの疑問でした。

ただの言葉足らずを予想して受け取り、たまたま二人とも考えが同じであっただけだ
と思つたからです。

しかし、二言目には明らかにエリカさんからの疑問は、先輩の言葉を待たずに返答を
受け取つたような不自然さがありました。

「……え、えつと桜が話していたんじゃないのか？」

先輩は少し言葉に詰まりながらも私へとそう言った。

(嘘ですね……これは何か先輩は知っていますね)

……すると御島さんの雰囲気が変わりはじめる。

「……さ……さ……く……ら……？」

先程のオグドモンの言葉と間桐のお願い通り、名前を呼んだだけなのにエリカの雰囲気が変わりはじめた。

オグドモンはエリカの変化と同時に引つ込み俺一人に、エリカと対面してしまう。

「……ねえ……さくらつて……名前で呼んでるつてどういうこと？」

「え……えと、あの……それはですね」

間桐のほうは雰囲気気圧されて聞こえなくなっているが、俺のほうも気圧されてしまっている。

「ふーん……私だって、君呼びから名前呼びへと変わるのに一年ぐらいかかったのに、その子に対しては随分と甘いんだ？」

体感的に言えば先程イラついていた彼女よりも遥かに恐ろしく、かつてこんなに怖い状況は師匠のあのときの説教ぐらいの恐怖であった。

あつ……なんか、デジャヴ……というよりも、完全に衛宮士郎の記憶の中からこんな場面にいくつも立ち合ったことを思い出した。

下手な言い訳は通用しない……というよりも、かつて『ドキドキデート大作戦』と
いうくだらないことで死にかけてた並行世界の衛宮士郎たちの記憶が頭をよぎった。

彼女たちのこと逆鱗に触れたバカどもには鉄槌が下った。

セイバーに宝具^劔で切られたり、遠坂にガンドに打たれたり、黒サクラ化した間桐にポコポコにされたり、その他諸々の理由でその記憶は当事者でなくとも確実にトラウマとして刻まれている。

当事者だつて処刑よりも怖かつたということが記憶^{トラウマ}である証拠だ。

それが、自分自身に向けられていることは今まで行動のどこかに彼女を惚れさせた何かがあつたと諦めよう。

「……」

俺はダンマリを決め込むという結論に落ち着いた。

間違いなく、エリカは嫉妬している。

そんな状況で何を言つても女が話を聞いてくれないのは、経験^{しつてい}済みだ。

しかし、この状況で他世界の衛宮士郎たちが気づけないことに気づけたはいいが、間^が悪^{かつた}。

「先輩……なんで黙っているんですか……？」

後門まとうさくらに鬼がいたことを……

前述……結果、俺のダンマリは失敗した。

もともと話してはいなかった、間桐との会話を根掘り葉掘りエリカに暴かれ、俺の精神はその日最低へと落ち込んだ。

『結かテキには成功シタカラ良いロー』

オグドモンとの会話は無かったことになったが、エリカと間桐のは俺とどちらが仲が良いかという言い争いへと発展……したらしい。

その頃には、俺はもう二人にはついていけなくなり、話を聞くどころか二人の圧力にただ頷くだけであった。

これはもう二度と思ひ出したくないほどのトラウマとなり、もう二度と人前でオグドモンとの会話をしないと心に決めることとなった。

今は遠き日の記憶『怠惰』の夢

「しろー、だいじょうぶ？」

しろーがおししよおーサマになぐられた。

いつものビンタじゃない。

『ぐー』だ。

てをにぎっておもいつきりなぐったんだ。

おししよおーサマはしろーをなぐったときにないていた。なんでないいたんだろ

う？

しろーはみんなをまもつただけなのに……

しろーはきおくをみておちこんでる。

なんかいわないと……

「貴方ね……ユピテルモンの顔に泥を塗った人間って……!!!」

そんなとき、ぼくたちのうしろにきれいなおんなのひとがあらわれた。
べつのぼくのきおくがこのひとをキケンだつていつてる。

「しろー!!!」

「ファスコモン!!!」

しろーはぼくのこえをきいて『デジヴァイス』をとりだそうとした。

・・・だけど、

『ダメよ・・・取り出さないで』

こえがきこえた。

そのこえはたたかおうとするきもちをぜんぶけした。

それがわかったのは、こえをきいたすうびようご・・・さつきたたかったユピテルモンとひかくするのはおこがましいぐらいこわくなった。

しろーはまだからだがうごいていない。

かのじよはしろーにちかづいていく。

「しろーっ逃げてー!!!」

ハネをひろげてぼくはしろーとおんなのあいだにはいろうとしたけど、おんなのひとのかたにのっているとりがぼくのじやまをした。

とりがぼくのからだをおさえつけると、ものすごくしあわせのようなきもちになった。

・・・でも、それいじょうにしろーがころされるほうがこわかった。

もがいても、もがいても、とりはからだをはなしてくれない。

そのあいだにおんなのひとがしろーにちかづいていく。

しろーはようやくうごきだしたけどおんなのひとはもうしろーのめのまえだった。

おんなのひとのこえは『ころしたい』ってきもちをすべてこわしてしまふから、しろーもこうげきするきもちにまだなつてない。

おんなのひとはにげようとしたしろーかたをつかんだ。

「めんなさい」

「えっ?!」

ぼくとしろーはおんなのひとのことばにおどろいた。

「な・・・なんで・・・?」

てきのはずのデジモンがいったとおもえなかつた。

おんなのひとはむねにてをおいて、しろーにもういつかいあやまつた。

「私の名前は『ウエヌスモン』」

「一応、先程襲撃してきたユピテルモンがトップにたつ『オリンポス』の十二神いる神の一人です」

やっぱりてきなんだこのひとは……でも、どうしてあやまつたりしたんだろう？

しろうもそこがきもんだとおもつてるようなきがした。だつて、まだにげるたいせいをとつているから。

「もともと私たちオリンポスは、ユピテルモンを中心とした勢力だけど、今回の件に関しては一枚岩というわけにはいかなかったの」

「一枚岩……？」

しろうがきになったのかくちにだした。

でも……いちまいいわつてなに……？

「そう……一枚岩……もともとは人間の手など借りずとも自分たちだけで世界を守れると言った『ユピテルモン』や『ネプトウーンモン』、ユピテルモンの意見に賛同する『ユノモン』や、所属している何人かの戦闘狂の神々やデジモンたちと、人間側……つまり貴方を助けようと考えた『メルバモン』や『メルクリモン』、もともとデジモンたちの争いが嫌いな『私』^{ウエヌスモン}や『ケレスモン』、いつも中立だったり、今回の件は流石に危険過ぎると判断した『バッカスモン』や『アポロモン』、『ダイアナモン』など他にもたくさん。デジモンが賛同してくれたのだけど、それが数ヶ月にわたって行われた結果、ユピテルモンが中心となった『過激派』と、ケレスモンが中心となった『穏健派』に別れて

しまったことにより……」

「最終的に言い争いをして意味はないと結論づけた『過激派』のユピテルモンがここに襲撃を仕掛けてきた……というのですか？」

かおがあおくなつていくウエヌスモンのことばを、しろーが続けた。

ウエヌスモンはなにもいわなかったけど、ゆつくりとあたまをたてにふったから、しろーのいったことがたまたまいりかいできたんだ。

「こうして謝つたのは、ユピテルモンの襲撃に関しては我々オリンポスの失態だからです……この戦いが終わり次第、何かしらの代償を受ける所存だと……決してトップの始末をつけに来たのではないと理解して欲しいからです」

しろーはあたまをかいてひっしになやんでる。

いままでしつばいはなかったけど、しろーがしつばいしたらまわりにたくさんのきけんがおこることをしろーはしっているから……

……. だけど、

「だいたいよーぶだよ、しろー」。

そのひとはたぶんしんよーできるとおもう」

ぼくにはなんとなく、このひとはうそをついてないことがわかった。

だって、ぼくをりようするひとはうそつきがおおかつたから、なんとなくこのひとはうそつきじゃないんだってわかつたんだ。

それに、しろーはたいだツミのノつるキぎをクみたらまいかいしんろー（？）になやんでるって、ほかのデジモンたちもいつてたし、これいじよーなやんでるしろーはみたくないから……

「……そつか、ファスコモンがそういうのならわかつたよ」

しろーはさつきとちがった、いつものしろーにもどった。

じゃあ、こんどはしろーをホメよう。しろーはすごいんだっていつて、しろーがなやんでるのをやめさせよー!!!

「でも、しろーすごいかったよね。『きおく』でみたバンチョーさんみたいにてからぶわつとでて、バンつてなぐつておいかえしたもんね」

そのとき、ぼくはまちがえたことがわかった。

「しろーをげんきづけられないかなっておもっていったことばは、しろーがわすれていたことをおもいださせたということ．．．．

「そうだな．．．案外やろうと思えば簡単なことだったよ」

しろーはわらってそういった。

しろーはたてまえでそういった。

しろーはわらってはいたけど、ほんとーはつらかったのは、しろーになにもできないぼくでもりかいすることはできた。

「シロウ君だったかしら．．．ちよつとごめんね．．．．」

ウエヌスモンがしろーのかおがくらくらくなったのにきづいたのか、しろーにちかづいて．．．．あー、しろーのあたまにゆびをおいた!!!

ゆびがひかかったりはじめたら、少しずつだけウエヌスモンのかおいろがわるくなつていった。

「．．．えつ、えつとなんですか．．．これ？」

しろーはウエヌスモンのふんいきにきづいていないから、ゆびからひかりがでてい
ることにあせている。

ひかりはゴフンくらいつづいたけど、ウエヌスモンはひかりがきえたときにものすご
くつらそーなかおをしたんだ。

「・・・そう・・・だから、頬が赤くなっていたのね・・・」

「テメエ・・・俺の記憶を読んだな・・・!?」

しろーはいっきにけいかいした。

きおくをよんだ?・・・さっきあたまにゆびをおいたときによんだのかな・・・で
もそののながこまるんだろー?

「ええ・・・少し悪いとは思ったけど、状況把握のために・・・それと、軽い気持ちでこ
んなことをしてしまったことに関しては、後悔しています。人にはそれぞれ知られたく
ないことだつてあるでしょうに・・・」

そのあと、『やはり、いつも通りにはいかないわね・・・』といったのはかのじよなり
のりゆうがあつたからなのかな?

それに、しろーもけいかいはしてるけど、あんまりおこつてないみたい。

「まあいいさ．．．それなら俺の相談にのつてくれ。こいつじゃあんまり期待した意見と
かもらえなさそうだからな」

そういつてぼくのあたまをぼんぼんとたたいた。

「なにをー!!」

ぼくのこーぎをしろーはわらった。

でも、そのかおのうらでしろーがつかいつていつてるのをぼくはしつてるから．．．

「なあ、あんた神さまなんだろ．．．『オレ』はどうすればよかったんだ？」

しろーはウエヌスモンになにかをきいた。

ウエヌスモンはうーんとかんがえている。

やつぱり、しろーのかんがえていることはむずかしいことなのかな？

「やつぱり、『アナタ』はきつと最後には処刑されていたと思うわ」

しろーはまだくらいかおだった。

しよけーってなんだろう？

ぼくにはわからないけど、きつとしろーのきおくのさいごにみたなわのことかなー？

「同族を身勝手な理由で殺しておいて、俺が世界から殺されない理由にはならないか」

そのかおはきらいだ。

なんとなくそうおもった。

しろーのいままでしたかおのなかで、いちばんきらいだった。

しろーはころされないなんていつてるから、たぶんしよけーってころされることなんだろう。

しろーはころされることがいやなのかな？

・・・だったら、

「だったら、この世界ですつと暮らせばいいんだよ!!!

そうすれば、しろーもみんなといっしょにいられるし、ころされることなんてないよ、

きつと……!!!」

「だって、しろーはえーゆるになるんだもん。

あつちのせかいでころされるんだったら、ずっとデジタルワールドでくらせばいいんだ。みんなだつてうけいれてくれるよ。

それに、たいだツミノキのつるぎキでみたばんちよーだつて、デジタルワールドでいきてたもん。それなら、しろーがいきられないりゆうにはならないはずだよ!!!」

ぼくはずつとかんがえてた。

たぶんこのたたかいがおわつたら、しろーはあつちにかえつちやうんじやないかって。ずっと、しろーやバケモン、オタマモンやルーチェモン、みんなみんなずっとくらせていけないんじゃないかって。

だから、これはただの『ユメ』だ。

でも、くちにだすならおーけーだとおもうんだ。

ふたりはめをしろくろさせた。

おどろいてるみたいだ。

どーだ、しろー。ぼくだつてしつかりとしろーにいけんをいうことだつてできるんだ

ひひ・・・ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ・・・ああ、腹がよじれる」

しろーはとつぜんわらったんだ。

「しろー、どうしたの？」

しろーはぼくをやさしくなでたんだ。

「いや、バカなこと考えてたんだって思ってたき・・・ありがとうファスコモン、ウエヌスモン。いろいろと考えはまとまってるけど、なんかスツキリした」

なんかしらないけど、ぼくの『ユメ』でなんかげんきになった。

でも、しろーがげんきならそれでいっかってそうおもったんだ。

第四話 実験の過程と遅れて来た彼女

実験場・・・『デジタルシフト』化された空間で二人は小さく言った。

「『夢幻召喚』」

急激な光により、二人の姿は変化した。

「『降臨者 イーター・アダム』」

一人は全身に鋼色の触手を纏わせる。

光沢は幻想的であるものの、どこか嫌悪感を覚える見た目であったが、カードを使った当人には多少の後悔の念と、これからの実験に向ける固い意思が見られる。

「『魔術師 ケルビモン (善)』」

もう一人の青年：・タクミは白とピンクのファンシーな見た目の着ぐるみに顔：・・・というよりも、口の部分に大きな切れ目ができており、青年の顔が出せるような仕組みになっている。

しかし一人目の青年・・・アラタとは違い、この姿に全幅の信頼を寄せ、この姿で戦

うことを誇りに思っていた。

それでは、始めてください。

そのアナウンスが聞こえたと同時に青年二人は前に出た。

「まずは、小手調べから行かせてもらおうぜ!!!」

『力の渴望』

彼は彼自身の攻撃力を上げ、触手を使ってタクミをしめあげようとする。

「……こつちだつて」

『ホーリーライトーイー』

タクミの手をを中心に光の塊ができ、触手に向かって放たれる。

触手は強力な光に押され、明後日の方向へとそのまま飛んで行ってしまふ。

そしてそのままアラタへと命中するところであつたが……

「負けるか!!!」

アラタの方ももう一方の手の触手を大きく広げ、攻撃自体をバグ化……弱くなつた

光を地面に叩きつける。

『マツハ・ラツシユイー』

「おっツ!!」

その隙を見たタクミは攻撃し、それに反応しようとしたアラタ・・・攻撃をくらってしまう。

「捕まえたぜ」

『テクスチャー・ブロウ』

「は?!」

触手を通じて送り込まれたウィルスは少しずつ力の根源である服を侵食していく。

「・・・くっ!!! 『ドットリカバリー』」

並行世界ではすぐに使えなかった回復アイテムであるが、この世界ではデジモン^{パートナー}ではなく、当人同士での戦いである為にタイムラグは少なかった。

タクミは彼のカードに対して疑問を抱いた。

「なんでって顔だな・・・俺が作ったのは『イーター』のカードそのものだ。当然他の『イーター』の技も使うことができる・・・それじゃ、オタクもを溜めおいたよな・・・」

「ッ!!!」
その会話自体も力を溜める時間稼ぎであったのだが、どうやら二人とも同じ考えに至っていたらしい。

「負けない……『ヘブンズ・ジャッジメント』」

「それじゃ、終わりだ……『インタラプトバンドラー』」

二人はために溜めた力を一気に解放しようとした。

しかし、それは唐突に起こった。

「……は……？」

力を解放しようとした途端、二人は元の姿に戻ってしまった。

当然、技は発動せず、溜めていた力も霧散し、残ったのはアホ面晒した二人の青年と二枚のカード。

「技の出力オーバーです。」

タクミさんにアラタさん、わざわざ究極体クラスの『必殺技』を発動しないでください」

淡々と述べられてはいるものの、背後には般若がいると二人は判断した。

「その・・・勢いあまつてつい」

アラタ失言である。

「勢いあまつて・・・つい・・・そんなことで計測器壊さないでくれませんか・・・」

その言葉は般若の怒りを助長させ、怒気を通り越して殺気まで感じるほど、悠子は怒っていた。

「すみませんでした!!!」

この殺気を受け、二人は遅れながらの謝罪・・・しかし、というよりも当然彼女の怒りは収まらなかった。

彼女はこの実験のために、ここ数日徹夜していた。

父親から任命されたこの仕事を一生懸命にやってはいたのだが、他^{へいこうせかい}世界の記憶がない他の重鎮に対し、この実験の説明や対応に追われ、ようやく許可が降りた実験であったものの、計測器が壊れるという事件が発生・・・このことで再び、重鎮達への対応は確定してしまったのである。

「へえ……今さら謝つても遅いんですよ……二人は減給および、雑よ……というよりも、今後の私の仕事を手伝ってもらいましょうか」
こきつかわれることを理解した二人。

「……………はい……………」

しかし、彼女の般若のような顔には反論するすべもなかった。

同時刻、暗い夜道を一人、慎二は歩いていた。

「……………ようやく……………ようやくだ」

なんどもそう言いながら歩いている。

周囲の人間が奇異の視線を送っているにもかかわらず……………

普段の彼であるならば、このような不可思議な行動は決してとらない。しかし、それ以上に彼自身を高揚させることが起こった。

かなりぎりぎりだったけど裏どりも取ることができた。

そのおかげでようやく慎二の行動の意味を理解した。

『昼まは、アヤうく、バレそうに成っていた癖によ……』

意外と慎二は警戒心が強く、数回、俺の尾行がバレそうになったりと、並行世界では考えられないような進歩もこの世界では起きている。

『……デモよ、コレジョーちゃんに伝えラレナイダロ』

（ああ、そうだな）

オグドモンの言葉通り、間桐には伝えることができなさそうだ。

裏どりをした結果……やはりこれは間桐本人に行ってもらうしかないか……

「少し、アプローチを変えてみるか……はあ」

手元の資料とともにローブを脱いで、今後の予定を確認しようと、尾行前に切った携帯の電源を入れると……

「は……どういことだ?!」

百を超える……とまではいかないが、留守番電話のメッセージとメールだけでも相当な数の通知があり、それはそれで驚いたものの内容を見た瞬間、つい声を出してしまった。

「うちの風呂が壊れた?! ……いや、そうじゃなくて、それでルヴィアさんちの人に厄介になって……って、えっ俺の風呂どうするのさ?! もう十二時半だよ!!! 決行明日だよ!!!」

……その日は結局ホテルに泊まってしまった。

男一人で泊まるようなホテルではないところで……

もともと、バイト先でよく泊まっていたこともあって、ホテルで泊まったことはバレてはいないが、今まで泊まるときには連絡を入れていたので、そのぶんの説教を次の日の朝に受けるはめになるだろうとその時は思っていた。

「……今日でよかったですよね」

今日は木曜日……と言っても夕方や夜ではない、昼まである。健全な少年少女であ

るならばしつかりと学校へと行っている時間である。しかし、彼女には学校を休んでも行かなければいけない理由があった。

(今朝の書き置き・・・先輩の文字で今日の十二時半に駅前まで来てくれつつ書いてあったけど、先輩はまだ来てないかな・・・)

現在十二時四十五分。

先輩に呼び出されたけど・・・先輩はまだ来ない。

すると・・・ひとりの女性が私の私の前に現れた。

「・・・君が、『間桐桜』ちゃんではないのかな？」

第五話 チケットの意味と『シンジ』

・・・どうしてこうなっただらう？

「ねえ、あなたはジミケンのどこが好きなの？」

「ジミケンのに歌の歌詞の内容で何が好き？」

「ジミケンのさあ・・・歌って・・・？」

「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」

「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」

「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」

「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」

「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」

「ねえ？」「ねえ？」「ねえ？」

これが、一時間前・・・初めて会った瞬間からずっと続いています。

このチケットをもらってから、『ジミイKEN』について多少なりとも調べていました。しかし、これほどのコアなファンだとは思いませんでした。

チケットの席の確認とか言われてチケット見せましたが、驚いてました。それほどすごいものを兄さんはなぜ先輩に渡したんでしょうか？

チケットを見て驚いた彼女はファンとしてすごいと思いますが……
たしかに先輩からは多少……と聞いていました。

……先輩にはあとで、なにか貰わないと割に会いませんね。

そうして、少しずつ曖昧な答えを続けていると藤咲さんは少し目を細めてこちらを見ました。

「貴女、やっぱりジミケンのファンじゃなかったんだね」

は？……この人は今何と言った？

「えつと……知っていたんですか？」

「うん、ごめんね……衛宮くんには聞いていたけど、やっぱり信用できなかったんだよね……最近ジミケン売れ始めているから、今までの質問でメジャーなものばかりだったらただのミーハーだって切って捨ててたかもしれない」

……えつとそこまで私、危ない橋渡ってたんですか!?

「質問の途中で見せてもらったチケットだって、初期のファンにしか配られていないも

のだったし……衛宮くんはこのチケット渡したのはだれ？」

しやうがなく私はこれまでの経緯を簡潔に話すことになってしまった。

「ふーん、兄さん……兄さん……ね」

洗いざらい事情をはがされ、私自身がただネットで調べただけの素人であることが彼女に知られてしまった。

先程の目から考えると、かなりミーハーを嫌っているために、これからなにをされるかわからない。

「確か……間桐……間桐つて……シー君の……もしかして、シー君……慎二君の妹さん!？」

えつと……どうやら、藤咲さんは兄さんのことを知っているみたいですね。

……兄さんのことを知っている!？」

「兄さんのことを知っているんですか!？」

「あ……そういえば、シー君から『妹が知ったとしても、なんにも言わないでくれ』って頼まれていたんだっけ……悪いけど、実際にシー君……慎二君を見てからにしてくれないかな」

彼女は思い出したようにそう言った。

その後、私が何度聞こうとも決してそのことには触れてこなかった。

周囲の音が聞こえなくなってきた。

それに引き換え、心臓の音がどんどん大きくなってきやがる。

「柄にもなく緊張してんのかよ、俺は」

いつもとは違う弱気な声。

手は震え汗が滲み、心臓は未だにドクンツ……ドクンツ……となり続けた。

周囲の声が大きくなったことに気づくが、今はそれどころじゃない。

「……ようやくだなあ、シンジイ!!!」

すると、突然ジミイさんに声をかけられる。

先程、周囲の声が大きくなったのも、派手なメイクをしたジミイさんが現れたからな

のだと納得した。

メイク前とは比べものにならないぐらいの迫力・・・何度も見ているが、これには毎回驚かされる。

「そ・・・そう、ですね、ジミイ・・・さん」

声を出そうにも喉が震えて声が出ない。

それが恥ずかしくなり、救ってくれた彼の前から逃げたくなる。

「なんだ、柄にもねえくせに緊張してんのか・・・ちよつと付いて来い」

ジミイさんは俺の腕を掴んで、壇上へと連れて行つた。

「まだ、人は来てねえが・・・あと三時間ほどすれば、ここが藁人形ファアどもでいっぱいになる」

真剣に彼は言う。

「俺も初めては緊張してるし、今回も緊張している」

メイク後に打ち合わせがあると言うのに、俺に面倒をかけてくれる。

「だがな、これはお前のスタートでもあるんだぜ」

彼はそれほどにこのライブを・・・俺を大事に思っているのだ。

「ここからは『俺』・・・この『ジミケン』様がついてんだ。安心して、俺の横に立つ

てろ!!!」

ストン・・・と緊張感がなくなり、俺の中から簡潔に一つ・・・この人の隣なら安心して『弾ける』という気持ちが残った。

「わかりました!!!」

「テメエは心配しすぎだ・・・テメエも誘ったやつ何人かいるんだろ・・・そいつに恥を見せてどうすんだ？」

そういや、衛宮を誘ったが・・・あいつのことだ結局来ないだろう。

だが、来た時に恥を見せるとなると、なんか怒りが湧いてくるな・・・

俺の怒りを感じ取ったのか、ジミイさんは『そのいきだ』・・・と言い肩を叩いた。

「ジミケン君、そろそろ最後の打ち合わせ始めるよ!!!」

「はいっ・・・わかりました。」

「テメエもさっさと行って来い・・・会議終わったら、リハだからな!!!」

『藁人形たちイ・・・俺様の『悪魔巡礼』の始まり、冬木市へようこそ!!!』

「「「キヤアアアアアアアアアア!!!」」」

それから、三時間のときは進んだ。

ライブの中心で、マイク片手に颯爽と登場したジミイさん。

『俺様の『悪魔巡礼』に来た藁人形たちなら知らないおバカさんはいないとは思いますが紹介しとくぜエ・・・』ユウジョン!!!』

『ユウジョン』さんのベースが会場中に鳴り響いた。

俺の体にはすでに鳥肌が立っており、あのとなりに立つことに違和感さえ覚える。

『NEXTはアー『オールSozi』イ!!!』

ジミイさんの声の残響を打ち消すように響くシンバルの音から始まり、次から次へとドラムを叩く技術は惚れ惚れとしてしまった。

二人の姿と俺の手はあまりにもかけ離れていたが・・・突如として場の雰囲気が変わったことに気がついた。

『藁人形たちイ・・・俺様の『悪魔巡礼』の始まり、冬木市へようこそ!!!』

藤咲さんは私を会場へと連れてきたのですが、ライブが始まってから兄さんの姿は発見できません。

「藤咲さん、本当に兄さんはここにいないんですか？」

兄さんの姿がどこにも見当たりませんが・・・」

「大丈夫だよ・・・絶対に見れると思うから・・・ツキヤアアアアアアアア、ユウジョーー!!!」

ベースの演奏の最中に聞くものの藤咲さんは私の話を聞かずに、ライブを楽しんでいる。

そして、ベースとドラムの演奏が終わってしまいました。

しかし、紹介後の歌が流れることはありませんでした。

ジミイKenの背後の画面から、ひとりの濃いメイクをしたひとりのギタリストが映し出されます。

『・・・ギター『ボーンJin』が手首の粉砕骨折で居なくなつて半年が過ぎた。俺たちは悩み苦しみながらも、ライブを続けた』

ジミイKenがマイクを握って、少し躊躇いがちながらも話し始めました。

『ボーンJin』という青年について、一部のファン以外は、それを知っているようでした。

『俺はあいつが二度と持たなくなつたギターの代わりに、この半年間エアギターを藁人形どもに見せ続けてきた・・・そして、俺たちは有名になつた・・・一部のファンはこのバンドにギターを弾く者が居たということすら知らないものが居たほどにだ!!!』
ジミケンは一部のファンが彼を知らないことに気づいていたのだろう。それに対して、さまざまな感情を持ちつつもこの場で言うことを決意したのでしよう。

『もはや・・・恒例となつてしまつた俺のエアギター、しかし今日・・・!!!』

『俺たちに新しいギタリストがメンバー入りすることになつた!!!』

ファンはほとんど知らないようでぎわめきが大きくなつた。

しかしその一言で、ファンの数名がピクリと肩を鳴らした。
藤咲さんも含めて。

『現れる新メンバー・・・『ウイストS i i i i i n n n n n t t t t t!!!』』

そして煙幕がステージを覆い、ギターが鳴り響く。

派手な音を鳴らすギターに、ファン達はざわめきよりも大きな声をあげた。なぜなら、それは『ジミイケン』のテーマを会場中に響かせたからである。

演奏の途中で少しずつ煙幕が晴れていく。

そこにたったひとりの見たことのある少年が現れた瞬間であった。

「……………もしかして……………兄さん……………?」

派手なメイクや、いつもなら着ない殺伐とした厨二感溢れる服装……………しかし、背丈や髪、体型を見る限り、『間桐慎二』その人であった。

「うん……………シー君だよ」

彼女の一言で私の兄さんだということは確定した。

「でも……………どうして……………?!」

「それは……………私から伝えようかな……………」

藤咲さんは懐かしそうに話し始める。

「四年前ぐらいだったかな……………ジミケンがまだ売れるどころか有名じゃなかった頃だよ。

私はその頃からジミケンのファンだったんだけど……ある日、たった一人の少年がジミケンの路上ライブを座って見てたんだ」

四年前……そういえば、兄さんが朝早くに急に飛び出していったことがあった。学校にも行つてなくて、小学生ながらに、夜に兄さんの友人達に電話をかけて聞いて回つたり、探したりしたのを覚えている。

結局夜遅くに帰つてきたのだけれど、兄さんが夜遅くに帰つて来るようになったのもそれが始まりだったかな……

『ねえ……どうしたの』つて聞くと、半泣きの癖に『うるさい』つて大きな声で返されたのが始まりだったかな……」

「そんなところを見たジミケンが私とシー君に声をかけて彼の話を聞いたんだ……『俺が継ぐはずだったのに』とか『俺は何を目指せばいいんだよ』とか言つてたんだよね」
私はわかつてしまった。

兄さんは中学にあがるまでに必死で、間桐の当主になる努力をしていた……しかし、私が引き取られた理由は兄さんに魔術の才能が全くと言つていいほどなかったため、それを知ったのがたぶん四年前だったのだろう。

兄さんはその時にジミケンに出逢つたのだ。

「その時にジミケンがシー君にギターを持たせてね……『だったらテメエでやりたいこ

とを見つければいい・・・俺は毎週ここにいるから、ギター弾きたきやここに来い」って言ったんだ。その時のジミケン、かつこよかったな」

そう言って悶える藤咲さん。けれど、兄さんがジミケンと出会いは知ったけど、なぜあそこに立っているのが説明されていない。

「すみません、はやく教えてくれませんか？」

兄さんはなぜステージに立って演奏をしているんです」

うーんと少し悩むも『わかった』と彼女は言った。

「その後からね、毎週シー君は路上でライブするジミケンのところに来ていたんだ・・・少しづつメンバーも増えて言ったんだけど・・・さっきジミケンが言ってたボンジー・・・『ボンジー』って人が八カ月ぐらい前に事故にあつたの。」

その人がもともとギターだったんだけど、事故のせいで手はボロボロ、今までのようにはギターを弾けなくなったんだ。それでも、色々と後押しがあつて、復帰したんだけど、ギターの枠を埋めるために、昔からのファンだったシー君にジミケンさんが頼みに行ったの・・・もちろんシー君は受け入れたんだけど、全盛期のボンジーさんよりはうまくなかったんだ・・・それでも、趣味だったギターを必死に練習し始めて、ここ半年間弓道や女遊びをやめて、ずっとジミケン達のとりに立てるように頑張ってたんだ」

『シー君の友人だった私や昔からのファンの人は知ってるけどね』と彼女は言った。

その時、兄さんが買った高い買い物は、ギターだったことに初めて気づくことができた。

『ウイストはまだ足りねえ部分もあるとは思うが、ここでこいつとともに始まる新たな俺たちのために・・・新曲を披露しようと思っっている』

ジミケンさんが兄さんの紹介を終わらせる。

『いくぜ、新曲『刹那いハミングバード』!!!』

それと同時に曲が始まる。

「見てよ・・・これがシー君が頑張った結果だよ」

ベースやドラムの技術は高い・・・しかし、その中でも確かに霞まずギターの音が鳴り響いた。

「これが・・・兄さんだったんですね」

第六話 『告白』

夕方、一人の少年がコンサート会場前のベンチに座っていた。

「……もうそろそろのはずだが……」

私は時計を見ている少年の背後から少しずつ、近づいていく。

「……桜か？」

背後、数メートルの間がある私に気がついた先輩。

「えへへ……バレちゃいましたか？」

「ここにいるってことは、見に行つたんだな……ライブ」

照れ顔の私を無視して、先輩はそう言った。

「ええ……行きましたよ、兄さんがステージの上でギターを弾いてました。私はよくわからないジャンルでしたので、少し戸惑いましたが、逆に兄さんらしいな……と思いますね」

先輩は『兄さんらしい？』と疑問に思つたようです。

「昔の兄さんは間桐の……うちの家業を継ぐために努力をしていました。それが、中学

生の頃あたりから夜遊びに変わったんです。

そのときは驚きましたし、心配もしました

ですが、先程兄さんがステージの上でギターを弾いているときに、兄さん自身が本当にやりたいことが見つかったんだなって、そんなふうに思えたんです」

夕陽に染まる空。

先輩はゆっくりと、私の方を向きました。

「先輩は……私と初めて会った時のことを覚えていますか？」

「……弓道の大会が初めてじゃなかったか？」

その言葉に首を傾げながら言う先輩。

「……違いますよ」

やはり覚えていないのかと思ってしまう。

しかし、覚えてないのも当然と半分で思っていたので、それほど悲しくはなかった。

『それより前に会っていたのか？』と先輩は言いました。

「少し……昔のことです。」

兄さんが初めて家出をした時、私は兄さんが心配で、兄さんの友人に電話を掛け続けました。しかし兄さんもあの性格ですから、とりついでももらってもまともに相手はしてもらえませんでした」

必死に探していたあの夜。

兄さんの友人やクラスメイトにかけても、一向に居場所がわからなかったときでした。

「そんなとき……たった一人、兄さんを『探してくやる』と言ったクラスメイトがいてくれたのです」

「……あつ!?!」

先輩はそこまで聞いて、ようやく思い出してきたようです。

その日だけ、家族に断りを入れてまで、夜遅くまで必死に探してくれた兄さんのクラスメイト。

「結局、朝方になってから兄さんは帰ってきました」。

兄さんが帰ってきたあとに電話をいれると、そのクラスメイトさんは私からの電話を勘違いして、兄さんがまだ見つからないと思って、心配して探しに行こうとしていたんです」

朝方に迷惑だろうと思ってかけた電話であったが、兄さんのために必死になって探してくれたクラスメイトさん。私は拙い説明でクラスメイトさんに誤解させてしまった。

なんとか誤解は解けたけど、それでも電話越しに許してくれたその人はとても優しい人だと思いました。

「それが……とつても嬉しかったんです」

「ほかの人は邪険にして、まともにとりあつてくれなかつた兄さんを真剣に心配してくれて、必死になつて探してくれる人でした……その人は突然、兄さんに連れられ私たちの家に来ることになりました」

あのときは驚きました。

電話越しでしか聞かなかつた声のあの人が部屋越しにいるとわかつたんです。

「実は……初めて会つたのはそのときです。」

すぐにわかりました。だって、私は声も口調もなぜかしつかりと覚えていたんです
少し口が硬くなります。

緊張で心臓が張り裂けそうです。

だけど、私は言わなきゃいけない。

先輩をしつかりと見据えて……

「そのときです初めてわかりました。

その人が……先輩が好きだと言ふことに……」

思わず目をつぶつてしまいました。

……けれど、真剣にはつきりと伝えます。

「先輩……『好きです』、どうか私と付き合ってください!!!」少し時間が経ちます。手は汗が滲み、私の心臓は張り裂けそうです。そして、先輩は少し悲しそうにして……

「ごめん、桜とは付き合えない」

ふと、力が抜けました。

『どうしてですか?』……と私は口に出していました。

「好きなやつがいたんだ。」

まだ、そいつが忘れられない……悪いが、まだじゃないと思う。正確には『一生忘れられない』……が正しい」

ポロポロと涙が溢れる。

ずっと好きだった先輩に好きな人がいたなんて知らなかったからだ。

「先輩、最後の質問です。その人はどんな人何ですか?」

依頼最後の質問。

せめて、その人に近づけば先輩は私に振り向いてくれるのでしょうか?

「名も知らぬ誰かを愛し、名も知らぬ誰かのために躊躇いなく行動できるやつだったよ」
その言葉で不可能だと悟りました。

だって、私の根底にあるものは……

「あと、桜が思っているような『誰か』のは変わりになるなんてことは、絶対に許さないやつだから、たぶん俺も桜がそんなことをしてアイツのように振舞ったら許せなくなると思う」

ああ……先輩は、少しの未練も許してくれないんですね。

それでも、せめて最後は笑顔で……

「……わかりました。それでも、先輩が好きだったことは変わりありません。だから、気が変わったら声をかけてください。私待つてますから……」

日が沈んだ。

先程まで居た少女いもうとは消え、少年ゆうじんがそこに立っていた。

「慎……覗き見なんて無粋だな」

「げっ……気づいてたのかよ。」

というより、よくも俺の妹を振ってくれたな、衛宮」

タクミさんに教わった気配を隠蔽する技術が一瞬にして、バレただけど……
「ハア……妹泣いてる時点で出てこないのは、流石に酷いとは思ったが、そのまま最後まで傍観してるとは思わなかったんだ」

「ハア……なんで桜にそんなことまでしないといけない。それに、妹とはいえ他人の恋愛事情なら首を突っ込むのはお門違いだろ」

衛宮は『まあ、その通りだが』と言った。

「……というよりも、お前はライブに俺が来なかったことを文句言ってくるのかと思っていたんだが、やっぱり妹思いだなお前」

「ハアツ?! そんなことないだろ、それにそういやなんでチケット渡してないのに、あの席に桜が座ってたんだよ!? あそこお前にくれてやった席じゃねえか」

少し焦ってしまう……衛宮のくせに痛いところ付いてきやがるぜ。

「探偵のバイトの依頼で、桜にくれてやったんだよ。」

お前の帰りがさらに遅くなったから心配して事務所まできたんだよ彼女……お前が、心配で……」

どこか含みのある言い方だが、まあいいだろう。

「てか……なんでバンドやってることがわかった？」

ジミイさんに紹介されて、知る人ぞ知る有名なハッカーチーム『デモンズ』が、ガツチガチに隠蔽してたんだよあれ、お前のところどうやって知ったんだよ」

「知り合いに頼んで調べてもらったんだよ」

「そんな簡単に調べられるほど、ハッキングは楽じゃねえよッ!!」

衛宮は軽く言ったが、たぶん衛宮の知り合いにも『デモンズ』の仲間か、ジミイさんから聞いた『レジェンド』クラスのハッカーが後ろについているはずだ、それ以外にありえねえ。

しかし、心のどこかで諦めがついていた。

こいつは、絶対に話したくねえことは話さないことぐらい知っているからだ。だが、言いたいことだけは言わせてもらおう。

「なあ、衛宮・・・お前生きてて楽しいか？」

表情はあまり変わらないが、衛宮が目少しを見開いた。

凶星のようだな。

「俺さ・・・桜のやつが言ってたように間桐家のまじ・・・家業を継ぐつもりだったんだよ」

桜が言ってたように俺はあの魔術を継ぐつもりだった。

「冬木の大災害で爺さんと親父が死んでから、叔父の間桐雁夜が当主を継いでたんだが、

俺が中学生にあがる前に死んでしまつて、叔父の荷物を整理してゐる時だつたな．．．俺は有る日記を見つけたんだよ」

「間桐の家業継ぐためにはある．．．社会的に言えば全く必要のないものだつたが、それでも家業を継ぐには必要な才能があつたんだが、俺にはその才能がなかつた。

桜はとある名家からの養子でな．．．俺にはない才能が桜にはあつたらしく、当主は桜に継がせるということが、爺ジジイさんの日記には書かれてたんだ」

あの時はものすごく腹が立つたのを覚えている。

たかが才能の違いだけで、今まで俺が努力してきたことが無駄になつたことがとつても腹立たしかつた。

しかし、長男であつた俺には、当主を継ぐ権利はあつた．．．だが、資格はなかつたのだとようやく気付いたんだ。

「そのあとは走り出したよ。

行くあてもなくなつただ街をぶらついて、苦しいとか悲しいとかそれ以前に、『これから何をしていけばいいんだろう』という無力さだけが、ここにあつたんだ」

俺は心臓のあたりに指をさした。

衛宮は真剣に聞いてはくれているが、どこかまだ信じられないようなもの見る目で俺を見ていた。

「そんなとき俺は『ジミイKen』に出会った」

「駅の近くで一人でギター持って歌ってたんだよ、あの人。誰も聞いてないのに必死で歌ってさ……まるで、何をやっても意味がないなんて考えていた俺が馬鹿みたいだったよ……」

「そのあとは、サクラさん……えっと、今日俺をジミイさんのファンにしてくれた人だな、その人と話してる途中で、ジミイさんにギターを弾かせてもらったんだよ」「そうしたら……自分の世界が変わったんだ。」

俺が見ていた世界がどれほどちっぽけなものだったか、教えられたのさ……」
今思い出しても鳥肌が立つ。

あの興奮はたった一度きりだったが、俺にとっては一番嬉しかったことだったのが今でも思い出せるんだ。

「俺はジミイさんと出会って変わったからな……お前がなんで『生きてる』のかはわかんねえが、一つだけ言っておく……お前が見てる『世界』より、もつと楽しいことがこの世界にはたくさんあるんだよ……じゃあな衛宮」

俺はそう言って、衛宮の前から去って行った。

『火はハハは派刃波ハはハ、ヤーイバレてヤンノ』

「うるさい」

桜に告白されたり、慎二になんかバレてたり、なんか今日は不幸が続いている。

『西ても、アノ程度でヨカッタだろ』

「告白に関して言えば、そう思える」

昔戦ったユノモンとかいうヤンデレデジモンに苦戦した覚えがある。あの時は、ルーチエモンがトドメを刺したんだっけ？

どちらにしても、もう恋だの愛だのにはこりごりだ。

「それに慎二にバレてたのも厄介だったよなあ」

『てメエハ、トアル目的ガあつて『生きる』ジャ無くて、『生きる』コトが目的だもんな』

オグドモンの言った通りだ。

本当に俺は……俺たちはこの世界が嫌いだ。

「……なんか、まだ嫌な予感がする」

時間は午後八時前だというのに玄関からとつともなく嫌な予感がした。

玄関に置いてあるアイリさんの車。

また、ボロボロになっているが、荒い運転でもしたのだろうとドアを開けると……

「おつかえりー、おにいーちゃん!!!」

突然、白黒の塊がぶつかってきた。

勢いよくぶつかってきたそれにより、玄関の地面に倒れゴンつと頭を打ち付けてしま
う。

「あつ!?クロだけズルイ!!!」

「残念でした、早い者勝ちよイリヤ!!!」

「ちよつとシロウ!?奥様、シロウがどうやら頭打ち付けてしまっています!!!」

「あらあら」

薄れゆく意識の中……

（『不幸だ(ダ)』）

どこかの主人公よろしく、俺とオグドモンの意識が重なった。

今は遠き日の記憶 『強欲』が欲したもの

沢山の民が死んだ。

並行世界の儂は
バルバモンは嘆いていた。

デジタルワールド
『この世界が憎い。』

なぜ・・・なぜ我らの同胞が・・・人工卵デジモンが死なねばならない・・・なぜ、死ななければならなかったのだ、イグドラシルよ!!!』

かつての儂とイグドラシルは契約を結び、共に同じ生命体として生きていくことを決めた。

そのために、同じ志を持つ同志達とともに同胞達を殺し、世界の革新を続け、ようやく・・・ようやく『NEO』が完成する・・・というところで、儂は滅んだ。

ツミノキオク
強欲の剣を見た儂ならば『並行世界の儂』自身の想いも受け継いだ。

しかし、彼にはもう叶えたい願いなどなかった。

・・・だって、

「・・・いくのじやろ」

「行ってくるよ、フアントモン」

こんなにも士郎コヤツが幸せそうにしていたのじゃから……

『……なあ、師匠』

『なにかしら、シロウ？』

『俺さ……決めたことがあるんだ』

『へえ、なにかしら？』

『俺、デジタルワールドに残るよ』

『……バカじゃないの?!』

『心外だな……こんなにも必死になって考えたっていうのにさ』

『……あなたの世界には、あなたの居場所があるんでしょ……その人たちに迷惑がかかるとは思わないの?』

『あいにくと、俺があつた世界に戻ったら処刑されるらしいんでな……たとえば家族がいようとも、わざわざそんな場所には戻りたくは無いのさ』

『……処刑ってどういうこと?』

『うーんと、どこから話したらいいかわからないが、俺の体の中には、俺を引き取ってくれた人たちが埋め込んだ特別な……デジヴァイスみたいなものが入ってるんだが……』

それによつて俺はこの前話した『投影魔術』つてのが使えるようになったんだった。ただどき、その奥の手はあちらの世界でも珍しいものだったから、裏の世界の奴らが欲しがつて、よくてホルマリン漬け、悪くてそれを抜き取られて殺されるらしい』

『・・・なっ!?!』

『並行世界の俺はその力を使つて、より多くの人を助けて回つていたんだが、その結果救えなかつた奴らや、結果的に殺す羽目になつた奴らがいてさ』

『・・・まさか?』

『そのせいで、処刑された・・・ま、それが一番の理由じゃないけど』

『・・・殺されるつていうのにな?』

『そう・・・殺されるつていうのにさ・・・俺はその事実を知つても最初の頃は帰りたいかた・・・だけど・・・』

『・・・大丈夫、手・・・震えてるわよ?』

『大丈夫、大丈夫・・・ちよつと緊張してるだけだから』

『・・・何よ、そんなにじつと見て』

『俺が一番残りたい理由はさ、師匠・・・いや、『ノワール』』

『あんたが好きだからだよ』

『……は、そんなこと知ってるわよ。で、それがどうかしたの?』

『いや……そうじゃなくて、愛してる……『LOVE』のほうだよ、ノワール』

『だから、私だつて愛してるわよ、妹も、ガンクウモンも、ハックモンも……それにあったさつきから名前で呼んでんじやないわよ、私は師匠よつ!!』

『いや……こんなにも鈍感だとは思わなかった』

『……何か言つたかしら?』

『流石に恥ずかしいが、こうするしかないか……』

『だからシロウなにつんむツ……!?』

『……バカ……』

『うわあ、やったことは仕方ないとはいえ、頬がまだヒリヒリする……それに『バカ』つて、それはあんたが鈍感で俺の『好き』を理解してくれなかったからだろ……』

『第一、私たちはデジモンと人間……種族だつて世界だつて違うのよ』

『別に……俺はもう俺自身を『人間』だとは思えないけどな』

『……わかつたわよ、それぐらい付き合つてあげるわ。あんたに生きな

ささいって無責任なことを言ったのも私だしね』

『……本当に悪いな……こんな無理矢理な告白を受け入れてもらっちゃって……』

『ふふふ、ちよつと昔を思い出しただけよ』

『昔?』

『私は私の師匠……ガンクウモンに会う前は、物語のヒロインみたいな王子様が迎えに来てくれるって思ってたのよ』

『いや、それは嘘だろ……たとえ物語の世界でも、師匠は完全に主人公、それも男の……ヒロインなんてありえないと思うぞ』

『イテツ……なんでまた殴るのさ?』

『シロウ、たとえデジモンであっても女の子は女の子……貴方は女の子達の夢をバカにしたのよ』

『そういうところが男っぽいなだよ』

『じゃあ、男みたいな私とは付き合えないわよね』

『あいにくとそういうところも好きで付き合いたいんだよ』

『……バカ』

『バカは酷いと思う』

「随分と悪趣味なことをしてるんだね」

背後を振り返る。

すると、ひとりの少年天使が儂の前に立っていた。

「ルーチェモン」

「まあ、これは見たい気持ちもわかるけれど、流石には無粋とは思わなかったの？」

手に持っていた水晶・・・その中には、先ほどの二人の会話が続けている。

「無粋じゃとは思ったのじゃが、流石にあのヘタレがどうなるのか見てみたかったといっても許してはくれないのじやろう？」

ルーチェモンはニコリと笑って・・・

『『グランドクロス』』

「ひぎゃあああああああああ!!!」

儂は攻撃を受けてしまった。

完全体に究極体並みの攻撃を与えるなんて・・・

「ハア、許すわけないだろ・・・ン？」

『本当に・・・私でいいの？』

『あんただから、好きなんだよ俺は』

「まっ・・・たしかに面白いとは思っけれど・・・」

ルーチエモンは水晶を持って・・・

「流石にこれは見逃せないかな」

地面へとたたき壊した。

第七話 新たな依頼と不穏な気配

「さあ美味しい物巡りへと行きませうか、士郎君!!!」

「いや仕事ですよ、悠子さん」

『大変だなアオイ』

現在、俺は東京へと来ていた。

事の発端は依頼から三週間……原因は二週間前に遡る。

慎二の事件が解決してから一週間。

俺にとつて平穩……とは言い難い日々が続いていた。まあ、いつも通りなのだが……あの依頼以降、間桐の話しかけてくる回数が減っていた。好きな男に振られたならば、当然とは言えるのだが……しかし、新しく家族になったクロエがうちに来たためにあまり心休まる日が来ない。

「お兄ちゃん、あーそーぼー!!!」

「クロエ……明日から期末テストなんだ。

テストが終わってから遊んでやるから、イリヤと遊んでこい」

「ええ〜!!」

そう、期末テストが明日から始まる。

小学生にはないが、一部の中高生にとっては進路が決まると言ってもいいものだ。慎二は休んでいた分の勉強に追われ、一成は予習復習しているので問題はない。俺には、『罪の剣』で得た並行世界の記憶やら、その旅路で得たイグドラシルの演算能力が裏技として残っていた。

だいたいこの範囲は理解していたが、以前の中間テストで並行世界のテストとまったく同じというわけではないが、出ている問題にはさほど変化はなかった。

しかし、裏技を使うよりも自身の力で行ったほうが、師匠ノワールにも認められるであろう。

「お兄ちゃん、携帯鳴ってるよ!!」

「わかった、すぐに行く」

クロエが邪魔をしに来たとき、もう一人の妹であるイリヤのの声がリビングから聞こえて来た。

(電話か・・・誰だろうな、オグドモン?)

基本的に、俺の仕事は終わった依頼の書類整理なので、杏子さんからテスト期間には来なくていいというお達しが来ている。だから、杏子さんやタクミさんからの仕事を頼まれることは絶対とはいかないが、かなりの確率でこないと言っている。

『アン外、溜まった書ルイをやらされるカモ知れ無いゼ』

(それは、いやだな・・・てっ、珍しいな)

『ア、!?悠子って、クイシンボウ女力!!』

(少し黙っててくれないか?)

『もしもし、神城と申しますが、そちら衛宮さんですよろしいでしょうか?』

マナーモードで揺れている携帯の通話ボタンを押すと、彼女の声が聞こえて来た。

「はい、こちら衛宮ですが何か御用でしょうか?」

『すみません、テスト期間中に電話するのも悪いとは思ったのですが・・・』

『依頼を』

彼女は一言置いてそう言った。

依頼内容としては、EDENが政府に認められて、公式に『βテスト』を行う会議するときに、東京へと向かうにあたって護衛を依頼したいとのことだ。

俺は依頼内容が周囲に聞かれるのは憚られるので、クロエとイリヤを部屋から追い出し、会話を続ける。

「護衛だけなら今まで通り、社のボディーガードを連れて行けばいいんじゃないですか

『?』

『・・・それが、EDENを売り出すにあたって、デジヴァイス・・・あなたではなく、私達の世界に存在した通勤端末を販売しようと思っていたのですが、それをよく思わない連中というのがいます・・・』

「よく思わない連中?」

『モシカして、携帯ガイシャの連チユウか?』

すると、突然オグドモンが話に割って入って来た。

「静かにしてろって言っただろ、それになんで携帯会社の人が襲撃してくるんだ」
『いえ、オグドモンのあたりです』

トイレのドアに頭を打ち付けてしまった。

「イテテ・・・それで、なんで携帯会社の人達が襲撃なんかしてくるんですか?」

『実は、EDENとデジヴァイスが普及してしまえば、ネットを通じて、世界中に繋がることができるようになるというコンセプトでやって来たのですが・・・』

あ、もしかして・・・

『・・・・・・・・それが成功したら、携帯を必要としなくなるかも知れないだからいつそのこと・・・・・・・・』

「この会議に来る娘を捕縛して、EDENの計画を潰してしまおうと……」
『そういうことです』

「それだったら、なぜ俺に連絡を？」

それならそれはやはりプロのボディガードのほうがいいのでは？」

少なくとも、自身の投影魔術は表沙汰にはできない部類の力だ。それを使ったら、危険だということは彼女がわかっているだろう。

『……それは……』

少し答えずらそうに悠子さんは唸っている。

一つ心当たりが思いついた。

「もしかして、携帯会社の連中が魔術師を雇ったとか？」

実際にはあり得ないと思うのだが、少し嫌な予感がしつつも聞いてみる。

『……はい、そうです。』

デモンズの皆さんが調べたところ、魔術師を何名か雇っているらしいです。それは、ほかのボディガードの方々には守れない可能性があったので、衛宮君に頼んでみたんですが、この依頼受けてくれますか？」

『本当ニ魔術師をやとつテイルとは……連中、馬鹿力？』

魔術師は欲に素直なところがある。

自身の欲を満たすためならば、きつと世界すら見捨てるであろう。

正直に言うところの依頼を受けるか少し迷いがある。

力がバレれば、どんなことになるかは明白であった。ユピテルモンの件を始め、たくさんさんのデジモンから危険視されたことは今でも思い出すことができる。

……だが、

「では依頼をよろしくお願いします、クライアントさん」

俺は受けることにした。

家族には知り合いと東京に行くこと伝えればいい。

『本当に受けてくれるんですね!?!』

「はい、それで日時は……?」

『ええと、確か三週間後の……』

見事に休日出勤が確定した。

まあ、バイトだから文句は言わないが……仕事が終わったら、報酬として優先してもらえようになったのはありがたいことだった。

「……おっと、すみません」

「(こちらこそ、すみませんでした)」

大柄の女性とぶつかってしまい、新幹線のチケットを落としてしまう。もう一度彼女に謝ろうと振り返るも、彼女はすでにいなかった。

「ほら、駅弁買ってきましたよ。早く食べましょうって、何やってるんですか？」
「い、いや・・・って、なんでそんな大量に買ってるんですか?!」

悠子さんは両手に三つずつ袋を抱えている。

もちろんその中には駅弁しか入っておらず、飲み物一つ入っていない。

「なんでって、それは私が食べるからですよ・・・さて、衛宮くんは好きなのをとってください。私は残りを食べますので」

一袋に三つ、これが六つあるのだ。

つまりは、彼女は17箱、自分で食べるつもりらしい。

『やっぱリクイシン坊ジャねえカ』

「食いしん坊ではありません、普通です!!」

それから、オグドモンと悠子さんの喧嘩をBGMにして食べてはいるのだが・・・

(なんだろうな・・・この不安は・・・)

先程感じた不安は、まだ俺の中に燻っていた。

「ここが、冬木市ですか」

タクシーから降りた私は手元にある写真を見ていた。

ターゲットとなる二人の少女が写っている。

一人は黒髪のツインテール、もう一人は金髪の縦ロール。どちらも魔術の名家の出身で、あの魔法使いの弟子らしい。この二人程度、協会側でなんとかしてほしいものだが、厄介なのは師が与えた礼装だということだ。

「私なら可能・・・ということですか」

封印指定を受けた私ならば、彼女たちが魔法使いから何を与えられていようと、私が正面から打ち滅ぼせる・・・そう、協会が判断したようだ。

「少々面倒ですが、手元にこれがあるならば、多少の苦戦を強いられても大丈夫ですね」
銀のケースの中にある『奥の手』。

これがあるならば、以前のサーヴァントとの戦いと同じように相手を叩きのめせる。

「さて、そろそろ時間ですね」

エーデルフェルト家の豪邸を前に私は拳を握りしめた。

第八話 パニック・襲撃・壊れた世界

「えっ……エーデルフェルト家にバゼット・フラガ・マクレミッツが現れたぞ!!!」

デモンズアジトは荒れていた。

『エーデルフェルト家』の監視の任を頼まれていた者がそう叫んだのをキツカケにデモンズアジト全体が恐慌状態になった。

「嘘……だ……!?!」

「すぐに……土郎さんに連絡を!!!」

冷静になったものが連絡係に指示を行う。

「ダメです、繋がりません!!!」

しかし、連絡できなかつたようだ。

「それじゃ、いったいどうすれば……!?!」

「……そうだ……!?!」

たった一人の言葉でとある所へと連絡が入る。

現在、昼過ぎ。

まさに嫌な予感は的中したのであった。

「……まったく、ため息が出るな」

時計を見ると、予想では悠子さんの仕事は終わりに近づいていた。

しかし、間抜けな魔術師どもがこの会場へと近づいて来るのを感じた。

(政府の役人もろともつてところが間抜けなんだよ)

路地裏に十人。

見たところ魔術師くずれの魔術使いがほとんど、二、三人ほど結構な使い手がいるが、だが魔術師の強さを鑑みて程度にしかならない……俺の姿にまだ気づいていないらしい。

赤色のローブを取り出して、身にまとった。

「……………殺すか」

「……………ツ!?!」

魔術師は驚いた。

それは自分達の間合いにいきなり、赤いローブを着た存在が現れたからだ。

デーモンのローブは姿を隠す。

デーモンがかつて使い、自らの姿を隠蔽したローブ……それは、大きな角が生えて

おり、世間では白く見られるであろうローブなんて代物を着ていたデーモンを隠蔽した。たとえ人が栄えた都市の中心にいようと、その姿や声、あまつさえそこにいたという気配さえそこにあるということさえ気付かなくさせる。

そうして俺は奴らが人避けの魔術を使う準備をしているところに逆に襲撃して、背後から三人撃ち殺した。

「・・・何者だ貴様は?！」

突然現れる敵。

それは、一瞬だが思考を停止させる。

突然の襲撃者に二人が発狂。二人は襲撃した士郎へと襲いかかってきた。しかし、ノワールの銃『アンソニー』を取り出して四人目と五人目を撃ちたおす。

「あいにくと襲撃者に語る名なんか持ち合わせていないんでね・・・とつとと死ね」
弾は鉄でいい、目の前のゴミを倒すのにわざわざ宝具など使う必要はない。五人目、六人目を撃ち殺す。ようやく動き出した手練れの一人、詠唱とともに動き出した。

しかし俺には止まって見える。

『トレス、開始《オン》』

弾は必中。

確実に命を奪うための宝具。

『刺し穿つ死棘の槍』

この程度の相手に『接続を使うまでもない。

予想通り弾は的の中、手練れの一人を撃破。

残りの三人は手を挙げています。

「なんのつもりだ？」

ボイスチェンジャーで変えた声で相手に聞く。

「私たちでは貴方に勝ち目はありません。

せめて戦う意思がないことを伝え、殺されないようにすることが最善だと他の二名にも伝えました」

たしかに、日本では警察へともう犯行の意思を持たない場合には手をあげる。

「・・・伝えた・・・か」

「『『投影《トレース》——接続』』

しかし、俺には信用できなかつた。

「・・・なッ!?!」

武器を投影するつもりはない。

俺が『接続』するのは『強欲の剣』だ。

「私たちはもう敵対する意思はありません!?!」

どうか、見逃してもらえませんか・・・私たちの雇い主の情報なら渡しますから・・・

どうか、どうか命だけは・・・!!」

「あいにくと信用できないんだ」

そう言つて騙されたのは一度や二度ではない。

それに『コレ』は憑依経験の必要はない。

『強欲の杖』
デス・ルアー

この『強欲の剣』は定着している。

「ヒッ・・・闇が・・・来るなッ!!!」

「助けて、だれか助けて!!!」

「死にたくない、死にたくない!!!」

必死に叫ぶ彼らだが、闇は既に彼らを包んでいる。

たとえこの世神であろうともこの闇には抗うことはできないだろう。

『終ワリだ、サツサト死ね』

オグドモンの声が聞こえた。

それは、紛れもなく俺の声だった。

戦闘後、公衆電話で死体を然るべき魔術機関へと処理を依頼し、ローブを脱ぎ捨てた。ローブ自体は俺の投影品ではないが、とある所へと送られる。

その後、現場から少し離れて、闇に包まれた彼らから得た情報をデモンズに連絡に連絡しようとして携帯を取ろうとする。

「……しまったな、携帯の充電が切れてる」

「そんなところで何してるんですか？」

「いや、なんでもないですよ」

どうやら会議は終わったらしい。

「それよりも早く食事に行きましょう!!!」

アラタさんやデモンズの皆さんが冬コミとやらに行った時に、穴場を調べてもらいました」

「えっ、まだ食べるんですか？ 今回の会議には、役人の方々やお偉いさんの食事があつ

たじやないですか」

悠子さんはやれやれと言った風に頭に手を当てる。

「食べていませんよ、やはり料亭などの食事には毒が入ってる可能性があります……
それにあの程度の量じゃお腹は膨れませんし……」

たぶん後者が本音なのだろう。

「そんなところにいないでさっさと食事に行きますよ!!」

「はい、わかりました」

少し彼女の言葉で報われた気がする。

だが何故だろう、嫌な予感はまだ続いていた。

『斬^フり^ラ扶^ガる^ラ戦^ラ神^クの^ク剣』

敵の時間を切り札より後に発動しながら、時間を遡り切り札発動前の敵の心臓を貫く魔剣。

それはルビーの言う通り、ライダーの宝具を使った美遊を吹き飛ばし、ライダーのカードを美遊の体から強制的に解除させた。

「……どうすれば勝てるの?」

手元にカードは既がない。

これが、クロは気絶していて、美遊もやられた。凜さんやルヴィアさんは今も屋敷の下。生きてるかどうかわからない。

「さて、次はその少女からカードを抜き取りますか」

クロが狙われた!?

戦わなきゃ・・・でも、どうやって・・・?!

「イリヤさん!? とりあえず、クロさんと一緒にイリヤさんの家まで逃げてください・・・きつと、アイリさんの助力があるはずです。そこで、一時撤退すれば勝機はあるはずです!!!」

「・・・逃げられるとは思わなくてください、それを行うと私は彼女たちがどうなってもいい・・・と考えます」

美遊の方を指差してバゼットは言った。

それは、美遊が人質に取られたと言うことだ。

「さあ、カードを持って逃げるか、戦うか選んでください」

バゼットは拳を握る。

「逃げてくださいイリヤさん!!!」

人質である以上下手なことはできません。それに、それは私の創造主であるクソジジ

イとの全面的な敵対を意味します。それをしてしまえば、魔術師たちにとっては戦争が起ころのと同義です。ここは逃げた方が得策です!!!」
「いもうとクロを連れて逃げるか・・・美遊ともを守るために残るか・・・わたし、いったいどうすれば？」

・・・バチツ
!!!!

大きな音が鳴った。

とても大きな音だった。

「なに・・・これ・・・?」

風景が変わった。

空の色が変わって、崩壊したルヴィアさんの家が所々の空から飛び出して来ている。

「どうやら・・・異常事態のようですね・・・少々悪い気もしますが、この事態の収束のためカードを回収させてもらいましょうか」

バゼットはクロに向かって走り出した。

「ダメッ!!!」

わたしはバゼットの進行方向に収束砲撃を撃ったが避けられてしまう。クロに向かって手を伸ばすバゼット。

……もうダメだ、クロがやられる。

「……やれやれ、どうやら間髪一つ髪だったようだ」

黒い騎士がバゼットの前に立っていた。

第九話 黒騎士の借り

黒の騎士……どうやら声のトーンから女性らしさがある以上彼女と定義しておこう。彼女は私が壊した屋敷や倒れている彼女たちを見て、どこか納得していた。

「ふむ、だいたい状況がわかったよ……海外から来た魔術師よ……この日の本の国で少しばかりやりすぎたのではないかい？」

彼女の片手には両刃の剣。

あれで私を吹き飛ばしたのだろう。

「生憎とこれは仕事ですから、多少の犠牲は伴わないつもりです……それと、貴女はいつたい何者ですか？彼女たちとの関係は？私の邪魔をなぜするのですか？」

彼女は剣を持たない片手を腰に当てた。

「まあ待て、質問には答えよう。しかし、そんなに聞かれても答えられるのは少しだけだ」

「では、貴女は何者ですか」

彼女はこれなら答えてもいいだろうと言った。

「私は……そうだな、魔術師をある意味で殺していることで有名なハッカーチーム『デア

モンズ』を動かしている者の一人だよ」

デモンズ・・・そういえば、かつての師であった言峰神父がこちらへと来るときに連絡したとき言っていたような気がする・・・『奴等には気をつける、骨の髄まで調べられ、暴かれる。絶対に敵対してはならない者たちだ』・・・と。

師事態が狙われたわけではありませんが、確か貴族の一部の家が根絶したのも彼らの仕業らしいと風の噂で聞いた気がする。

「それで・・・そのデモンズの幹部がなぜここにきたのですか？」

「所用・・・と言っても理解してくれなさそうだね。君たちは」

なにを戯言を・・・と言いたいところではありましたが、たち？

私は銀髪の少女の方を見ると、彼女も私と同じように彼女へと杖を向けている。

「クロを・・・妹をどうするつもりなの?！」

騎士はそう言った彼女の方へと褐色の少女を抱きかかえて近づいていく・・・その時!?

「解除」

その一言をきっかけに黒の騎士の姿から、顔は見えないが、ローブ姿の女性らしい体つき・・・やはり女性だったと確信する。

「えっ!？」

そうして、彼女は少しずつ近づいていき、銀髪の少女へと褐色の肌をした少女を渡した。

「私は彼女をどうこうするつもりはない。

だから、安心して私に任せてくれ」

「私の目的はただ一つ……君たちに伝えたいことがあったからだよ」

……彼女の伝えたいことはいったい？

「どうやら彼女も起きたようだね」

「……イ、リヤ……イリヤ!」

「クロツ!」

背後を見ると褐色の少女……クロという名前らしい。

彼女に銀髪の少女……イリヤが説明をし終わったところで、話が始まった。

「貴女、何のつもりで私達を助けたの?」

「先に私の質問に答えてもらえませんか?」

先ほどの伝えたいこととは一体なんですか?」

クロと私の質問に辟易するように彼女はフードの上から頭へと手に乗せる。

「すまないが、クロエ君だったかな……彼女を優先してもいいかな。私が君たちを助けたという疑問はそこで解消されるだろう」

「……ええ、わかったわ」

渋々といったふうにクロは言うことを聞いた。

「さて、待たせてしまったようだね」

「いえ……それでは始めてください」

私たちは得体の知れない彼女に救われた。

ローブはオリジナルのようだけど、たぶん顔はわからないと思う。

「伝えたいことと……というのは二つ。

我々デモンズはこの子のおかげで救われたから借りを返しに来たのだよ」

イリヤ……に借り？

「どういうこと!？」

イリヤがいつあんたたちみたいないな得体の知れない集団に貸しを与えたっていうの!？」

彼女は長い裾をまくり、『一枚のカード』、それも私たちが持つていない絵柄のカードのうえ、私たちの銀のカードとは違い、金色カードであった。

「……『裁定者』のカード……何故貴女はそのカードを持つているのですか!？」

筋肉女が言った。

私の……いや、イリヤも瞳孔を開いてそのカードを見ていた。きつとイリヤもその

カードに疑問を持っているのだろう。

「これは君たちが使っている『劣化』しているカードではなく、我々が独自の方法で作出した『複製品』だよ」

「劣化……複製……いったいどういうこと!!」

イリヤが叫ぶ。これは私もイリヤも、たぶんそこにいる筋肉女も疑問に思っていることだろう。

「……それは、君たちがいざれ知ることになるだろう……それとも、はやく知りたいというのならば、君の杖の製作者にでも聞いて見るといい……答えをもらえるかどうかはわからないが……」

製作者つて、ルビーを作った人のことよね……魔法使いつて言つてたけど、彼女の言い回しからきつと何か知っているのよね。

「つまり、そのカードも私が回収しなければならぬと言うことですか」

再び筋肉女が拳を握った。

「ハア、戦闘は二つ目を聞いてからでも遅くないだろう……それに、私が君に負けるとは到底思えないのだが……」

「……言つてくれますね。」

「だったら、倒した後に拷問してでも聞き出しますよ」

バゼットが走り出した。

手に持った『斬り抉る戦神の剣』は宝具を使えば確実にローブの彼女を捉えるだろう。
『夢幻召喚』

ローブの彼女が、かつて美遊が使った『夢幻召喚』を地面に置かずに手に持ちながら発動する。

『裁定者』

発動・・・『アルファ・イン・フォース』

「宝具・・・使っちゃダメツ!!!」

『斬り抉る戦神の剣』

バゼットは『斬り抉る戦神の剣』の準備を終えた。

イリヤの制止はもうすでに意味はなくなっていた。

「理解してもらえたかな・・・君が敗北したということ・・・」
立っていたのは黒の騎士。

既に気絶しているバゼットの首には両刃の大剣が押し当てられ、下には『斬り抉る戦神の剣』が転がっている。

バゼットの宝具『斬り抉る戦神の剣』は相手の敵の時間を切り札より後に発動しながら

ら、時間を遡り切り札発動前の敵の心臓を貫く魔剣……発動すれば必ず命中して相手を倒す原作のはず……つまり、彼女に対してバゼットの宝具『斬り抉る戦神の剣』は発動しなかつたってこと!?

「どういうことだ……何故『斬り抉る戦神の剣』は発動しなかつた」

「さあ、私は自分の手の内を教えるつもりはないよ……『複製』できたのは、彼女から借りた『狂戦士』のカードがあつたおかげだ……『ありがとう』、間接的とはいえ、君のおかげで救われたものがいた……その貸しを返しに来たとでも思ってくれればいい」

甲冑の中の顔は笑っているような気がする。

バーサーカーとの戦いは、イリヤと私にとつては苦い記憶だ。でも、彼女のおかげで私は少しだけ報われたような気持ちになった。

「さて、本題に戻ろうか……君たちが求めている『模造品』の最期のカードについて私は伝えるに来た」

「……ちよつとまって、それって貴女たちが作ったもの以外にカードがまだ存在するってこと!？」

「その通り……八枚目のカードは存在する」

彼女は首を縦に振ってこたえた。

「私は、君たちの仕事は未だ終わっていないことを伝えに来たのさ……それにちようど良く『助っ人』も来ていることだから、いい機会だと思つてな」

『助っ人』……まさか!?

「あんた、私たちの助っ人を筋肉女にさせるき……!? 第一、カード集めなら私たちだけで充分よ!!!」

「いや、それは難しいだろう」

嫌な予感がする。

彼女はその言葉を神妙な面持ちで言った。

それは、今の私たちでは危険ではないかという現れのような気がしてならない。

「……それ、どういうこと?」

今まで黙っていたイリヤが、彼女の神妙な面持ちに嫌な予感がしたのでだろう。

「……なぜなら」

「八枚目のカードは『英雄王　ギルガメッシュ』」。

彼の宝具は彼が生前世界中から集めた宝具を収納した宝物庫だからだ」

今は遠き日の記憶 『色欲』のとても大きな間違い 前編

何もかも間違いが始まったのは全て私のせいでした。

そうすれば『シロウ』はあんな選択をするはずなかつたのに……

『色欲』の試練……『シスタモン・ノワール』、『シスタモン・ブラン』

『色欲の剣』に選ばれたのは、お姉ちゃんと私の二人だった。

「お姉ちゃん、楽しみですね!!!」

「……ええ、そうね」

二人が選ばれたのは前代未聞でした。

他のデジモン達が調べてはくれているが、『たぶん試練までには間に合わない』って、ルーチェモンがおっしゃっていました。

その話を聞いて、シロウやお姉ちゃんは少し不安そうにしていたけれど、私にとって

は好都合でした。お姉ちゃんと再会してからというもの、本気で戦ったことはありませんでした。ようやく、ようやく本気で戦えます。

『色欲の剣』はここだね、お姉ちゃん」

「そうだわ・・・でも、二人の理由は分からなかったわね」

お姉ちゃんはまだそんなことを気になっているのか・・・どうでもいいじゃないですか。私たちなら絶対に大丈夫ですよ。

「大丈夫だよ・・・シロウもそう思いますよね？」

「・・・そうだといいな」

シロウもお姉ちゃんもやつぱり、気が抜けないのか警戒を続けています。むー、なんか嫌な感じです。

「じゃあ、すぐに始めましょう!!!」

「あつ、おい待て!?!」

私は剣に触れました。

試練は剣に触れることで開始されることは知っていた。だから、私は触れたのです。

これが、『大きな間違い』だと知らずに・・・

『夢』

これは、少年の夢。

衛宮士郎という少年ではなく・・・

これは、『悪』とされた少年の夢。

そうやって私は認識したのだと思いました。

四日間の悪夢・・・ただ一人のために、多くの人を巻き込んで、それでも続けていたのは何故でしょうか。私には理解できません。

そんな夢を見ました。

『夢』は覚めます。

これが戦いの場。

かつてあの世界で見たの東京と違い、街がほとんど壊れてしまっていました。まさに荒廃したといったふうでしょうか。

よく見ると、人はいません。

どこことなく、寂しさを感じます。

「・・・ねえ、本当にここが？」

「正しいと思う・・・毎回、違う場所だから」

シロウの方を見る慣れていいのか、お姉ちゃんと少し話をしていました。
「来る」

・・・たった一言、そして突然影が二つ現れます。

『『色欲』の試練・工藤タイキ・シャウトモン』

『『超進化』

シャウトモンを中心に暗い光が包み込みました。

中心には金色ではあるが光沢はなく、薄気味悪いデジモンがそこいました。

『『オメガシャウトモン』

オメガシャウトモンは私たちに向かって、走ってきます。

「行くわよ、ブラン!!!」

「はい、お姉ちゃん!!!」

『『覚醒』

私たちシスタモンは普通の進化とも違う『覚醒』と呼ばれる進化を使う。姿は子供から大人へと変わり、私たちの本領が発揮できるようになるのです。

「・・・ッシロウ!？」

お姉ちゃんは叫びました。

オメガシャウトモンが私たちの『覚醒』を見た時に、シロウへと攻撃対象を変えたからです。

「大丈夫だ・・・オラア!!!」

「ーーツ?!」

シロウが今まで発したことのない言葉を使った瞬間、オメガシャウトモンはシロウから吹き飛んでいきました。シロウの手のひらを見るとなぜか黒色に光っています。

「・・・デジソウル」

「お姉ちゃん、それは何ですか?」

お姉ちゃんのこぼした言葉、『デジソウル』という単語は私には知りませんでした。

「気を抜かない、敵はこっちにきてる!!!」

「はいっ、姉さん!!」

オメガシャウトモンはお姉ちゃんへと殴りかかって来るも、お姉ちゃんは紙一重で避けました。

「くらいなさい『ブレスファイヤ』!!!」

お姉ちゃんの銃・・・『アンソニー』から放たれた二つの弾丸。それが命中し体の装甲に穴が空きました。悲鳴すらあげない敵だけど、決定的な隙ができました。

「今ですわ、『ディヴァインピース（覚）』」

私のお気に入りの槍『クロスバービー』で奴を攻撃。避けようとしたオメガシャウトモンでしたが、ギリギリ足に命中しました。覚醒したことにより、パワーはいつもより上がっていたので、どうやら相手の足の装甲から、大きな穴が空いていることにお姉ちゃんが気づきます。

「止め、行くわよブラン!!!」

「わかりました、姉さん!!!」

お姉ちゃんの銃と私の槍。

私たちはそれぞれの力を込める。

「『グランドシスタークルス』!!!」

私たちの連携攻撃がオメガシャウトモンの装甲ごと吹き飛ばしました。しばらくしても、オメガシャウトモンは起き上がる様子はありません。

私は覚醒を解いてお姉ちゃんの方へと走り出しました。

「・・・やった、やったよお姉ちゃん!!!」

「ブランツ、まだよ、警戒しなさい!!!」

お姉ちゃんの警戒の一言。

そして、オメガシャウトモンの方向を見ると……

『ハードロックダマシー』!!!』

倒れたと思ったオメガシャウトモンが攻撃を仕掛けてきました。突然の攻撃に私は防御の姿勢すら取れません。

「ブラントッ!」

お姉ちゃんの声、そしてあれほど教えられたのにもかかわらず、つい目を瞑ってしまいました。

……あれ、痛みが来ない?

「ノワールッ!」

シロウの必死な声を聞いた瞬間、目を開けなければならぬと思ってしまった。

「……お姉ちゃん?」

私の目の前にお姉ちゃんがいました。

でもいつも見ているお姉ちゃんとは全く違います。

・・・なぜなら、

「シロウごめんね」

お姉ちゃんの胸に大きな穴が空いていたからです。

今は遠き日の記憶 『色欲』の無意味 中編

「ノワールツ、ノワールツ!!」

シロウは何度もお姉ちゃんを抱き上げて、何度も声をかけていました。それでも、お姉ちゃんは目覚めませんでした。

私はその様子をただ呆然と見ているだけでした。

……これって私のせい？

お姉ちゃんが死んだのは私のせい？

ただただ呆然と見ているだけでした。

そんな時、シロウのズボンのポケットからドス黒い光が放たれます。シロウはとっさに、ポケットの中にあるデジヴァイスを見ると、お姉ちゃんを奇襲したデジモンの影のパートナーが持っていたデジヴァイスとそっくりな形になりました。

『強制デジクロス』

機械音のような声がこの場に響きました。

「ノワールツ!？」

「・・・お姉ちゃん?」

突然お姉ちゃんの体が光へと変わって、私へと集まり始めました。

「・・・なにこれ?」

私の姿が変わり始めます。

覚醒したわけでもないのに体が大きくなり、服装も修道服から派手なドレスへと変わりました。

「まさか・・・『進化』したのか?」

今までとは比べものにならない力が手に入ったことがわかりましたそれにお姉ちゃん私の力が入っている感じがします。しかし、私の今の感情はそれを受け入れられるほど強くはありません。

・・・そんな時、

「・・・まだだ、まだ終わってなんかいない!!」

シャウトモン、『ファイナルクロス』だ!!」

たった一言。

そう、その一言を影が言った瞬間。

色欲の剣から黒い影たちがシャウトモンへと集まっつていきました。それはどんどん集まり、まるで大きな山が私を見下ろしているような感じがします。

『シャウトモンX7 Superior mode』

山よりもはるかに大きいそのデジモンが私たちへと向かって歩き始めました。

「……あんな……あんなのに勝てるはずがありません!!!逃げましょう、シロウ!!!」

冷静になれたのは、シャウトモンの存在という恐怖からでした。それに気づいていながらも、デジヴァイスを持ちながら、お姉ちゃんを抱いた腕をそのままにしているシロウへと声をかけていました。

ただ、ただ、逃げたいとそう思っつてシロウの体をゆすりました。

「……に……げ……る……?」

「そうです!!!逃げるんです、ここか……」

言葉が途切れました。

私の方をようやく見たシロウの顔は泣きながら笑っていました。

「こいつから、ノワールを殺したこいつから逃げろだと……ふざけんなッ!!!」

泣き顔は憤怒へと変わり、進化したシャウトモンをシロウは見据えます。

『トレス、開始』

顔は未だ怒りで表情は変わりません。

そのままシロウは手元に武器を作りだしました。

「あいにくだがこいつで終いだ、『ファイナルクロスブレード』!!!」

シャウトモンは私たちを殺すために巨大な大剣を振り下ろしました。しかし、シロウは逃げる様子がありません。

「シロウッ、逃げてッ!!!」

私の叫んだ瞬間、

『オメガ・ブレード』

その一言……たった一言で状況は再びいっぺんした。

「合体を解けばそんなもの関係ない」

シャウトモンが再び元の赤いデジモンへと姿を変えたのだ。

「もう一度……もう一度だっ『ファイナルクロ……づっ……ぐあああああ!』」

シロウはもう一度進化しようと、デジヴァイスを掲げたパートナーの腕を肩から切り落としたのです。

「進化できなければどうということはない」

シロウはパートナーの方へと走り出しました。

先にパートナーの方を叩くつもりようです。

『ロックダマシー』!!」

先程の『ハードロックダマシー』よりは劣るものの、シャウトモンがそれを止めようと必殺技をくりだします。

……しかし、

「……防げ」

目が一瞬だけ、瞳孔まで開いたのを私は見たのです。血で真っ黒になった剣を持ってシロウは言いました。

「さあ、みんなのところへ帰ろう」

今は遠き日の記憶 『色欲』は失い、『傲慢』は嗤う 後編

シロウとともに帰ってきました。

見たのは愚かな女の記憶。

あれが私であるというのなら、今なら理解ができます。

私は愚かだったことがわかったからです。

戦闘に固執し、十分な注意もせず、ただ敵を屠ることを考えていました。それで、勝てない敵を見たら逃げ出そうとする。

師匠が見たならば言うでしょう。

お前は三流未満だと……

その通りだと思います。

こんな愚かな私のせいで、彼があんな『選択』をすることは今思いませんでした。

これも全て私のせいです。

きつとお姉ちゃんがいたのならば、こんなことにはならなかったでしょうから……

ジエスモンは何も言いませんでした。

お姉ちゃんが死んだのは私のせいだと言つても、誰も私を責めたりしませんでした。そんなとき、ルーチェモンが言いました。

『試練はこれが狙いだっただのかもしれない』……と。

誰もが、それを聞きました。

お姉ちゃんの死は決まっていたものだったか？

ルーチェモンの言葉はそれを肯定するように頷きました。

『なんとなくだけど、二人のデジモンが試練に選ばれたのは初めてだ』

『しかし、シスタモン達は双子の姉妹……つまり、同じデジタマから生まれたデジモンだった』

『もともと双子として生まれたデジモンだから、二つに別れた力を元の一つにするために『色欲』の守護者が殺したんでしじゃないかと僕は推察している』

『それなら、二人が一緒に守護者に選ばれたのにも納得できる』

そこにいた一部のデジモン達は、ルーチェモンのことを責めました。それは、お姉ちゃんとの仲が良かったデジモン達でした。だけど、ロイヤルナイツや魔王デジモンへと進化するシロウのパートナー、ウエヌスモンが止めに入ったことで、争いは一時的に終わりました。

そして、今まで静観していたシロウが立ち上がりこう言いました。

『ルーチェモンと二人だけで話したい』

どこか、いつもと雰囲気が違うシロウに戸惑った私達と、それを首を縦に振ることで肯定するルーチェモン。

二人はテントから離れていきました。

それについていこうとしたデジモン達も、先程、止めに入ったデジモン達に再び止められ、私も行くことができませんでした。

「ルーチェモン・・・デジモンのタマゴが生まれる場所って知っているか？」

「まさか、彼女ノワールを生き返らせるつもりかい？」

「・・・知っているとすることは、あるってことだな」

「知っているも何も、僕は一応イグドラシルから請け負った剣の管理人であり、それぞれ剣を祀った神殿の神使だよ。君の記憶も知っているし、並行世界の記憶も知っている」

「・・・驚かないんだね」

「別に驚くことじゃない・・・と、いうことはタマゴが生まれる場所はないのか・・・？」

「いや、あるよ」

「・・・本当か!!!」

「本当だよ・・・イグドラシルが管理している『システム界』の中心地区に厳重に警備されてる・・・」

「・・・それならっ!?!」

「不可能だよ」

「・・・なんでさ、俺たちならシステム界に行くことができるはずだ。もし行けなくても、伝令役に頼めば・・・」

「無駄だ」

「……ッ!？」

なんで……なんでそんなこと言うんだよ。

他の記憶を見ていたらわかるだろ、一乗寺賢だって、自分のデジモンと再び会うために、タマゴのある街に行つたじゃないか!!!」

「無意味だからさ」

「無意味って……だから、なんで俺は行けないんだよ!!!」

「生き返らないからさ」

「……は?」

「基本的にデジモンはある一定の強さを手に入れたときデジタマに戻る権利が与えられる」

「しかし、七大魔王に負けたデジモンはそれにあたらぬ」

「七大魔王に負けたデジモンはそのデータを七大魔王の血肉……つまり、エネルギー源にされるんだよ」

「……でも、それは七大魔王と戦ったデジモンであつて……ノワールには関係ないじゃない……」

「……だけど!!!」

「正確には言われていないが、剣はかつての七大魔王デジモンだと言われている……つまり、試練自体が七大魔王を選定するためのものなのさ……弱いデジモンならば七大魔王になる資格無し」

「むしろ、剣のエネルギーとなつて礎になれ……ということだよ」

「・・・俺は、何のために・・・」

「どうして、生き返らないのさ」

「生き返ると思ったから、戦えたのに・・・」

「・・・何で生き返らないんだよ!!!」

「・・・俺が、間違っていたのか？」

「あんな夢平穩を見なければよかったのか？」

「あんな夢安息を望まなければよかったのか？」

「あんな夢幸せな未来を見たから、ノワールは死んだのか？」

「俺は何のためにこデジタル世ワールドに来たんだ？」

「『正義の味方』になるためだ」

「ノワールが俺が弱かったから死んだんだ」

「正しくなければならぬ」

「弱さを許容してはいけない」

「より多くの民を救わなければならぬ」

「俺は正義の味方にならなければならない」

「だって、そうだとノワール」

「……俺はお前を殺してしまっただからさ」

「大丈夫、計画は順調だよ・・・イグドラシル」

「ふう、逐一報告するのも疲れるよ」

「それにしても、シロウは面白いな」

「こんなにも、壊れるのが遅いなんて」

「普通なら、自身の過去を見せられた時点で終わっていたのに」

「まさか、他人の記憶をねじ込まれても壊れなかったのは面白いとしか言いようがない
ね」

「・・・思ってた通り、人間って面白いね」

「さあ、人形シロウこれから僕に何を見せてくれるのか・・・楽しみで仕方がないよ」

第十話 狙いと嘘と誕生日

「・・・ハア、結局、私達がやってきたことは無駄だったってわけね」

ため息をついた凜さん。

額に青筋を浮かべるルヴィアさん。

二人とも八枚目のカードについてバゼットさんへの交渉材料として使おうと必死に走っていたというのに、ついしてみれば戦いは終わっていた・・・しかも、せっかく見つけた『八枚目』という交渉材料を、乱入者にその詳細まで伝えられるという恥を晒してしまったのだ。

そのあと、ルビーとクロから弄られて、怒った凜さんとルヴィアさんが宝石魔術を使ってさらにドンパチやって壊れてなかった家具なども、最終的に全部壊してしまったのだ。

「・・・それにしても、『ギルガメッシュ』・・・ね」

「なにか疑問でもありますの、ミス・トオサカ？」

眉間を指を当てる凜さん。

流石のルヴィアさんもこの状況で喧嘩を売るような真似はしないらしい。

「情報の出所を考えていたのよ。」

カードは地脈深くにあるにもかかわらず、場所の詳細ではなく、カードの英霊の詳細を伝えるだなんて随分とおかしいと思うのよ……まるで、場所は知らないが、全てのカードの正体を知っているような……」

ゾクリ……と、背筋が凍る。

美遊も、クロも、ルヴィアさんも、わたしをふくめて凜さんの言葉に気がついたのだ。わたしたちの切り札の詳細を知っている……ということに。

「……なあーんてね、そんなことあるわけないじゃない。ただ私が考えすぎただけじゃない。なにそんな顔をしてんのよ……それに、次のカードの宝具までわかったんだから、急いで作戦会議を進めましょ……もしかしたら、バゼットだけじゃなくそいつらまで襲ってくる可能性だってあるわけだし……もしかしたら、勝てなくて私たちに頼ってきた可能性のほうが高いと思うしね」

なんだ、ただの考えすぎか……

「それで、どうやって倒すかだけど……」

それから、凜さんからバゼットと組んで戦うことを伝えられた。クロやルヴィアさんは少し不満そうだったけど……どうにか、なった。

でも、私は美遊が気になる。

『そんなもの、あるはずない……』

八枚目のカードとその詳細をデモンズの人が出したときに、美遊が小声で言った言葉だ。たぶん小さかったから、わたしにしか聞こえてないと思う。

……それが、どこか不安だったから、

「ねえ、ルヴィアさん……美遊の誕生日って知ってる？」

東京から戻って少し経つ頃……

「……なんでさ？」

目の前にあったのは、大量の資料の山であった。

理由は数週間前……山科さんを含め、他探偵事務所の二人（俺の上司）プラス、そ

の他数名による大実験（上に通さなかった）が起きてしまった。

その代償として、機器の一部が破損。

もちろん上は知らなかった。トップは出張でいなかったために起きた事態である。

戻ってきた、悠子^{上の}トップさんは激怒した。

……かの悪逆なる部下達の行動に。

そしてその結果が、この大量の事務処理である。

この一件に関しては、バゼット・フラガ・マクレミッツという不確定要素を確認した杏子さんが、イリヤを助けに行ったのが裏にあるのだが、それに賛同した一部^{バカ}の天才^{ども}がデジタルシフト内での実験を許可なくやってしまったために、機器の一部が壊れてしまったのだ。

当然、仕事だったからという

現在、自宅でその処理を半分ほど終わらせたのだが……

『マダ、この山終わらねエな』

資料の山はまだまだ山積みされていた。

家を持って帰ってやっていているものの、資料にいたっては探偵事務所の処理までであるため、全部数えたら百は軽く超えるだろう。

『教イク機関卜のテイケイに、でんしまネー、背景や世界観ノ統一、医療ノジツヨウカ：ソノタ諸々、政府に任さレタ事も入ってるぜ』

見ているだけでうんざりしてくる。

少し喉が渴いたな・・・下の階に降りて、お茶でも飲んでくるかな・・・

「・・・残念だったね、ちょうどルヴィアさんに用事があつた日だったなんて・・・」

「別にいいじゃない、別の日に祝ってくれるって言ってたんだから」

「・・・わたし、今まで誕生日に祝われた事ないし」

そうすると、イリヤとクロエ、美遊がリビングにいた。

なんの話をしていたかわからないが、イリヤとクロエが固まっている。・・・どうしたんだ？

「いらつしやい、美遊ちゃん」

「……はい、それと士郎さん、美遊でいいです」

「わかったよ、美遊……それでイリヤたちはなんの話をしていたのかな？」

美遊の一言にギョツとした表情を浮かべたイリヤとクロエ。

「えつと……保護者のルヴィアさんが少し用事で私の誕生日を前倒しにするという話でした」

『ソリヤ、こいつ視てんノ話ダロ』

オグドモンは俺にしか聞こえない声で突っ込みする。そんな話なら、イリヤもクロエもこうまでして固まらないだろう……そういえば、ツミノキョク強欲の剣では、誕生日を祝う記憶がなかったな。

そうか、この子が祝われたことがない……とでも言ったのかな？

とあることを思い出したので、とりあえず用事を聞いてみる。

「イリヤ、確か美遊の誕生日って七月二十日であつてたよな」

「えつ、あ、うん」

「美遊、その日って用事無いか？」

「いちおう、ありませんが……？」

……少し考えてから携帯を取り出す。

「ちよつと、待っててくれないか？」

そう言つて俺はアラタさんに電話をかけた。

「・・・お兄ちゃん、ちよつとおかしくない？」

私は今の会話にお兄ちゃんとの会話に疑問を覚えた。

「・・・えつ、クロ、突然どうしたの？」

「確かに、おかしいと思う」

「えつ、美遊まで!？」

「・・・美遊も気づいたか。」

「お兄ちゃんは『確か美遊の誕生日って七月二十日であつてたよな』って言った。でも、美遊や私たちが言いふらさない限り、美遊の誕生日って知り得ないんだよね。それに、凜やルヴィアまでついさつきまで知らなかったのに、私たちが言う前にお兄ちゃんが知ってるなんておかしいわよ・・・裏に何かあるに違いない」

「・・・まさか、お兄ちゃんは美遊のストーカーをやつてたっ!？」

そして、イリヤのこの発言。

「そんな・・・土郎さん、ストーカーなんてしなくても、直接言つてくれれば・・・」

そして、お兄ちゃんがストーカーをやっていたかもしれないと考えた美遊だけど……まんざらでもない様子。

やばい、これは私がしつかりしないと!?

二人は妄想の世界に入る前に声をかける。

「待って!?!何かあるとは言ったけど、まだお兄ちゃんがストーカーとも決まっていなわ」

あつ、この答え方じゃ……

「じゃあ、ストーカーの可能性もあるんだね(です)、クロ!!!」

一方は焦り、もう一方はなぜか期待して私へと言った。

……そんな時、

「電話終わったからちよつと……って、どうしたんだ?」

お兄ちゃんが帰ってきた。

「……お兄ちゃんの……」

「……土郎さんの……」

「変態!?!」

「なんでさ!?!」

イリヤと美遊の拳がお兄ちゃんのお腹に突き刺さった。

「……で、それが理由か？」

俺は美遊のストーカーでも、ロリコンでもないよ」

殴られた経緯を聞いて、物凄く疲れた。

なんで、美遊の誕生日を知っていたかどうかで殴られなきゃならないんだ。

「でも、なんでお兄ちゃんは美遊ノ誕生日を知ってたの？」

唯一殴ってこなかったクロエが聞いた。

「数週間前に、イリヤが風呂呂入る前に『まさか、美遊と同じ誕生日だったなんて』って呟いてたのを思い出したんだ……だから、俺は悪くない」

「結局あんたのせいじゃない!!!」

「すみませんでした!!!」

クロエがイリヤの頭を叩いた。しかし、実際、イリヤは呟いていたかは記憶にない。ただ強欲ツミノキオクの剣で知っていただけなのだが、それじゃ説明のしようもないので犠牲になつてもらった。

「それで、土郎さんは誰に電話をかけていたんですか？」

美遊が戻ってきた俺に質問する。

「・・・そうだ、これを伝えにきたんだった。」

「ちよつと、知り合いに頼んで七月二十日に用事を開けてもらつたんだよ」

「用事・・・なんで？」

復活したイリヤが聞いてきた。

「俺も二十日にちよつと用事があつたんだが、二十日がイリヤの誕生日だつて思い出してな・・・それを、その人に言つたら、パーティーを開こうつて話になつたんだ」

本当は、その人がイリヤたちに『とあるもの』を渡したかったから、ちよつどいい理由になつたらしい。

「パーティー？」

「近くの海水浴場の海の家でやる予定だつたんだが、それでよかつたか？」

三人とも顔を見合わせる。

流石に、知らない人に祝われるのは嫌だつたかな？

「土郎さん、私はそれで大丈夫です・・・クロエは？」

「私も大丈夫」

どうやら二人はそれでよかつたらしい。

イリヤは少し首を捻っていたが……

「うーん、二人が大丈夫なら私も行こうかな」

最後にはそう言った。

「……やっぱり、お兄ちゃんは少し怪しい」

第十一話 海と祝いとプレゼント

「……流石にこんなに多いとは思わなかったんだが？」

「……本当にすみません」

アラタさんは頭をかきながら、車の鍵を閉めた。

理由は、イリヤ達と俺達のパーティーに参加する予定だった人数の認識の違いである。イリヤ、美遊、クロ、……ここまでは俺達の認識であった。しかしイリヤは、イリヤのクラスメイトたちも含めていたのである。そして、十人の運転になったから……アラタさんは唖つたのであった。しかし、俺もイリヤ達の考えを認識しきれなかった部分もあつたので、まあ、八人……それも子供なら何も問題ない……ギリギリ全員乗れたので話はいった。

「……まあ、オレから言ったことだしな、これ以上ぐちぐち言うつもりはもうねえよ」
はあ、と少しため息をついているのは、たぶんもう少し『アレ』を持って来れば良かった、と思っているのだろう。

「「海だツツ……!?」」

そうすると、イリヤ達の大きな声とともに、大きな音が鳴り響いた。

「ん、ちよつと……待ってる!？」

アラタさんが走り出した。

何に気づいたのだろうか？

「おい、その車……待てツ!!!」

見た方向にはイリヤ達に何か渡して去っていく車……まさかツ!？」

「チツ……逃げやがったな、ナンバー覚えたからなツ!!!」

「……まだ、怒ってるんですか？」

「そんなんじやねえよ」

先程まで、車に轢かれた少女の親御さんに、謝りに行っていたアラタさん……運良く、誕生日パーティーを請け負ってくれた海の家を営んでいる家族が親御さんだったの
で話はすぐについた。しかし、親御さんが『傷がないみたいだからもういい』と、言っ

でもアラタさんは頭を下げ続けた。そうしていると親御さんのほうが折れてしまい、パーティーの準備を手伝うことで話がついてしまった。アラタさんはしぶしぶという形であったが、『友人の妹の誕生日パーティーを壊さないように』とエリカに怒られていたので、ようやく領いてくれた。

「アラタさん、次のオーダーよろしく!!!」

「はいッ、わかりました!!!」

・・・じゃあ、またパーティーで」

・・・そして、

「「「セーの・・・」」」

「「「イリヤ&クロ&美遊、お誕生日おめでとーーーーー!!!」」」

少女たちと男二人の声が、彼女たちの誕生日を祝った。

注文していたかき氷を中心に大きな机の上いっぱい料理が並べられる。

「さつきはすまなかつたな、せっかくの誕生日だったのに……」

「ううん、タツコを心配してくれたんだもの。別に構わないわ……それより、アラタお兄さんも食べましょ」

アラタさんのほうは、クロエに謝ってるいるし……

「まさか、ここも嶽間沢家が経営していたとは……」

「やるな、タツコんち」

子供達は食べ物に夢中……

……主賓のほうはと目を向けると、少し戸惑った様子の美遊が座っていた。

「どうしたの、美遊？」

「どうやら、イリヤも同じ心配をしていたらしい。」

イリヤは少し躊躇いがちに美遊へと聞いた。

「ねえ、イリヤ……誕生日って祝うものなの？」

会場内がピシリと固まる。

……そういえば、誕生日を祝っているところを強欲ツミノキオアの剣で見た覚えはなかつたな……

「ジンジャーエール、ウメエー!!!」

車に轢かれた子……タツコちゃんの空気の読めない一言が、この変な空気を壊した。
……しかし、誕生日……か。

「美遊」

「何ですか、土郎さん？」

美遊は本当に疑問を持った目で俺を見た。

彼女ならどう言っただろうか……と、少し考えるけど、それでも『あんたのの言葉で伝えなさい』と言いたいそうだなと思ひ……彼女へと伝える。

「誕生日つてのはさ……今まで、生まれてきたこと、自分が生きてこれたこと、周囲の人に生かされてきたこと……そして、これからも自分は必死に生きていくことを感謝すると同時に、周囲の人たちへこれからも一生懸命生きていくことを宣誓をする日……なんじゃないかな？」

「生かされてきたこと……感謝と、宣誓……」

俺が言えることではないけど……でも、彼女には何か響いたみたいだな……少し、恥ずかしい。

「でも、そんな堅く考える必要はないさ……誕生日はお前たちにとっては特別な日なんだから、祝われる側はいつもより幸せな日だと思って……」

照れ隠しとともに、カバンの中のプレゼントを取り出す。

「ただプレゼントを受け取ってくれるだけで、祝う側は嬉しいものなんだよ……三人とも誕生日おめでとう」

三人へとラッピングされた包みを渡した。

「お兄ちゃん、開けていいの？」

「いいよ、むしろ開けて感想を言ってくれたほうが嬉しい」

三人は包みを開ける。

「……これって、ブレスレット？」

「しかも、三人で形が違う」

そう……ブレスレット。

イリヤには星、クロエには剣、美遊には月の飾りがブレスレットにはついている。

「これって、お兄ちゃんが選んだの？」

「ああ、バイト帰りに駅に寄って買ってきたんだよ」

正確には、やらかした二人からの被害を受けた分の仕事を悠子さんに届けるときに、駅に寄って買ってきたものだ。仕事が終わったのが一昨日だったので、選ぶのにはあまり時間をかけなかったが、こういうのは自分で選ぶべきだったのは理解していた。

「えっ、お兄ちゃんが!?!」

「自分で選んだの!?!」

「そんなにおかしいのか!?!」

そこまで、俺自身はやらかしてはいないと思うのだが……

「お兄ちゃん、ありがとう」

でも、イリヤ達の笑顔が見れたのなら、それでいいか。

「士郎さん」

「生まれてきたこと」

「生きてきたこと」

「周囲の……イリヤや士郎さん、みんなに助けられてきたこと」

「その全てに感謝と……」

「これからも一生懸命に生きていくことに誓いを……ありがとうございます、士郎さん」

その表情に少し憂いを帯びていたのは、他でもない彼女自身がたぶん俺だけがこの世界で知りうる事象なのだろう。

「おっもーい!!!」

彼女達はその言葉を笑った。

しかし、俺はその言葉がどれだけ尊いかを知っているから……こんな日々が続いて欲しいと思う。

そんなとき、アラタさん側三人へと『アレ』を取り出した。

「じゃあ、俺からもプレゼントだ」

三人はそれぞれ一人ずつに渡された、三つの封筒を開ける。

「……これは？」

三人は一枚の紙を取り出して、アラタさんに聞いた。

「実はオレ、『カミシロ』でプログラマーのチーフとして働いてんだけど、そのチケットはまだ市場に出回ってない『カミシロ』の新しいシステム、通称『EDEN』のβテストのチケットなんだよ」

「βテスト？」

イリヤとクロエは首をひねるが、美遊は手が震えている。

「イリヤ・・・βテストって言うのは、開発中の製品を試験運用すること・・・つまり、一般人よりも先に製品を使用できること」

「・・・ええッ!?!」

イリヤは驚いたようだけど、クロエはまだ納得していない様子。

「でも、そのシステムってどんなものかわからないし、『カミシロ』が作っているシステムがそもそも子供が楽しめるようなものなの?」

カミシロが今まで作っていたのは、大人用のゲームや市場に出回っているプログラムなど・・・たしかに一般的に有名ではあるが、子供用となると、そこまで楽しめるようなものではなかった・・・クロエの懸念も事実だろう。

「いや、システム自体には問題ないと思う・・・それに、政府にも認められて、今後教育機関や医療などにも手を出していく・・・といった具合に、今のうちに勉強していくのもありかと思うぞ」

「ーーツ、アラタさん!?!」

「機密事項ってことはわかってんよ、これ以上は言わないって」

「・・・ってことは、お兄ちゃんも『カミシロ』に関係しているの?」

つい、アラタさんに声をあげてしまったせいで、クロエ達に俺がカミシロの関係者ということがバレてしまった。

秘密にしていたことがわかったのか、俺の近くに寄って聞こえないように話しかけてくるアラタさん。

「お前、まだいつてなかったの？」

おたくは、カミシロの今後の経営の重要部分を担ってるんだから、家族ぐらいに話したらいいのに・・・」

「いや、そんなことしたらカミシロが魔術に関係しているの可能性があると思われるじゃないですか」

「わかった、その辺は隠してやるよ」

よしっ!!話はまとまった。

アラタさんは俺から離れて、俺がどうしてカミシロの機密事項を知っているのかを話しました。

「実はな・・・こいつは、今カミシロが開発中の、機密中の機密の『EDEN』のゲームの『イラストレーター』のチーフをやってるんだよ、こいつが徹夜や遅く帰ってきた時には、だいたいこの仕事を請け負っているんだ・・・つまり、学校を卒業したら、カミシロが雇ってくれることが決定しているんだよ」

実際にやっているんですが、バイトで遅くなっていることをバラすのやめてもらえませんかね・・・法律違反なんで。

「お兄ちゃんがツ!?!」

イリヤは驚き、

「うーん、なんか怪しい」

クロエは頷かず、

「それって、ほうり・・・むぐ?!?!」

「はいはい、お兄さん凄いいことにやってるんで、黙ってようね」

美遊は友達に口を塞がれる・・・危なかった。

ナイスだ、イリヤのクラスメイト!!!

「怪しむのも、驚くのも、別にいいが、実際にβテストでカミシロの作ったものを見てくれれば、士郎の努力がわかると思う・・・だから、見に来てくれると士郎も嬉しいし、オレも宣伝できて嬉しい」

「すみません、ちょっといいですか？」

「このチケットって政府公認っていつてましたよね・・・じゃあこれって、市場でいたいどれくらい値段になるんですか？」

眼鏡の少女……スズカちゃんがアラタさんに聞いた。

「どうだろうな……もともと、クローズドでしかも、関係者の方々の子供限定でやる予定だったからな……もし、市場に出回らんだったら、値段につけられないんじゃないか？」

……と、冗談半分でアラタさんは言った。

ピシリと固まる彼女たち。

「「え……ええ……!!?」」

「いやいや、アラタさんのは半分冗談だよ……少なくとも、100万つてところが妥当じゃないか?」

「それでも値段は高いよ!」

俺の答えにイリヤは突っ込んだ。

でも、まだリリースされてないうえ、実験のβテストの段階だから、そこまで高くないはず……. . . だけだな。

結局、そのあとこのチケットで大騒ぎになった。

実は、俺は一度この話を断っていた。

理由は、友人たちの前でこの話をして、友情が壊れないかという疑問であつたが……

「おい、そんなものより、海で遊ぼうぜ!!!」

「そんなものつてなんだあ!?!」

このチケットかなり、貴重なんだぞ!!!

「楽しかったら、言った時のこと教えてね、イリヤちゃん」

「つてか、子供にこんなもの渡すんじゃないわよ」

「あわ、あわわわ……とりあえず、お兄ちゃん預かつて!!!」

「………土郎さん、これつて、それほど高いものなんですか?」

とまあ、こんな終始こんな感じで、それでも楽しそうにしていたのは嬉しかった。

そんなこんなで、もう帰りの時間になり、車の中で子供たちは寝てしまっていた。

「イリヤ達の誕生日、ありがとうございました」

土郎が車で感謝してきた。

「別にいいさ……次は、こんなむさ苦しい男とじゃなく、恋人行けよ……そつちの方が、オレにとっては話のネタになるし」

「いえ、別に俺は恋人を作るつもりはありませんよ」
「……はあ、エリカちゃんがかわいそうだな。」

「こつちも、こつちで先が思いやられるな」

今は遠き日の記憶 『暴食』と覚悟

『色欲』の試練から一週間経った。

仲間の一人だったデジモン・・・シスタモンノワールが死んで、俺たちは変わり果てたと言ってもいいぐらいの変化があった。

良くなった面は、妹のシスタモンブランは戦闘に対しての執着が消えたり、ジエスモンを除く、ロイヤルナイツやオリンポスの面々と連合が組めたこと。

・・・悪くなった面で言えば、

「・・・たつ、助けてくれ!!!」

チツ、また起こりやがったか。

悲鳴の上がる方へと全力で走った。

そして、案の定その中心にいたのは・・・

「もう、死ねよ」

弓を持ったシロウだった。

「ちよつと、待ってくれ。大罪のパートナー……なんでガーベモンに攻撃をしようとしている」

「……チツ」

ロイヤルナイツのマグナモンのほうが先についたか……

「お、俺達、腹減つてて……食料庫があったから……つい……そしたら、こいつが突然」

「オイラ達は悪くねえ、こいつがいきなり襲つて来たんだ!!!」

「やめろ、弓を向けるな!」

騒ぐガーベモンとヌメモン達……それにムカついたのかシロウは静かにガーベモン達へと弓を向ける。

「待ってくれ、とりあえず大罪のパートナー……事情を聞かせてくれ」

マグナモンは両者を急いで落ち着かせ、シロウへと説明を要求した。

「食料庫と言ったね、彼が食料庫を無断で使用したのか?」

「こいつが漁ったのは、幼年期、成長期限定の食料庫だ。備蓄自体はこいつが襲う前はそこそこあったが、俺が見に来た時には中でこいつらが備蓄を漁り続けていたが、その頃

には備蓄自体もうほとんど駄目にされていた」

「幼年期、成長期限定の食料庫をこいつらが漁ったことが原因か……人だからできないから、近くによれねえ。」

「たしかに、幼年期や成長期の備蓄を食ったが、まだたくさんあった!!」

「たかが、幼年期や成長期の食事よりも俺達完全体や成熟期が食って何が悪い!!」

「殺されるような真似はしていないぞ!!」

「ガーベモンはロイヤルナイトで有名なマグナモンが止めに来たことにより助長してやがる。シロウは過剰に行動しただけで悪くねえのに、気にくわねえな。」

「……黙れ」

シロウは静かにそう言った。

「……は？聞こえねえよ」

「大きな声で言ってくれませんか？」

「ロイヤルナイトの前で言えるんだっつたらな!!」

助長したガーベモン達がシロウを煽りやがった。

「ちよつと待て、俺はまだ……」

マグナモンが自身の中立を説明しようとした時……

「そうか、死ぬ」

シロウは一匹のヌメモンの頭を撃ち抜いた。

「なっ!?!」

「ひっ・・・ヒイ!?!」

その行動にマグナモンは驚き、ガーベモン達は恐怖する。

「お前らは確か、生産の方にいたデジモンだったよな・・・ウイルスバスターズとの戦いの前線に出ない完全体と成熟期がいるとルーチェモンに聞いたことがある・・・ほかの完全体や成長期は前線に出て戦っているのに、お前らは平穏な生産部隊でこのうのと暮らしているうえ、備蓄を食い荒らす害虫だ・・・以前の俺は一度見逃してやったが、今はさっさと殺してしまったほうがいいとさえ思っている」

「・・・一度、まさかお前・・・シロウなのか?」

「髪が白かったから気づかなかった」

「なんで、一度は見逃してくれたじゃないか!?!」

「そういうや、俺と出会う前に備蓄を荒らしたデジモンを追放したと、ルーチェモンは言ってるやがったな・・・シロウが『命は助けてやってくれ』とか懇願しやがったから、生き延びた奴らだったが、まさかオグドモン対策連合の中のメンバーにはいつていやがっ

たつてことか……

「見逃した……?じゃあ、言ってやる……二度目はないから、今ここで殺してやる」
もう一度、一匹減ったデジモン達は悲鳴をあげた。マグナモンは頭を抱えている。
チツ……俺が出るしかないか。

シロウは、マグナモンを無視して、ガーベモンを殺そうとした。

「……死ね」

「待てよ」

俺はガーベモン達を射抜こうとした腕を掴んだ。

「なんのつもりだ、インプモン?」

「こいつらの処遇はロイヤルナイツに任せる……それでいいなマグナモン」

「えっ、ああ、それでいい」

「なっ!?!」

シロウが弓を向けたことで、気絶していたガーベモン達を連れて行くマグナモン。

「……なんで、止めた?」

「……」

「なぜ、逃した!!!」

シロウは今までと違った冷酷な目で俺を睨んだ。

ここ一週間でシロウは変わり果てた。

肌の色は浅黒く変化して、髪の色は真つ白へと変わった。それに比例して、少しずつ優しさという感情が消え、正しさだけで動くようになった。

俺は別に構わねえが、シロウがなぜか気に食わなかった。

「ハツ・・・自分で考えろよ」

それから2日後、俺達は『暴食』の剣の前に立っていた。

気分是最悪、気に入らねえやつと一緒に戦うなんざ本当は嫌だった。

「さっさと行くぞ」

「おい、もう少し警戒しろ!!!」

俺は話聞いた『色欲』の試練と同じように剣に触れた。

夢を見た。

・・・正直言って、胸糞悪かった。

正義の味方なんてくだんねえもん目指している馬鹿が、失敗した話だった。

宗教なんてくだんねえもんはわからねえし、知りたくもねえ……ただ、継り付いた人間全員を、世界のために殺しちまったのは理解できねえ。

弱い奴は死ねばいい……と俺は思う。

もともと、デジタルワールドはそういう世界だった。

だが、シロウが来てからは何かが変わった。

やっぱり、俺には理解できねえな。

そんなところで目が覚めた。

真っ赤な世界。

それだけしか言いようがない場所だった。

シロウも目が覚めたようだ。

「ハッ……俺も結局はあんな風になるのかよ」

シロウはそう言った。

たしか、見た未来はシロウの未来だったんだよな……

それを思い出して、さらに気に食わなかった。
そして、二つの影が現れた。

『Matrix Evolution』

そうパートナーが叫んだ時、二つの影が一つになって一体のデジモンが現れた……
いつは見たことのあるデジモンだった。

『『デュークモン』』

「合体しているだけなら、消してやるよ!!!」
『終焉防^{オメ}ぐ^ガ願^{ブレ}いの^ド剣』を取り出したシロウ。

……しかし、

「なんで、二つに別れないんだよ!？」

デュークモンの影は二つに別れなかった。

オメガ・ブレードもどきの力が効果がないとすると、シロウ自体の戦闘力が激減する。
だが、デュークモンは未だに襲ってこない。

「下がってろ、俺がやってやる」

「七魔王どころか・・・成熟期に進化できないインプモンじゃ勝てないに決まってるだろ!!!」

「うるせえ、俺がやらなきゃ、誰がやるんだよ!!!」

この空間は他の剣で得た力なんて使えないのは知ってたんだ!!! てめえはそこで見ていろ!!!」

デジソウルすら使えないシロウは戦力外と言つてもいい。だから、俺が戦わないと負けてしまう。

「おい・・・待て、戦うな!!!」

俺が・・・俺がやらなきゃいけないんだ!!!」

シロウはまだ俺に戦わせないように言う。

「うるせえッ!!!」

そんなシロウの惨めな姿に、今まで溜まったイラつきが爆発した。

「てめえは何のためにここに来た」

「戦うためだ」

キレた俺にも平然と返すシロウ。

そんな姿にまたイラついてくる。

「戦うだと・・・笑わせんな」

「笑わせるだと・・・ふざけるな!!!」

俺は『正義の味方』にならなきやいけないんだ!!! そのためには、戦つて、闘つて、敵を殺して、より多くの苦しんでいる奴らを救わなければいけないんだよ!!!」

何なんだよ、何で今のこいつを見てるとイラついてくるんだよ。

「それが、《ノワールを殺した俺の唯一できることなんだよ》!!!」

「ふざけんなッ!!!」

我慢の限界だった。

キレていても、どこかで我慢していた俺・・・だが、こいつのあまりの見苦しさに我慢することができなくなった。

「ああ、もう……柄にないことぐらいわかってんだがよ……てめえのやつてることはただ『死んだノワールに押し付けているだけじゃねえか』!!!」

シロウはその言葉に少し傷ついた様子だが……

「そんなのはわかんてんだよ!!!」

シロウは涙を零しながら言った。

「小さい頃、夢を見たんだ

絶対に助からない地獄から救い出してくれた二人……そんな生き様に憧れたんだ……でも、現実是非情で……この世界に来てたくさんのことを知った」

バケモンのやつが言っていた。

シロウの原初は地獄であつた……

「この世界で……俺の並行世界の自分が我を通して処刑されていった!!!
ファスコモンが言っていた。

シロウにはこの世界ずつとにいて欲しい……

「だから、俺は一度『正義の味方』を捨てたんだ!!!

ノワールに夢を語ったんだ・・・『俺はデジタルワールドに残り続けたい』って・・・『お前の隣ですつと笑いたい』って言ったんだよ!!!」

ノワールのことで最も傷ついたのはシロウだった。

ノワールを誰よりも愛していたのは、シロウだと周知の事実だったことを霞むぐらい、その後の行動はノワールがいなくても正しくあろうとしていたから・・・

「だけど・・・世界は許してくれなかった。俺が生きることも・・・幸せになることも・・・許してくれなかったんだ!!!」

「ふざけんじゃねえ!!!」

ああ、ようやく気にくわねえ理由がわかった。

「世界が許してくれない？バカにしてんのかてめえは!!!俺はてめえが幸せに生きているのを見てるのが好きだったんだよ!!!」

そうだ、好きだったんだ。

初めての試練の後、過去を吹っ切ったこいつが……

みんなのためじゃなく、自分の思った行動を率先してやろうとしていたこいつが……

ノワールの隣で笑っているこいつが……

シロウが幸せになった姿を見ているのが好きだったんだ。

「何が世界が許してくれないだ……だったら、俺が許してやる」

「力がないんだったら身につける。世界が立ちほだかるんだったら一緒に敵対してやる。お前が苦しんでんなら、何度だって助けてやる!!!」

「世界だって、なんだって踏み台にしろ!!!」

お前が幸せになれるんだたらなんだってしてやる……俺はお前のパートナーだ!!!
「今度幸せになることが許さないなんて言ってみやがれ……俺が……俺たちが絶対に
幸せだったって言わせてやる!!!」

その瞬間、光が満ちた。

泡のような光だった。

その一つ一つには記憶があった。

『ねえ、貴方の名前はなんて言うの？』

『シロウさん・・・戦闘準備です!!!』

『シロウ君、またこれ作ってよ』

その中は暴食ツミノキオクの剣の一つだったけれど・・・

『お前たちは、先にカルデアに帰っていてくれ』

『シロウさん逃げてください!!!』

『フン・・・虫ケラ風情が我等の前に立ちはだかると言うのか』

『 | | | | |
 un^無li^限mi^のte^剣d^で | | | | |
 bla^出de^来 | | | | |
 My^こ | | | | |
 wh^たole^の | | | | |
 lif^体e^は | | | | |
 wa^はs、 | | | | |
 ”

『さあ、魔術王・・・魔術の展開は十分か？』

『ほぎくなよ、虫ケラ風情が!!!』

『・・・立香、マシユ・・・俺は『正義の味方』になれたよ』

決して、不幸な記憶ではなかったのだから。

「なんだ、幸せになってるじゃねえか」

シロウの手のひらのデジヴァイスから、シロウが出していないのに、二つの銃が現れる。

「アンソニー？」

「ちよつくら借りるぜ」

なぜかそれを手に取らなければならないと思った。

アンソニーは光輝いた・・・そうして、俺の姿は大きくなり、そして力が溢れてくるのを感じる。

「背中に違和感があるが・・・どうする、お前も戦うか？」

シロウは笑って首を振る。

「お前に頼むよ・・・ベルゼブモン」

「フツ・・・そうだな、俺が買ってきてやるよ」

赤い騎士はまだ俺たちの方を向いて立ち止まっていた。

「随分待たせたようだな」

『生憎と、このデュークモン・・・弱い敵に試練を受けさせるつもりなどありわしない』

「ハツ・・・じゃあ、この姿でも役不足だったのか？」

デュークモンは首を振った。

「その姿であるならば、このデュークモンの宿敵として相対してもいい……では、行くぞ!!!」

「ああ!!!」

俺へと攻撃してきた

その攻撃も今では遅く見える。しかし、それは相手も同じだ。俺の銃弾は硬い盾と鎧に防がれ、あまりダメージが通っていないように見える。

しかし、均衡状態は崩れ去った。

俺とデュークモンは力の溜めに入ったのだ。

「どうやら考えていることは同じのようだな」

「あいにくとこのデュークモン、やすやすと負けてやるつもりなどないのでな。全力でいかせてもらおう」

力を溜め終わった陽電子砲で魔法陣を書いた。

その中心へと陽電子砲を向けた。

そして、相手も盾の溜めが終わったようだ。

「聖なる光が敵を撃つ」

「こいつは俺たちの世界への決別の一撃だ!!!」

『ファイナル・エリユシオン』

『カオス・フレア』

そして、俺の一撃がデュークモンを貫いた。

「ルーチェモン」

「なんだい、シロウ」

「俺は生きることに決めた」

「そうか・・・その覚悟、どこまで続くのか楽しみにしているよ」

そう言ったシロウの髪は真っ黒に染まっていた。

第十二話 聖杯戦争と士郎の隠し事

「もう、なんなんですよの!!!」

ルヴィアさんの愚痴が始まってから約一時間が経った。凜さんは自分よりも怒っている存在がいるので、苦笑いを浮かべている。

「カミシロのせいでこんなにも計画が遅れてしまいましたわ!!!」

「まあ、それはいいじゃないの・・・ちゃんと工事も終わったんだから・・・それよりも、対ギルガメツシュ戦について話しましょう」

凜さんがルヴィアさんをどうしようと、怒った馬を落ち着かせるように言い聞かせた。まだ怒っているルヴィアさんを無視して、最後の説明に入った。

「いい、私たちがやることは一点突破・・・ギルガメツシュに宝具を使われる前に攻撃するのが吉・・・わかってるでしょうね!!!」

ギルガメツシュの宝具を聞いてしまった以上、私たちにできるのは使われる前に倒すことしかできない・・・そう、前回の会議で決まった・・・それを凜さんが最後の確認として言った。

「はい!!!」

「わかってるわよ」

「ええ、わかっていますわミス・トオサカ」

凜さんの最終確認が入った。

「不確定要素の『デモンズ』は、とりあえずギルガメッシュのカードの回収が終わってから考える・・・これでいいわね!!!」

先程と同じようにみんなが大きく頷いた。

「決行は明日の夜八時・・・それまでにルヴィアの屋敷に来ること・・・イリヤとクロ、いいわね!!!」

「はい!!!」

「わかってるわよ、凜」

「それじゃ、解散!!!」

最後に大きな声で、締めた凜さん。

その後、私たちは家に帰るとバイトに行く前のお兄ちゃんに出会った。

・・・そのとき、クロがお母さんの部屋に突然と走り出した。

どういうこと、

どういうこと、

どういうこと!!!

「ママツ!!!」

私は急いでママの部屋へと向かった。

「クロエちゃん、そんなに慌ててどうしたの?」

言いたいことが山ほどあったのに、ママの顔を見て何を言えればいいかわからなくなつた。

「いきなり走ってどうしたの、クロ!?!」

「お嬢様方、そんなに走ってどうかしたのですか!?!」

「クロエ、イリヤ・・・どうしたの?」

イリヤが走って来たとすれば、下の階のリビングにいた二人もママの部屋に集まって

来た。

「なあに、クロエちゃん」

ママは私の焦りようにいつものほんわかとした雰囲気をやめてくれた。

「ママに聞きたいことがあつてきたの」

「聞きたいことつて？」

「まずは、カードと聖杯戦争との関係よ」

私が先に聞いておきたい……いえ、本当に聞きたいことが言えなかつただけね。だけど、これも一応私が聞きたいことであるには間違いない。

「カードつて……何？」

ママはとぼけたふうには見えなかつた。

だから、私は今まで私たちがやってきたことをママやイリヤ、それにセラとリズの前で話した。

途中、イリヤは止めようとしたけれど、どのみち聞かれたら話していたと思つたから、今のうちに話すべきだとイリヤの言葉を無視した。

「そういうことだつたの」

「……奥様、とりあえず宝石翁とその弟子の二人とは話をしなければいけませんね」

ママは感心していたが、セラは話を聞いて怒っていた。だけど、それじゃあ、話が進まないから私はママに聞いた。

「ママ、続けてもいい？」

「いいわよ、クロエちゃん」

「十年前の聖杯戦争でのシステムとは違ってた。

昔の聖杯戦争は七人の英霊を七つのクラスに分けて召喚して、なんでも願いが聖杯を求めて最後の一人まで戦い、勝者を決める言っちゃ悪いと思うけど、ただの儀式だった……でも、今回のは違っていた」

「カードを媒体にして召喚されて、そのうえ八枚目のカードが現れたということね」
顎に手を当てたママが、少し難しそうな顔をしながらそう言った。

「ねえ、ママ……本当にシステムは変わったの？」

ママは私を見て、静かに手に持った本を閉じた。

「いえ、変わってないわ。」

むしろ、十年前の戦争以降、私たちアインツベルンと魔術が絶えてしまった間桐の前参加者の魔術関連の友人、遠坂の遠縁、そして魔術教会がそれぞれを警戒して、それぞ

れを監視しながら聖杯を監視している、そのおかげでシステムの改竄はおろか聖杯に干渉することすら難しいわ」

アインツベルンに遠坂と間桐、それに魔術教会・・・私たちの知らない単語だらけで、イリヤは話についていけないさそうだ。

「じゃあ、お父さんが海外に行ってるのも・・・」

「もう二度と聖杯戦争なんて起こさないように、キリツグが頑張ってくれているのよ」
じゃあ・・・

「じゃあ、どうして・・・」

カードは現れたの？

そんな疑問が頭に残っていた。

「クロッ!!!」

イリヤが突然私の手を引っ張ってきた。

「行くよ、クロッ!!!」

「ちよつと、待って……待ってって言うてるでしょ、イリヤ!!!」

私を連れて行くとうとしたイリヤの腕の力が緩んだ。

まだ……まだ聞きたいことがあったから、つい大きな声を出してしまった。

「ごめん、イリヤ……私はまだママに聞きたいことがあるの」

呆然としたイリヤ。その姿に、少し私は罪悪感を覚えるが、どうしてもママに聞きたかった。

「……ママ」

「クロエちゃん……ほかに、何が聞きたいの？」

口がつぐむ。どうか間違っていて欲しいと、どうしても思ってしまう。

「……」

「どうしても辛いなら、ここに来なさい」

私の様子に気づいたのか、ママはポンポンと膝に手を置いて優しくそう言った。

「ううん、大丈夫」

「……そう」

本当は大丈夫なんかじゃない。

どうしても思ってしまう、どうしても願ってしまう。私の見間違いだってことを、でも私の目にははつきりと見えたから、ママに聞かなきゃいけないんだ……私は知りました。

かったから……

「……ママ」

「なあに、クロエちゃん？」

私はこんがらがる頭の中をようやく整理した。

そして、ママに聞く覚悟ができた。

「……お兄ちゃんの体はいつたいつたどうなってるの？」

「「……ッ!?!」」

その言葉を聞いたとき、ママは椅子から立ち上がった。

「……クロエ、シロウにいったい何があったの？」

その言葉で、ママとセラ、リズは知らないことがわかった。イリヤは聞こうとしたが、ママの手で制した。

「もう一度、聞いわ……シロウにいったい何があったの」

そして、ママは私にもう一回聞いてきた。

先程とは違う、ものすごいプレッシャーを感じた。これが、アインツベルンの魔術師なんだと思つた。

そして、さっきのことを私は伝える。

「……お兄ちゃんの体がときどきだけど、イリヤやママみたいなの真つ白に見えたり、髪の毛の色が赤色のはずなのに墨で塗りつぶされたような真つ黒な色に見えたりする」
「それって本当なのですか、クロエ様？」

私は特に見えたことはありませんが、リズは？」

「ううん、そんなふうになつたのは見たことがない」

やっぱり、二人には見えてなかつた。

イリヤは少しオロオロしているが、ママは真剣な表情で私を見ていた。

「セラも言つたけれど、それって嘘じゃないわね、クロエちゃん」

「ええ、嘘じゃないわ。」

「……最初は見間違えじゃないかと思つたけど、二回同じことが起きれば話は別よ」
「二回といつたけど、いつから見たの……正確に教えてもらえないかしら？」

なんだかママに尋問されているような気がするけど、しつかりと伝える。

「初めてお兄ちゃんにあつた時が1回目で、2回目がさつきお兄ちゃんと玄関ですれ

違ったときよ……イリヤの頃は見たことなかったけど、イリヤと私に別れてから見れるようになったみたい」

「だから、あのとき走ったの!?!」

「ごめん、イリヤ。本当は聖杯戦争のことを夜にママに聞くつもりだったけど、お兄ちゃん姿を見たら、急いでママの元に行かなきゃって思ってたね……」

『ううん、もう大丈夫だよ』とイリヤは言った。

ママは私の話を聞いて、ゆっくりと話しはじめた。

「……クロエちゃん、三年前って覚えてる?」

三年前……忘れもしないお兄ちゃんが行方不明になった一週間のことだろう。覚えていたから私は頷いた。

「帰ってきたとき、シロウは『覚えていない』って言ってたけど、最近シロウが三年前の一週間を覚えていたことがわかったの」

「……え?」

イリヤと声が重なった。

セラとリズの様子に変化はなかったから、たぶんそのことを知っていたのだろう。

「それで、お兄ちゃんは三年前、何があったのッ!?」

イリヤは焦ってそのことをママに聞いたけど、ママはゆっくりと首を横に振るだけだった。

「シロウはいつか自分から話すって言っていたけど・・・」

「たぶん、その変化は三年前に起因していると思うわ」

その日は結局よく眠れなかった。

そして私たちはギルガメツシユに敗戦した。

・・・そして、

「なんなのよ・・・あれはいつたい!?!」

「いえ、そんな悠長なことは言ってられないようです」

次元にヒビが入っていく。

そう、ギルガメッシュは鏡面世界から飛び出してきたのだった。

今は遠き日の記憶 『傲慢』と『選択』

最初にイグドラシルから聞いたときは、馬鹿な話だと思った。

以前、人間の手によつて救われたからと言つて、今度も人間の手を借りて戦えば勝てるなんて、本当に耄碌したんだと思つたんだ。

シロウと初めて出会つたとき、面白いと思つてしまった。

その在り方を、その生きる意味を、最初から黒く塗りつぶされている生き物なんて見たことなかつたからである。

だから、僕はシロウを人形シロウと呼んだ。

たとえば世界が滅びようと、人形みたいな彼の行く末はみてみたかつた。

だから、わざと試練のことや魔王について教えなかつた。

この前のは、とても面白かつたよ。

醜く、苦しみ、それでも仲間に助けられ前を向いていく……

よくある英雄譚みたいじゃないか!!!

しかも、僕に向かつて『生きたい』なんて言つたんだ。

認めようシロウ。

君は人間だ。

だから魅せてくれ。

君の英雄譚を……

剣は案外簡単に見つかった。

「シロウ、さあ戦いに行こう」

「ああ、そうだな」

ああ、愚かだな。

この世界に正義などないのに。

人形と人形の戦いを見させられて、どこか物足りなさを感じる。

正義という無駄な感傷などどうでもいい。

僕は今のシロウを見ていたいんだ。

話に聞いていた通り、目が覚めた。

「ハハハハ？」

何も無い空間・・・いや、星の光がある。

「これは宇宙みたいだ」

「宇宙であつていると思うぞ、ルーチェモン」

よく聞いた声だ。

振り返ると、シロウも起きていたようだ。

『ルーチェモン・・・なら、俺たちも全力でいかせてもらおう』

『拓也やるぞ』

シロウが驚いた様子で後ろを振り返った。

まるで、予想外の事態が起きたみたいじゃ無いか。

『『エンシエントスピリット・エヴォリユーション!!!』』

シロウは急いで戦闘態勢をとった。

だが、僕は先行させてもらおう、進化している最中に攻撃してはならないという規定もないしね。

『グランド・クロス』

僕が出した、小さな星々でできた十字架が進化の途中の二人へと襲いかかった……しかし、そこに立っていたのは……

『『スサノオモン』』

「……チツ、ダメージなしか」

「ルーチェモン、下がれ!!!」

手元に黒色の大剣を持ったシロウが、スサノオモンの方へと投影した武器を向ける。

『『終焉防ぐ欲望の剣』』

『んなッ!?!』

『ハア!?!』

そうすると、彼らの姿は二体のデジモンへと別れた。

『どうして、カイゼルグレイモンに!!!』

『カイゼルグレイモン、あの剣だ!!!』

カイゼルグレイモン・・・ドラゴンに近い姿をしているデジモンは驚き、もう一方の名前のわからないデジモンはシロウの攻撃だと理解した。

「よし、成功!!!」

喜ぶシロウの声を裏目に僕は、カイゼルグレイモンと呼ばれたデジモンの方へと飛んで行く。

『暴食の剣』ツミノキオクでは失敗したと聞いた武器がだったが、今回の戦いで通用したみたいだ。この試練の前に、わざわざ時間をとってオメガモンたちと練習した甲斐があったみたいだ。

『終焉防ぐ欲望の剣』オメガ・ブレイドの弱点はいくつかあった。

一つ目、合体などの不完全な融合は分解することができる。

以前、オメガモンとの修行では、ウオーグレイモンとメタルガルルモンの二体に分けることができたことをシロウに聞いた。しかし、かつて戦った『暴食の試練』のデュークモンは人間とデジモンに分けることができなかつたことを悩んだシロウは、噂でどこかで世界を救うために人間からデジモンになった存在がいると聞いたことがあつたことを思い出して、そこへ行ってもいいかと聞きにきたが、流石にオグドモン復活まで時間が足りないことをシロウに伝えたことで話をつけた。

しかし、魂レベルの融合は分解できないこと。

これは、今の攻撃で確信したことだ。

本来なら、デジモンと人間二人に戻るはずだった。

しかし、カイゼルグレイモンともう一方のデジモンに分かれたのは、もともと、二体のデジモン・・・影の二人が、それぞれ魂レベルの進化融合をしてから、スサノオモンへと進化したのだと予測できた。

『なら、もう一度だ!!!』

『行くぞ、マグナガルルモン!!!』

「そうはいかないよ、『グランド・クロス』」

『うッ……グアアアアアアッ!?!』

もう一度、合体しようとしたら二体の一方に接近して、僕はカイゼルグレイモンに必殺技を放った。なんとか防御したカイゼルグレイモンだが、二体のデジモンは、狙い通り僕へと意識が向いた。

シロウは走って、僕とマグナガルモンの間に割って入った。

『カイゼルグレイモン!?!』

両断された二体の間に僕とシロウが割って入った。

「目をそらしていいいいのか？」

—— トレース、オン
投影、開始

背後に気づいたがもうシロウは武器の投影を開始している。

それはかつてユピテルモンとの戦いで使った剣だ。シロウがボロボロに追い詰められてもなお、折れず、砕けず、かけることがなかったその剣を投影した。

—— トリガー、オフ
投影、装填。

「全工程投影完了《セット》——」

『そんな破砕剣、受け止めてやる!!!』

右腕に取り付けられた銃で防ごうとしたマグナガルモン。

その行動に僕はニヤリと笑ってしまった。

「『ドラモン・ブレイカー神殺しの竜剣』」

シロウは、剣の重さに耐えきれず、真つ直ぐマグナガルルモンの方向へと振り切っただけであつたが、さすが神殺しの剣……マグナガルルモンを真つ二つに割ることができた。

『マグナガルルモンツ……テメエツ!!!』

「余所見は禁物だと、仲間の行動から学ばなかつたのかな。」

くらえ、『グランドクロス』

カイゼルグレイモンがシロウへと余所見をしたときに、無防備の体に僕の三度目の必殺技『グランドクロス』が入って、トドメを刺した。

そして、大幅な眠気に襲われる。

「どうやら、進化しなくても試練は超えることが……できた……ようだ……ね』

二つの戦争。

僕が見たのは、ケモノかヒトガタかの たかが見た目の違いだけで、愚かにも戦争を続ける患者の世界……

シロウにはこの世界はどんな風に見えたのだろう？

次に見たのは、僕とは違うルーチエモンが世界を導く姿。それに反抗したデジモンたち。

進化しなくとも、究極体を圧倒し続けた結果……ルーチエモンは負け、封印された。

この記憶には少し不平があるものの、もう一度くだらないものを見た。

何度も同じ不平を繰り返し言い続けるデジモンたち。

その結果、もう一度僕が復活の準備を始めた。

優秀ゆえに気づいたデジモンたちは、関係のない人間を巻き込んだのだ。

……それは、僕らも同じか。

シロウに聞くべきことが増えた気がする。

復活したものの、今度は完膚なきまでに倒されてしまったルーチエモン。

．．．．．そんなところで、目が覚めた。

「ねえ、シロウ．．．この世界に呼ばれたことを後悔していないかい？」
起きたシロウに僕は聞いた。

「後悔してるし、軽く考えてきたことに反省している」

．．．．．そうか、僕はあの愚かものどもと一緒なのか。

「．．．．．でも、」

「これは、俺が選んだことだし、今までの『選択』を間違っていたとだとは、今の俺は考えていないさ」

その言葉に少し、照れ臭くなってしまった。

すると、突然地震のようなものが神殿を襲った。

「シロウツ、外に出る・・・僕に捕まって!!!」

そして、僕らはその時絶望を見た。

世界を侵食する絶望を。

第十三話 表の戦い 裏の設営・・・そして・・・

「・・・くつ、始まりやがったか」

街の灯りはほとんど消えたことがわかった。

魔術協会の干渉により、街全体の電力が供給されなくなったので、予備電源使い、機会を操作し続ける。

「・・・シロウのやつも無茶なことを言うよな」

「アラタは別にいいんじゃないかな、俺は予備戦力として連れてこられたんだから」
むすつとした顔で、金色のカードを持った友人。

俺は話を聞きながらも、作業の手を休めない。

「おたくはこの作業がどれくらい辛いかわかってんのか!？」

『EDEN』を乗っ取った時だつて、戦闘には向かわなかったのに、今、俺たちは英雄王の戦いの真下にいるんだぞ!!!」

「そこは大空洞の真下・・・つまり、カミシロが大空洞の真下に擬似龍脈を作り出したのである。」

「龍脈の下に作るなんて馬鹿な真似、ほんつとうに乗らなきゃよかったぜ!!!」

「そう言った、アラタ一番乗り気だったけどな!!!」

わはは・・・と笑った千歳にイラツとくる。

「うるせえ、千歳・・・おい、もうそろそろ行った方がいいんじゃないか?」

「そうだね・・・もう行くよ」

そう言つてタクミは走り出した。

もうそろそろ、魔術協会の連中が山に入るところだ。山に仕掛けた監視カメラからそ

の様子が見えた。

「・・・シロウ、本当にお前だけでいいのかよ」

電力を街全体から奪い尽くす。

それを使い、デジタル情報を集めて、擬似龍脈へと大量に流し始める。

「そうは言つてられないぜ、アラタ。」

俺たちは俺たちにできることをやるんだ」

「ああ、そうだな」

そして、合図が来るまで俺たちは擬似龍脈へと次々に流して、山全体を覆い尽くすように収束させる。

・・・準備は完了。

あとは、この作業を続けて、デジタルシフトになるのを待つだけだ。

「頼むぜ、タクミ、シロウ」

「アイリスファイル・・・ようやくきましたか」

「・・・この状況はいつたい？」

「たしかに、キリツグと一緒に十年前に、聖杯を封印したはず・・・」

「これじゃあ、まるで・・・」

「聖杯の術式が起動しています」

「それは、嘘であつて欲しい一言だった。

だから、おかしいことがあつた。

「・・・ツ!？」

「ありえないわ、アレは単独では動くことのできないもの。私がここにいる限り・・・」
「ですから、起動しているのはアインツベルンとは別の術式ですよ・・・」

「ーーツ!？」

「驚くことばかり・・・それも、悪いことが立て続けに起こるなんて・・・まるで、
第四次聖杯戦争あみたいじゃない。」

「その中心に美遊とイリヤスフィールがいます。

流石にこれ以上は教会側わたしも干渉できません」

私は急いで車の運転の準備をする。

「・・・一言、言っておきましょう。」

教会側わたし以外にも、この山に侵入している者がいます。どうか気をつけてください」

・・・まだだ、

・・・まだ、

・・・まだ足りない!!!

「イリヤさん、これ以上はッ!？」

ルビーの止める声がある。

でも、もつと、もつと出力を上げないと美遊は救えない。

「友のために身を滅ぼすか。」

君は、僕の全力に相応ふさわしいしい!!!」

彼が取り出した剣から、鏡面世界の中で見た地獄を思い出させた。

……. だけど!!!

「銘はない」

「僕はただ『エア』と呼んでいる。」

かつて天と地を分けた——文字通り世界を切り裂き、創造した最古の剣さ……感じるかい？

遺伝子に刻まれた原初の記憶をさ…….」

彼は言った。

「世界ごと君を切り裂き」

「今ここに原初の地獄を織りなそう!!!」

頭が空っぽになった。

まだ足りない部分がある。

「ルビー、まだ全力じゃなかったよね」

いつのまにか口に出ていた言葉。

「しかし、イリヤさん・・・!!?

いえ、これ以上は無粋ですね・・・私も全力でいかせてもらいます!!!」

ありがとう、ルビー。

「筋肉も」

体が軋む。

「血管も」

血の流れが速くなるのを感じる。

「リンパ腺も神経も」

体の痛みで、目が絡みそうになる。

……でも、

「わたしの全部を使って!!!」

全・力・じ・や・な・い・と・美・遊・は・助・け・ら・れ・な・い・!!
!!

『ク・ヴ・イ・ン・テ・ット・フ・ア・イ・ア
多・元・重・奏・飽・和・砲・撃・!!!』

『エ・ス・マ・エ・リ・シ・ユ
天・地・乖・離・す・る・開・關・の・星・!!!』

……まだ、まだだ。

こんなんじゃ美遊を助けられない!!!

『クワインテットファイア
多元重奏飽和砲撃』がギルガメッシュを飲み込んだ。

．．．なんだろう、夢を見ている。

どんな夢か．．．わからない。

でも、優しい夢のような気がする。

暖かい場所．．．優しい場所．．．幸せな場所．．．悲しい場所．．．苦しい場所．．．
辛い場所．．．楽しい場所．．．

わたしなんか、手にしてはいけないような気持ちになる。

『美遊がもう苦しまないでいい世界になりますように』って願われたんだろ』

．．．．．そう願ってくれたのに、わたしには何もできなかった。

『『やさしい人たちに会って欲しい』って』

でも、出会えたよ・・・とてもとてもやさしい人たちに

『『笑いあえる友達を作って欲しい』って』

うん、作れたんだ。とても大切な友達・・・

『『そうか・・・作れたんならよかったな』

でも、わたしなんかその子のそばに行ってもいいのかな？

『お前の居場所だろ、自分で『選択』^{えらぶ}よ』

わたしは戻りたい!!!

『なら、大丈夫だ・・・だから、お前もこんなところに来るなよ』

鎖の少年が見えた．．．そこには、彼女のような満点の星空が広がっていて．．．．．
その景色が遠く見えた時．．．．．

「イリヤ．．．？」

かのじよ
イリヤの立っている姿が見えた。

「．．．．．泣いてるとこ、初めて見た」

「えっ．．．．．？」

イリヤに言われてわたしの頬に涙が流れているのに気づいた。

「ミュ．．．大丈夫でしたか!!!」

「二人とも無事!!!」

「美遊様!!!」

たくさんの人に心配されていて．．．．．

「美遊様は、馬鹿です．．．本当に馬鹿です」

「ごめん、サファイア」

こんなにも嬉しかったのは久しぶりなんだ。

・・・そんな時だった。

「イリヤさん、美遊さん上空から魔力はー」

ルビーが言おうとした時、天空から、

雷撃が降ってきた。

「なっ・・・なにが・・・ッ!？」

私たちは、なすすべもなく倒れ伏した。

『『インストロ夢幻召喚』』

・・・この声はッ!？」

「誰よ!？」

クロの声が聞こえた。

「ハン！ようやく見つかつたと思つたら、なんだかオマケがうじゃうじゃいるんですけ

どー」

「捨て置け」

やっぱり……

「今は最優先対象のみを回収する」

あいつらがわたしを追ってきたんだ!!!

「お迎えに上がりました、美遊様」

奴らが近づいて来る。

「……いつ、イヤ……戻りたくない!!!」

わたしは、戻りたくないかない!!!

あんな男のところなんかに!!!

「そんな口が聞けるようになるとは……ですが、バカンスはおしまいです」

……嫌だ、あんな奴のところになんか行きたくない!!!

あの女がわたしを掴もうとした時・・・

「斬^{シユナイ}・・・撃^{デン}・・・」

イリヤの攻撃が、わたしとあの女の間に入ってあの女を引かせた。

「・・・ほう、まだ抗える力があるとは」

「美遊は嫌がつている・・・友達として、そんなところへは連れて行かせない!!!」

イリヤはわたしとあの女との間に入って、女の前に立ちふさがった。でも、あいつには英雄王のカードがある・・・

「イリヤ・・・逃げて・・・」

ボロボロの体で立ち塞がるイリヤ。

そんな体じゃ、立っているのもやっただろう。

「まあいい、揺り戻し」

『天地乖離する開闢の星』で空いた穴が、元に戻ろうとしている。

「嫌だ、あんな場所になんか!!!」

そして、白く世界が染まろうとした時……

世界が歪んだ。

「おい、いったいなにが起きてやがる!!!」

先程の雷撃を放った少女が叫んだ。

「……この歪み、まさか……?」

バゼットがなにか言いかけたとき……

「どうやら間に合ったみたいだな」

わたしと、イリヤの前に立った二人の青年。

赤いローブに、首にかけたゴーグル・・・何一つ見たことのない格好だけど様になっていて……………

「貴様は・・・!?」

「イリヤ、美遊・・・」

振り返ったその姿は……………

「お兄ちゃん!!!」

「あとは任せろ・・・俺が来た!!!」

第十四話 雷撃と天雷と本当の自分

ボロボロの彼女たち・・・

無防備な状態であの雷撃をくらったみたいだね。

士郎からギリツと、何かの音が聞こえた。

「タクミさん、頼みます」

はあ、と少し溜息を俺はついた。

「いいよ、少しぐらいなら話していても問題ないよ」

手元にカードを出しながら背後の士郎を見る。

「あーあ、士郎だいぶ怒っちゃってるな」

「貴様等は何者だ・・・いや、もう一人のほうは知っている。正確には、貴様は何者だ」

俺たちの登場にフリーズしていた侵入者が声をかけてきた。

「さあね、ただのしがない探偵助手だよ」

平行世界で俺を救ったアルファモンのように、俺は静かにそう言った・・・つと、もうそろそろ作戦を開始しないと。

「その彼女もらっていいかい？」

「あ、!?なんだ、テメエ!!!」

この体は、全部ジュリアン様のものに決まってるだろうがツ!!!
げっ……!?

なんか嫌な勘違いをされた。

「いやいや、そういう意味じゃないよ。」

ただ、場所を移して戦わないかって言ったんだよ」

「場所を……移すだど?」

金髪のほうの彼女が眉をひそめた。

「あいにくと彼の間合いで戦うと彼の邪魔になりそうなんですね……君もそうなんだろう」

さっきの雷は、彼女の攻撃だ。

これは、金髪の彼女がここへ来るときに『夢幻召喚』^{インストロ}をしておらず、ギルガメツシュのカードを『夢幻召喚』^{インストロ}したことで推測できた。そして、ギルガメツシュのカードを使い剣の雨を降らせる金髪と、雷の広範囲攻撃と近距離戦法で戦う彼女では、同じ場所です戦うには相性が悪いのだろう。

「私達は、その少女を連れて帰ることが目的だ。貴様等と戦う必要はない」

「残念だけど、それは無理だよ。」

『マヨヒガ空間』のままでは君たちは元の世界に帰ることはできない。これは俺達が起

こした現象だからね・・・俺や士郎を戦って倒せば、もしかしたら元に戻るんじゃないかな？」

これは嘘だ。

俺達を倒しても元の場所には戻れない。しかし、街の停電が復旧して、擬似龍脈のデジタルウェイブが途切れたら、マヨヒガ空間から強制的に元の世界へと戻ってしまう。

タイムリミットがあるわけだけど、こちらとしては何も問題はない。

「では、なぜベアトリクスを・・・？」

「簡単なことだよ。君の相手はあっちだからさ。」

それに・・・」

彼女への問いに、親指で後ろを指す。

そこには倒れている彼女達を介抱している士郎の姿があった。

そして俺は言葉を付け足す。

「あの程度の雷撃ごときで自慢げな君が滑稽で仕方ないからね」
「・・・なんだとツ!!」

あまりにもお粗末・・・としか言いようのない雷撃。

滑稽すぎて、笑えないよ。

「待て」

キれているところも、金髪の彼女によつて抑えられている時点で、ふざけているようにしか思えない。

「さつさと、連れてけ!!」

「テメエを先にぶちのめしてやるツ!!!」

「じゃあ、行こうか」

士郎・・・もう充分時間を稼いだよね。

タクミさんが会話をしている時、俺は倒れている五人へと近づいた。

「・・・お兄ちゃん?」

「イリヤ、よく頑張ったな。」

しばらくの間、眠ってていいぞ」

『接続』

『リンク覚悟の剣』

俺の足の下からベルフェモンの鎖を取り出した。

「ゆっくりお休み」

ベルフェモンの鎖で包む・・・そうすると静かに寝息を立て始めた。

「衛宮くんツ!？」

「シエロ!？」

二人が気絶から戻ってきたらしい。

「やあ、遠坂にルヴィアさん・・・夏休み以来か。

とりあえずこの三人を見ていてくれないかな？」

そうして、寝ているイリヤと気絶している美遊とクロエを渡してあいつへと視線を向ける。

「シエロ、危険ですわ!？」

あの女は、ギルガメツシユという・・・ああ、もうつ、どう説明すればいいんですの!!!」

ルヴィアさんが相手がどれほど危険な相手か教えようとするも、魔術師ではない一般人の俺に説明してもいいものか悩んでいた。

「大丈夫だ・・・だいたい状況はわかっているさ」

「そう・・・衛宮くん、貴方は魔術側の人間なのね」

遠坂は冷静に考えているが、少し違うな。

「少し違うな・・・俺はどちらかといえば、科学側の人間だと思うぞ」

「・・・なツ!?! いったい、どういうことよ!?!」

平静を装っていた彼女が慌てているので、少しだが笑いがこみ上げてくる。

「とりあえずは今は俺に任せてくれないか？」

遠坂はなにかを察してくれた。

ルヴィアさんはまだ、思考が安定していない様子。

「衛宮くん……とりあえずは預かっておくけど、あとで絶対に話を聞かせてもらうからね」

「……ああ」

「……お兄ちゃん」

意識を少し回復美遊がそう言った。

俺を『あの』衛宮士郎と重ねているのか、俺の服を離そうとしない。

「俺は君のお兄ちゃんじゃないし、代わりにもなれない……だけど、安心して眠っててくれ。その頃には終わっているからさ」

そう言つて俺は彼女の手を服から話して、敵のほうへと歩いて行つた。

「ありがとう、待っていてくれて」

「貴様を倒さなければ、彼女を連れて帰ることができないからな……一つ、聞きたいことがある」

「貴様等はなぜ邪魔立てをする？」

彼女と貴様はこの世界では関係ないだろう？」

「……ああ、それは俺にしかわからないことだったな……と、思い出した。

「恩人の妹に恩を返しにきただけだ」

この解答であつてゐるだろう。

「恩人……だと!!!」

貴様はあの男には出会つたことすらなかつたはずだ。それなのになぜ恩人だと言える!？」

「出会つたことはない……だけど、知ることができた。

そのおかげで俺は、一時いつときでも彼に救われたんだよ。

お前にはわからないだろうが、彼は俺に『選択』えらぶことの大切さを教えてくれたんだ

よ……そのおかげで、俺は今ここにゐる」

『出会つたことはない』……だと、わからない!……なぜ、そんなことが言える!!!」

……滑稽だな……ここまで、不毛な会話を続けるとは。俺しかわからないことを言つたところで、無駄だろうな……

「結局、誰かのキオクなんて本当に知ることにはできないさ」

関わってきた人々と、経験したこと。

それをどう感じるかは人それぞれ・・・本当に知ることなんてできやしない。どう感じるかは、当人の気持ち次第だが。

「あいにくと、こちらも時間がないんでね。

このまま、不毛な会話が続くというのなら、戦わせてもらおう」

「ほう・・・ならば、貴様と戦い、彼女を連れて行こう。そうした方が、懸念もなくこのまま終わることができる!!!」

そして、俺達の戦いが始まった。

「・・・ここら辺でいいかな」

山の中腹・・・あの二人の戦火が届かない場所まで来ることができた。

「へえ、じゃあ見せてくれよ、俺のテーマの雷をよ!!!」

彼女はすでに臨戦態勢のようだ。

俺はポケットにしまつてある金のカードを取り出した。

「・・・なんだ、そのカードは!？」

「このカードは、君たちみたいな『劣化品』とは違う、完全に『複製』されたカードだよ……盗人風情にはわからないだろうが」

その言葉に再びキレた様子の彼女。

・・・俺は助手とはいえ探偵だ。

彼女達のことを知つてから、なんて傲慢なんだろうと思つてしまった。

他人の力を、まさに自分の力のように使う。

そんなものは見ているだけで不愉快だ。

『『インストロール夢幻召喚』』

そして、この世界を侵食しよとしている。

だから、倒そう……

『『キャスター魔術師ケルビモン(善)』』

この姿で。

「へえ……なかなか、可愛らしい姿してるじゃねえの」

姿としては顔の部分が空いている着ぐるみだ。

「そのカード……本体振じ切つてあたしのコレクションにしてやるよ」

しかし、奴は俺の逆鱗に触れた。

「盗人風情が調子にのるなよ……たかが、あの程度の雷撃放つたぐらいで」

「なんだとツ!!!」

そう言つたら、案の定キレた様子の敵さん。

だけど、俺もとつくに切れてるんだよ。

「あれが本気だと思つたか……ジュリアン様から許可はもらつてないが、ここは並行世界だしな……躊躇なく『二雷目』をブツパさせてもらうぜ」

ハンマーに雷が集まつていく。

さつきより何倍もの威力があつた。

……でも、《たかがそれだけだ》。

「見せてやるよ、本物の神の雷撃つてやつをよ!!!」

「吹き狂え、元素の彼方まで、」

『万雷打ち轟く雷神の嵐!!!』

ハンマーを振り下ろしたとき、雷の柱が俺に迫ってきた。

ミヨルニル・・・ということは、北欧神話の神の雷撃だろう。

・・・それが、どうした？

「力を貸してくれ、ケルビモン」

俺達の旅路でこの程度の敵に阻まれたことはない。

ならば、答えてくれるはずだ。

お前の本当の力を!!!

『ヘブンス・ジャツジメント』

一瞬だった。

天から降りた雷が雷の柱を一掃した。

「・・・んなッ!?!」

だが、天から降る雷は止まらない。

屠った雷撃をもともせず、一瞬で主人の敵を捕捉し、敵を命を根こそぎ奪うために、地面を這う。

自身の自慢の攻撃が弾き飛ばされて、呆然と動くことができなかつた彼女は、天雷によつて焼き尽くされた。

悲鳴すら響かない轟音が、地面を貫いた。

彼女の声は届くまもなく、雷によつて吸い尽くされたのだ。

雷が終わると、ひとりの少女が倒れていたのが見えた。

「そういえば、カードは意識を失えば外れるんだつたかな」

そして、俺は戦いの場所を目指した。

「・・・士郎は大丈夫だといひけれど」

目が覚めたとき、少しだけ前のことを思い出した。

たしか雷を受けた後、お兄ちゃんがわたしたちを助けてくれて・・・

「お兄ちゃん!!!」

「美遊ッ、起きましたの!?!」

ルヴィアさんが目の前にいる。

「お兄ちゃんは、お兄ちゃんはどうなったの!？」

「少し落ち着きなさい。衛宮くんは貴女のお兄ちゃんじゃないわよ」

そう言っている、凜さんもイリヤの治療に専念している。

「・・・土郎さん?」

そうだ、ここはわたしの世界じゃない。

じゃあ、わたしを守ってくれた土郎さんはどうなったの!？」

「ルヴィアさん・・・土郎さんはどうなったんですか?」

「・・・それが・・・」

ルヴィアさんは苦しそうに唸った。

そして、ルヴィアさんが向いている方を見ると、片膝をつけて傷だらけの土郎さんがいた。

「・・・無様だな」

無傷の彼女は俺を侮蔑した目で俺を見た。

「貴様の投影はあの世界の衛宮土郎のものより・・・いや、我が宝具よりも上のランクの

物を投影できていた」

それはそうだ、七つの並行世界の衛宮士郎の投影の経験が俺の中にある上に、俺はあの世界を生き延びたのだ。それに、『罪の剣』によるバックアップもあるため、あの世界の大体の武器は投影できる。

「・・・しかし」

だが、『それでも弱点はある』。

「貴様はあちらの衛宮士郎とは違い、投影する速度が圧倒的に遅い・・・特に、物量を投影しようものならば、もっと時間がかかるだろう」

なんて、情けないんだろう。

いつのまにこんなにも愚かになっていたのだろうか？

そんなときだった。

「これ以上、士郎さんを傷つけないで!!!」

美遊が遠坂たちのほうから走って、俺のほうへと駆け寄ってきた。

「わたしが戻れば、士郎さんを傷つけないんでしょ」

なんだよ、また俺は守られるのか？

「そうだ、こちらへとくれば、そこの男の命は助けてやろう」

こんな奴に見逃されるのか？

こんな雑魚相手に俺は淘汰されるのか？

許せるわけがない!!!

「・・・だったら!!!」

「大丈夫だよ、美遊」

泣きそうな目で俺を見た美遊。

そんな顔をしないでくれよ、俺はもう負けてやるつもりはない。

「ほう、まだ立ち上がる力があるのか・・・」

「あいにくと、そこら辺は『師匠』に鍛え上げられたのでね」

．．．思い出してくる

楽しかった思い出。

悲しかった思い出。

苦しかった思い出。

楽しかった思い出。

．．．そして最後の、

『みんな悪い、約束守れなかった』

本当に辛かった思い出。

なんで思い出せなかったのだろう。

俺は今まで『選択』^{えら}んできたというのに。

「．．．．．貴様は!?!」

俺は彼女を無視して美遊の頭を撫でた。

「・・・士郎さん」

できる限り、安心できる言葉を『選択』しよう。

「大丈夫、俺が守るから」

美遊の頭から手を離して、俺は『アイツ』に声をかける。

『決まったか』

「ああ、俺が間違っていた」

嫌いだ、嫌いだと言いながら、こんなふうにいるのが、楽しかったんだろう。

・・・だが、《《それもお終いだ。》》

『「接続」』

手をかぎそう。

あの夜空に届くように・・・

『「^リ繋^グげ」』

手をかぎそう。

あの日々に戻れるようにと
．．．

『「^リ壊^グれろ」』

手をかぎそう。

あの場所に戻れるようにと
．．．

だが、そんな場所はもうない

俺の居場所はここではない

『オグドモン』じゃない。

抑止よ、返してもらおう。

これは俺ノものだ。

体が作り変わる。

体に鎖が混じり出した。

皮膚が白くなつた。

髪は黒く染まつた。

繋リシクげしろおおおおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ズレた世界が一つになった。

「リンク帰、リミット・ブレイク世界制限破壊」

第十四話 産声をあげて

「……ただいまって言えばいいのかな？」

切り別れて三年間……ようやく約束通り戻ってこれた。

「……クヒツ……クハハハハハハハ!!」

「何がおかしい」

「そういえばいたな……こんな奴。」

「悪いな、久々にいい気分なんだ。」

「少し静かにしてくれないか……」

あのせかい
固有結界から武器を『選択』ぶ。

「……土郎さん？」

「ああ、美遊……ありがとう、君のおかげで元に戻ることができた」

「そうだ……この子のおかげで、俺は『選択』ぶことができたんだ。」

……そういえば、クソ抑止力のせいで、俺が三年も半分に別れたままだったのを思い出すと腹が立ってきたな。

「さっさと終わらせて久々に家族にも会うかな」

・・・抑止力が来る前に片付けるとするか。

「なんだと・・・先程の揺れには驚いたが、貴様はただ見てくれが変わっただけではないか」

『見てくれが変わっただけではないか』

たしかに、俺の姿は変わった。

髪は漆黒に染まり、肌は白く塗りつぶされた。

体：・・・いや、左目、右肩、左手のひら、右の太ももに左の足の甲、背中の中、そして、胸の心臓がある部分・・・それら全てに七色の模様が浮き出ている。

これは、罪の証・・・七大罪を受け入れた証である。

「本当に愚かだな『人形』」。

・・・俺がどう変わったかも、見て取れないのか」

「なんだとツ!!!」

奴は激昂と同時に、ランクの低い武器を射出した。

「士郎さん!？」

「大丈夫だ」

使う武器は決まった。

もう俺は投影する必要はない。

「来い、ベレン・ヘレーナ」

ベルゼブモンの銃。

俺のパートナーデジモンの一体が持っている銃の一つ。

奴の射出した剣へと一発・・・弾が空間ごと切り裂き、射出した剣を一瞬で塵へと変

えた。

「・・・なっ!? ならば、これでどうだ!!!」

俺の周囲360度から、無数に射出する。

・・・だが、

『ダブルインパクト』

八回・・・計十六発の弾丸が剣の来るほうに即座に反応し撃つ。それは、今まで欠け

ていた俺ではできなかつたことだ。

体が馴染む。

かつて、投影と接続リンクという工程おいて、行なっていたことが、今では一工程でできるようになっているからだ。

「なっ……貴様ツ!!!」

「今度は空間置換をしてスピードを上げる……か」

英雄王のカードを使う彼女を、失望した目で俺は見た。

「これなら、貴様も対応できないだろ!!!」

射出した剣の雨。

先程とは比べものにならない速さだ。

……だが、彼女は気づいていないのだろうか？

俺がもう『攻撃』していることに……

奴の射出した剣は俺に当たる前に消えて無くなった。

『リフレクト・ショット』

先程の『ダブルインパクト』の弾が反射して、奴の剣を粉々に砕いたのだ。

「……何が起こった!?!」

奴はそれに気がついていない。

「……本物の英雄王ならば、この程度の攻撃にはすぐに対処しただろう。まあ所詮、偽物だということだ。」

「この程度の小細工にも気づかないなんて、本当に英雄王のカードを使っているのか？」
これは単なる疑問だ。

あの意識があるヘラクレスを圧倒したサーヴァントのカードを使っているんだ。なんらかの対策を講じるのが普通だ。

だが、使つて来るのは剣、剣、剣……どこまで頭悪いんだ？

「ならばこれでどうだ!!!」

『イガリマ』『シユルシヤガナ』!!!」

それは一度見ている。

俺は『憤怒』を使用。

「掻き消せ、『フレイム・インフェルノ』」

大きな焔の渦が二つの大剣を蒸発させた。

「なん……だと……」

「……この程度かよ」

正直言つて、今まで苦戦していたのが馬鹿に思える。

この程度なら、普通に対処できていたはずだ。

もしかして意識まで抑止に干渉されていたのか？

実際にあり得る行為だ。

デジタルワールドを旅していた頃の俺ならば、カード集めの時点でデーモンのロープで介入して、全て集め終えて、爺さんに渡していた。だが、それに意識が向かなかつたのは、何故だろうか？

「余所見をしていいのか!!!」

彼女は『エルキドウ』を使って、俺の行動を止めようとするが……

「いや、それは悪手だろ」

『怠惰』を使用。

「燃えろ『ランプランツス』」

俺を縛ろうとしたエルキドウが、俺の鎖によつて阻まれる。

「くっ……貴様ア!!!」

苦し紛れの剣の雨も、『ランプランツス』絡めとり、溶解させた。

「……これ以上、無意味なことを続けるのか？」

正直言つて、これ以上は見るに耐えない。それに、もうネタ切れだろ。

他人の武器を使つて、ここまでのことしかできないなんて、滑稽通り過ぎて、逆に哀れだよ。

「……舐めるなア!!!」

彼女は英雄王の最終手段を呼び出した。

「これならッ……これで終いだ『偽物』!!!」

「……偽物……だと……」

「『投影、開始』」

「『天地乖離す開闢の星』!!!」

俺はただ一つの武器を記憶から投影した。

「『終焉防ぐ欲望の剣』!!!」

デジタルシフトごと消し去ろうとする一撃は……とある一言を言った為にかき消され

た。

その宝具の一撃は、ただ一つの愚かな一言が俺を『憤怒』だたせた。

「お前は友の銃を偽物だと言ったな」

俺の『憤怒』は頂点に達した。

人形であるはずの女が震えるほどに……

「見せてやるよ、決別の一撃を」

奴は、呆然とした。

自身の最も強いと確信した宝具を消しとばされれば、自信も喪失するだろう……だがな、お前は俺の逆鱗に触れた。

「来い、『陽電子砲』」

腕に取り付けられる巨大な大砲。

俺を中心に、一つの逆五芒星を描いた。

「塵芥全て消滅しろ」

「『カオスフレア』!!!」

奴の方向には山しかない。

だから、俺は全力の一撃を女に浴びせた。

意識が戻り、途中で盾を用意して防ぐものの、光線は盾全てを一瞬で消滅させて女に命中した。

残っていたのは、私服の女とギルガメツシユのカード。俺は女へと駆け寄って、ギルガメツシユのカードを奪い取った。

「これで、お終いだな・・・」

ガシリと掴まれた右足。

「まだだ、私は負けてなどいない」

奴は足を掴んでまだ戦おうとする。

「必ず、聖杯をジュリアンの元に届かなければいけないんだ」

本当に面倒だな・・・この手の相手には、会話も何も通じない。一番手っ取り早い手段は、『憤怒の剣』にあるピエモンの能力を使って人形に変えることなんだが・・・

「士郎さん!!」

「衛宮君!!!」

「シエロ!!!」

三人が起きていることなんだよな。

とりあえず、掴まれていない左足で背中を蹴飛ばして気絶させる。

「士郎さん、大丈夫!?!」

「大丈夫・・・もう、怪我はない」

体は変化の影響で傷がほとんど治っている。

「衛宮君、とりあえず状況を教えてくれないかしら?」

「あいにくと、俺にも把握できない部分があるがいいか?」

特に、勝ったとは思いますが、タクミさんの戦いの様子は知らないしな。

「シエロツ、シエロく!!!」

「とりあえず、ルヴィアさんはシエロシエロ言うのやめてください!!!」

遠坂に説明する前に、気絶した女を鎖で縛りあげようとした時・・・

「げっ、士郎にそんな趣味があったとは・・・あとでアラタに伝えたこと」

「タクミさんも、幼女抱えて歩き回ってたって所長に言いますよ」

「それだけはやめてください!!!」

なんていいながら、大空洞へと入ってきたタクミさん。

そんなとき、派手な外車のエンジン音が大空洞に鳴り響いた。

「・・・大空洞・・・ここにイリヤ達がつて、あらシロウ・・・なんでいるのかしら？」

アイリさんが登場した。

「衛宮くん？」

「士郎さん？」

「シエロ？」

「シロウ？」

「・・・なんか、怖いな。」

タクミさんに救援を求めてみるも、ゲラゲラと笑っていた。

「とりあえず、全部説明するんで一旦帰ってもいいですか？」

こうして、俺の・・・いや、俺たちの長い夜更けが始まった。

幕間の物語

第一夜 収束の裏側

「はい、わかりました。すぐに向かいます．．．だから、待っていてください」

士郎くんからの電話により、並行世界からの使者との戦闘に勝利．．．実験は成功したようだ。

「それでは皆さん、次に私が電話をかけてきたら『デジタルウェイブ』を止めてください」

「はい、わかりました!!!」

ここで、アラタさんや山科さんを含む私たちのチームが命令に従った。

私は地下から上がって、山の麓に出た。

そこに一台の車が駐車されていた。

「さあ、我が助手くんとバイトくんを迎えに行こうではないか」

そして、私は考える。

彼の口調から抑止力が危惧していたことが起こってしまったのだろう。

「．．．すみませんが、出発する前に二人、電話をかけさせてください」

杏子さんは頷いてくれた．．．基本的にタクミかさんのことれが関わらなければいい人な

んだよなと思いつつ、一人は連絡先に乗っているのですぐに連絡がとれた。

もう一人は、以前デモンズにハッキングしてもらった資料から、その電話番号にかける。

「はじめまして、こちら神城悠子と申しますが・・・」

『もしもし・・・君はいつたい?』

「・・・ここは?」

そういえば、知らない人たちが襲ってきて、それをお兄ちゃんが助けに来てくれて・・・

「・・・お兄ちゃんツ!」

目を開ければ、なんか襲って来た人はもう鎖で縛られてるし、ママはいるし、傷は治っているしで、わかんないことだらけだった。

・・・でも、一番わかんないことがある。

「もしかして、お兄ちゃん？」

「久しぶりだな．．．イリヤ」

髪は黒く染まって、肌もわたしやママみたいな真っ白になってる。目の中や左手には、変な痣が入ってるし．．．

「お兄ちゃん．．．左目や左手の痣はどうしたの？」

「．．．ツ!？」

少し驚いたお兄ちゃんは、『やっぱり見えていたのか』と言って、わたしから離れていってしまった。

そんなとき、ママが近づいてきた。

「．．．ママ?？」

「イリヤ．．．」

「．．．ママ、お兄ちゃんはいったいどうしたの？」

ママはゆつくりと首を横に振って、わたしを抱きしめた。

「シロウは．．．ううん、シロウにも言いたくないことがいっぱいあるの．．．でもね、イリヤ．．．わたしたちは家族だから、話してくれるときを待たなきゃいけないのよ」

お兄ちゃんは赤い髪の男の人話している。

そんなとき、美遊がこつちに駆け寄ってきた。

「・・・イリヤッ!?!」

「美遊・・・よかった」

美遊は連れて行かれなかったみたい。

「イリヤ・・・ありがとう」

「美遊も連れて行かれなくて本当によかった」

「士郎さんが・・・士郎さんが助けてくれたの!!」

美遊は泣きながら、わたしに説明してくれた。

その説明で、お兄ちゃんがなんであんなつたのかはわからなかった・・・ただ、お兄ちゃんにわたしたちに話していい、大きな秘密を抱えていることがわかった。

「それでね、そこで士郎さんがツ・・・」

「アイリさん、ちよつといいですか?」

そのとき、お兄ちゃんとママの会話の声が出て聞こえてきた。

電話を終え、とりあえず迎えにきてもらう方向に話がついた。先程、イリヤに聞かれた内容が頭から離れない・・・それでも、頭を振ってアイリさんに話しかけた。

「なに、シロウ?」

少し涙の後がある。

『やっぱり間違っていたのだろうか？』

そんな疑問が頭をよぎった。

何度も、『自分は間違っていなかった』と結論づけた『選択』こたえを再び自身に言い聞かせる。

「アイリさん、ちょっといいですか？」

それでも口は動いていた。

「なに、シロウ？」

少しはにかんだ笑みで、彼女は俺に返事をした。

「俺たちは迎えが来るので、アイリさんたちは先に帰っててください」

「えっ、でも……」

アイリさんは戸惑っているようだ。

たしかに、この言葉には戸惑わせてしまうのも仕方がないと思った。たぶん息子だと思っっている……いや、一緒に暮らしている人間が、ここまで変化するのは流石に心配

になるだろう。

そこで、俺はタクミさんのほうを見た。

「俺は彼と一緒に帰ります」

「わかったわ」

それと、伝えなければならぬこと。

「……家に着いたら全部話しますから」

小声になってしまったけれど、アイリさんが固まった表情になったので、わかりやすかった。

「……ふう」

士郎君の話し合いが終わって数十分が経過した。

遠坂とエーデルフェルトのお嬢さんがたは文句を言いつつも、彼女らとともに無事帰っていった。

……しかし問題は、

「だから、タクミさんと私が後ろに乗るって言っているじゃないですか!!!」

「いや、助手君は助手席に乗って私の隣に座るべきだ」

……この問題をどうするかを考えることだ。

彼女らが帰って数分後、俺たちの迎えが来たが、俺が助手席に座るか、後部座席に座るかの喧嘩が始まってしまった。

どこかで見たことがあるが……思い出せないな。

士郎君は、アインツベルンのみなさんが帰ってから、すぐにどこかに消えていった：そのせいで、逃げて行きやがったという恨み言すら言うことができない。

「だいたい、いつも一緒にいるんですから、せめてこういう場所では譲ってくれたっていいじゃないですか」

「あいにくと、それは譲れないんだ。君に助手君を奪われたくはないのでね」

醜い言い争いを見ている、理由がはっきりとしない：もし、アラタがいたら、『またこれか』……と言ったため息をついてしまうのはなんとなく予想ができた。

「それで、タクミさん（助手君）はどっちに座りたいって言うんですか（だ）!!!」

喧嘩がヒートアップしてきて、俺にまで飛び火してきた。

そこで、今まで探偵をやつきた俺の灰色の脳細胞をフル活用して、どうこの状況を乗り切るかを考える。

．．．．．これだ!!!

「えっと、悠子さんが助手席に座ればいいんじゃないですかね？」

うん、これなら喧嘩は止まるはずだ．．．．

「私たちが聞いているのはそう言うことじゃない!!!」

あつさり、無視された!?

いつも悠子さんを止めてくれる勇吾がいない、仕事案件だからと割り込んでくる山科さんがいない、適当に茶化して誤魔化してくれる千歳くんがいない．．．．

．．．この状況、いつたいどうすればいいんだ!!!

はやく帰ってきてくれよ．．．土郎君。

そこから十五分、その喧嘩を止められなかった。

そんなときに、先程戦っていた穴から土郎君があがってきた．．．ひとりの、傷だらけで裸の少年を抱えて。

「すみません、俺とタクミさんを後ろの席に座らせてくれませんか？この少年をどうしても、連れて行きたいんです」

俺が言った時よりあっさりと二人は受け入れた受け入れた。

夜の街が見える。

私は見慣れた病室で布団に入っていた。

「．．．少し頑張りすぎたかな？」

．．．でもそのおかげで。

そう思つて、手元の金と黒のカードを見た。

中心には金と黒の螺旋、二人の道化師は一方は金、もう一方が黒に染まっている。空に光が見えて．．．きつと、君の作戦が成功したことがわかった。

それがどこか、悲しくて．．．

彼がひとりなのはなんだかとても嫌だった。

……だから、

「……いるんだよね」

その言葉とともにゆっくりとドアが開かれた。

そこには何年も会っていないお兄ちゃんの姿があった。

「……いつから気づいていた」

悲しそうなその顔で、お兄ちゃんはそう言った。

「最初からだよ」

その顔が少し驚愕が混じっていたのも、少しだけおもしろかった。

「だって、あの事故以降、この部屋になる前も、《ずっと私の病室の前に立って帰って行くお兄ちゃんの姿》をみんなが私を元気付けるために教えてくれたんだから、すぐにわかったんだよ」

千歳やシロウが教えてくれた。

いつつも、病室に行くたびに辛そうな顔をするお兄ちゃんのことを、毎回メールで教

えてくれるんだから・・・そう付け足して、私は千歳から送られてきたメールを見せる。
「・・・千歳のやつ」

お兄ちゃんは少しだけ笑った。

そんなお兄ちゃんにひとつだけ頼みたいことができた。

「お兄ちゃんがどんな気持ちで、ここにきているのかわからない・・・それでも、私のことを妹だと思ってくれるのなら・・・」

言葉が詰まった。

お兄ちゃんの顔が私を見ていた。

「私の妹としての最期のお願いを聞いてくれるかな？」

第二夜 集まる人々と過去を知る人々

二つの螺旋の空間、そこに私は立っていた。

私と相對するのは二人の少女^{わたし}。

『ねえ、貴女は何を選んだの？』

蝶^{わたし}の少女^{わたし}が言った。

私がここにいること。

『貴女はどこへ行きたいの？』

獣^{わたし}の少女^{わたし}が言った。

思い出したのは、赤髪の少年。

．．．．．せめて、彼の側に。

『．．．．．そう．．．．．』

二人の少女は私を見た。

そして私は言った。

力が欲しい．．．せめて、あの人の隣にいられる力が．．．．．

二人は顔を見合わせて、静かに頷いた。

『いいよ、貸してあげる』

『これで貴女は私、わたしは貴女．．．』

そして、彼女たちのうでが私に触れた．．．．

そして、私は見覚えのある実験室で目を覚ました。

「もしかして、夢？」

パソコンの中にあるカードを見ながら、私は首を振った。

「ありがとう・・・わたし」

そんなとき、ゆつくりとドアが開かれた。

「どうかしたのか、エリカ？」

「なんでもないよ、お兄ちゃん・・・すぐに始めよう」

お兄ちゃんはもう頭にヘッドギアがつけられている。それを見て、寝起きの頭で、机に座った。

そして、私はパソコンを操作し、別のページを開いてその中にある複写カードコピーの上書きを始めた。

車は走る。

夜・・・というには少し明るくなった山麓へと向かうために。

「・・・朝になりましたね」

あのあと少し騒動があり、結局四時あたりから車で山を降り始めた。

「士郎があんなことしなければこんなことにはならなかったよ」

「まあ、いいじゃないか。私はあれは面白いと思つたよ」

ムツとした顔をしたタクミさんに、少し笑っている杏子さん・・・そして、悠子さんは首を傾げている。

「士郎くん・・・なぜあんなことをしたんですか？」

「あはは・・・つい・・・といつても理解してくれそうにありませんね」

うわ、この人既に目がすわっている・・・いつもなら怒らずに考える人なのに・・・それほどまでに、タクミさんの隣に座りたかつたのか。

「なぜ、彼女たちの隣に置き手紙なんておいたんですか？」

・・・なんだ、そのことだったのか。

俺は子供のギルガメッシュを車に乗せたあと、鎖で縛つた彼女らに置き手紙を残した。そういえばこの人たちに見せずにおいてきてしまったな。

「簡単ですよ・・・こちらに美遊がいる限り、彼らはまた狙つてくるはずですから、『今度そちらの世界にお邪魔する』って内容を書いてきました・・・ところで、カードのほうはできていますか？」

俺にとつてはそっちの方が重要だ。

「それならいいです……カードですか、ちよつと待つてください」

目はまだすわっているが、バッグの中から封筒をひとつ取り出した。

「はい、これであつていますよね」

封筒の中身を確認する。

『セイバー』、『アーチャー』、『ランサー』、『ライダー』、『キャスター』、『アサシン』、『狂戦士』の七枚の金のカードが確かに存在していた。

「はい、確かに」

以前のお願ひにより、この七枚のカードを作った。

この封筒は特殊な装置が使われている……タクミさんのバッグを劣化しているが、再現したものだ。大量のデータを持ち込めないが、カード数枚程度なら、封筒の中に入れていれば現実にこれるぐらいには。

「本当にそれでいいんですか?」

実験のときに一枚しか『幻想召喚』^{イリュージョン}ができなかつたことを懸念しているみたいだが、俺はこれでいい。

「ええ……と、もうすぐですね」

そろそろ山麓が近づいてきたので急いでカードを封筒に入れる。もちろん隣で気絶

している、子供のギルガメッシュをできる限り起こさないように注意してだが。
「……うわっ!？」

少し車体が揺れたとき、眩い朝日とともに世界は元に戻った。車の後ろを振り返ると、未だに歪んだ世界が見える。

悠子さんは携帯電話を取り出してこちらを向いた……と、同時に目をギョツと見開いた。

「……土郎くん、肌の色が……!!？」

「土郎、鏡、鏡つ!!!」

「……えっ、いったいなんなんですか!？」

タクミさんはポケットから携帯を取り出して、画面をこちらへと向ける……そこには……
は……

「……嘘だろ……!!？」

先程まで、変化していた肌・髪の色、そして……自身の体に浮き上がった紋章が消えて無くなり、戦う以前の姿へと元に戻っていた。

「……すまないが、驚くのは後にしてくれないか？」

バイトくんの変化もきになるが、もうそろそろ、街の人々も起きる頃合いだ。このまま街の電気を使い続けては迷惑だろう」

杏子さんは静かにそういったが俺は別のことを考えていた。この現象に対してひとつだけ思い当たる節があったからだ。

「・・・そうですね、それについてはあとで話を聞かせてもらいましょう。それじゃ始めますね」

俺とタクミさんは首を縦に振った。

悠子さんは地下にいるアラタさんへと電話をかけ、ワンコールが鳴ったと同時に・・・

ズドンっ・・・と、大きな揺れが山に響いた。

もう一度振り返ると、山の頂上は元に戻り、削られた後なんて残っていないかった。

俺という愚者を残して・・・

「・・・ふーん、わたしが寝ている間にそんなことがあったんだ」

わたしの意識が戻ったのは家に着いてからだだった。

起きたときに、突然イリヤと美遊が同時に話しかけてきて容量を得なかったが、そのあとリンとママが説明してくれた。

「・・・で、それって本当なの？」

謎の襲撃者、お兄ちゃんとカミシ口の介入、見覚えのある探偵、お兄ちゃんの体の異

常な変化、お兄ちゃんの魔術……いろいろと説明されたが、どうしても理解することはできなかつた。

あの場所になかつたリズやセラも首を捻っている。

いろいろと起こりすぎて実際に見ないとわからないのは、見てないわたしと同じのようだ。

「正直に言つて当事者である私たちが、全て把握しているかつて聞かれればわからないけど……今私たちが言つたことは本当よ」

そのとき、昨日のお兄ちゃんの姿が頭をよぎつた。

「リン、それは見てないわたしには理解できないわよ。もう少し理解出来るような……そうね、証拠でもあれば理解すると思うんだけど……」

信じてほしいリンに対して、わたしはどうしても信じたくなかつたそのとき、ルビーがイリヤのズボンのポケットからひよっこりと現れた。

『それならクロエさん、わたしたちの録画機能を使うのはどうでしょうか?』

そうして否定する間もなく、ルビーは映像を空へと映し出した。そこには、イリヤたちが寝ている間の戦う記録さえ残っていた。

「……本当だったんだ」

映像にあるお兄ちゃんの顔に刻まれたなんらかの模様、髪が黒く変化していることから、昨日見たあれは事実だつてことを理解させられた。

「……えつと、少し待つてくたさいね？」

「本当にシロウは知つてたんだ」

リズは手元にあるポテトチップスを食べていて、セラは事実を受け止めきれず頭を押えている。

「……つて、貴女はどうしてそんなに落ち着いていられるんですかつ？」

そんな様子のリズにセラは苛立ちをぶつけた。

「だつて、シロウに聞かなきゃわかんないでしょ……怒つたつて意味ないじゃん」

「……それはそうですが……」

リズの言う通り怒つたつて意味がない……それでも、お兄ちゃんが魔術を知つていたことや、お兄ちゃんの体の変化……それに、変化した後から明らかに宝具と思われる物でわたしたちが苦戦したギルガメッシュをあっさりと倒すなんて……

「ありがとう、ルビー……あんたの役目は終わったわよ」

『そんな酷いこと言わないでくださいよ。リンさん!!』

厄介者を追い払うようにリンが言い、それに文句を言おうとしたとき……

突然、玄関から呼び鈴が鳴った。

「すみません、少し出てきますね」

セラが最初に玄関へと向かった。

セラが扉を開けた音が聞こえたとき、大きな音がリビングまで聞こえてきた。

それに気づいて、リン以外のわたしたちも玄関に向かった。

玄関には二人の男性が立っていた。

一人は初老の外国人男性。

「ふむ、少々サングラスが過ぎたかの？」

もう一人の日本人男性には見覚えがあった。

「貴方が来れば、貴方を知っている人は誰だつて驚きますよ……」

その人を見たとき、ママもイリヤもわたしも動くことができなかつた。

「……切嗣ツ（パパツ）!!」

そして、その人はゆつくりとこちらを向いていて……

「……ただいま、みんな」

……その人……『衛宮切嗣』が帰ってきたのだ。

第三夜　そして少年は語り始める

「ただいま、みんな」

アイリヤイリヤは固まっているけど、少し起こった表情の黒いイリヤ・・・あれは話に聞いていたクロエかな？

こちらで起きていたことはセラやアイリに連絡をもらっていたけど・・・イリヤたちにも話が聞きたいかな・・・

そんなふうと考えていると、リビングの方からもう一つ足音が聞こえてきた。

「ちよつとイリヤ（さん）、どうしたの（んですか）・・・って、大師父（クソジジイ）!？」
遠坂の娘さんは僕をここへと連れてきた人物・・・キシユア・ゼルレッツチ・シユバインオーグを見て驚いていた。

「儂のことをそう思ったたんか・・・生みの親として悲しいの」

「黙れこのクソジジイ!!!」

「・・・なんじやと!!!」

それにしても、十年前に見たあの時よりもだいぶ大きくなつたみたいだ。

「それにしても、切嗣っ・・・一週間前に連絡した時には、まだどうぶん帰れないっていつ

てたのに、こんなにはやく帰ってこれたの!？」

あの時はいろいろと忙しかったけど……

「はやかったのは、例の件は舞弥の方に任せてきたからだよ。それで、どうやってこっちに来たかだけど……」

「こちらの御仁……宝石翁がの魔法で連れて来てもらったんだよ」

その前に一人の少女から使いを寄越すって連絡を受けていたのは、今は説明を省くでしょう。

「宝石翁ってことは……!？」

翁のほうを向くアイリに対し、翁は長く伸びた髭を触りながら……

「すまないが、どちらにも積もる話があるじゃろうから、とりあえずあがらせてもらえんかの?」

「……なるほどね、それで士郎がイリヤたちを助けたんだ」

僕はこの数ヶ月間に起こったことをイリヤとクロエから聞いた。

イリヤの宝石翁の礼装との契約から始まり、それによる遠坂家の娘さんとの出会いやサーヴァントとの戦い、カードの回収終了からのクロエがどんな風に生まれたか、そして魔術協会の使者との戦闘とギルガメッシュとの戦い……僕が思っていた以上にいろ

いろと起きていたみたいだ。

それにしても士郎の体の異常……か……

「映像を見た二人に聞きたいんだけど、士郎の体の異常について何かわかったことはあるかい？」

「うーんと、体はわたしみたいないない肌が変わったことな」

「髪は赤色だったのが、真つ黒……それも、綺麗な黒色じゃなくて塗り潰したような黒色に変わったのはすぐにわかったわよ」

体色と髪色の変化……それぐらいなら、珍しい魔術を使う者の代償としては有名だな。有名な者であれば、目の前にいる宝石翁も、吸血鬼へと体を作り変えられたとき、今のような老人へと姿を変えている。

「他に何かあるかい？」

士郎が何者であるか……それが現状の問題だ。

今ではこの街で最も有名になった企業……カミシロが士郎と関わって来ているから、少しも油断はできないからな。少しでも、士郎についての情報が欲しい。

「あとは……って聞かれても……?」

「そうね……あとは、体から浮き出たなにかの模様かしら……」

クロエが話した言葉に、模様自体が魔術なのではないかと考える……それが、自身の知りうるものかどうしても知りたい。

「模様……それはいったいどんな形をしていたんだい？」

クロエは紙をとって、三又の槍のような形を書いた。

「こんな形を丸で囲んだ模様が体からいくつか出ていたのよ」

まるで見たことのない模様だったが、クロエはいくつかと言っていたな。

「それは正確に幾つあったのかと、覚えている限りでいいから、体のどの部位から浮き出していたのかを教えてくださいませんか？」

「そういえば、目や手、足から出ていたのは見たよ」

「あとは左胸と背中、肩から一つずつ出ていたのをわたしは見たわ」

「……そうか、ありがとう」

イリヤとクロエの話から最低六つ、最大で十の模様が士郎の体に浮き出ていることが考えられた。

そして、居間に四人の人間が入ってきた。

先ほどの遠坂の娘さんと宝石翁、そして金髪の少女とイリヤと同じくらい黒髪の少女……彼女たちが、ルヴィアさんと美遊という子だとすぐにわかった。

「どうやらそちらも話が済んだようじゃな」

翁の方も話がすんでいるようだ……僕が美遊らしき少女のほうを見ると、彼女は少し驚いた様子でこちらを見ていた。

「……ふむ、帰ってきたようじゃな」

その一言とともに、数時間前の僕の時と同じようにインターホンが鳴る。

玄関からひとりの人間の足音が聞こえた。

ドアがゆつくりと開き、僕が前に見たよりも少し大きくなった少年がそこに立っていた。

「……お兄ちゃんツ!」

だが、士郎は話にでていた黒色の髪でなく、いつもどおりの姿で帰ってきた士郎がそこに立っていた。

「ただいま……って、親父も帰っていたのか」

士郎は呆れた様子で僕を……いや、僕の隣にいる人物を見た。

「……僕には何も無いのか?」

いった。

「・・・それで衛宮くん、話してくれるのよね」

「遠坂、みんなもあとで話すから・・・とりあえず、ルヴィアさんの用意ができるまで待つていてくれ」

士郎はそう言つて、部屋の外へと出て行つた。

あのあと、車の中で悠子さんから親父へと連絡したことを伝えられた。そして家へとついたときに親父や爺さんがいたことに対して驚いた。

とりあえず、ルヴィアさんに頼んで部屋を用意してもらい、その間にノキアさんと御島兄妹を除いたカミシロいっものメンバーも全員揃つていた。

衛宮家やルヴィアさんと遠坂と美遊はすでにルヴィアさんの家に集合していた。

親父とお袋のほうは、杏子さんのことを知っていたから、驚いた様子で俺たちを見ていた。

これで全員揃つたのだが・・・

誰一人として喋つていなかった。

「ねえ、お兄ちゃん、その人たちは一体誰なの？」

ルヴィアさんの部屋はしばらく無言だった中、クロエが最初に彼らについての話を切り出した。

「二応、関係者だよ。それよりも、どうしてみんな喋らないのさ？」

「いやあ、なんとなくタイミングを逃してしまつてね、それにどうやら注目されてるみたいだし、喋りずらかつたんだよ」

千歳さんは頭をかきながら苦笑していた。

それを見て少しため息をついた悠子さんが話を始める。

「とりあえず、紹介でもしましょうか・・・私の名前は神代悠子。カミシロエンタープライズの社長の娘です」

それを皮切りに杏子さん、タクミさん、アラタさん、千歳さん、勇吾さんの順に紹介を終え、俺へとこの場にいる全員の意識が向いている。

「それでようやく説明するのか、士郎」

「・・・ちよつとまつて、大師父は衛宮くんの体について何か知つていたと言うのですか!？」

遠坂が俺の首を振る前に、爺さんに説明を求めた。

「知つているもなにも、其奴を日本まで届けたのは儂じやよ」

そして、その言葉で周りの空気が変わった。

驚愕、怒り、疑問……それぞれの感情が衛宮家から爺さんへと向けられる。
……爺さん、余計なこと言いやがって!!!

「そこも俺が説明するので、静かに聞いてくれないか？」

誰かが声を出す前に、すぐさま俺は自分が答えると言った。

なんとかそこにいたメンバーはそれで止まったが、俺の説明がやはり難しくなったのが、現状だな……

……やばい、どこから説明すればいいかわからない。

「それで、シロウ……説明してくれますよね？」

先ほど、真つ先に爺さんへ殺気を向けたセラの怒りが、こちらへと向いてきた……と
りあえず、これから話すか。

「はあ、最初は衛宮士郎……について話していくことにするよ」

これが、一番無難だからな。

「……まるで、『衛宮士郎』自体の話をしはじめるみたいな話し方だね？」

「その通りだよ、親父……俺は『とある理由』により、並行世界のいくつかの自分を

「ついでに……それについても、話していくつもりだ」
カミシロメンバーと爺さん以外は驚いているようだ。

「……と、言っても断片ぐらいだけなんだけど……まずはここから説明しないと始まらないからな」

『……は、生きなさい』

俺は一瞬だが、ノワールのことを思い出す。

少し、自分にイラついた。

俺は迷い続けた結果が……これなんだと、カミシロメンバー以外の全員を見て、そう思った。

それでも進むために、俺は言葉を選んで話し始めた。

「これはたった一人の『正義愚かな人間の味方の話だ』

第四夜 衛宮士郎とは

・・・愚か者、そう士郎さんはみんなの前で言った。

「そうだな、始まりはだいたい『俺が親父に助けられた』ところから、衛宮士郎のくだらない物語が始まる」

並行世界の自分への侮蔑の言葉を言いながら、士郎さんは少し遠い目をして話し続ける。

さっきの言葉に少し違和感を覚えた。

「衛宮士郎は十年前の冬木の大火災で、唯一衛宮切嗣によつて助けられた」

お兄ちゃんから、災害の被害にあつたときに切嗣さんに救われたことは知っていたけど、並行世界でも火災じゃなかつたはず・・・そこが気になつたのだろうか？

「衛宮士郎は憧れたんだ・・・『泣きながら嬉しそうに自身の手を握る男の姿に』」

「・・・待つて、お兄ちゃんひとつ聞きたいんだけど？」

クロガが士郎さんの話を止めた。

・・・切嗣さんとアイリさんはなぜか暗い顔をしていた。なにかを察しているのだろうか？

「どうかしたのか・・・って、聞くのはおかしいよな。だけど、クロエ・・・悪いが話を続けさせてもらう」

真剣な表情でクロの質問を断った士郎さん。その表情に押され、クロは黙ってしまった・・・わたしは、士郎さんがクロのほうを見たとき、一瞬だけ切嗣さんとアイリさんのほうに目を向けた。そのときの目が少し鋭かったの見た気がする。

そして、士郎さんは話を続ける。

「そして、衛宮切嗣は衛宮士郎を引き取り、『数ヶ月後死んだ』」

わたしと切嗣さんとアイリさん・・・そして、カミシロの人たち以外全員が驚いていた。やっぱり切嗣さんはわたしの世界と同じようにしんでいたんだ・・・でも、『どうして切嗣さんたちは驚かなかったのか』という疑問が出てきた。

誰もが驚くなか、士郎さんはこの場にいるカミシロの人たち以外全員をさらに驚かせる事実を言った。

「これは、俺が見た並行世界の全てで起きた事象だ」

その言葉にまず反応したのは凜さんだった。

「ちよつと待つて、衛宮くん．．．!!!」

「最初に反応するのはお前だと思つていたよ．．．遠坂、それで聞きたいことはだいたい予想はできるが、一応なんの質問か教えてくれないか？」

先ほどの真剣な表情とは違い、いつもの優しい笑顔を見せる土郎さん。その言葉には、真つ先に反応したのが凜さんだとわかつていたみたいだった。

「その口ぶり、まさかとは思うけど、まるで私が最初に言うことがわかつていたみたい．．．まあ、それは後で聞くとして．．．」

凜さんの言葉が詰まった。

数秒．．．凜さんの緊張がわたしたちにも伝わり、その緊張が長く感じられた。

「．．．つよ」

凜さんの声が少ないだけだった。

緊張して声が出なかつたのだろう。しかし、土郎さんは凜さん型話すのを待つてい

る．．．．．そして、

「いったい、いくつ並行世界の自分を知っているのよ!!!」

凜さんは緊張感です大きな声で聞いてしまう。

「最低四つ、最多七つ」

そう士郎さんが単調に答えた。

緊張で包まれた空気であったが、その一言で凍りついたと言ってもいい。

だけど、わたしはその言葉をどこか冷静に聞くことができた。

「『最低』、『最多』ってどういうことですか？」

話を聞いても、質問をしても、まだのどにつつかえていような感覚がある。ほんとうにわたしが聞きたいことではない気がした。

「俺はとある試練を受ける前提として、並行世界の俺自身の記憶を閲覧……経験した。その中であつたのは、並行世界の俺自身の『過去』・『現在』・『未来』の三つ、そして『現在』の分岐した記憶が二つ、『未来』の分岐した記憶・『過去』の分岐した記憶が一つずつ……『計七回』の俺自身の記憶だった。

最低四つと言つたのは、『過去』、『現在』、『未来』の記憶がひとつの世界の可能性を考

えた末に、『最低』・『最多』という言葉をつけた」

・・・だから、土郎さんはそう言ったのか・・・ん、今、なんて言った？

『過去』・『現在』・『未来』の三つ・・・違う、そんなことじゃない・・・土郎さんはその前になんて言った？

わたしの違和感が増え続ける。わたしはなにか重要なことを聞き逃した気がした。

「・・・シエロ、その七つの記憶とはいったいどんな記憶でしたの？」

それでもわたしたちの会話は止まらない。

その中でも、わたしの嫌な予感は拭えなかい。

「ルヴィアさんも知りたいようだし、それじゃあ、『過去』から話そうか・・・いいよね、美遊」

そう聞かれたわたしは、つい首を縦に振ってしまった。

わたしの違和感よりも、お兄ちゃんとは違う土郎さんの『過去』のほうが気になってしまった。

土郎さんはゆっくりと話し始める。

「最初の記憶は火の海だったよ」

士郎さんは自嘲気味にそう言った。

凜さんとルヴィアさんが驚いている。

切嗣さんとかがアイリさんはどこか暗い顔をして、イリヤやクロはそのことがわからないのか首をひねっている。

「……そう、『十年前の大火災』だ」

わたしにはわからなかった。わたしは冬木市に災害があったことは知っているけど、それが火災ではないことくらい知っていた。

……原因の一端はわたしだから。

「俺はそのときの記憶を最初に取り戻したんだ」

「……取り戻した？」

士郎さんの言葉にはどこか、卑屈な気持ちがあつたような気がする。衛宮家のメイドさんの一人、リズさんがその言葉に反応した。

セラさんも同様にそのことを驚いている。

「いちおう、このことは親父たちには言つてたからな……でもきつかけはこれだったんだよ」

「……じゃあ、あのときの言葉は……!?」
『あのとき』

セラさんがそう言った瞬間、土郎さんはニヤリと口角を上げた。

「嘘ではないけど、あれのおかげで随分と長い時間俺の『約束』を守れた……誤解させたら悪かったよ」

わたしの耳に『約束』という言葉が残った。

土郎さんはなんらかの『約束』をしていたから、今まで喋らなかったのかという疑問が頭の中を増えた。

セラさんの表情が固まる。

土郎さんはらしくない表情で話を続けた。

「そして、衛宮切嗣が死ぬ夜に並行世界の俺は『正義の味方』を受け継ぎ、『呪われた』……その後の衛宮士郎は『正義の味方』になることに対して固執した」

『正義の味方』……その言葉で、とある一人の男の姿を思い出した。

『大を救うために小を切り捨てる』

人類を救うために、わたしの中の『聖杯』を使おうとしたあの男のように、並行世界のお兄ちゃんはなっただろうか？

「それは『現在』の記憶でもそうだ．．．と、ここまで疑問が生じたよな、クロエ？」

初めて、士郎さんが誰かに対して質問を要求した。

「ええっ．．．!? パパやお兄ちゃんは出てるのに、イリヤやママは出てきてないわ」
突然、一つの疑問が解消された。

士郎さんの言葉には、ここにいるはずの二人の人物が登場していなかったことだ。

「そうだ．．．俺の知っている世界ではこの世界以外、アイリさんは死に、イリヤはマスタ―として聖杯戦争に参加している」

『聖杯戦争』．．．たしか、アイリさんが言つた魔術儀式の．．．?」

士郎さんは嗤つた。

「それはまさか．．．?」

切嗣さんの動揺した声が聞こえた。

「その通りだよ親父．．．俺の知っている記憶だとこの世界と美遊のいた世界以外で、『第四次聖杯戦争』、『第五次聖杯戦争』が行われている．．．いや、『現在』の記憶ではマスタ―として俺は『第五次聖杯戦争』に勝利を収めている」

「ちよつと待つてお兄ちゃん、『聖杯戦争』つて、ただの魔術師の儀式なんじゃないの!？」
『聖杯戦争』を知らないイリヤもわたしも、話についていけない。

「ただの・・・じゃない、真正正銘、言葉通り『ある程度の範囲で、どんな願いでもひとつだけ叶えてくれるおもちゃを巡る冬木市の中で行われる戦争』だよ」

士郎さんは『聖杯戦争』の・・・『現在』の記憶説明を始めた。

あらゆる時代の七人のマスターと呼ばれる魔術師が、七体の英霊達を召喚し、冬木市内でたった一人を決めるまで戦い続ける・・・その戦いで、アーサー王を召喚し、並行世界のイリヤとの戦い、言峰綺礼に突きつけられた真実・・・そして、ギルガメッシュとの最終決戦を乗り越えて、聖杯を破壊したこと。

「それでも『正義の味方』を指摘したんだがな・・・『未来』の結果は残酷だよ」
「・・・それって、どういうこと？」

クロが士郎さんの言葉に反応する。

『残酷』・・・とはいったい？

「簡単だ・・・『未来』の記憶では俺は処刑されるのさ」

「・・・嘘よツ!!!」

あつけらかにそう言った士郎さんの言葉に、凜さんは即座に否定した。話の内容から並行世界の凜さんが手伝っていて、最後が処刑という終わりがわたしにもわからなかった。

「本当だよ・・・現に、クロエが証明してるさ」

「・・・わたし!?!」

士郎さんは一言、『投影』・・・と呟くと、クロクが使う二対の夫婦剣が現れた。

「ーッ!?!」

「クロエの中にあるカードの英霊は『エミヤ』・・・並行世界で処刑され、世界と契約した守護者だ」

士郎さんはその英霊の過去を話し始めた。

衛宮切嗣に憧れ、聖杯戦争を勝利し、英雄を目指した男は、少くない犠牲を出したが、その数千倍の人々を救った。

その結果が、友人に裏切られて処刑された。

それでもなお『正義の味方』目指して、世界と契約し、擦り切れた男の末路・・・それが、自身の『過去』の衛宮士郎を殺すことを目的とした英霊『エミヤ』。

わたしは吐き気をもよおした。

その生き方を教えられ、どうして平然と喋っていられるのかと思わずにいられなかった。

イリヤもクロも・・・士郎さんが連れてきた人たち以外、全員の顔が蒼白になっ

ていた。

「……どうした？ 悲惨なのはこれだけじゃないのに」

軽い口調で、驚くべきことを言った土郎さん。

そして話は『過去』へと戻る。

わたしの世界の話。

お兄ちゃんがわたしをとるか、『正義の味方』うけついでものを目指すかで悩み苦しんだ日々。

次は、アンリマユに乗っ取られた話。

繰り返される四日間と、殺され続ける日々を淡々と語った。

可能性の『未来』の話。

救いたかった人々を殺してしまい、『正義の味方』えい、い、ゆではなく、記憶も擦り切れた『傭兵』きかいへと成り下がった。

可能性の『現在』の話。

英霊エミヤが、再び『正義の味方』を目指した話。

だが、そこにはイリヤの無残な殺され方まで、伝えられた。

「……と、ここまでが、俺の知っている範囲の並行世界の記憶だ」

士郎さんは記憶をどう思っていたのだろうか……という疑問しか残らなかった。

「……随分、勿体ぶった喋り方をする。まさか、『あのこと』を喋らないつもりなのじゃろうか？」

今まで喋らなかった、ルヴィアさんの師匠が話した瞬間……士郎さんから恐ろしいほどの殺意が向けられた。

しかし、それもすぐにやみ、士郎さんは本当に悲しそうな表情をしていた。

「話しますよ、これはまだ『前提』の話ですから」

「……どういうこと、お兄ちゃんはその記憶を見て変わったんじゃないの？」

イリヤは『前提』という言葉に質問した。

わたしはどこかで聞いていなかったところがあつたんじゃないかと、焦り始めた。

「まあ、いろいろと話していたから、忘れたのかもしれないけど……最初に『とある試練を受ける前提』という話をしていた」

凜さんとルヴィアさんは大きな声をあげて、思い出したとでも言わんばかりに手を叩

いた。

しかし、土郎さんの言うことが正しければ……

「土郎が受けた『試練』とはいったいなんなのか教えてくれないか？」

『試練』……それが、土郎さんが変わった要因。

ここからが、土郎さんの根幹に関わるような話のような気がした。

「まあ、とりあえずは順序立てて説明していくさ」

「俺は『異世界』に行ったんだ」

第五夜 ハジマリ

『異世界に行ってきたんだ』

お兄ちゃんの唐突な一言。

誰も信じられそうにないと言った顔をしていた。

しかし、わたしはなぜかは納得していた。

どうしてなのかわからなかったけど、お兄ちゃんの言葉は本当なんだって理解するこ
とができたんだ。

「いやいやいや、流石にそれは信じられないわよ。

だって、並行世界を渡るのにも魔法が必要なのよ。それを一介の少年が……」
だけど、凜さんはみんなの言葉を代弁するようにその言葉を言った。

その瞬間、時は止まった。

その『一言』は言つてはならなかつた言葉だと気づいたのは、彼を見ていなかつたらだ。

「……ははは、流石に信じられないよな」

涙を流していた。

「でも、本当なんだ……アイツらはたしかに生きていたんだ」

カラカラと嗤いながら話す彼は、この場にいる誰もが壊れているように見えたのだらう。

『生きていたんだ』

わたしはこの言葉に違和感を感じた。

「……ねえ、お兄ちゃんがそんなふう泣くくらい大切な人だつたの?」

そう聞くとお兄ちゃんは、自分が泣いていることに気づいていなかったようで、驚いた顔で、急いで服の袖でゴシゴシと涙を拭いた。

「大切だつたよ……家族に会えなくてもいいと思うぐらいには」

その言葉にわたしはもう何も言えなかつた。

お兄ちゃんの『本音』はわたしの心に突き刺さつたからだ。お兄ちゃんが本気なのは

声を聞くだけで伝わって来た。それだけで、わたしの頭の中は空っぽになっている。

それだけ寂しかった。

凜さんたちは驚いていた。

お父さんとお母さんは悔しそうな表情をしている。美遊は泣いていた。ク口は……ただ悲しそうだった。

「そう思ったなら、士郎はなぜ戻って来たんだ？」

それはお父さんの口から出た言葉だった。

お父さんはその言葉を言い終わった後、思わず口に手を抑えた。その様子を見たお兄ちゃん、少しだけ寂しそうに微笑んだ。

「戻らなきゃいけなかったからだよ」

そこで私に疑問ができた。

『戻らなきゃいけなかった』

……それは、どういうことなのだろうか？

わたしやみんなのことをどうでもいと思えるくらい、本当にいたい場所に行けたの……なんで戻らなきゃいけなかったんだろう。

お兄ちゃんは天井に手を伸ばした。

そのときの顔が少しだけ、白く染まった気がした。

「……このぐらいでいいか」

そこからパキパキッと音がなった。そこには、何にもない場所だったはずなのに、うちのテレビぐらいいの大きさの水晶が現れた。

「……これは、いったい……?」

「ただのテレビの代わりだよ」

お兄ちゃんは平然と言った時に、水晶がテレビの画面みたいに映像が流れ始めた。

「実際に見てもらった方がはやいんじゃないかと考えて……始めから見るのは長すぎるから、ある程度カットしたものを流すか……」

大きな画面から今より若くて小さなお兄ちゃんが映し出される。それは、大量の本が置いてある施設のような場所だった。

「そうだな……きつかけは本当に馬鹿みたいなことだった」

お兄ちゃんは当時はうちの家にはなかったパソコンを使って調べ物をしようと電源

を入れていた。

「夏休みの宿題で『冬木の大災害』について調べようと、図書館のパソコンを使おうとした時に突然光り始めたんだ」

パソコンの画面の中から突然光が現れて、水晶の映像を超えた。

「えっ!?!」

「何!?!」

「……眩しッ!?!」

「……シエロッ!?!」

明かりがついている部屋をさらに太陽が照らすように光が放射される。

「……聞いていたが、まさかこんなに光ったなんて、予想してなかったぜ……!?!」
「そうだね……事前に知っていなければ、少し慌てていただろうね」

お兄ちゃんが連れてきたアラタさんとユウゴさんとの会話の声が聞こえてきた時、光が収まっていた。

そして、わたしは画面の変化に気がついた。

「懐かしいな、確かこんな出会い方だったんだよな」

映像から現れたのは宇宙空間……その中心にいるのは3対の羽を持つ少年天使だった。

『やあ、初めましてでいいのかな……？』

僕の名前は『ルーチェモン』というんだ。衛宮士郎くんではよかったよね』

映像の中のお兄ちゃんがコクリとうなづいた。

『ぼくたちは君をずっとずっと待っていた』

『あんたはいつたいなんなんだ？』

なんの目的で俺をここへと連れてきた!!』

天使：ルーチェモンに向かってお兄ちゃんは質問をした。少し、怒りを滲ませた：ううん、少し違うかもしれない。お兄ちゃんの表情には怒りとは違う何かを、わたしは感じていた。

『まずは、僕らの存在の説明した方がいいね』

『僕らはデジタルモンスター。』

電子の世界に住む、君とは違う生命体だ』

大袈裟に手を広げてルーチエモンはそう言った。

『・・・電子の世界・・・？』

『そう、電子の世界の世界・・・通称、『デジタルワールド』を救ってもらいたくて君を連れてきたんだ』

天使は自身の顎に手を当てて、愉快そうにお兄ちゃんを見ている。その姿勢にはどこにも頼むような気持ちなんかは感じ取れなかった。

『その姿勢のどこの、『俺』に救ってほしいという思いがあるツ・・・俺を馬鹿しないで、さっさと図書館へと返せ!!!』

・・・やっぱり、どこかお兄ちゃんの言葉にはなにかに期待しているような気持ちを感じていた。

ルーチェモンのその一言で理解することになるなんて、思いもしなかったけど……

『本当に返していいのかい……?』

君は、求めていたんだろ……『心の穴』を埋める何かを……』

『……ツ!?!』

「……心の穴?」

ルーチェモンは確かにそう言った。

映像のお兄ちゃんが動揺していたのが、見えていたからなんとなくだけど、お兄ちゃんにも自覚があつたように見える。

『君に存在する『心の穴』……ずっと存在しているんだろう……なにをしても、なにを感じようとも、決して埋まることのない『心の穴』を』

『……どうして、それを知っている?』

『さあね、君が僕たちの世界で旅をしていけばわかるんじゃないかな?』

ニヤリと笑って、お兄ちゃんを誘う姿は、天気ではなく悪魔に見える。クロがたまにお兄ちゃんを誘っている姿を見ることがあるけど、それとは違う嫌な感じがわたしの背筋を這いずる感じがした。

『それに僕たちは本当に困っているんだ。』

いままで幾度となく世界の終わりが来そうな事件があつたんだけど、今回は違う……僕たちや君たちの世界どころか、もしかしたらありとあらゆる世界というんだ定義すらなくなることになるかもしれない』

……ルーチエモンは、小馬鹿にする笑いから、少し難しい表情へと変わり、お兄ちゃんへと説明を続けた。

今、大事なことを言ったような……

「……って、世界の終わり!!?」

映像が流れている途中なのに、大きな声で叫んでしまった。静かにしていた周りのみんなと比べて、叫んでしまったわたしは恥ずかしくて、頬に手を当てながら周りを見た時……みんなは啞然としていた。

「……イリヤ、最後まで見たらわかるよ」

穏やかな声でありつつも、お兄ちゃんの声には寂しさが存在した。わたしの声が聞こえようとも、お兄ちゃんは映像は流し続ける。

『それに、その様子だと君が現在欲しがっているものは手に入れていないんだろう?』

欲しがっているもの?

……次々と不安な言葉がルーチエモンが言っているし、それを肯定するように苦しそうな顔をしているお兄ちゃんが見える。

『あんた全て見透かしているんだな、どれが欲しがっている『生きる理由』が世界を救うこととなんの関係がある?』

『苦虫を嘔み潰したような顔をする必要はないというのに……それに、安穩とした世界よりもずつとはやく、君の『生きる理由』が見つかるかもしれないよ』

静かに『生きる理由』と言ったルーチエモンの笑みには、どことなくただの少年らしい無邪気な笑顔と言葉自体の奇妙さに異質さを感じたけれど映像のお兄ちゃんはルーチエモンの顔を見ていなかった。

『五年の歳月をかけて見つかることはなかったものが、見つかるかもしれないよ。世界を救うという理想の果て……つまり、戦い続ける日常の中で』

力みすぎて震えるお兄ちゃんの手は、少しずつだけけれど力が抜けていくのが見えた。

『……もういい、わかった』

「そうだ、ここから」

そのときのお兄ちゃんの目は、

『俺を連れて行ってくれ』

「始まったんだ」

と・も・輝・い・て・見・え・た・。

◆? ◆? ◆?

二人の旅路が始まった。

最初の七日で、おばけに出会った。

おばけは世界の危機をすでに知っており、手助けをするために俺の仲間になった。

次の七日で赤いオタマジヤクシと出会った。

同類とは違っていると差別されていた。

俺はそれが許せなかったから、赤を助けるためにおばけとともに青たちを倒していった。

赤いオタマジヤクシはそれに感謝して、俺たちの旅路についてくるようになった。

次の七日でタマゴと出会った。

天使がそれを連れて行けと言って、俺たちはタマゴを持って行った。

次の七日で黒いシスターと出会った。

青を倒した件で騒動に陥ったが、なんとか説明をして納得してもらった。

しかし、シスターは俺たちを自身の旅路に巻き込んでいった。

そこから、人助けの旅路が始まった。

次の七日でタマゴが孵った。

中から出てきた悪魔はとても素直で、自身の役割を俺に伝え、旅路へと加わった。

次の七日で小悪魔と出会った。

いたずら好きなそいつは、街を追い出されてしまったのだが、人助けという成り行きで俺たちの旅路に加わることになった。

次の七日で死神と出会った。

死神は俺を殺すために立ちはだかった。

俺たちは力を合わせ戦った。

しかし、死神に敵うことはなかった。

そんななか俺たちに奇跡が起こり、おぼけが強くなって死神を追い払うことに成功した。

それから、死神は何度か俺たちと戦うことになったが、旅路の仲間に加わることになった。

次の七日

次の七日

次の七日

次の七日

次の七日

次の 七

次 七

あれから半年が経った。

俺が旅路で多くのデジモンを助けるために、事件や災害に首を突っ込んで行くたびに仲間たちは強くなって行った。

俺はなにをすればよかったのだろうか？

仲間が強くなるたびに自分の力不足からくる無力さと、身勝手な自身の行動に疑問を

持ち始める。

ルーチェモンの呼び出しがきた。

いったいなんの呼び出しだろうか？

次

次

次

ようやく仲間を助けられる力を手に入れた!!!

これでより多くのデジモンを救える。

次

あいつが死んだ。

俺はいつたいなにをしていたのだろうか？

わからない。

もうどうすればいいのか。

次の七日

最近、うまく笑えなくなった。

仲間にも俺の行動が制限されることが多くなった。

なにを救えば『師匠』は帰ってくるんだ？

次

結局、俺はどうすればよかったのだと考えることが増えてきた。だけど、そんなことを考えても、今更なことはわかっているんだ。

俺は『この世界を守りたい』

他の誰でもなく、『俺』と『師匠』に誓ったのだから

次

次の七日、

俺がこのデジタルワールドへと来てから、もうすぐ一年になる。

『奴』の復活が近づいていることを、ルーチエモンには伝えられる。

明日は最後の試練だ。

気を引き締めよう。

・
・
・
・
・
次の七日、

俺たちは『バケモノ』と出会った。

第六夜 蘇る絶望

・・・それは、バケモノだった。

神殿から噴出する黒い霧。

それが少しずつ形をとっていき、一本の足が生成される。

ただそれだけの存在だというのに、その不気味さは今まで出会ったどんな敵よりも恐ろしかった。

「成熟期・完全体は幼年期・成長期を別の拠点へと逃すんだ!!!」

隣にいたルーチエモンが透き通った声で叫んだ。

その声から、このことが現実であるという自覚を俺自身の中に刻み込むことができた。

「究極体は足止めに徹しろッ!!!」

バケモン、オタマモン、ファスコモン、ブラン、ファントモンは進化の準備をーッ
!？」

俺は全力でそう叫んでいると、俺とルーチェモンの何かが横を通り過ぎていった。

『グ・ラ・ド・ウ・ス』

その攻撃の余波をなんとか踏ん張って堪える。しかし、攻撃の余波は想像以上の威力の上、なにをされたのか理解ができなかった。

「・・・だ」

ルーチェモンが小さく呟いたのが聞こえる。

「あのバケモノが攻撃の手段で最も予想できるのは『蹴り』しかないっていったんだ!!!」

俺はその言葉に納得とともに『戦慄』を感じていた。

理由として・・・ルーチェモンが攻撃を見えなかったからだ。

ルーチェモンは成長期でありながらも、かつての四大天使・・・現在の三代天使の一席に置かれていたデジモンである。そんなデジモンでさえ、見ることすらできない存在

が敵に回っていることが何よりも理解ができなかった。

「喰らいやがれ、『バインドレッドトリガー』!!!」

「ヤレ『デルブリッツ』」

「『ダイナキャノン』」

マグナキッドモン、ガンドラモン、キャノンドラモンの銃撃の雨がバケモノの足に命中する。

「へへへ、やったか!？」

マグナキッドモンが自身の絶対の攻撃が命中したこと、相手が見えなくなったことから油断をしてしまう。

それも仕方のないことだった。

究極体の・・・どのデジモンも歴戦の強者すら一瞬で屠ることのできる必殺の一撃である。砂煙が舞う中でもあのバケモノにもダメージが存在するはずだと俺も少し気を緩めてしまった。

「士郎・・・決して油断をするな!!!」
ルーチェモンのその一言を聞いた瞬間、

『グランドウス』

三・体・の・デ・ジ・モ・ン・は・一・瞬・に・し・て・屠・ら・れ・た・。

呆然としてしまった。

俺は彼らの実力を知っていたからだ。

彼らはロイヤルナイツや七大魔王よりは弱い・・・しかし、決して弱くはないのだ。むしろ究極体の上からは上から数えた方が早い部類に入る。

そんな彼らをバケモノは一瞬のうちに倒してしまった。

今まで絶望なんて踏み越えてこれた。

・・・だけど、

絶・対・に・倒・せ・な・い・な・ん・て・感・じ・た・の・は・初・め・て・だ・つ・た。

「主、大丈夫か？」

・・・このまま、負けるのか？

『・・・シロウ？』

師匠が死んだ時を思い出した。

「・・・どうした、契約者!？」

嫌だ

「ねえ、しろー・・・しろーったら!!!」

・・・このまま死ぬのか？

師匠が消えた瞬間を思い出した。

「敵が来る・・・さっさと冷静になれ!!!」

嫌だ

「シロウ、しっかりしてツ!!!」

・・・このまま失うのか？

師匠ノワールの死を実感した時を思い出した。

「テメエ、なにぼさつとしてやがる!!!」

その答えを言う前にとつくに俺の体が行動を起こしていた。

「お前ら全員進化しろッ!!!」

悲痛が

聞こえない。

嘆きが

聞こえない。

叫びが

聞こえない。

俺にはなにも聞こえなかった。

◆?
◆?
◆?

戦闘の音が鳴り響く。

戦場には倒れ伏した仲間たちの姿があった。

そ·の·中·に·は·七·大·魔·王·の·姿·も·あ·っ·た·。

「···ああ」

次々と仲間が倒れていく中で、バケモノへのダメージが一切存在しないことを自覚していく。

「···ああああ」

俺には何もできなかつたという事実を理解した。

こんな中でも戦闘は続いている。

仲間が戦っている。

．．．．．それでも、

勝てないと思つてしまつた。

この絶叫によつてバケモノは俺に気がついた。

バケモノが近づいてくる。

どうでもいい。

バケモノが足を止める。

どうでもいい。

バケモノが足を振り上げる。

どうでもいい。

バケモノが足を振り下ろす

「・・・どうでも

「よくねえ、だろぅがア!!!」

いつのまにか、赤のマントと白の甲冑の騎士が俺を助けていた。

「……ジエスモン、どうして？」

そのとき、俺の体が浮いていた。

「てめえ、莫迦にしてんのかア!!!」

首が苦しい……。俺は胸倉を掴まれたことによく気がついた。

「俺の姉貴分が命賭けてまで戦ってんのに、パートナーのてめえが諦めてどうすんだよ……命かけろよ、」

てめえは『パートナー』だろうがツ!!!」

視界が揺れる。俺を叱ったジエスモン。その言葉が俺の絶望しか見えなかった目に、ようやく現実への実感を湧かせた。

「・・・パートナー？」

周りを見る。

デーモンが倒れている。

リヴァイアモンが倒れている。

ベルフェモンが倒れている。

バルバモンが倒れている。

リリスモンが倒れている。

ベルゼブモンが倒れている。

ルーチエモンが倒れている。

・・・俺は何をやっていた？

こいつらは俺を守る為に戦ったのではないのか？

それなのに俺は勝手に絶望して、現実を見ずにどうでもいいなんて思っていたのか・・・

「・・・ふざけるな」

自分自身が恥ずかしかった。

『轍劍成敗』 『鉄拳制裁』

後押ししたふたりの手によって、弾き返したんだ。

目の光が薄れゆくなか、師匠の顔を思い出した。

俺はあの人に近づけたのかな？

◆？
◆？
◆？

『もういいわよ、シロウ。よく頑張ったわね』

第七夜 最後の虚構（うそ）

「どうすればよかったんだ？」

後悔は今でもしている。

◆? ◆? ◆?

「……(ハ)は……」

目を開ければ、薄暗い光が差し込む天井が見えた。この場所が仮設用テントのうちの
一つであると思いつく。

「……そうか、そうだったな」

……嗤いを堪えた。

久し振りに敗走したことの馬鹿さ加減に嗤いがこみ上げてきたからだ。
今すぐにも泣き出したい気持ちが湧き上がってくる。

『もういい』

それでも涙は出てこなかった。

天幕が開けられる。

「・・・おや、どうやら目覚めているようだ」

そこには見知らぬ・・・いや、記憶でも見たことのなかったデジモンが立っていた。

「はじめまして、俺はアルファモン・・・最後のロイヤルナイトだ」

◆? ◆? ◆?

現在は仮設テントの一つ・・・医療を主に行っている場所だ。

「これで終了だ・・・おつかれ」

俺は『デジヴァイスIC』の技術を使って、何体ものデジモンたちの怪我を治している・・・これで最後か。

「うん・・・ありがとう、シローツ!!!」

最後の幼年期のデジモンに絆創膏を貼った。

幼年期のデジモンは俺に笑顔に向けて、元気に笑顔を向けた。

夕陽は沈みかけ、夜がやってくる。

いつもと違った静かな医務室・・・今の時間帯ならウオーグレイモンとメタルガルルモンが、ほかのウイルス種のデジモンと大喧嘩して・・・それをデルタモンやマンモンが喧嘩を止めて、その喧嘩での怪我を治すためにここへとやってくるのに

・・・今は誰もやってこない。

「・・・何体死んだ？」

わ・か・っ・て・い・る・は・ず・だ。

「突如、現れたオグドモン」

コツコツと歩く音がする。

「逃げ惑うなか混乱した者、取り乱す者、幼年期、成長期合わせて15体」

揺れる六枚の白い羽。

「それを守ろうとして混乱に巻き込まれた者、成長期、成熟期合わせて10体」

金髪の髪からは包帯が見え隠れしている。

「逃げる者を守る為に殿として攻撃を請け負った者、成熟期、完全体合わせて27体」

透き通るような声は、あの時のように現実を突きつける。

「あの場に残り、最後まで戦った者・・・55体」

ゆつくりと見上げた先に・・・

「計107体・・・君が見殺しにした者、守ろうとした者も含めて、オグドモンが殺した
デジモンたちだ」

ルーチエモンがいた。

◆? ◆? ◆?

あんなに激しい戦いがあったというのに、月の光は窓から差し込んでいる。カーテン越しだというのに、綺麗だと思ってしまうのは、何故だか笑いがこみ上げてくる。

・・・これは自嘲だ。

何も出来なかつた俺自身への、くだらない感情でしかない。

「・・・それが、どうした？」

ルーチェモンのセリフには、俺は何も感じなかつた。

「・・・シロウツ!!!」

ルーチェモンのいかりと驚きが混ざつた声に・・・何も感じない。

「君は何も感じなかつたのか!!!」

下らない感傷だと感じる・・・しかし、自身の言葉がするりと溢れてしまった。

「・・・感じたさ」

「それでも、前に進まなければいけないんだ・・・」
最後に残った笑顔で笑う。

「・・・シロウ？」

俺の顔を見て、理解できないといったふうに驚愕するルーチエモン。

そんな中でも月は俺を残酷に照らす。

それでも綺麗だ・・・と思ってしまうのは、あの日見た光景つぎが俺の幸せな思い出だからだろう。

「・・・ルーチエモン、ここに全員を集めてくれ」

覚悟でも、決意でも、ヤケでもなく・・・

「オグドモンを倒す方法がわかった」

俺は『諦観』を持ってそう言った。

◆?◆?◆?

お兄さんが映像を流し始めて、数時間……映画のように少しずつカットされた映像も、終盤を迎え始める。

最初に始まったフアントモンとの戦いから、ついさつき戦ったオグドモンの戦い……私には、『何故お兄さんがこの存在たちに戦いを挑んでいけるのか』理解できなかつた。

雷に打たれても

大きな刃で切り裂かれても

遙か上空から落とされても

弾丸の雨に撃たれても

狂いそうな狂気に陥っても

吐き気がするような最低な攻撃を受けても

絶対に倒せない相手が現れても

……再び立ち向かえたのは何故だろう？

理解とは裏腹に映像は、オグドモンへと立ち向かう瞬間へと変わる。

『本当に勝てるのかよ？』

インプモンが言った。

映像越しに見ていた私にさえ、その言葉は理解できなかつた。

『それでも信じてやるしかない』

フロントモンが言った。

疑いと信じたいという気持ちがある半々の答えを返すしかないと言った顔であった。
映像でお兄さんは言った。

『勝つ手段はただ一つ……七大魔王全員と罪の剣を『デジクロス』して、七大魔王の力を集結させる』

『……その為の足止めとして』

映像から、黒い霧が地平線から伸びてくる。

オメガモンは、生き残ったロイヤルナイツ数名を連れてお兄さんへと声をかけた。

『オグドモンが近づいてくる……シロウ』

オメガモンとマグナモン、ロードナイトモン、デユナスモンへとお兄さんへ近づいていく。お兄さんの手に持っているデジヴァイスは黒色の丸い形をしたものへと変わる。

『わかった……すまないが足止めを頼んだ』

お兄さんは誰にも目を合わせなかった。

お兄さんのデジヴァイスからデータの塊が現れると、四体のデジモンたちの体へと吸い込まれていく。

Death-X-Evolution
『死の進化』

四体のデジモンたちの体は変形していった。

先ほどまでの姿よりも強く、雄々しく……姿形が変化しただけでなく、何も知らない私から見ても、映像越しからでも圧倒されるほどの威圧感を感じることができた。

『悪いがシロウ……お前の出番は無いな、この姿であればあの化け物にだって負けることはないだろう』

デュナスモンの声は、戦闘前とは比べ物にならないほどの自信が存在した……その声にはもう戦いへの不安なんて存在しなかった。

『……それ負けフラグですよ、デュナスモン』

明らかな慢心を口にするデュナスモンを注意するマグナモン……この四体の中で、その場でこの戦い自体の本質を最も考えているマグナモンらしい一言だった。

『マグナモン、フラグがどうか美しくありません。戦士ならば、勝利をただ確信して、目の前の戦いに挑むだけです』

そんな中でも自分らしく、そんなどこ吹く風のような感じで、美しさを求めるロードナイトモン……それでも声には緊張があり、手が震えている。まるでこれから戦うことへの不安を抑える為に、自分を鼓舞する意味を感じることができている。

『そうは言っても、前回の戦いは逃げるのに必死だったじゃないか』

それに気づいたのか、オメガモンは軽口を言った。

『うるさいッ!!……オメガモンこそ、傷一つつけられなかった癖に!!』

そんな感じに言い合いになる彼ら。しかし、その場にあつた緊張や不安などの暗いものが消え、馬鹿馬鹿しい滅らさず口の言い合いになる。それだけで場の空気が緩む。

それでも、私には決して勝てるとは思えなかつた。

黒い霧が近づいてきた。

『馬鹿なことを言つていけないで行くぞ』

デュナスモンは口元に笑みを浮かべて霧へと飛んで行く。

『行つてくる』

ロードナイトモンは一言そう残して飛び去つた。

『あとは頼む』

オメガモンは戦闘準備を完了させ、敵へと飛び立つた。

『最後だから言えるが、俺は君のことは許していかない……だが、君を信じて戦うことはできる。それじゃあ行つてくる』

『あんなには行かなくていいのか？』

マグナモンはそう残して飛んで行った。

『あんなには行かなくていいのか？』

黒い鎧のデジモン……アルファモンに、お兄さんはそう聞いた。

『……まだ、俺には役目があるんだろ？』

……役目、編集された部分に何か会話があつたのだろう。お兄さんは静かにうなづ

いた。

そんなとき、戦闘音が響くのが聞こえる。オグドモンとの戦いが始まったのだ。

『・・・やろうか』

そう一言言った時、今まで話さなかったお兄さんのパートナーデジモンたちがうなづいた。

『進化だ』

かすれて聞こえた声に黒いデジヴァイスは暗闇とも言えるほどの、黒の光を放ってバケモンへと集まる。

『バケモン進化』

光は0と1へと変わり、バケモンへと吸収され・・・

『アーモン』

赤いローブを纏ったデジモンへと姿を変える・・・その姿を見た時、お兄さんが着ていたローブと同じものであったと思い出せた。

『進化』

丸い形へと変えたデジヴァイスは、炎を思わせるような激しい光を放出し、オタマモンへと集まった。

『オタマモン進化』

赤の光に包まれ、そして比例して大きくなるオタママモン。そして、大きな龍へと姿を変えろ。

『リヴァイアモン』

巨龍は少しだけお兄さんの方を見つめて、静かに戦闘音のする方へと体を向けた。

『進化』

直方体に似た形のデジヴァイスから、膨大な量のデータが可視化される・・・それは一つの存在を覆い尽くした。

『ファスコモン進化』

小柄だった姿は少しずつ変容し、覆っているデータよりも巨大な姿へと変わっていく。

『ベルフェモン』

ぬいぐるみのような姿とは違い、大きな獣の姿へと変異した。

『進化』

暗い記憶を彷彿とさせる形状のデジヴァイスから、いくつもの円が彼女を拘束する。

『シスタモンブラン進化』

崩れて、壊れて、人型へと変え、妙齢の女性へと姿を変える。

『リリースモン』

この世には無い美しさがそこに存在した。しかし、手を強く握りしめているのか、血が滲んでいた。

『進化』

十字型のデジヴァイスは、進化という言葉に反応し、中心から円状の光に包まれる。

『インプモン進化』

その光はインプモンすら包み込み、一人の孤高の悪魔を生み出した。

『ベルゼブモン』

彼は視線の先へと銃口を向け、未だかつて無いほどの敵へと殺意を向ける。

そして、最後にお兄さんがデジヴァイスを変えたとともに、『進化』と言おうとした

ら……

『シロウ……待ってくれ』

ルーチェモンがお兄さんを止めた。

『……ルーチェモン？』

画面のお兄さんも私もルーチェモンの意図がわからなかった。このまま進化して、『ルーチェモンサタンモード』へと『デジクロス』するのではないのかと考えていたからだ。

『このまま、『デジクロス』してくれ……今なら、何か変わる気がする……』

そう言ったルーチェモン・・・それは、無理な賭けだと私は考える。この状況で、『進化』^そせずに^な『デジクロス』^とをすれば失敗する可能性だってあるのだ。

『わかったよ、全員準備はいいか?』

しかし、お兄さんはその考えに受け入れた。他のデジモンたちも驚いてはいるがお兄さんの考えを受け入れて、静かにうなづいた

お兄さんは『クロスローダー』を掲げる。

『ルーチェモン』・『デーモン』・『リヴァイアモン』・『ベルフェモン』・『バルバモン』・『リスモン』・『ベルゼブモン』!!!』

お兄さんは息が切れたのかそこで息継ぎをして、もう一度大きな声で叫ぶ。

『憤怒』・『嫉妬』・『怠惰』・『強欲』・『色欲』・『暴食』・『傲慢』!!!』

クロスローダーの中から剣が現れ、声に反応して輝き始める。

『・・・デジクロスッ!!!』

ルーチェモンを中心に、内側を6体のデジモンたちが、外側を7本の剣が円となって回り始める。

少しずつ速度が上がって

一つの球状の形になった時……

『『デジクロスッ!!!』』

球が繭へと変わって、その中心から光を放ちながら碎け壊れた!!!

『……ふう……』

そこにいたのは灰色の天使だった。

髪は金髪から灰色のような白へと変わり、

七対の羽は背中から生えているのではなく、それぞれ一対づつに模様が魔法陣のよう
に背中から浮き出しており、そこから透明な光の羽が展開されている。

見た目は十三、四ぐらいの少年で、

服以外の見た目はほとんど変わらないその姿は、決してルーチエモン・サタン・モードで
はなかつた。

『……お前は?』

画面の中のお兄さんも驚いているのか、その天使へと声をかける。

『……ルーチエモン・creationモード』

その一言を置いて、ルーチエモンはオグドモンへと飛び去っていく。

◆? ◆? ◆?

場面は戦場へと変わる。

ロイヤルナイツと呼ばれていたデジモンたちは全員がボロボロの姿となっている。

ある者は既に気を失っている。

ある者は手足がもがれても戦おうとしている。

ある者は攻撃を寸前で躲し続け、攻撃を与えてはいるものの、既に体力の限界に近い。

黒い霧からは、五本目の足が形成され始めたとき……

灰色の天使が現れた。

『………！？』

灰色の天使は剣を振り上げオグドモンへと斬りかかる。

オグドモンも同時に五本あるうちの二本の足を使い、蹴り潰す。

ルーチェモンは一本を避け、もう一本を弾き飛ばす。

『・・・クツ!?!』

『グラドウス』

ルーチェモンは悲鳴をあげる暇もなく、足の攻撃が続く。光よりも疾いその一撃を回避して、隙を作るために攻撃を始める。

『グラドウス』

攻撃はさらに激しくなる。

『グラドウス』

オグドモンは少しずつ強くなってきている。

『グラドウス』

少しずつ霧が集まり始める。

ついに六本目が形成された。

『……やはり、原因は『霧』』

霧の正体はオグドモン、そのものである。

祭壇から噴き出した

『……oooooooooo!!!』

オグドモンの叫び声とともに、地面からマグマが吹き上がる。

ルーチェモンは気づいた。五本の足でもキツかった攻撃が、六本目が完成してから威力もスピードも桁違いに上がったことに。それはオグドモンは少しづつ……いや、霧の集まるスピードがさらに上がったことで、完全な存在に先程より速く完全体に近づいている。

『……チツ、このままだと拉致が開かないッ!!!』

早期決着をしなければ負けることを判断したルーチェモンは、オグドモンへと特攻を始める。進化前とは桁違いに上がったスピードで、オグドモンの未完成の動体に狙いを定める。

隙を作るなんて考えていられない。

攻撃を寸前で躲しても、風圧で吹き飛ばされる。全身の力を込めて接近しようとしても、なかなか近づくことができない。

『これでどうだッ!!』

足の間を避けて攻撃しようとしても、胴体に避けられる。明らかに俊敏になっている。力が完全に取り戻しつつあることがわかる。

そのせいでルーチエモンに焦りが生まれる。

自分は着実にダメージを受けているはずなのに、相手は少しずつ強くなっていく。そのことが、とても恐ろしく感じ始める。

その恐怖を感じている時間さえも惜しいというのに……

自分の後一撃入れることさえできれば勝るというのに……

そんな感情がさらに焦りを強くする。

それから攻防は苛烈を極める。

空間を切り裂き、

地面を潰し、

空を割り、

星を砕き、

それでも後一撃の攻撃が届かない。

そんなときだった。

オグドモンの体が揺れ、この戦いで初めて明確な隙を見せた。

『こいつで終わりだアアアアアアアアアア!!!』

『崩壊創生功罪剣ほうかいそうせいこうざいけんンツーーー!!!』

．．．．ボキリ

劍はオグドモンの体に突き刺さることなくへし折れた。

『．．．嘘．．．だろ．．．？』

ルーチエモンは現実を理解できなかった。自身の絶対ともいえる全身全霊を込めた一撃．．．それでも、傷一つことができないう現実を。

『————』

ルーチエモンは全身全霊の一撃を放ったことにより、自身の羽が動かさなくなつたことに気がついた。

オグドモンの目がが歪んだ。

まるで笑っているようだ……とルーチエモンは感じる。それもそのはずである。最後の一撃として接近しようと失敗した。この距離では、ルーチエモンはオグドモンからもう逃げることはできない。

時間をゆっくりと感じながらも、オグドモンの胴体が割れる。

そこが口だと気付いてしまった。

大きな口は空間にある全ての空気を吸い込むように大きく息を吸った。

『……『カテドラル』』

超々至近距離からの音波の攻撃は、今のルーチエモンに避けられるはずがなかった

『アルファ・イン・フォース』

．．．．はずだった。

◆? ◆? ◆?

黒より黒に染まる太陽へと迫る一人の少年。

地面は隆起し、マグマがたまる。

海は枯れ果て、既に生命体はいない。

空は黒く染まり、大きな化け物が乗り潰している。

「・・・足止めおつかれ」

そう言った少年は化け物を連れて天まで登って行った。

第八夜 黒く塗りつぶした真実と選択の終わり

『足止めおつかれ』

画面の中で、俺がそう言った・・・本当に懐かしい。あの選択がなければ、きっと俺はここに立っていないなかったから。

誰にも言いたくはないから隠したのに・・・思い出してしまうのはなぜだろうか？

◆?◆?◆?

『久しぶり、シロウ』

白く染まった大地。草も花もなく、空も海も、太陽でさええないのに、この空間は白く塗りつぶされている・・・唯一、色がついているのは彼女だけだ。

「・・・え？」

俺は驚いた。そう笑った彼女・・・死んだはずのシスタモン・ノワールが目の前にい

ることの現実感がなかったからだ。

『ふふ、やっぱり驚いた』

先程のにこやかな笑いとは違った、悪戯が成功したことを喜ぶ子供のようないびき。それを見たとき、『師匠』だと感じてしまう。

……だけど、

「あなたは死んだはずだ。あのとき、あの場所で、妹を……ブランを庇って、俺を残して死んだ。なのにどうして俺の前に現れた？……本当は何者だ？」

……そう、確かに『色欲の試練』で死んだ。俺自身死んだ人間と会う方法は知っているが、ルーチェモンがそれを否定した。目の前にいる人物はノワールではないはずだ。

『……それもそうね、でも『私』は『シスタモン・ノワール』で『あなたの師匠』で間違いないと思うわよ』

予想通りの反応……というふうには彼女は笑う。そんなところも似ていて、その言葉を信じそうになるが、『七大魔王』に殺されたデジモンはデジタマに戻ることなく消滅することを俺は知っている。

そもそも、俺の最後の記憶はオグドモンと戦ったところで終わっている。ここが死の世界でない限り、

『……絶対に警戒を解くわけにはいけない?』

「……oooooooooo!!」

彼女は俺の考えたことを先読みした。

『嫌になるわね。そんなふうに考えられているなんて……こんなことをしなくても、あなたの考えていることぐらい簡単にわかるわよ』

ニヒルに笑う口元……それが俺をさらに混乱させる。

ノワールに似ている……いや、本人だと思っただけ行動が同じに見える。

『……そんなに信じられないかしら?』

ううん、当然ね……私自身が思っている以上に、私がここにいること自体が奇跡のようなものだもの』

俺は啞然とした。

彼女の一連の行動がノワールと同じすぎるからだ。

「本当に何者だツ!!?……七大魔王のデジモンに殺された者は転生することもできず、存在ごとく消えて無くなるはずだツ!!!」

七大魔王の一体で、かつては天使であったルーチェモンに話を聞いたんだ……それ

を証拠も無しに嘘と決めつけることなんてできない。

その言葉を聞いた彼女は、どこか納得した様子で手に拳を置いた。

『……そうね、そうだったわっ……そんなこと確かにあつたもの!!!』

快活に笑う彼女……しかし、俺は苛立っていた。ノワールの死は『そんなこと』で片付けられるものではない。

「……テメエツ……ーッ?」

俺が怒りに任せて殴りかかろうとしたとき、目の前に奴の顔が急に現れる。そんな俺を見て、心の底から嬉しそうにしながら、俺の唇に指を静かに当てる。

『ふふふ、何怒ってんの』

そんなふう嬉しそうに笑った彼女。そんなに俺を怒らせたのかこの存在は……? 『……まあ、あんたの考えてることぐらいなんとなくわかるから、なんとも言えないんだけどさ』

いくら夢の中の存在だとしても、ここまで苛立たせるのはどういうことなんだ?

『……ああ、なんだろう。ちよつと嬉しいって思ってしまうのは何だかなあ……?』

……何がおかしい。

喉に吐き出しそうなほどたまつた違和感が、俺の中で黒く渦を巻いている。

『たぶん、今のあんたに何を言っても、本人だつて信用されなれないと思うから……私は私としてシロウの知らない真実と私の思いを伝えるよ』

……真実？

『そ、真実……とつても残酷で、とつても無意味な、とつても『愛』がない真実よ』

◆？◆？◆？

ねえ、シロウ？

なんでオグドモンなんて居ると思う？

罪を消す為？……そんな抽象的な話じゃないの。

答えは案外簡単なものよ。

……デジモンという存在の完全破壊。

それが目的。

なんで、そんなことをするのか？・・・だつて？

うーん、これは今のデジタルワールドができる前の話なんだけど、

・・・ずっと、ずっと昔には、私たちデジモンは生まれてなくてね。それよりもずっと前から暮らしていた存在がいたの。

・・・そう、デジノームみたいな存在がたくさん住んでいたの。

でもね、今のデジモンみたいにはやく進化するわけじゃないけど、一部の存在たちは進化を遂げていった。

そのことに危機感を覚えていた存在が『旧世界の神・ホメオスタシス』。

彼はそのことに危機感を覚えて、『進化』がもしも危険だった時のために対策をしはじめた。

まず、最初にイグドラシルという神を創り出した。

そして、イグドラシルの役目として『進化していくものへの統治と粛清』を任せたの。『進化していくもの』・・・これは、現在のデジモンへの古い呼称だったものよ。

次に創り出したのが、『デリーパー』と『オグドモン』、そして『Xプログラム』。どれもデジモンを殺すために創造されたものであり、対デジモン兵器として封印されたのよ。そしてその場所を隔離するために創られたのが『ダークエリア』と『ファイアーウォール』。そしてその番人として、当時最も力を持っていた『グランドドラクモン』に任せることにした。

・・・しかし、ホメオスタシスの転落はここから始まったの。

進化するにつれ、デジモンたちはさらに進化つよくなるする術を探し始めた。最初はゆっくりと数十年かけての進化であったものが、道具を使うことでその時間を短くすることができることがわかり、道具を使うものの権利についていざこざがはじまった。

そのなかで、グループをつくり、それが集まり国となり、国同士の戦いとなって、戦争へと変わっていった。

そのなかで登場したのが『ルーチエモン』。ルーチエモンは六人の仲間と共に、戦争をもう行わないように世界を統治していった。

最初は順調だったわ・・・みんなが幸せになるようにルーチエモンも仲間たちも一生懸命になって国策に取り組んだ。

本当に残念よね・・・ルーチエモンが必死になって取り組んだのにもかかわらず、国が滅んでしまうなんて。

滅んだ理由は簡単よ。

デジモンが進化しすぎたの。

デジモンの進化が頻繁に起こったことにより、対デジモン兵器として作られた存在である『デリーパー』が暴走。デジモンの世界はほとんどが壊滅・・・ルーチェモンの仲間全員死に絶えたわ。

・・・グランドドラクモンは？

なんとか生き残つてはいたけど、戦後に後継者に力を渡して死亡。その後継者が新しくグランドドラクモンへと進化したわ。

ルーチェモンは仲間の死骸を背負つて、イグドラシルの元へと向かったわ・・・もうこんなことが二度と起きないようにすることはできないのかつてね。

・・・もはや、可愛そう過ぎて啜えてくるもの。

イグドラシルはそのことを憂い、世界の真実をルーチェモンへと教えたわ・・・ただの統治するだけの機械だったイグドラシルさえも哀れんでね。

哀れよね・・・世界が平和になるように行動していたルーチェモンが滅びへと向かう

方へと、デジモンたちを誘導したのも。

それでもルーチェモンは諦めなかった。

そして、その答えが『対デジモン兵器の完全封印』。

ルーチェモンと六体の死骸を使うことにより、これから作られる並行世界含めた全てを利用した完全な対デジモン兵器の封印を行ったの。

・・・結果として、ルーチェモンは『傲慢』へと堕ち、多くの戦争を引き起こしたわ。

戦争の理由は、仲間や民を殺した兵器を創り出した『神』への復讐。ルーチェモン自身、たとえ、この身が狂おうとも決してホメオスタシスを許すことはなかったわ。

ホメオスタシスを命と引き換えに完全に力を奪い取ったわ。

・・・その結果、魔王デジモンやそれに与する者のダークエリアへの封印。

でもね・・・このおかげで、新たな進化やデジモンたちの意識が変わったりもしたり、いろんな良いことが起こったのよ。

まず一つ目は、デジモンたちがルーチェモンという一体の王に仕えるのではなく、いろいろな思想や派閥を持ったことね。

このおかげで、いろいろな環境で進化することができるようになったわ。なかでも、神と呼ばれるデジモン・・シロウの知っているユピテルモンやウエヌスモン、記録に出てきたチンロンモンやスーチエーモンみたいなデジモンが現れたことね。

神デジモンたちは知能が高かった。

そのことをイグドラシルが考え、各地域の統治の権限を委任したの。この統治にかかると負担や経験により、デジモンたちの新たな進化への道が開かれたの。

二つ目は、自力の進化ね。

昔は道具を使った進化が主流だったけれど、戦争の中でデジモンたちが必死になって戦ったことにより、自力で進化できるように変わっていったわ。

三つ目は、ホメオスタシスによる脅威の可能性が低くなったことかしら。

ルーチェモンの対抗策は、デジタルワールドを変えたわ。ホメオスタシスの考える旧世界の存在よりも、今生きているデジモンたちがまともに生きていける環境を作り上げたの。それまでは、オグドモンやデリーパーによる脅威はガラ空きで、いつ目覚めるかわからない化け物をホメオスタシスは放置していたんだもの・・イグドラシルに裏切

られて当然だわ。

・・・そして、何より変わったのは、

イグドラシルが意思を持ったことよ。

イグドラシルは哀れみ以外の感情が浮き彫りとなり、これ以上のホメオスタシスがしてきたものを壊していくことを誓った。

まず行なったのはホメオスタシスがまた力を取り戻さないように、ルーチェモンが破壊したデータ^のを必死に集め尽くして、徹底的に世界の管理権限を奪い尽くした。このことで、神と呼ばれる地位を絶対とした。

その次に行ったのが、封印の絶対化。

デジタルワールドがこれから生み出す並行世界のシステムをすべて利用し、封印しているデジモンの魂・・・通称管理者の強化・・・その後、倒された場合並行世界へとバックアップとして、デジモンの力をそのまま並行世界の管理者へと移動させる。

これにより、封印の力を維持させることに成功・・・その後、封印の強化が実装され

た。

・・・封印の強化について？

わからないって？

・・・たぶん、あなたの考えている通りだと思うわよ。

何、泣いてんのよ。

あんたがそんな顔でどうすんの・・・私はそんな顔されたって生き返るわけでもないのよ。

・・・ちよつと、酷いとは思うけど、それでも必要なことだったのよ。

イグドラシルは対デジモン兵器への警戒から、デジモンたちのこれ以上の進化への危険性を鑑みて、いろいろな行動を起こし始めたわ。

最初に、デジモンたちがこれ以上増えないように、卵に転生するシステムを創り出した。これは、封印されたオグドモンのこれ以上の強化を防ぐためね。

・・・なぜかって？

オグドモンの能力の最たるものは『悪感情を持つ存在の攻撃の無効化』：それがいったいどんな感情であろうとも、オグドモンに対する敵意が有れば攻撃を無効化してしま

うの。ホメオスタシスはデジモンのことを余程脅威と思ったのか、決して倒されないように感情が明確な存在に対して、絶対に倒せない化け物を創り出したわ。

・・・知ってるわよね。どんなに究極体が束になろうと、傷一つつけられなかったものを見たんだもの。

・・・そんな存在どう戦えばいいのかって？

イグドラシルはね、それができなかつたから封印したのよ。

ねえ、唐突だけどなんで『人間』をデジタルワールドに召喚してまで、人間に頼っていたかわかる？

ロイヤルナイツという私兵や天使型デジモンだっていたはずなのに。
なんで弱い『人間』なんかに頼ったのかしら？

・・・わからないわよね。

生きていた頃の私の唯一の疑問だったわ。

なぜ、デジモンは強さを求めるのか？

なんで、デジモンは戦い合うのか？

どうして、シロウが巻き込まれなければいけなかったのか？

・・・答えは簡単なものだったわ。

デジモンの間引きを行うためよ。

感情を持ったことで、かつての戦争の直接の原因となった対デジモン兵器を蘇らせないように、これ以上のデジモンが繁栄するのをイグドラシルは否定した。

だから、ある程度世界に影響を与えるほどの力と危険な思想を持つデジモンをのさばらせて、危機が訪れたら人間を頼る・・・そうすることで、デジモンの数の全体数を減らし、新たなデジモンが生まれたとしても、オグドモンがそう簡単に復活できないようにしたの。

人工で造られたデジモンに関して言えば、不安要素であったがために、人間に対してものすごく警戒をしていたわ。

大門大の世界や龍野ツルギの世界で、イグドラシルが動いたのも、警戒故の行動だったのよ。

……耳を塞がないで、シロウ。あんたは現実を知らなきやいけない。決して目を逸らさないで、あんたが傷ついているのは私が一番わかっているから。

……そう、それでいいのよ。

歴史はあんたの感傷なんて関係なく、わたしたちに悲しみだけを伝えていくんだから。

その後はしばらくはある種の平和が続いた。

デジモンたちが争い合い、小競り合いのなか進化を促し、強い者が世界を手を収めようとしたら人間が倒して、卵へと還る。

唯一のイグドラシルの誤算は……

人間が七大魔王にまで牙を剥いたことよ。

人間たちの前に立ちはだかるのは、ただ力をつけて粹がっている雑魚ども以外にもい

たの。

七大魔王たちはさまざまな理由で、人間の前に立ちはだかったわ・・・記録を見たでしょう？

かつての英雄たちも含め、多くの並行世界で七大魔王デジモンたちは殺されていったわ・・・もちろん、対抗策は発動していた。

・・・それでも、殺しすぎてしまったの。

どんだんデジタルワールドのデジモンたちは進化していったわ・・・そのせいで、どうなるかも知らずに・・・

七大魔王のによる封印は緩み始め、デリーパーの封印が解かれたことにより、災害が巻き起こる世界が現れ始めた。なんとか、松田タカトの存在によってデリーパーは消滅・・・並行世界も含めた、デジタルワールドは救われたわ・・・一見ね。

松田タカトの存在する世界のデジモンたち外急激な進化したことよって、封印に更なる負荷がかかり始めたわ。許容量は限界寸前^{ストレージ}。封印はどうとうパンパンまで膨れ上がってしまった。

そのときにイグドラシルは決意をしたの。

・・・大々的なデジモンの間引き、

『プロジェクトアーク』を。

一つの世界を丸々犠牲にして、なんとか並行世界にある全てのデジタルワールドを救おうとした計画よ。

デジモンを間引きしていたのも、デジモンが生き残るために行っていたことだったから、イグドラシルは決して愛していなかったわけではなかったわ。苦渋の決断だったはずよ。

それでもイグドラシルは決行したの。並行世界全体のために、一つの世界を犠牲にする覚悟をしたのよ。

それでも、結果はお察しの通り・・・デジモンたちは、神さえ乗り越えて、死に打ち勝ち、勝利した。結局のところ、人間とデジモンの手によつてその計画は破綻してしまった。私たちがだつて生き残りがかったんだから、たつた一柱の神によつて明日の生死を決められたくはないから、納得はできるのだけれどね。

だからイグドラシルは、最終手段に出たのよ。

オグドモンを遠く離れた人間世界へと行かせることを……

……つまり、他世界へと送る繋ぎのためにあなたはこの世界に呼ばれたのよ。

ようやくわかったみたいね。

あなたは自分の世界を滅ぼして、並行世界も含めたデジタルワールド全体がオグドモンから生き残るための生き餌としてここに連れてこられたのよ。

……泣きたい気持ちはわかるわ。嘘だつて言いたい気持ちも、この世界のために一生懸命頑張ってきたのも見てきた。

……だけど、これが真実。

この計画は、他世界の管理者すらも騙すことを決意した、イグドラシルによる最後の、

最悪な、最終手段よ。

貴方がいくら泣いたとしても、貴方がこの世界に来てしまったこと自体が、『貴方の選
択の間違いよ』。

．．．ねえ、シロウ一つ命令おねがいがあるの。

『かえりなさい』

◆?◆?◆?

・・・悲劇だ。

今まであの人たちみたいな英雄になれるなんて、ずっと甘いことを考えていた。

自分の愚かさに耳を塞ごうとしても、『彼女』は震えたその手で俺の腕を掴み続ける。俺は俺はと考えるたびに、ただ何もできない無力さだけが残っていった。

そんなふうに見える始めたら、耳を塞ごうとしていた腕の力が抜けていたことによく気がついた。

『彼女』は俺をそんな俺を抱きしめて、ただあの頃のように一言だけ命令した。

・・・かえりなさい。

その言葉を言った時、俺はすんなりと『帰るか』と考えてしまった。もう、英雄になんて憧れを抱いていないし、正義の味方になりたいわけでもない。ただ、非常にあの人

たちに会いたくなつた。

そんな時だった。彼女の体が震えていたことに、その時ようやく気がつくことができた。

小さな腕で俺を震えながらも抱きしめていた。

「いめんなやつ」

こんな選択をする俺を『許してください』

「・・・その命令だけは、聞くことはできない」

震えた声で俺はそう言った。

どうぞ、憎んでください。

呪ってください。

恨んでください。

貴女が与えてくれた救い^{メイレイ}を、^{むげ}選択にしかできない俺を許さないでください。

『・・・そっか』

彼女は抱きしめている両手を、そつと俺の顔へと当てる。

『『oooooooooooooo』』

・・・たった数秒の口づけ。

ただ、しよっぱさだけが口の中に広がっていく。

『・・・ごめんね』

唇、両手・・・彼女は泣いた顔で自らを少しずつ遠ざけていき、口を開けてそう言った。

『こんなことしかできない私を許してとは言えない』

『・・・ただ、私は』

『貴方のことを愛しています』

彼女は消えたなくなつた。

◆? ◆? ◆?

デジモンたちは地に付した。

俺はオグドモンを無理矢理天空へと連れて行く。

『グランドウス』

「oooooooooooo!!!
……ファイヤーウォールが一撃でヒビが入るとは思わなかつたよ!!!」

オグドモンのシス^足テム界はもう崩壊寸前、俺自身の足場^{デジメモリ}を先ほどの技の振動がまるで地震のように揺らしている。

オグドモンを無理矢理天空へと連れて行った方法は、システム界を足場にしてファイヤーウォールでオグドモンを包み込んで簡易的に封印、その後デジメモリに乗ってそのままロケットのようなスピードで空を飛んだだけである。

「チェンジ」

デジヴァイスの形を変形させる。

イグドラシルの力が詰まった聖なるデヴァイスだ。これを使うことによってオグドモンの動きが少し鈍くなった。

「デジソウル」

ファイヤーウォールをデジソウルで覆い、さらに壁を作る。

オグドモンはさらに力を加えて暴れだす。

ファイヤーウォールもデジソウルの壁も崩壊寸前まで追い詰められる。

それでもここまで場を整えたんだ。

デジモンたち《パートナー》にも嘘をついて。

多くのデジモンを見殺しにして。

最愛の人まで裏切った。

やるしかない。

やるしかないんだ!!!

『体は剣で出来ていた』

・・・そう体は剣で出来ていた。

決して折れることのない剣を収めるための鞘を、体に何年も埋め込まれていたんだ。その体はすでに剣へと変わっていたんだ。

『器は崩れ、世界は朽ちた』

折れないにも限度はある。

世界ごと腐り堕ちれば、どんな剣であろうが盾であろうが、朽ちてなくなるのは当然のことだ。

『行き着く先に希望なく』

正義なんて語るんじゃないかった。

俺は何一つさえ守ることなんてできなかつた。

『すべからく無意味へと還る』

夢なんて語るもんじゃない。

現実には救いなんて存在しない。

『傍観者は一人常闇の城に終焉を齎す』

ごめん、何一つ約束を守れなかった俺でごめん。

『差し伸べる手を退けて』

それでも、

『unlimited blade works世界を救うために』

世界だけは救って行くから。

◆? ◆? ◆?

詠唱を終わらせたお兄さん。

星一つない闇夜の空に、唯一灯る青い炎^{ヒカリ}。

七つの城がお兄さんとオグドモン^{バケモノ}を囲んでいる。

お兄ちゃんとは違うシロウさん^{お兄さん}。

お兄ちゃんの前中は大きかったのに対して、あの前中は寂しさで叫んでいるようだった。

『なあ、『オグドモン』……この世界をどう思う』

その問いに答えず、オグドモンは叫び声だけあげた。そして、炎の壁と光の壁を壊した。七本目の足を掲げて獣の雄叫びをあげる。

『……俺にはこれが地獄に見えるよ』

シロウさんへと振りかぶった足が、炎の鎖で拘束される。

『……答えはそれか？』

オグドモンの八つ目の目を睨みつけるお兄さん。

……そこにあつたのは涙だけであつた。

『さあ、バケモノ……テメエには豪華にも俺俺のが一緒人生に心中くしてやるよ』

オグドモンの八つの目に向かって白い剣が突き刺さつた。

・・・それはあの時、折れた罪の剣だった。

『教えてやる、この『固有結界』は無限の剣を模倣し、創り出す。神の祭具だろうが悪魔の片手剣だろうが、竜殺しの大剣だろうがな。ここまで言えばわかるだろ・・・テメエの大嫌いな罪の剣を大量になッ!!』

流星群のように無限の罪の剣が降り注ぐ。

その剣全てが突き刺さった。

でも、どうして突き刺さったのかわからない。本物は突き刺さらなかったのに、偽物が突き刺さったことに疑問を抱いた。目の前の映像の中で、偽物が突き刺さっていることにオグドモンも動揺しているのかもがき苦しんでいる。

『動揺しているようだな。テメエが効かないと思っていた武器が直接突き刺さっているんだ・・・疑問に思わないわけがない』

オグドモンはもがき苦しんでいる。

『テメエは自身に対して向けられる『悪意ある攻撃を無効化する』』

———— 『オーラーティオ・グランディオクア』 ————— ツ!!!

『……でもな』

お兄さんへと焦点を当て、最後の力をを振り絞るように空間を破壊し始める。世界を……空間さえも破壊しようとする攻撃でもお兄さんは星を落とし続ける。

『……俺の中にあるのは』

『自分が今まで行ってきたことへの後悔だけだ』

そうして、世界はヒカリに包まれた。